長岡京市文化財調査報告書

第33冊

1995

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第33冊

1995

長岡京市教育委員会

序　　文

私たちが住んでいる長岡京市は、かつて都があったところで、市街地のほぼ全域が「長岡京跡」をはじめとした遺跡に含まれています。このように地下に刻まれた遺構等埋蔵文化財については、文字や文献の乏しい時代の文化を解明するための唯一の歴史資料であり、これを解明し後世に伝えるとともに、広く活用を図ることは現代の私たちに課せられた重要な使命であります。

今年度より長期不況もようやく明るい兆しが見え始めてきましたが、まだまだ企業活動、個人消費は低迷が続いているこの時期、１月17日に阪神大震災が発生しました。今まで想像もしなかった５千人以上の人命と財産が奪われるという甚大な被害を被るとともに、住宅、ライフラインや企業活動は壊滅的な打撃を受けました。一日も早い復興をお祈りいたします。

さて、本市では今年度の発掘調査件数は例年に比べかなり少なく、前年度に引き続き少ない件数で推移してきました。その中から注目すべき成果として、教育委員会が国庫補助事業として実施した井ノ内稲荷塚古墳から横穴式石室と木棺直葬の主体部が出土しました。６世紀前半の前方後円墳で異なる形式の主体部が確認されたのは、近畿で２例目で全国的にも珍しいものです。また、乙訓地域では向日市の物集女車塚古墳と並んで最古の横穴式石室であることも判明しました。

この報告書では、上記の件も含め、長岡京跡の西市、中世の開田集落に関する発掘成果をまとめています。これらの成果が長岡京跡をはじめ、郷土の歴史を解明する上で貴重な資料になるとともに、歴史学習の資料として広く活用していただき、少しでもお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方並びに関係機関、また発掘調査にご理解とご協力を賜りました土地所有者の方々に、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成７年３月

長岡京市教育委員会

教育長　中 小 路　　脩

凡　　例

1．本冊は平成６年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。

2．上記の調査地は付表１のとおりである。その位置は第１図に示した。

3．長岡京跡の調査次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977) による旧大字小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京跡の条坊復原については、近年条坊が従来のものより二町分北にずれることが判明しつつある。本書では新たな有力説である山中　章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原に従った。なお、従来の復原は必要に応じて（　）を付けて示した。

5．本書に使用する地形分類は、とくに断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史資料編一』(1991年) に従った。

6．各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。

7．本書の編集は長岡京市教育委員会文化スポーツ課文化財係中尾秀正が行った。

8．現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々のご協力を得た。また、図面のトレースは財団法人長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏に、遺物写真撮影の一部は写房楠本真紀子氏にそれぞれご協力を得た。

〔技術補佐員〕池庄司　淳・高橋浩二・朴　天秀・清野孝之・高田健一

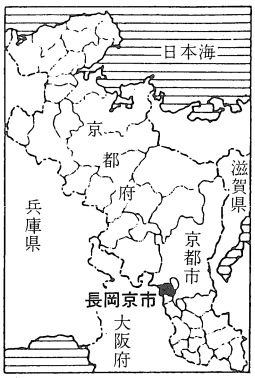
〔調査作業員〕岩岸三郎・麻田安太郎・平木秋夫・高瀬嘉一郎・田頭道登・堤　昭治・佐藤昭三・前田　正・今井貴三郎

〔調査補助員・整理員〕船戸裕子・橋田邦夫・久保直子・井上礼子・坂根　巧・森　昌彦・西口秀樹・尾崎みづ樹・河合澄子・岡本弓美子・栩谷智香・小畠絢子・岩川絢子・田中京子・天白真理子・太田美枝子・奥野久美子・早川いずみ・安尾美穂・大川充夫・黒田利恵・松浦宇哲・宮崎　認・安河内敬志・伊藤崇樹・大林　元・川村雪絵・北田明宏・楠樹華奈・宍戸太一・竹花明良・田中史子・寺前直人・豊島直博・林　涼子

付表１　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間（現地）	調査面積	備考
井ノ内稲荷塚第2次調査	7ANGKS-2	長岡京市井ノ内小西40	林　三代次	1994. 7.20～ 8.11	40㎡	長岡京跡右京第478次調査
長岡京跡右京第475次調査	7ANKNT-3	長岡京市開田4丁目608-1他	樋口一雄	1994. 6.27～ 8. 5	242㎡	開田遺跡
長岡京跡右京第479次調査	7ANMSI-14	長岡京市開田4丁目405-1	藤井博一	1994. 8.22～10. 7	297㎡	開田遺跡

第１図　本書報告調査地位置図



長岡京条坊復原図

北京極大路
北一条大路
一条大路
二条大路
三条大路
四条大路
五条大路
六条大路
七条大路
八条大路
九条大路
西四坊大路
西三坊大路
西二坊大路
西一坊大路
朱雀大路
東一坊大路
東二坊大路
東三坊大路
東四坊大路
2000m

本　文　目　次

序　　文……　……i
凡　　例……　……ii

第１章　井ノ内稲荷塚古墳第２次調査概要……1
　1　調査経過　　2　墳丘の構造　　3　埋葬施設の構造
　4　出土遺物　　5　総括

第２章　長岡京跡右京第475次調査概要 ……33
　1　はじめに　　2　調査経過　　3　検出遺構　　4　出土遺物
　5　まとめ

第３章　長岡京右京第479次調査概要 ……49
　1　はじめに　　2　調査の経緯　　3　検出遺構　　4　出土遺物
　5　まとめ

付論１　乙訓の中世城館研究に関する覚書……91
　1　はじめに　　2　外部勢力の城郭　3　在地土豪の城館
　4　環濠集落　　5　おわりに

付論２　長岡京市開田遺跡出土火挾（鉄砲金具）の材質について……97
　1　はじめに　　2　分析方法　　3　結果及び考察　　4　まとめ

図　版　目　次

井ノ内稲荷塚古墳第２次（７ＡＮＧＫＳ－２地区）調査

図版１　１　墳丘の現状（後円部から前方部を望む）
　　２　前方部墳頂トレンチ（前方部から後円部を望む）
図版２　１　前方部第１トレンチ全景（南から）
　　２　前方部第２トレンチ全景（東から）
図版３　１　クビレ部第１トレンチ全景（西から）
　　２　クビレ部第２トレンチ全景（東から）
図版４　１　後円部第１トレンチ全景（北西から）
　　２　後円部第２トレンチ全景（北から）
図版５　１　墳丘裾の浅い溝（後円部第２トレンチ北半部）
　　２　後円部第１トレンチ上部の盛土状況（東小口壁）
図版６　１　後円部墳頂トレンチ全景（南から）
　　２　後円部横穴式石室（羨道側から）
図版７　１　後円部墳頂トレンチ東区北壁土層断面（攪乱の切り込みライン）
　　２　後円部墳頂トレンチ西区北壁土層断面（攪乱の切り込みライン）
図版８　前方部木棺直葬
図版９　１　前方部墳頂トレンチ東区北壁土層断面
　　２　木棺に副葬された須恵器
図版10　１　古墳に伴う土器
　　２　鉄鏃
　　３　古墳以降の土器１
図版11　古墳以降の土器２

長岡京跡右京第475次（７ＡＮＫＮＴ－３地区）調査

図版12　１　発掘調査全景（南から）
　　２　六条々間南小路全景（西から）
図版13　１　第１トレンチ遺構検出状況（南から）
　　２　第１トレンチ全景（西から）
図版14　１　第２トレンチ遺構検出状況（西から）

2　第２トレンチ全景（北から）
3　第３トレンチ全景（南から）
4　ＳＸ47501全景（北西から）
図版15　溝ＳＤ47503 出土遺物
図版16　1　溝ＳＤ47503 出土墨書土器
2　溝ＳＤ47503 出土線刻土器

長岡京跡右京第479次（７ＡＮＭＳＩ-14地区）調査

図版17　発掘調査地全景（北から）
図版18　1　溝ＳＤ47902 検出状況（北から）
2　堀ＳＤ47905 西壁（東から）
図版19　1　拡張区全景（東から）
2　井戸ＳＥ47909（東から）
3　井戸ＳＥ47909 出土の曲物（東から）
4　掘立柱建物ＳＢ47921（北から）
図版20　1　縄文土器
2　弥生土器１
3　弥生土器２
4　石器
図版21　長岡京期・平安時代の土器・陶器
図版22　瓦
図版23　土器埋納坑ＳＸ38507 出土遺物１
図版24　土器埋納坑ＳＸ38507 出土遺物２
図版25　土器埋納坑ＳＸ38507 出土遺物３
図版26　土師器・瓦器・施釉陶器
図版27　国産陶器（上段：常滑焼、中段：備前焼、下段：信楽焼）
図版28　輸入磁器（上段：白磁、中・下段：青磁）
図版29　1　輸入磁器と伊万里焼
2　肥前系陶磁器
図版30　木製品・金属製品・土製品・石製品

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図 ……iii

井ノ内稲荷塚古墳第２次（７ＡＮＧＫＳ－２地区）調査

第２図　乙訓地域の古墳分布図 …… 2
第３図　井ノ内稲荷塚古墳の位置 …… 3
第４図　調査風景（1994年） …… 5
第５図　説明会風景（1994年） …… 5
第６図　墳丘測量図 …… 7
第７図　トレンチ配置図（アミは埋葬施設） …… 8
第８図　前方部第１・第２トレンチ平面図、断面図（上：第１、下：第２） …… 9
第９図　北宋銭出土状況（クビレ部第２トレンチ） ……10
第10図　クビレ部第１・第２トレンチ平面図、断面図（上：第１、下：第２） ……11
第11図　後円部第１・第２トレンチ平面図、断面図（上：第１、下：第２） ……12
第12図　後円部第１トレンチ上半部の盛土状況図 ……13
第13図　井ノ内稲荷塚古墳墳丘復元図 ……15
第14図　後円部墳頂トレンチ平面図、断面図 ……17
第15図　後円部墳頂トレンチ土層断面図 ……18
第16図　土師器出土状況（後円部墳頂トレンチ） ……19
第17図　焼土層の堆積（後円部墳頂トレンチ） ……19
第18図　前方部墳頂トレンチ平面図、断面図 ……21
第19図　木棺直葬平面図 ……23
第20図　古墳に伴う土器実測図 ……26
第21図　鉄鏃実測図 ……27
第22図　古墳以降の土器実測図 ……29
第23図　北宋銭拓影 ……30

長岡京跡右京第475次（７ＡＮＫＮＴ－３地区）調査

第24図　発掘調査地位置図（１/5000） ……33
第25図　発掘調査前全景（南から） ……34
第26図　第１トレンチ調査風景（北東から） ……34

第27図　第２・３トレンチ調査風景（北東から）……34
第28図　トレンチ配置図（１/200）……35
第29図　調査トレンチ土層図（１/100）……36
第30図　第１トレンチ検出遺構図（１/150）……37
第31図　溝ＳＤ47502 土層図（１/40）……38
第32図　溝ＳＤ47502（南西から）……38
第33図　溝ＳＤ47503 土層図（１/40）……38
第34図　溝ＳＤ47503（西から）……38
第35図　第２・３トレンチ検出遺構図（１/50）……39
第36図　柵列ＳＡ47505 実測図（１/80）……40
第37図　柵列ＳＡ47506 実測図（１/80）……40
第38図　石の検出状況（北東から）……40
第39図　土坑ＳＫ47504 実測図（１/80）……41
第40図　土坑ＳＫ47504（南東から）……41
第41図　溝 SD47507（東から）……41
第42図　溝ＳＤ47503 出土遺物実測図１（１/４）……43
第43図　溝ＳＤ47503 出土遺物実測図２（１/４）……44
第44図　溝ＳＤ47503 出土遺物実測図３（１/４）……45
第45図　溝ＳＤ47503 出土墨書土器実測図（１/４）……46
第46図　溝ＳＤ47503 出土線刻土器（１/４）、銭貨・石製品（１/２）実測図……46
第47図　土坑ＳＫ47504、溝ＳＤ47507 出土遺物実測図（１/４）……47

長岡京跡右京第479次（７ＡＮＭＳⅠ-14地区）調査

第48図　発掘調査地位置図（１/5000）……49
第49図　調査前の状況（北から）……50
第50図　周辺の遺跡分布と集落（１/10000）……51
第51図　調査地断面図（１/100）……52
第52図　堀ＳＤ47905 西壁断面図（１/100）……53
第53図　溝ＳＤ47904・01 断面図（１/40）……53
第54図　溝ＳＤ47902 断面図（１/20）……54
第55図　井戸ＳＥ47903 実測図（１/50）……54
第56図　井戸ＳＥ47909 実測図（１/50）……55
第57図　井戸ＳＥ47914 実測図（１/50）……55

第58図　掘立柱建物ＳＢ47921 実測図（1/80）……56
第59図　検出遺構図（1/100）……57
第60図　全調査地の検出遺構図（1/200）……59
第61図　時代別の遺構変遷図（1/500）……61
第62図　縄文土器実測図（1/2）……64
第63図　弥生土器実測図（1/4）……64
第64図　石器実測図（1/2）……65
第65図　長岡京期・平安時代の出土遺物実測図（1/4）……66
第66図　瓦実測図1（1/4）……68
第67図　瓦実測図2（1/4）……69
第68図　土器埋納坑ＳＸ38507 実測図（1/10）と検出状況（南から）……70
第69図　土器埋納坑ＳＸ38507 出土遺物実測図（1/4）……72
第70図　溝ＳＤ38503・44803 出土遺物実測図1（1/4）……73
第71図　溝ＳＤ38503・44803 出土遺物実測図2（1/4）……74
第72図　溝ＳＤ38503・44803 出土遺物実測図3（1/4）……75
第73図　井戸ＳＥ47909 出土遺物実測図（1/4）……75
第74図　中世前期の出土遺物実測図（201～221-1/4、222-1/6）……76
第75図　溝ＳＤ38501・44801 出土遺物実測図（1/4）……78
第76図　井戸ＳＥ41301 出土遺物実測図（1/4）……78
第77図　中世後期の出土遺物実測図（1/4）……79
第78図　火鉢・風炉実測図（1/4）……80
第79図　輸入磁器実測図（1/4）……81
第80図　木製品実測図（1/4）……82
第81図　火挟実測図（1/2）……83
第82図　土製品実測図（286・287-1/2、284・285-1/4）……83
第83図　砥石実測図（1/4）……83
第84図　石仏出土状況……83
第85図　調査地周辺条坊図（1/2500）……86
第86図　主な中世遺構の検出状況（1/600）……87
第87図　火挟細部……98

付　表　目　次

付表１　本書報告調査一覧表 …… ii
付表２　墳丘トレンチ各部分の高さ ……16
付表３　調査地一覧 ……50
付表４　主な検出遺構一覧 ……63
付表５　ＳＸ38507出土土器法量分布 ……71
付表６　ＳＸ38507出土土器の破片数量 ……71
付表７　主要遺構の遺物破片数量 ……84
付表８　遺物一覧表 ……99
付表９　報告書抄録 ……105

第１章　井ノ内稲荷塚古墳第２次調査概要

――　長岡京跡右京第478次調査　――

１　調　査　経　過

（１）周辺の古墳

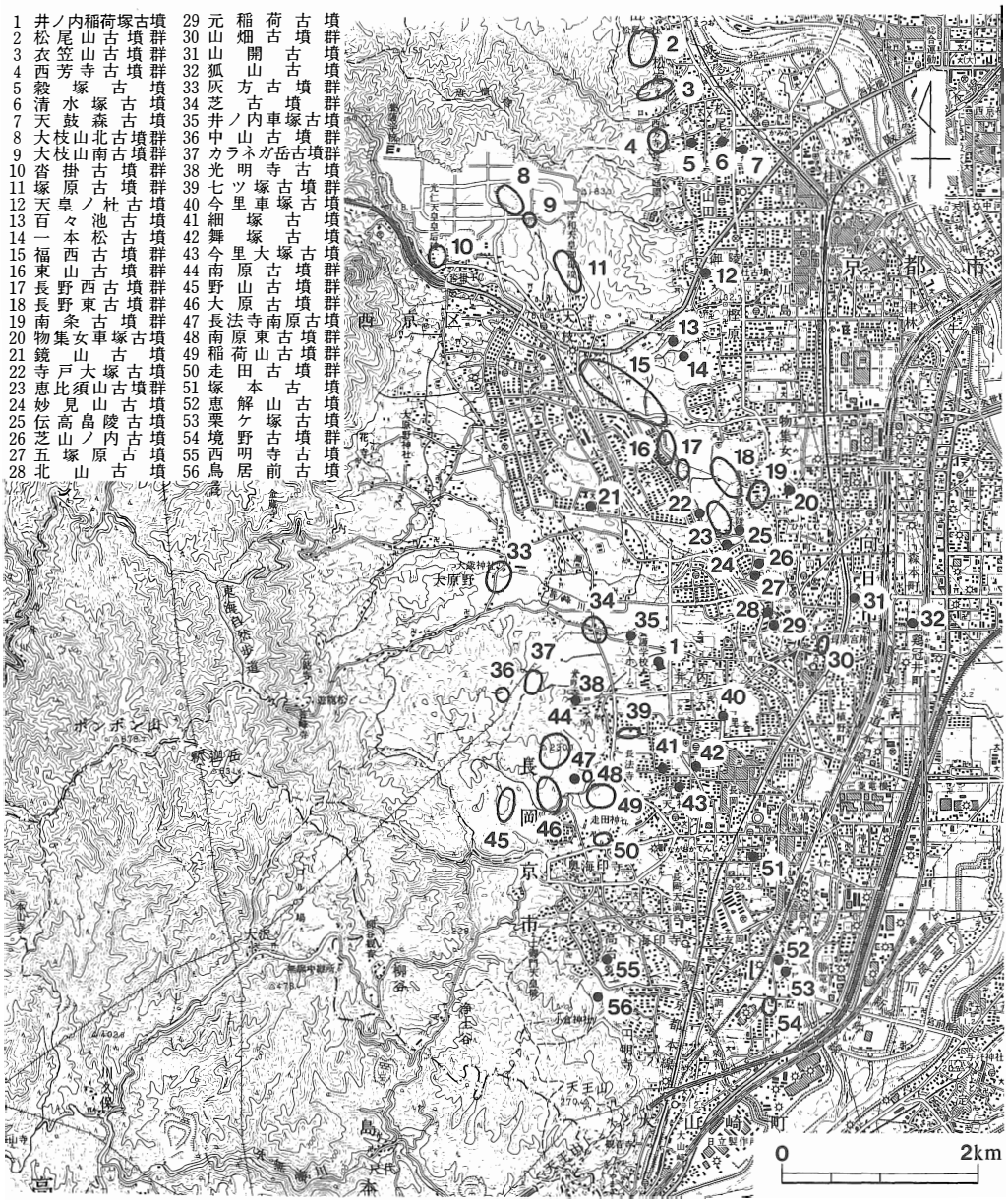
京都盆地の西南端に位置する乙訓地方は、旧石器時代から現代に至るまでの様々な時代の人々が住み続け、生活する舞台である。井ノ内稲荷塚古墳は、この乙訓地方の東端を南流する小畑川が形成した低位河岸段丘上、京都府長岡京市井ノ内小西40番地に位置する。古墳は現在、竹林に覆われ目立たなくなってはいるが、本来は向日・樫原地域を越えて丹波に至る交通路からよくみえる場所に存在していたと考えられる。

乙訓地方に最も早く出現する古墳は、稲荷塚古墳の北東約１㎞、西山山塊から南東に低く派生する向日丘陵の南端に位置する元稲荷古墳（前方後方墳、全長94ｍ）である。出土した最古型式の円筒埴輪などから、全国でも最古の古墳の１つに数えられている。向日丘陵には、この後も寺戸大塚古墳（98ｍ）・五塚原古墳（98ｍ）・妙見山古墳（120ｍ）といった前方後円墳が前期を通じて次々と築かれ、一連の首長系譜を形作っている。向日丘陵の北方、京都市樫原付近の丘陵上にも、一本松古墳（前方後円墳）・百々池古墳（円墳）・天皇ノ杜古墳（前方後円墳、86ｍ）と続く首長系譜を認めることができる。これらに対して、長岡京市以南の乙訓地方南部では長法寺南原古墳（前方後方墳、60ｍ）以外に顕著な前期古墳は発達しない。

ところが、中期になると状況は一変する。これまで乙訓地方の盟主的地位を保っていた向日地域には前方後円墳が築かれなくなり、牛廻古墳（40ｍ）・伝高畠陵古墳（65ｍ）・恵比須山古墳（15ｍ）といった円墳以外築かれなくなる。一方、乙訓地方南部には、丘陵上の鳥居前古墳（前方後円墳、51ｍ）・カラネガ岳２号墳（造り出し付円墳、36ｍ）など前期末葉の首長墓に引き続き、今里車塚古墳（推定74ｍ）・恵解山古墳（120ｍ）などの前方後円墳が東の平野部に造られるようになるのである。恵解山古墳は、1980年の調査で前方部副葬品埋納施設から総数700点におよぶ大量の鉄製品が出土し、注目された。以上のような大型古墳のほかに中期中葉になると、群集する小規模古墳が乙訓地方の平野部に現れる。恵解山古墳のすぐ南にある栗ヶ塚古墳群・境野古墳群、北方の小畑川上流の芝古墳群、向日丘陵の麓にある南条古墳群・山畑古墳群などがそれである。これらの古墳群の中には、初期須恵器が出土したものから陶棺を用いるものまであり、造営時期にかなりの幅が認められるが、いずれにしても乙訓地方において中期以降古墳を造ることのできる人々の間で階層分化が進んだことを示している。

後期になって大型古墳が顕著にみられるのは、乙訓地方北部の樫原地域である。金銅装の馬具や帯金具などの豊富な副葬品を持ち、学史的にも有名な中期後葉の穀塚古墳（前方後円墳、

2　調査経過



第２図　乙訓地域の古墳分布図

40ｍ）のあと、清水塚古墳・天鼓森古墳（ともに前方後円墳）と続く首長系譜を認めることができる。稲荷塚古墳の北東約２㎞、向日丘陵の東方の低位段丘上には、６世紀前半に物集女車塚古墳（前方後円墳、45ｍ）が築かれる。物集女車塚古墳は、組み合わせ式の家形石棺を納める右片袖式の横穴式石室を持ち、金銅装の馬具・冠などを副葬する有力な首長墓である。長岡京市北部では、ほぼ同じ頃小畑川上流域に稲荷塚古墳・井ノ内車塚古墳（前方後円墳、37ｍ）

第３図　井ノ内稲荷塚古墳の位置

が出現した。また同地域には、遺構・時期などの詳細は不明ながら、親王御塚古墳（前方後円墳）など３基の古墳が存在していたことを古絵図から知ることができる。稲荷塚古墳より南方の今里・長法寺地域には、５世紀末から６世紀中葉にかけて塚本古墳（前方後円墳、30ｍ）・舞塚古墳（帆立貝式古墳、39ｍ）・細塚古墳（前方後円墳、20ｍ）といった比較的小規模な古墳が築かれるが、６世紀後半になると山城でも最大級の横穴式石室を持つ今里大塚古墳（45ｍの円墳または後円部径45ｍの前方後円墳）が築かれる。そして、この古墳を最後に乙訓地方では大型古墳の築造は終わりを告げる。後期の群集墳は乙訓地方の各丘陵上および平野部にも分布するが、稲荷塚古墳の周辺では、芝古墳群・小西古墳群・灰方古墳群・カラネガ岳古墳群・南原古墳群・大原古墳群・長法寺七ツ塚古墳群・稲荷山古墳群などが知られている。丘陵上に位置するものの多くは横穴式石室を持つが、平野部に位置するもののなかには木棺や陶棺を直葬する主体部を形成し横穴式石室を持たない古墳があるなどの相違が認められる。

古墳時代より200年ほど後、この地には桓武天皇によって長岡京が造営され、その際多くの古墳が破壊されたと考えられる。実際、右京の五条以北・二坊以東および宮域内に存在した古墳の多くはこの時期に完全に破壊され、周濠などの痕跡を残すのみとなっている。一方、右京二条四坊に位置する稲荷塚古墳は横穴式石室の石材の一部を抜き取られているものの、完全な破壊は免れている。このことは長岡京の造営の実態がどのようなものであったかを考える手掛かりの１つになるとおもわれる。（高田）

（2）過去の調査

京都府教育委員会による調査　1967年から翌年にかけて京都府教育委員会が行った向日丘陵周辺における遺跡分布調査のなかで、稲荷塚古墳に関しても測量調査が行われた。その結果、稲荷塚古墳は全長45ｍ、後円部径28ｍ、後円部高4.2ｍ、前方部幅20ｍ、前方部高2.6ｍの規模を持つ前方後円墳であることが示された。(1)

大阪大学による調査　大阪大学文学部では文部省科学研究費補助金（一般研究Ａ、研究代表者小松和彦助教授）を得て、1992年から３ヶ年の計画で、日本古代の葬制と社会の関わりをテーマにした考古学、文献史学、文化人類学の共同研究を企画した。考古学班は、首長墓の構造の変遷から古墳時代の社会的、政治的動向を解明するための事例研究として、長岡京市稲荷塚古墳の測量調査および墳丘発掘調査（第１次調査と呼称）を実施することにした。

稲荷塚古墳は、当地域の古墳時代首長系譜研究の空白部分を埋める古墳時代後期の首長墓の１つと推定されてはいたが、発掘調査がなされたことはなく実態は不明のままであった。そのいっぽうで、古墳周辺では一帯に広がっていた筍栽培用の竹藪を浸食する形で宅地開発が進み、古墳が位置する環境も変化しつつある。そのため、現時点でこの古墳に関する正確なデータを得ておくことは、今後の研究の進展のためにも、また、文化財の保護活用の点からみても欠かせない作業であった。

調査はまず、1993年３月15日から23日までの約１週間を費やして墳丘測量を行い、その成果をもとに、同年７月20日から８月11日までの期間において、古墳の規模、形態を解明することを主眼においた発掘調査を実施した。その結果、古墳は後世にかなりの削平を受けていること、墳丘残存部の大きさは全長45ｍ、後円部径29ｍ程度であること、墳丘裾に幅４～５ｍの浅い溝を持つこと、墳丘はほとんど盛土で造られており、埴輪や葺石は施されていないことなどが判明し、今回の第２次調査を実施する上での貴重な基礎データとなった。(2)（福永）

（3）調査経過

調査の目的　今回の第２次発掘調査は、市内でも数少ない後期の前方後円墳であるこの古墳の保存、整備を考えていく上での基礎資料を得るために、長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施された。その具体的な目的は墳丘形態や築造時期の確定、埋葬施設残存状況の確認などである。調査は大阪大学文学部教授都出比呂志の指導を得て同助教授福永伸哉、同助手杉井健が担当した。調査期間は1994年７月20日から８月11日までの23日間である。

調査経過　調査はまず設定トレンチ内の竹の根起こしを行い、その後各トレンチで墳丘面の検出作業にとりかかった。埴輪、葺石などの外表施設がなく、墳丘盛土も黒色ないし暗褐色のため、墳丘面の判別が難しく、サブトレンチを多用して対処した。墳丘斜面部と前方部墳頂部の墳丘面がほぼ確定した後は、残された後円部墳頂部の攪乱坑内の攪乱土除去作業にあたった。この夏の猛暑は記録的で、期間中最高気温39℃を越える日が４日間も続くなど、手掘りの発掘

調査にとっては過酷な条件であったが、そのせいか例年大いに悩まされるヤブ蚊が比較的少なかったのはせめてもの救いだった。

８月１日になって後円部頂の攪乱坑内から数個の巨石が姿を現し、輪郭をたどっていくと横穴式石室の側壁であることが明らかになった。さらに４日には、前方部の墳丘盛土の構造を確認するために墳丘面を断ち割った深さ２ｍの前方部墳頂トレンチの底から須恵器が並べられた状態で検出され、周囲を精査したところ墳丘主軸に直交する木棺直葬の小口に納められた副葬土器であることが判明した。今回の調査は埋葬施設も含めてその残存状況を確認することが目的であったため、検出したこれらの埋葬施設についてはこれ以上の調査は行わず、現状の実測、写真撮影などを行うにとどめ、９日までにその記録作業を終えた。この間、８日には調査成果について関係者説明会を行った。10、11日の両日で埋め戻しを行い、現地での作業を終了した。

調査参加者　発掘調査、整理作業には調査員、調査補助員として大阪大学文学部考古学研究室、大阪大学考古学研究会のメンバー等が参加した。また、このほかに、調査団の合宿生活を支えるために多数の学生諸君が協力した。それらも含めた参加者の氏名は次の通りである。

朴天秀、清野孝之、高田健一（大学院文学研究科）、高橋浩二（文学部研究生）、大川充夫、黒田利恵、松浦宇哲、宮崎認、安河内敬志(文学部４回生)、伊藤崇樹、大林元、川村雪絵、北田明宏、楠樹華奈、古松良章、宍戸太一、竹花明良、田中史子、寺前直人、豊島直博、林涼子、岩崎陽子（文学部３回生)、松本めぐみ（人間科学部３回生)、山本征治（工学部３回生)、関口俊洋、中川直樹、岡寺良、高橋徹、林正憲、岩戸晶子、衣畑真紀子、忽那敬三、村田真一、湯野基生（考古学研究会)。

また、本書には内容記述と調査成果の理解のための便宜をはかって、前年に行われた大阪大学による第１次調査の成果も加えているが、この調査の参加者のうち今回の第２次調査に加わっていない人の氏名をあげ、その負うところを記しておきたい。

佐々木憲一、ウェルナ・シュタインハウス、金田善敬、辻美紀、橋本達也、角南聡一郎、赤木寛、秋山妙子、荒木亮太、泉和郎、井上順子、白井美友紀、鶴田健治、吉田進、飯岡直子、

第４図　調査風景（1994年）

第５図　説明会風景（1994年）

大森圭一郎、道下将章、山上和世、山田朋子、吉野瑞穂。

なお、本章の執筆は福永、杉井、朴、清野、高田、高橋(浩)が行い、杉井がこれを編集した。各人の分担は執筆箇所の文末に示した。

謝　辞　調査の実施にあたっては多くの方々の御援助を頂いた。

調査地の地権者林三代次氏は発掘調査に御理解を頂き、調査を快諾された。また、隣接地の地権者岡本隆、五十棲春一、野村伊三郎、野村義三、石田繁和、石田芳嗣、石田秀次郎の各氏および隣接地の㈲大筆興業からは調査に関してご協力を頂いた。子守勝手神社総代会は調査団の宿舎を貸与され、合宿生活の円滑化に関して便宜を図られた。後円部出土の墨書土器の釈読に関しては向日市埋蔵文化財センターの清水みき氏からご教示を頂いた。

このほかにもさまざまな方面からの協力と援助によって発掘調査が大きな成果を上げることができたことに、深く感謝の意を表したい。(福永)

2　墳丘の構造

(1) 墳丘の現状

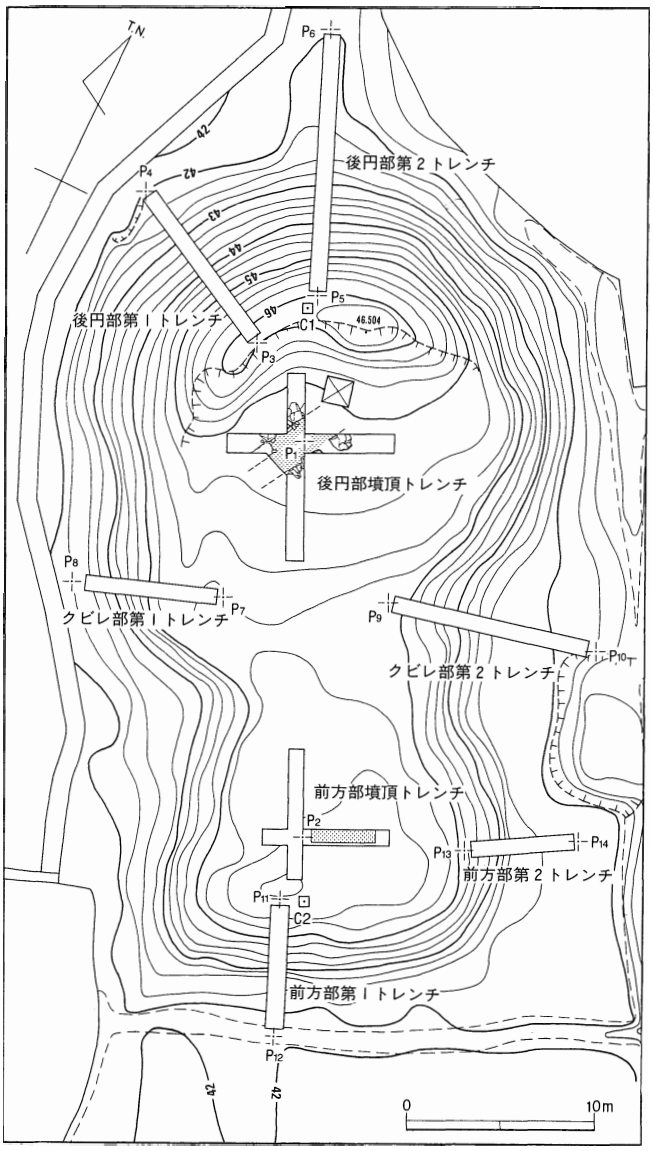
稲荷塚古墳は西から東に向かって傾斜する低位段丘の上面に立地し、付近の標高は42ｍ前後である(第3図)。古墳の北側はいまだうっそうとした竹藪で覆われており、古墳はその竹藪の中に存在する。墳丘および周囲の地形については、1967～68年の京都府教育委員会の調査、1993年の大阪大学の調査において測量図が作成されているが、両者を見比べてみると、25年の歳月を経ても、その間に古墳の墳丘部分に関しては大きな改変を受けていないことがわかる。ここでは、大阪大学が作成した地形図をもとに墳丘各部分についての所見をのべる（第6図)。

古墳は前方部を南に向ける前方後円墳であるが、その外形は前方後円形をよく保っている。特に後円部北西斜面の残存状態は良好である。

後円部についてみてみると、その北西斜面の良好な残存状況に対して北東斜面の等高線には若干の乱れがみられる。しかし後円部北側斜面に関しては比較的よく旧状を残しているとおもわれる。ただ、古墳のすぐ西側にまで開発がおよびコンクリートの塀が後円部西側を取り巻くようにめぐっているため、後円部西側の墳端部分については若干の削平を受けている可能性がある。後円部墳頂部には「オキツネサン」と俗称される小さな祠が祭られているが、等高線からは、それを中心とする後円部の南側が大きくえぐり取られたと判断できる。しかし、後述する調査結果から、一見後円部の残存部のようにおもえる祠北側の高まりも、その大半は後円部墳頂部削平後の堆積であることがわかった。また、等高線をみると、西側クビレ部が不自然に大きく外側へ張り出しており、後円部墳頂部を削平した際の廃土が押しやられた状況を想定することができる。一方、東側のクビレ部は比較的良好に旧地形を保存している。

前方部については、その前面と西側コーナー部分の残存状態が良好である。おそらくそれに

第６図　墳丘測量図



第７図　トレンチ配置図（アミは埋葬施設）

続く西側斜面の等高線の直線的なラインも、本来の墳丘面を反映したものであろう。それに対し、東側コーナー部分の等高線は円弧状のカーブを描き、また東側斜面の等高線も明瞭な直線とはならず、これらの部分は後世の改変を受けていると考えられる。

現状の墳丘において、後円部墳頂部の最高点の標高は46.5ｍ、後円部の削平による平坦部分の標高は44.5ｍ前後、前方部の最高点は44.8ｍである。また、墳丘裾の標高は42ｍ前後であり、したがって現状の後円部最高点との比高差は約4.5ｍとなる。また、後円部、前方部とも段築の存在は確認できず、埴輪や葺石が存在する証拠も認めることはできない。(杉井)

（２）トレンチの設定

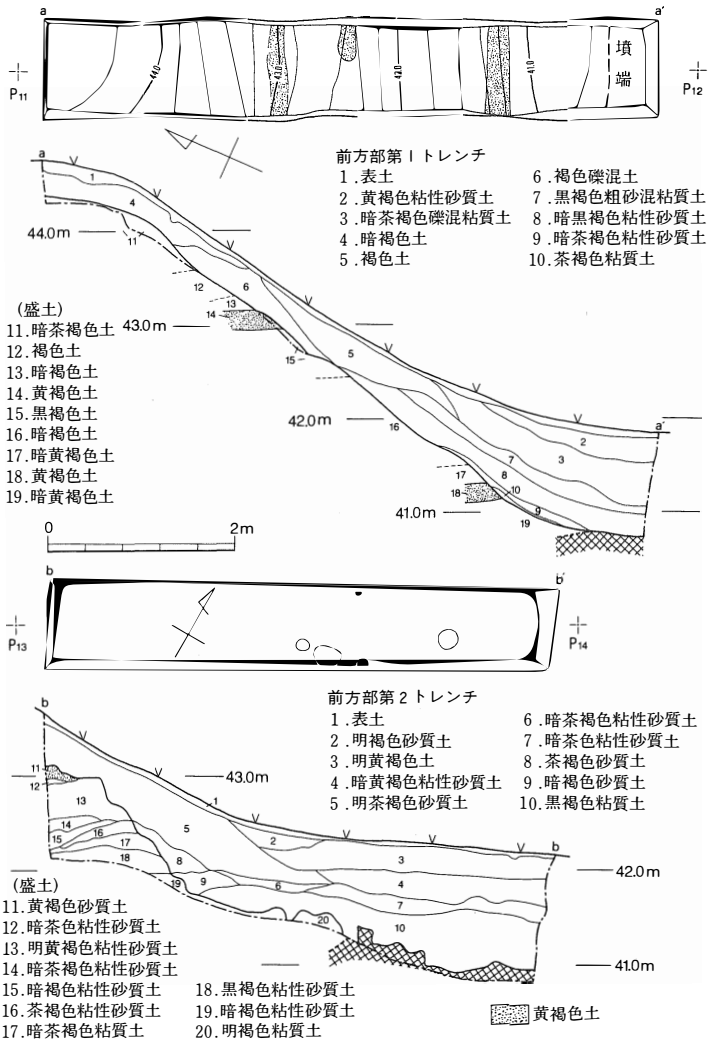
墳丘調査においては、前方部、クビレ部、後円部にそれぞれ２箇所、計６箇所のトレンチを設定した(第７図)。トレンチの名称は前方部、クビレ部、後円部ともそれぞれ西側から第１、第２トレンチと呼称する。

トレンチの設定は、墳丘の形態および墳丘斜面の形状を明らかにすることを目的に、墳丘が良好に保存されているとおもわれるところを中心に行った。このうち前方部第１トレンチ、および後円部第２トレンチは古墳の全長を知ることを主眼におき、墳丘主軸に沿うかたちで設定した。以下、各トレンチの調査内容、およびそれによって得た所見を述べたい。(杉井)

（３）調査の所見

前方部第１トレンチ（第８図上）　前方部前面における墳端の位置を確認する目的で設定し

たトレンチである。後述する後円部やクビレ部の各トレンチに比べて墳丘の遺存状態は良好で、トレンチの上半部（北半部）では表土下0.3～0.5ｍ、下端部（南端部）では約１ｍで墳丘面を確認した。



第８図　前方部第１・第２トレンチ平面図、断面図
（上：第１、下：第２）

墳丘盛土は、あいだに黄褐色土層を２層はさんで暗茶褐色系の土と明茶褐色系の土を互層に盛っており、後に述べる前方部第２トレンチでの観察結果とも基本的に対応する。上部の黄褐色土層上面のレベルは標高43.1ｍである。この墳丘盛土面は約37°の角度で南に傾斜し、トレンチ南端部から約0.5ｍの位置で水平面となる。ちょうど水平となる地点から南は小礫を多量に含む暗黄褐色土の地山面となり、この傾斜変換点をもって墳端と認識した。墳端、および地山面のレベルは40.8ｍである。一方、トレンチ上部（北端部）でも盛土面が平坦となることを確認した。墳丘測量図（第６図）の等高線の状況からみても、この付近で前方部墳頂平坦面に移行すると考えるのが妥当である。

なお、墳丘面には葺石は施されず、段築も存在しない。また、トレンチ下部（南端部）の平坦面より南側は調査範囲外であったため周溝の有無は確認できなかった。遺物は須恵器片・土師器片などが出土したが、いずれも古墳に伴う時期のものではない。（高田）

前方部第２トレンチ（第８図下）　前方部側面の正確な形態を解明する目的で前方部東側斜面に設定したトレンチであるが、古墳築造当初の墳丘面は後世の人為的な削平や小動物の巣穴などによってほとんど残存していなかった。したがって、平面的に墳丘面を検出することが困

難であったため任意の面まで掘り下げ、土層断面の観察によって墳丘面の確定を行った。

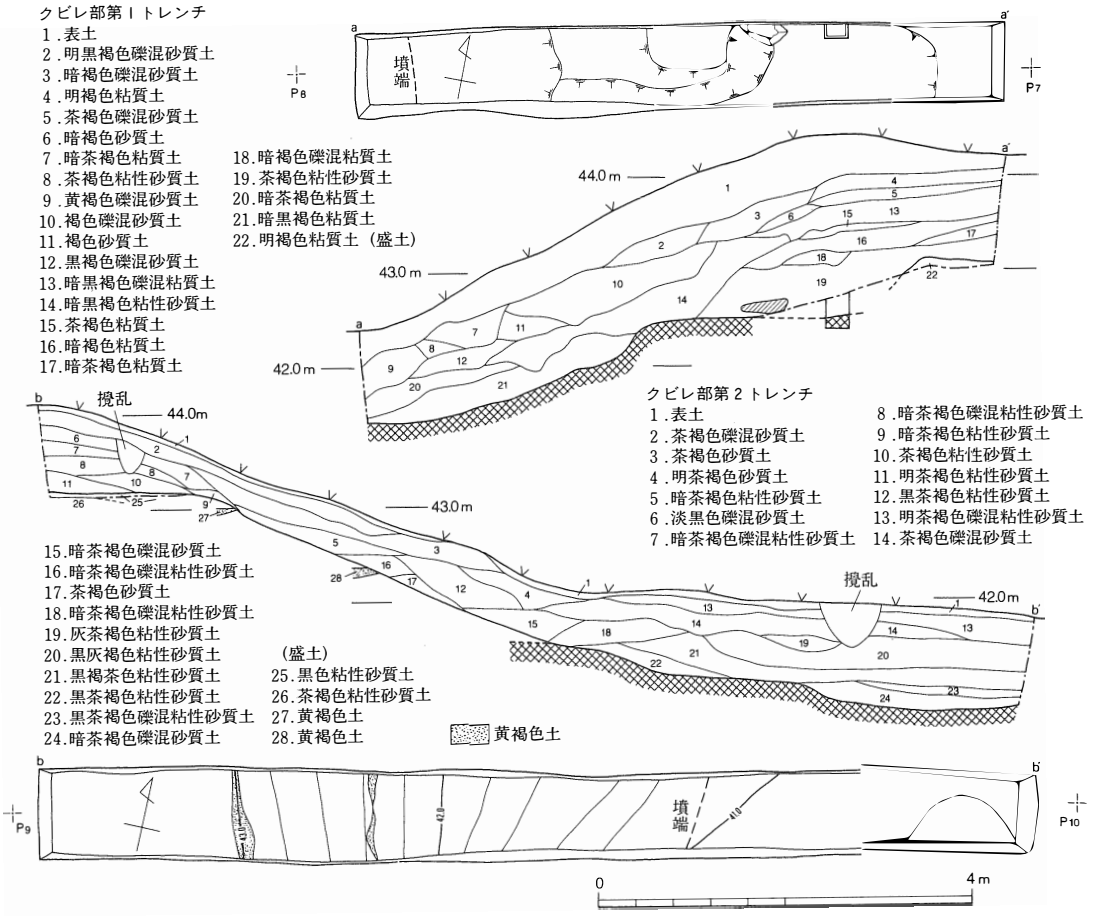
トレンチ西端部で黄褐色土層の存在を確認したが、その残存する上面のレベルは標高43.1mであり、前方部第1トレンチおよび後述するクビレ部第2トレンチの同様の土層とレベルが一致する。よってこの黄褐色土層を盛土の一部であると認識し、この土層以下を墳丘残存部と判断した。さらに、墳丘はトレンチの下半部において最も大きく削りとられているため、墳端は明らかにしがたいが、地山、および盛土と考えられる19・20層の上面をたどると、トレンチ上部のポイントP13から約5.1mのところで平坦な地山面を復元できる。このような状況はトレンチ南壁の土層でも観察できる。したがって、この平坦面が始まる部分をもって墳端と解釈しておきたい。なお、墳端とする地点のレベルは41.0m前後であり、前方部第1トレンチおよび後述のクビレ部第2トレンチにおけるそれぞれの墳端のレベルとほぼ同じである。また、残存する地山上面のレベルは41.3～4mである。なお、葺石の存在は確認できない。遺物は奈良時代の土師器片・須恵器片などのほか、墳丘盛土から弥生式土器片が出土した。(高田)

クビレ部第1トレンチ（第10図上）　西側クビレ部の構造および墳端ラインを確定するために設定したトレンチである。表土および流土を1.2～2m掘り下げ、ようやく墳丘面に到達した。トレンチ上半部（東半部）では墳丘部分が大きく削平されている。第10図上の22層（明褐色粘質土）は非常によくしまり粘性も強く、これ以下を墳丘残存部と判断した。このレベルは標高43.1mである。

トレンチ中央部から下半部（西半部）では礫を含む暗黄褐色土の地山面を検出した。この地山面も22層に続く墳丘残存面であると考えられるが、安定した傾斜面をなさず、後世の改変を受けているとおもわれる。トレンチの西端部付近で、ゆるやかに傾斜してきた地山面が水平になる箇所が確認され、その地点を墳端であると判断した。墳端のレベルは41.4m、トレンチ中央部の地山平坦面のレベルは42.5mである。なお、葺石の存在は確認されなかった。

トレンチ中央部の地山上面から、若干の堆積土をはさんで比較的大きな石材が出土した。これは後述する後円部中央の横穴式石室に使用されていた石材の可能性がある。また遺物は流出土のなかから方頭斧箭式鉄鏃や土師器の小片、須恵器の数片、および古墳に伴わない若干の弥生式土器片と中世の土器片が検出された。これらのうち鉄鏃は横穴式石室に納められた副葬品の一部である可能性がある。墳丘の現状のところで述べたように、西側クビレ部の等高線は不自然に外側へ張り出しており、これを後円部墳頂部を削平した際の廃土の集積と考えることは、このトレンチから大きな石材や鉄鏃などの横穴

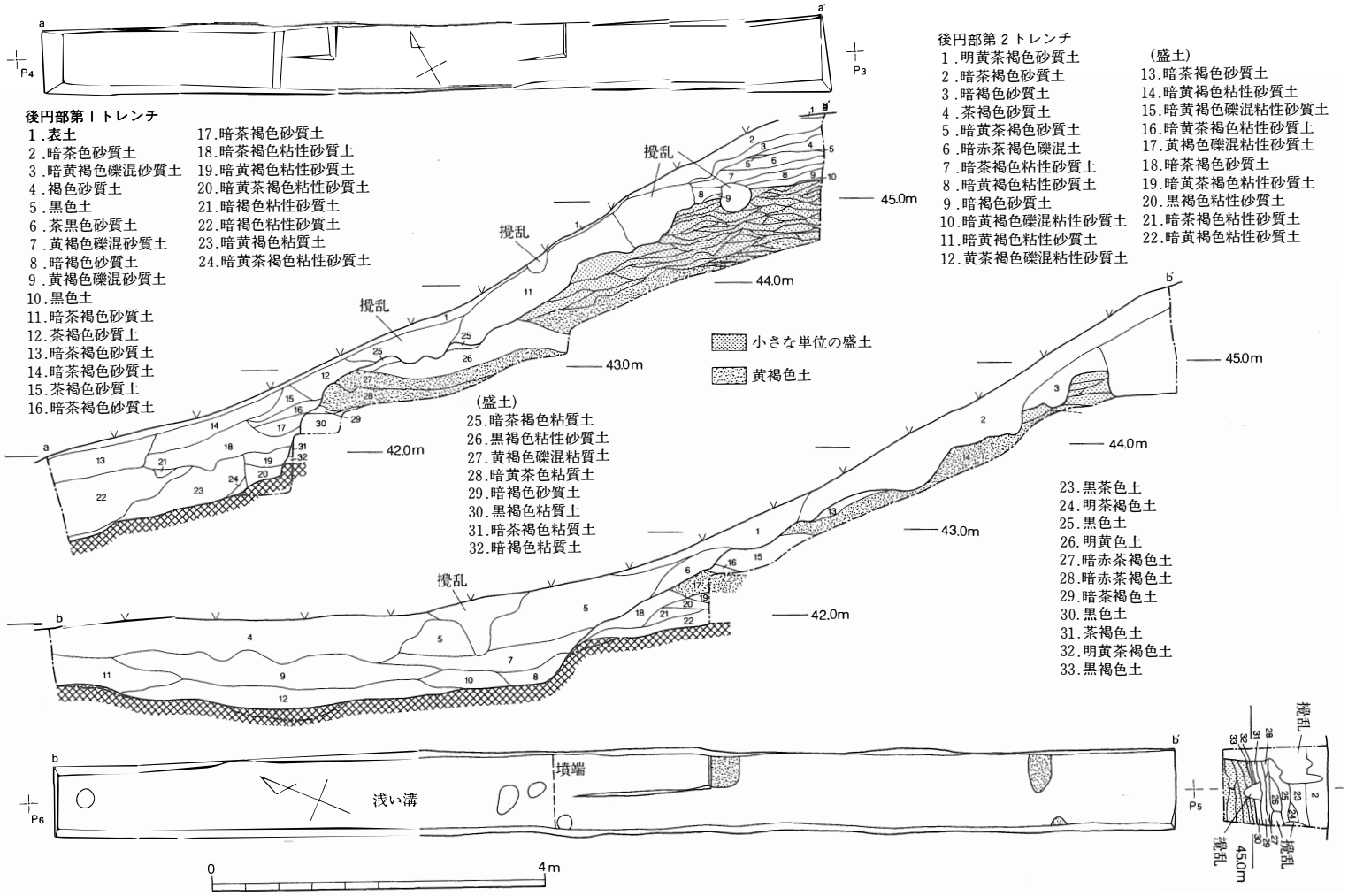
第9図　北宋銭出土状況（クビレ部第2トレンチ）



第10図　クビレ部第１・第２トレンチ平面図、断面図（上：第１、下：第２）

式石室に関連すると考えられる遺物が検出されたことに矛盾しない。さらに、横穴式石室に対する撹乱行為に伴って、このトレンチでみられた墳丘面の改変もなされたと考えることもできよう。（朴）

クビレ部第２トレンチ（第10図下）　東側クビレ部の構造を確認するために設定したトレンチである。表土および流出土を0.5～１ｍ程度掘り下げると、東側に向かって約22°の角度で傾斜する一連の面を検出した。この面は、トレンチ西端から約1.5ｍの間では水平面をなし、その地点から東へ一定の角度で傾斜したのち、東端から約3.5ｍの位置で再び傾斜を変え、ほぼ水平となる。この安定した一連の面を墳丘盛土の残存面であると判断した。よって、このトレンチにおける墳端の位置は、傾斜面が再び水平面に変わるトレンチ東端から約3.5ｍのあたりであると判断できる。墳端のレベルは41.1ｍである。一方、トレンチ西端部の水平面は、墳頂平坦面とするにはレベルが低く、後世の削平を受け形成されたものと考えられる。この部分のレベルは約43.2ｍである。



第11図　後円部第１・第２トレンチ平面図、断面図（上：第１、下：第２）

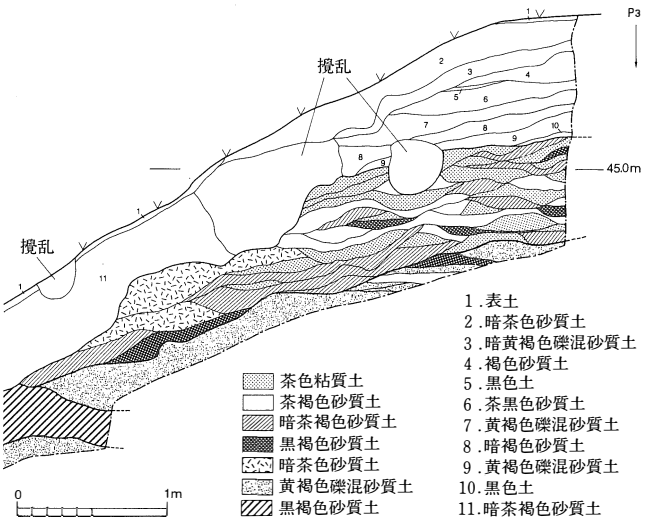
墳丘面を構成する盛土層には、標高43.0ｍ、および42.3ｍのあたりに明るい黄褐色の土層が２層存在する。特にその上部の黄褐色土層（27層）は、先に述べた前方部第１トレンチ、第２トレンチで確認された同様の黄褐色土層とレベルが一致することは重要である。これらの黄褐色土層にはさまれた部分の盛土は、黒色ないしは茶褐色の均質な粘性砂質土で形成される。また、トレンチのほぼ中央部から東側では礫を多く含む黄色砂質土の地山となる。その地山の最高点のレベルは41.5～6ｍであり、前方部第２トレンチの地山上面の高さとほぼ同じである。葺石および段築の存在は確認できなかった。

遺物は墳丘盛土直上の土層から北宋銭７枚が検出されたほか(第９図)、流出土から古墳以降の土師器、須恵器、陶磁器の小片が出土した。(杉井)

後円部第１トレンチ（第11図上）　後円部の北西斜面に設定したトレンチである。後円部の墳端ラインの確定を目的としたが、トレンチの下部に大きな攪乱がおよんでいたため、それを明確にするには至らなかった。しかし、墳丘面の認定が困難であったことが結果的に墳丘の一部を断ち割ることとなり、墳丘盛土に関して重要な知見を得ることができた。

トレンチの北西部（下部）では、現地表下約１ｍで黄褐色シルト質粘質土の地山面を検出した。この地山面は標高41.9ｍの高さで水平面となり、その上に墳丘の盛土がなされている。地山と盛土の間にいわゆるブラックバンドは認められない。盛土には幾つかの大きなまとまりが存在することを観察できるが、そのうち標高44.0～44.5ｍを境にしてその上下で全く盛土の施し方が異なることは注目される。すなわち標高44.0ｍ以下の盛土は、厚さ20～40㎝、水平幅２ｍ以上を１単位とするもので、比較的大きな盛土単位をなす。一方、標高44.0ｍ以上では、厚さ５～10㎝の断面凸レンズ状の小さな単位を密に幾層にも積み重ねる盛土となる。

大きな単位の盛土部分に関してはさらに２つの部分に分割できる。まず、水平に整地した地山面の上に暗褐色ないし黒褐色粘質土の盛土を60～70㎝施し（第11図上-29～32層)、その上に小さな礫を含む黄褐色粘質土を中心とした盛土を行う（27･28層)。これが下部のひとまとまりをなし、その厚さは１ｍ程である。その上にこれと同様の盛土をもう１単位繰り返す。２度目の盛土単位となる黄褐色土の上面は後円部の中心に向かって



第12図　後円部第１トレンチ上半部の盛土状況図

徐々にレベルをあげているが整った平坦面をなし、盛土作業における重要な整地面および作業休止面の１つであろう。ここを境に盛土の形状が全く異なることもそのことをよく示している。その上部の、密に凸レンズ状の小さな単位の盛土を繰り返す部分は、茶色系および茶褐色系の砂質土あるいは粘質土を交互に盛り固めた状況を呈する(第12図)。盛土ひと運びごとに土質を変え、非常に念入りに盛土作業を行った様子がうかがえる。トレンチ上端部でこの種の盛土の残存する厚さは70㎝程度であるが、後円部墳頂部が大きく削平を受けていること、および後述する横穴式石室の復元される高さを考慮すると、この部分にも本来はさらにいくらかの盛土が存在していたと考えるのが妥当である。なお、段築および葺石の存在は確認されなかった。遺物は、須恵器、土師器の小片が出土しているが、大半は古墳以降の遺物である。(杉井)

後円部第２トレンチ（第11図下）　後円部の北側、墳丘主軸上に設定したトレンチである。古墳の全長、および周溝の有無を明らかにすることを目的とした。このトレンチにおいても結果的に墳丘の一部を断ち割ることとなり、後円部第１トレンチと同様に盛土の様子を観察することができた。

まず墳端は、トレンチ北端部より南へ約６ｍの位置で確認した。それは直径20㎝以下の多くの礫を含む明黄色砂礫層の地山を削り込み形成されている。墳端のレベルは41.2ｍで、墳丘側の地山平坦面のレベルが41.8～9ｍであるから、60～70㎝の削り出しの高さを持つ。地山は墳端部から北へゆるやかに傾斜し、トレンチ北端部から2.7～8ｍのところで最もレベルが低くなったあと、再びゆるやかにレベルをあげる。そして、トレンチ北端部から70～80㎝の箇所で再び墳端部と同じレベルになる。地山の削り込みは後にも述べるように墳丘構築時の人為的なものであると考えられるから、この後円部北端部に続く地山の浅いくぼみも人の手による意味のあるものと考えるのが妥当であろう。よって、この幅約５ｍ、深さ約30㎝の浅いくぼみを墳丘裾に設けられた溝の一部であると判断した。

墳丘盛土は、後円部第１トレンチでみられた状況と類似する。すなわち標高41.9ｍの高さで地山を水平に整地し、その上に盛土が施される。地山と盛土の間にはブラックバンドは存在しない。盛土は、まず下部に比較的大きな単位の土盛りを施し、それには黄褐色系の土層を２層はさむ（第11図下-14・17層)。また、後円部第１トレンチとほぼ同じレベルの標高44.3ｍを越える位置で大きく盛土の状況が変化し、小さな単位の密な盛土となる。特に、地山上面のレベル、および盛土の状態が大きく変化する地点のレベルが後円部の両トレンチにおいて一致することは注目され、その両面が墳丘構築作業時における重要な作業単位面である可能性が高い。なお、段築、葺石の存在は確認されなかった。また、遺物は、若干の須恵器片、土師器片が検出されている。(杉井)

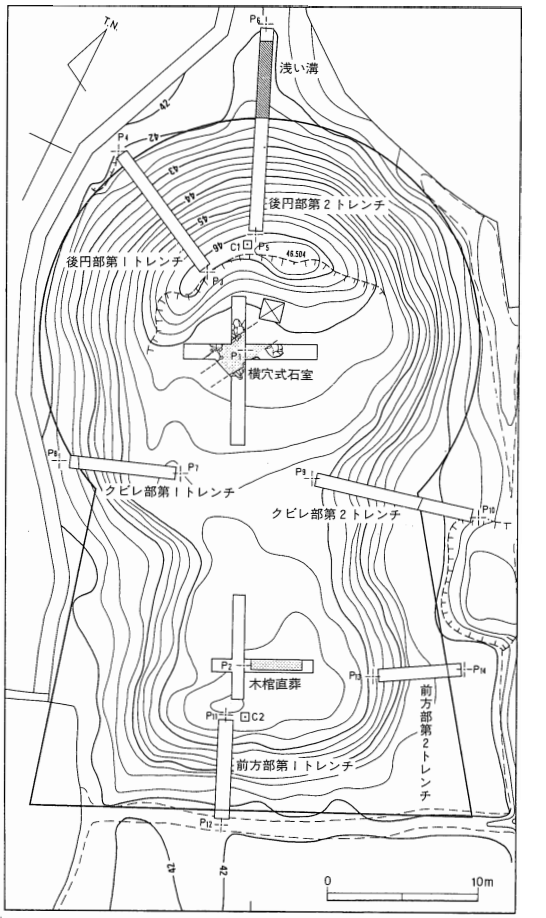
（４）墳丘形態の復元

墳丘の形態（第13図）　これまで述べてきたように、稲荷塚古墳の墳丘は後世の削平によっ

て各所が改変を受けているが、墳丘に設けた６箇所のトレンチのうち５箇所で墳端を確認することができた。

まず、後円部径の復元にあたっては、確実に後円部の外郭線と認めうる後円部第２トレンチおよびクビレ部第１トレンチで検出した墳端ラインが、円周上の一部となる正円を描く作業を行った。円周上の点が２点のみであるため、幾つもの正円を描くことができるが、墳丘測量図の等高線や後円部第１トレンチの下端部で検出した地山面のレベルを参考に、最も妥当であるとおもわれる後円部の外郭線を描いた。

ここで１つ問題となるのは、クビレ部第２トレンチで検出された墳端ラインを後円部の一部として取り込むのかどうかという点である。第10図下のトレンチ平面図に示した等高線をみると、墳端であると認識したあたりの等高線は後円部の一部とするのにふさわしいラインを描いているようにみえる。しかしトレンチ上半部で検出した盛土面の傾斜から判断すると、ここではむしろ前方部の墳丘斜面を検出しているとみるほうが妥当であるとおもわれ、したがって当トレンチのすぐ北側に後円部と前方部の連結部分が存在するとの推察が可能となろう。



第13図　井ノ内稲荷塚古墳墳丘復元図

前方部の前面については、前方部第１トレンチで検出した墳端ラインによって確実に捉えることができる。一方、その側面に関しては、クビレ部第２トレンチおよび前方部第２トレンチで検出した墳端ラインを直線で結び、それを現状で想定しうる墳丘中軸線を境に西側へ折り返すことにより復元した。この折り返し作業においては、墳丘中軸線の位置により前方部の幅が大きく異なってくるが、後述する後円部や前方部で検出された主体部の位置、およびよく墳丘が保存されていると考えられる前方部西側コーナー部と西側斜面の等高線の方向を参考にして、墳丘中軸線の決定と折り返し作業を行った。

以上の結果、墳丘の平面形態は第13図のように復元できる。すなわち、稲荷塚古墳は全長46m、後円部径29.5m、クビレ部幅21.5m、前方部長16.5m、前方部幅29.5mの規模を持つ前方

付表２　墳丘トレンチ各部分の高さ

	墳　端	地山上面	黄褐色の盛土
前方部 第１トレンチ	40.8ｍ	40.8ｍ	43.1ｍ 41.2～3
前方部 第２トレンチ	41.0	41.3～4	43.1
クビレ部 第１トレンチ	41.4	42.5	―――
クビレ部 第２トレンチ	41.1	41.5～6	43.0 42.3
後円部 第１トレンチ	―――	41.9	44.0～5 43.2
後円部 第２トレンチ	41.2	41.9	44.3 42.4～5

後円墳である。また、現存する後円部高は４ｍ、前方部高は3.5ｍである。墳丘主軸の方向はN25°Wで、前方部は南に向く。後円部第２トレンチ北半部の所見から、墳丘裾には幅５ｍ程の浅い溝がめぐらされていたと考えられるが、これが全周するか否かという点も含めて詳細な内容は現状では不明である。ただし、埋土の状況からみて常に帯水状態にあるような溝であったとは考えがたい。さらに、葺石、埴輪を持たず、段築成の存在も認めることができない。

墳丘の構築　各トレンチの所見の部分で個別に記述した盛土や地山の高さを第１表にまとめた。これをもとに、墳丘の構築過程を考えてみたい。

まず注目されるのは、各トレンチにおいて地山と盛土の境を示す地山上面のレベルがほぼ一致することである。これは、墳丘を構築するにあたって、まず旧地形を削平し平坦面に整地するという行為があったことを推察させる。後円部のトレンチで確認したように地山上面にいわゆるブラックバンドが存在しないことは、この推察を裏付ける。また、墳端のレベルは標高約41ｍで共通し、地山上面のレベルと比べて各トレンチとも数10㎝低いことから、墳丘の基底ラインは地山を削り込むことによって造り出されたことがわかる。墳丘裾の浅い溝はこの作業の結果形成されたものであろう。

その地山の上に盛土がなされるのであるが、ベルト状にはさみこまれた黄褐色系の盛土のレベルが、前方部、後円部ごとに共通することも注目される。特に後円部にみられる上層の黄褐色土のレベルが標高44ｍを超えたあたりの数値で共通し、さらにこれを境に大きな単位の盛土から小さな単位の盛土に変化することは重要である。後述する後円部墳頂トレンチで確認された石室の裏込め土および墳丘盛土においても同様の小さな単位の土盛りがみられ、レベル的に墳丘トレンチのそれと同質のものであると考えられる。こうしたことから、標高44ｍの黄褐色土の整地面は墳丘構築においてはもちろん、石室構築においても重要な作業休止面であった可能性が高い。また、想定される石室の高さから判断して、標高41.9ｍの後円部における地山整形面が、石室の基底面であると考えられる。

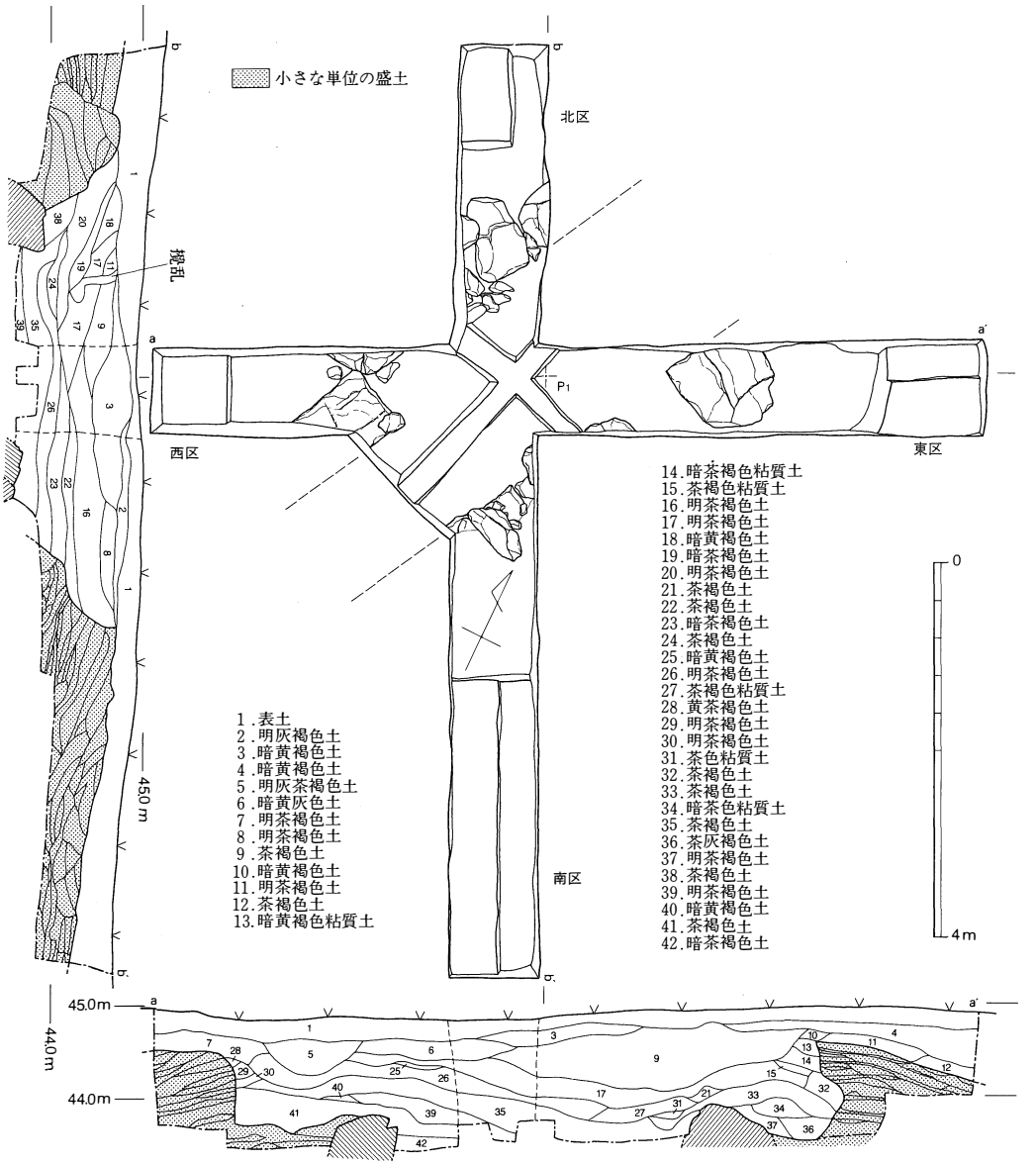
一方、前方部では標高43ｍあたりに黄褐色系の盛土が存在するが、その上下で後円部でみられたような盛土の１単位の大きさが変化する状況はみられない。黄褐色土のレベルが後円部と前方部で一致しないことも合わせて考えると、前方部と後円部における墳丘構築の手順が同じものではなかったと予想できる。(杉井)

3　埋葬施設の構造

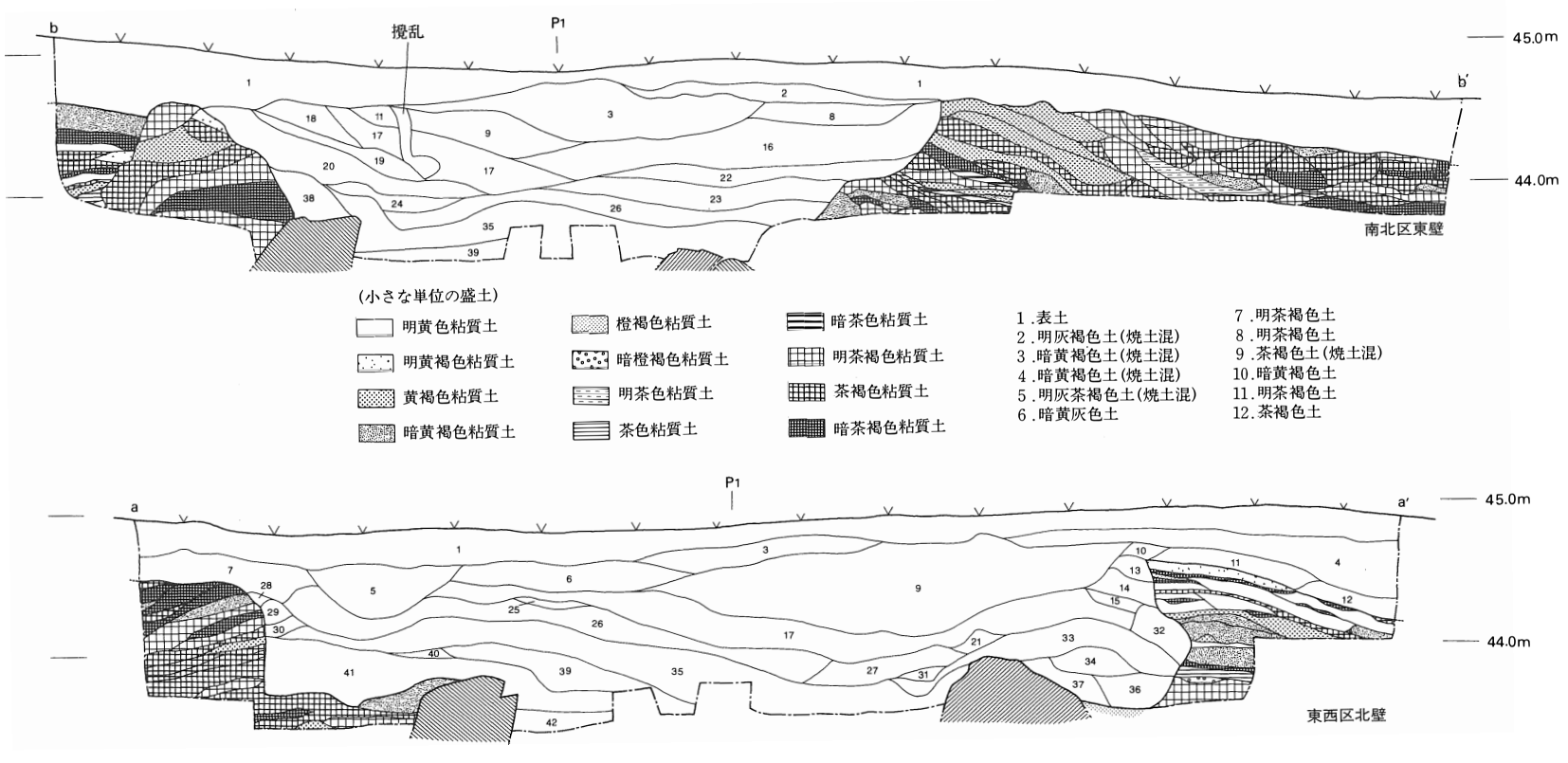
（1）発掘区の設定

古墳の主体部の残存状況を確認するために後円部、前方部の墳頂にそれぞれ１箇所トレンチを設定した（第７図）。それぞれ後円部墳頂トレンチ、前方部墳頂トレンチと呼称する。

後円部墳頂トレンチはポイントＰ１、前方部墳頂トレンチはポイントＰ２を中心に、それぞ



第14図　後円部墳頂トレンチ平面図、断面図

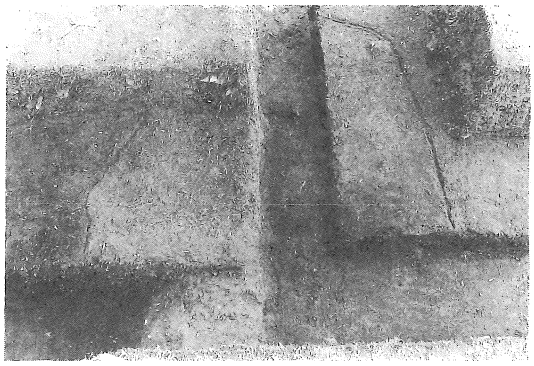


13.暗黄褐色粘質土
14.暗茶褐色粘質土
15.茶褐色粘質土
16.明茶褐色土
17.明茶褐色土
18.暗黄褐色土
19.暗茶褐色土
20.明茶褐色土
21.茶褐色土
22.茶褐色土
23.暗茶褐色土
24.茶褐色土
25.暗黄褐色土
26.明茶褐色土
27.茶褐色粘質土
28.黄茶褐色土
29.明茶褐色土
30.明茶褐色土
31.茶色粘質土
32.茶褐色土
33.茶褐色土
34.暗茶色粘質土
35.茶褐色土
36.茶灰褐色土
37.明茶褐色土
38.茶褐色土
39.明茶褐色土
40.暗黄褐色土
41.茶褐色土
42.暗茶褐色土

0　2m

第15図　後円部墳頂トレンチ土層断面図

第16図　土師器出土状況（後円部墳頂トレンチ）



第17図　焼土層の堆積（後円部墳頂トレンチ）

れ墳丘主軸に沿う方向とそれに直交する方向に十字形に設定した。また後円部墳頂トレンチでは、横穴式石室の主軸方向を確認するため、トレンチが十字形に直交する部分の南西コーナー部をカットした。

以下、両トレンチの調査内容と、調査の結果その存在を確認した主体部の構造について、概要と現状における所見を述べたい。（清野）

（２）調査の所見

後円部墳頂トレンチ　後円部における主体部の残存状況の確認を目的とし、墳丘主軸方向に長さ10ｍ、ポイントＰ１でこれと直交する長さ７ｍのトレンチを加えた十字形に設定した。その結果、標高44ｍ付近より下層に横穴式石室が遺存していることを確認した。また、石室の周囲に施された裏込めおよび墳丘盛土の状況を確認した。

横穴式石室、墳丘盛土および石室裏込めの状況については後述することにして、ここではまずそれらの上部の攪乱坑内（第14図-１～42層）の状況について概要を報告する。なお説明の便宜上、十字形のトレンチをポイントＰ１を中心に東、西、南、北区とそれぞれ呼び分けることにする。

横穴式石室、墳丘盛土および石室裏込めは大規模な攪乱を受けており、石室の上半部は完全に破壊されている。この攪乱は各所において石室石材が存在していたとおもわれる位置よりさらに外側の石室裏込めおよび墳丘盛土にまでおよぶ。特に東区においては墳丘盛土を大きくえぐり込んでいる（第14図、図版７-１）。

東区において、この攪乱土中より土師器が一括して検出された(第16図)。いずれも長岡京期のものと考えられ、この攪乱がそのころのものであることを示している。これらの土師器のうちでも特に注目されるものは、その外面に墨書人面が描かれることがしばしばあるタイプの土器が含まれることである（第22図-23)。こうした土師器が一括して面的に検出されたことから、この遺構に伴って何らかの祭祀が行われたと考えてよかろう。他に、この時期に該当する遺物として、底部外面に墨書を施す須恵器（第22図-27）などがある。

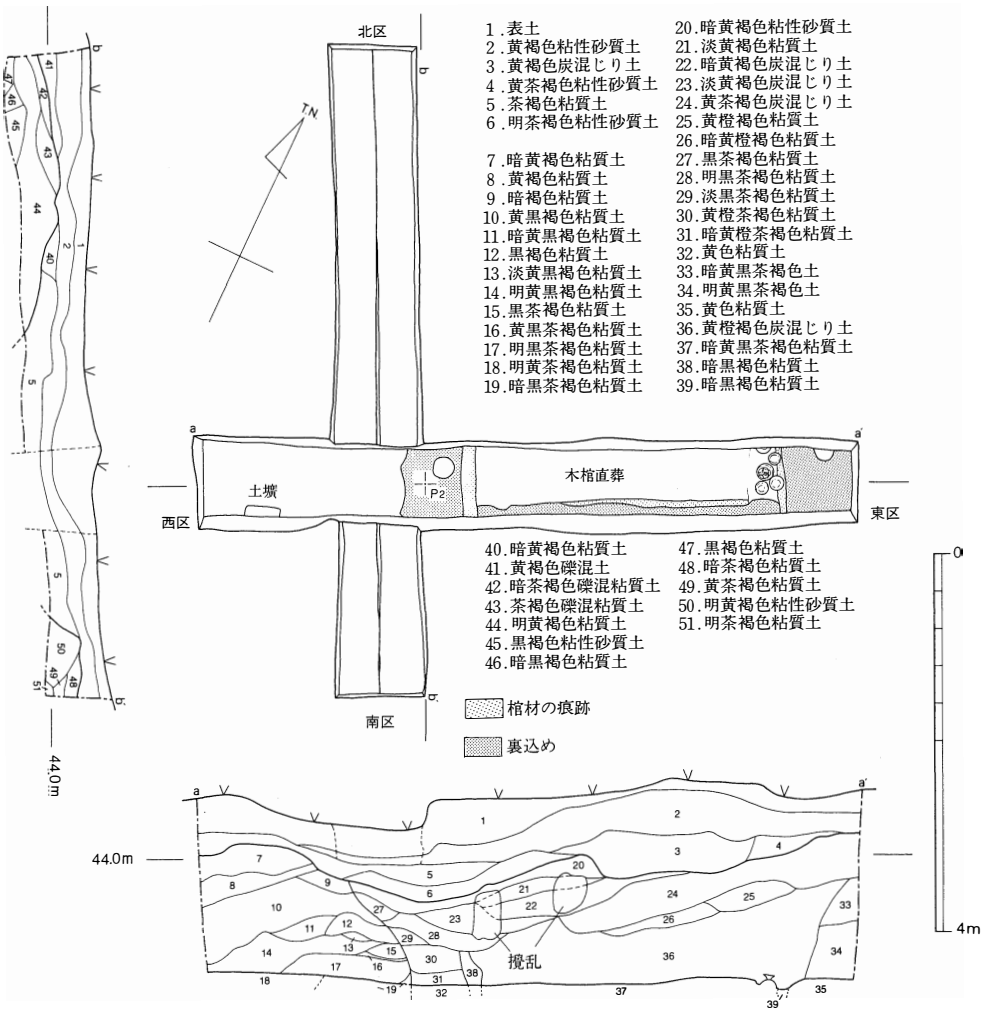
この攪乱坑内の上層から焼土を含む層（第14図-２～５、９層）がいくつか検出された（第17図)。土層の堆積状況からみてこの層が堆積した時点ではすでに大規模な攪乱坑がほとんど埋まり、墳頂部が浅くくぼんだ状態であったことが想定できる。焼土を含む層はその浅いくぼみのほぼ中央部に堆積している。焼土を含む層はいくつか重なって存在し、後円部墳頂付近で何回かにわたって火を使用したことがうかがえる。これらの層からは中世の羽釜、瓦器や、近世、近代の遺物など、様々な時代のものが出土しており、焼土を含む層の時期を特定するには至らなかった。

ところで、最初に述べた石室にまでおよぶ大規模な攪乱については以下のことが想定できる。もし石室内を盗掘することのみが目的であればこれほど大規模な攪乱は必要ではなかろう。石室の側壁を大きく越えてその外側にまで攪乱がおよんでいることを考慮すると、当初から石室の石材を抜き取ることが目的であったと解釈した方が蓋然性が高い。さらに先述した一括出土の土師器からみて、石室石材の抜き取りに際し、何らかの祭祀行為が行われたとみなすこともできよう。また、これらの土師器の時期がほぼ長岡京期に比定できることも勘案すれば、この大規模な攪乱が長岡京造営工事で使用する石材を調達するための古墳破壊であった可能性が考えられる。(清野)

前方部墳頂トレンチ　前方部における主体部の存否、および墳丘盛土を確認するために設定したトレンチである。前方部墳頂に位置し、墳丘主軸にそって南・北区、それに直交する東・西区という十字形のトレンチを設定した。規模はそれぞれ南北７ｍ、東西７ｍで、幅は１ｍである。調査の結果、土層は４つに大別できることが判明した。東西区北壁の土層でそれを示すと、上から表土（第18図-１層)、２次的な堆積土層（２層）および後世の攪乱土層（３～６層)、盛土層（７～19層)、主体部に関係する土層（20～39層）となる。また木棺を直葬した主体部が東区から検出されたが、これについてはのちに詳しく述べることにし、ここではまずその上面の土層の状況について述べる。

後世の攪乱は、少なくとも２回認められる。まず中央部から東区にかけて、墳丘盛土をすり鉢状に大きく掘り窪めているものである。規模は上面で南北4.5ｍ、東西5.8ｍである。埋土中からは、中近世の土師器皿などが出土した。さらに東区では、この層を掘り込む攪乱が認められる。規模は東西2.2ｍである。埋土中からは、若干の炭とともに、中近世の土師器皿などが出土した。そして、これらの攪乱層の上に２次的な土層が堆積する。この層からは中近世の土師器皿の他、須恵器や陶磁器などが出土した。

これらの層を除去すると、盛土と考えられる硬く締まった層が検出された。北区の状況でこれを示すと、盛土は上から茶褐色系（42層)、黄褐色系（44層)、黒褐色系（45～47層）と交互に積み上げられている。北区北端で、45～47層のような水平に積み上げようと意識した盛土が認められた。ただし後円部の各トレンチで検出されたような小さな単位の盛土はみられなかっ



第18図　前方部墳頂トレンチ平面図、断面図

た。

さらに主体部を確認する目的と地山までの土層の状況を調べるために、東西区で深さ１ｍほどの断ち割り作業を行った。その作業の途中、東区で主体部に副葬された須恵器を検出した。地表下約２ｍ、標高42.6～7ｍのこのレベルが、主体部のほぼ下面に相当しよう。ここで作業を中止し、土層の断面観察を行った結果、盛土の状況や主体部の掘り込みを確認した。

東西区での盛土状況をみていくと、ここでも黒褐色系（７層）、黄褐色系（８層）、黒褐色系（９～12、14、19層）、黄褐色系（17、18層）と互いに層をなすことがわかった。ただし、小さな単位の盛土は認められない。また12層からは、墳丘構築以前の弥生式土器の甕底部と考えられるものの他、数点の土師器小破片が出土している。（高橋）

（3）埋葬施設の構造

1．後円部横穴式石室

前述の通り、後円部において横穴式石室の存在が確認された。ここでは横穴式石室と、墳丘盛土および石室裏込めの状況について述べる。

石室裏込めおよび墳丘盛土　石室裏込めは、西区の北壁に裏込めの用途を持つとおもわれる石材がみられるものの、北区、東区では石の使用が確認できず、土により石室裏込めを行ったと判断できる。そのため墳丘盛土と石室の裏込め土を区別することは困難であり、ここでまとめてふれることにする。

墳丘盛土および石室裏込めは黄褐色系と茶褐色系の土が小さな単位で積み重なる互層となっており、各層は墳頂部を最高所とする墳丘の傾斜に平行して斜めに積まれている(第15図)。これらの土はいずれもしまりが良く、粘性を持つものが多く、また大きな礫を含まない。こうしたことから石室裏込めおよび墳丘盛土には均質な、きめの細かい土を選択的に使用したと考えることができる。

また、後円部第1、第2トレンチでは、標高44.0～44.5m付近に墳丘盛土をいったん平坦に整地した面が検出されている。この平坦面より上の墳丘盛土は、横穴式石室の周囲の墳丘盛土および石室裏込めと同様に、しまりがよく、均質な、きめの細かい、黄褐色系と茶褐色系の土を互層に積むことから、石室構築に対応した盛土である可能性が高い。すなわち、この盛土整地面でいったん後円部墳頂を平坦にならした後に、石室構築と並行して墳丘を築造していったことが想定できる。おそらく、この盛土整地面は何らかの作業休止面に当たるものであろう。さらに、後円部においては標高41.9mで地山が平坦に整地されている。レベルから判断して、これは石室構築における基底面になる可能性が高い。

石室の規模　今回の調査では、調査区が限られていたため、玄室および羨道の一部を確認したものの奥壁は検出されなかった。また、横穴式石室を検出した時点で掘り下げを中止したために、石室の残存している部分の上面を確認したに過ぎない。このため石室の規模、構造等について得ることのできた情報は限られているが、現状で判明している範囲で報告する。

横穴式石室は奥壁からみて右側に袖を持つ右片袖式である（第14図)。石室主軸はN28.5°Eで、南南西に開口する。玄室の幅は各所で多少の差はあるが、およそ1.85m、袖部の幅は0.6m、羨道の幅は1.16mである。玄室の長さは、奥壁が検出されていないので不明だが、最も短く見積もって、東区のほぼ中央の大型の石材が側壁と奥壁のコーナー部に相当すると考えると、3.6m程度となろう。その場合、玄室の中央が後円部のほぼ中心に位置することになる。

また、前述の通り、後円部第1、第2トレンチで認められた標高41.9mの地山整形面を石室構築の基底面とすると、このレベル付近に石室床面が存在すると考えられよう。それならば床面からおよそ2mの高さまで石室が残存していることになる。

石室石材　石材は東区の中央付近の石および袖石に大きいものを用いるが、小さな石材も各区でみられる。現位置を保つとおもわれる石材が多く、残存する石室の側壁ラインを想定できる。しかし、北区南端の、玄室側壁に沿って４つ並んだ20～25cm程度の石、袖部コーナーの25cm程度の石、南区北端付近にある、南区と東区とのコーナーに一部だけみえている石は、石室の側壁ラインから石室内側にはみ出しているため、原位置を保つものではないと判断できる。

石材は自然石が使用され、その短辺を石室側に向け、小口積みにされている。石材の上面はほぼ平坦であるが、石室内側がやや高くなるように工夫されている。これは石材の荷重を石室の外側に分散させるための構造上の理由によると考えられる。

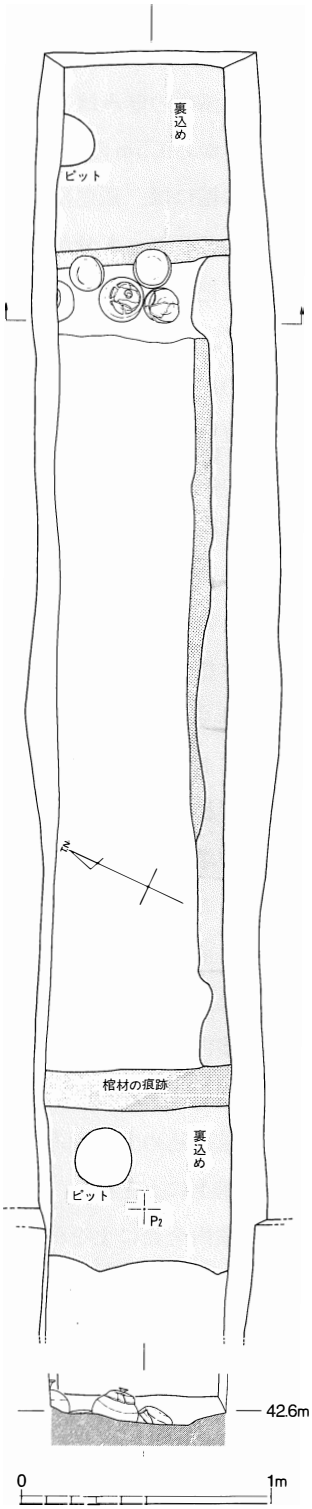
築造の時期　この横穴式石室の築造の時期を直接示す遺物は確認されていない。しかし横穴式石室が後円部のほぼ中央に位置することから、これはこの古墳の中心埋葬と考えられ、前方部の木棺直葬がＴＫ10型式期の須恵器を伴うことから判断して、これとほぼ同時かそれ以前の時期を想定することができよう。これ以降の時期に属する古墳時代の須恵器が後円部に設けられたトレンチからいくつか検出されており、これらは横穴式石室に伴う遺物である可能性がある。(清野)

２．前方部木棺直葬

前述のように、前方部墳頂の主体部は、トレンチ断ち割り作業によって、地表下２ｍの位置で発見された。主体部は墳丘の主軸に直交し、前方部墳頂の東側に偏って位置する。主体部の構造については、墓壙や木棺、および裏込め部分などがわかっている。

墓壙は盛土を掘り込んで構築している。断面観察の結果、上面は攪乱層によって削られているものの、掘り込みの西端が検出できた。東端は、さらにトレンチ東方に存在すると考えられる。結果的に墓壙の規模は、上面で長さ5.4ｍ以上、下面で4.8ｍ以上になる。また墓壙の幅はトレンチ外に位置するため不明である。

木棺は、組合せ式箱形木棺である。小口板が側板の外側に接



第19図　木棺直葬平面図

する形態をなす。木棺の規模は長さ約3.5ｍで、幅は0.6ｍ以上である。小口板の南北長は、現状で0.7ｍ確認できる。小口板の厚みは東側で狭く、西側で広い。それぞれ８㎝、15㎝ほどである。また側板の厚みは７㎝ほどで、一部わずかに木質が残存していた。木棺の西端は、墓壙の掘り込みから0.5ｍの間隔をおく。東端では、墓壙との間隔はさらに広がる。

また木棺には、須恵器が副葬されていた。須恵器は木棺内東端で、小口板に接して検出された。現状で５セット分が確認できた。北側から横瓶と考えられる個体、杯身・杯蓋のセット、短頸壺と把手付蓋のセット、杯身・杯蓋のセット、南端も杯身・杯蓋のセットである。これらはすべて、全面に赤色顔料が塗られている。

木棺の両小口外側では、裏込め土を除去すると、円形のピットが１箇所ずつ検出された。両方とも直径約20㎝である。東側ピットは木棺から約30㎝、西側は７㎝離れて位置し、両者の間隔は3.8ｍである。未掘のため、深さはわからない。このピットは木棺の下面と同レベルに存在する。木棺の埋設にあたって、墓壙内に木棺を吊り下げるなどの用をなす支柱が立てられた可能性もある。

これらの主体部構造にともなって、層位も大きく４つに分割できる。木棺上埋土（第18図-36・37層）、木棺立ち上がり（38層）、木棺裏込め（30～35層）、そしてこれらの上層に墓壙内埋土（20～29層）が厚く堆積する。36層からは、須恵器杯身などが出土した。

さらにトレンチ西区で、トレンチ西端から約0.4ｍのところに、土壙の一部を検出した。墳丘主軸に平行し、墳頂中央部からやや西側に位置する。幅は、約0.4ｍと小型である。上述した木棺直葬が墳頂中央部からかなり東に偏在することから他にも複数に主体部が存在する可能性が高く、この土壙もその１つである可能性がある。

以上、前方部墳頂主体部についてみてきた。最後に主体部の築造順序を復元し、まとめたい。

①盛土を掘り込んで、墓壙を構築する（長さ上面で5.4ｍ以上、下面で4.8ｍ以上）。

②墓壙内にピットを設ける。それとともに、木棺（長さ約3.5ｍ、幅0.6ｍ以上）を設置する。棺内に須恵器などを副葬する。

③木棺裏込め土を積み上げる（30～35層）。

④木棺上に土を積む（36・37層）。

⑤墓壙内全面に土を積み上げる（20～29層）。

このように主体部は構築され、さらに上面には盛土がなされたと考えられる。（高橋）

4　出　土　遺　物

（1）遺物の概要

遺物は総数600点余りが出土した。墳丘トレンチ出土のものは、弥生式土器および古墳築造以後ほぼ現代までの土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などの土器類が大半を占め、他に瓦・銅銭・

鉄釘・釣針・砥石などがある。古墳に伴う可能性のある須恵器が後円部第１・第２トレンチおよびクビレ部第２トレンチから少量出土している。後円部墳頂トレンチからは、奈良時代の土師器・須恵器（墨書土器を含む）とともに古墳時代の須恵器も検出されている。また、前方部墳頂トレンチでは、木棺に副葬された須恵器のセットが良好な状態で遺存していることを確認した。以下、各遺物についての概要を述べる。（高田）

（２）古墳に伴う遺物

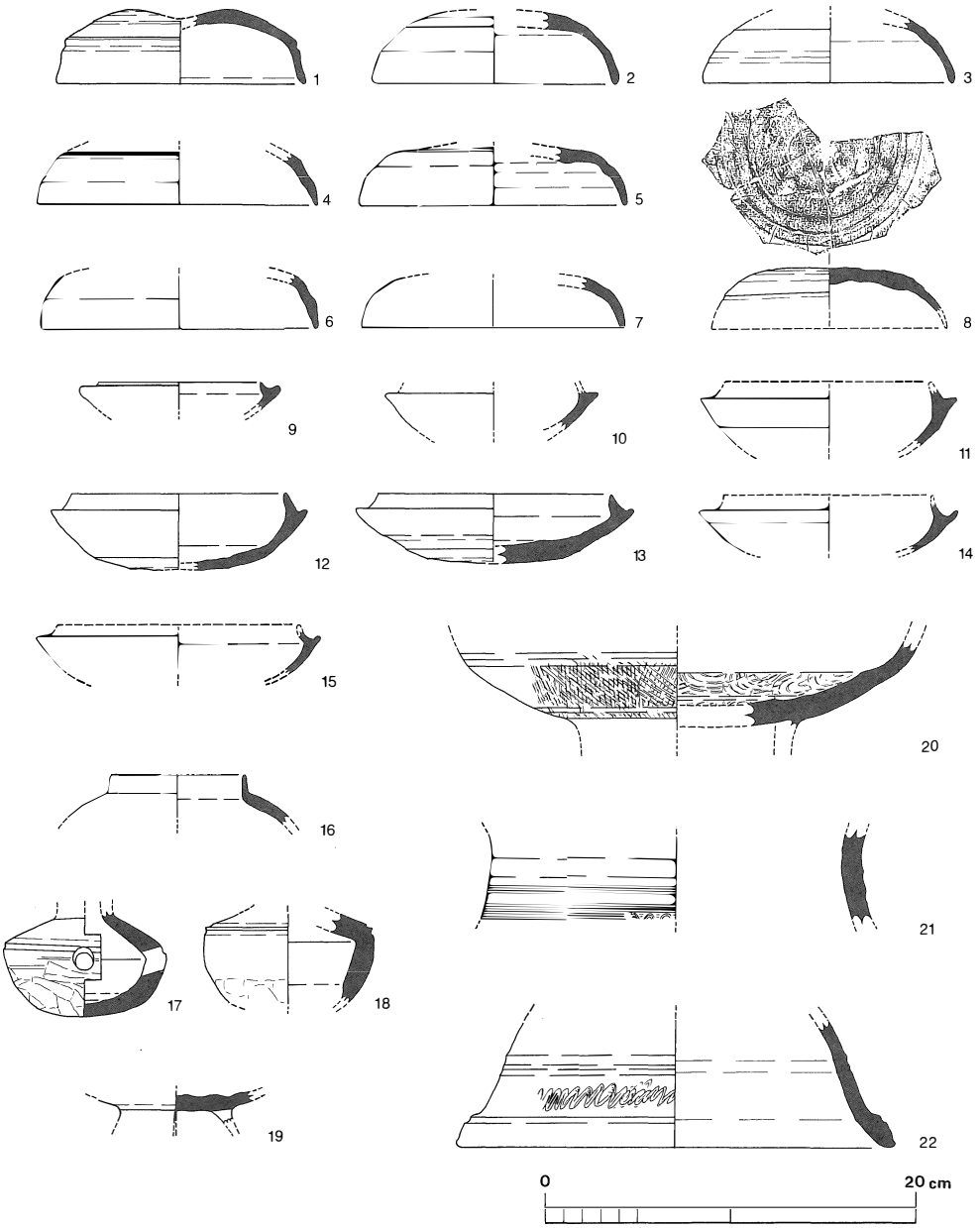
木棺に副葬された土器（第20図-１）　前方部にある木棺直葬の棺内東小口において、杯身・杯蓋の組合せが３セット、短頸壺・把手付蓋の組合せが１セット、横瓶と考えられるものが１点の計９点が原位置を保ったままの状態で遺存していることを確認した。遺物は今回の調査では取り上げず、埋め戻した。したがって、調査時に一時的にその一部を取り上げて図化した杯蓋１点について報告する。今回は破片から復元・作成した図を示しているが、本来は完形品である。

それは口径13.6㎝、高さ3.9㎝の杯蓋である。胎土には径２㎜以下の長石・石英を含み、焼成は堅緻である。色調は明灰色を呈する。口縁端部は内傾し、不明瞭ながらも段を持つ。天井部と体部の境目には凹線がめぐる。上面のケズリの範囲は外面の約２／３を占め、反時計回りに削る。外面には赤色顔料が塗布されている。口縁端部が内傾する点、天井部と体部の境目の稜が失われている代わりに凹線がめぐる点などから、陶邑編年のＴＫ10型式期に併行する時期のものと考えられる。

墳丘流出土から出土した土器（第20図-２～22）　後円部・クビレ部の墳丘トレンチおよび、後円部・前方部の墳頂トレンチからは流出土や攪乱土中から古墳に伴う可能性のある須恵器片が少量検出されている。器種は杯身・杯蓋が最も多く、他に器台杯部・同脚部・瓿・高杯脚部・短頸壺・甕などが出土している。

杯蓋は７個体分示した。小破片からの復元のため若干の誤差を含むが、口径13㎝前後で器高の高いもの（２・３）と口径15㎝前後で偏平なもの（５～７）に分けることができる。天井部と体部の境が明瞭でないものが多く、いずれも口縁端部は丸くおさめている。ヘラケズリの範囲も狭く、外面の１／２～１／３程度である。その中で後円部第２トレンチから出土した８は、ヘラケズリの範囲が外面の２／３におよび、天井部と体部の境目に弱い凹線がめぐる点で古い要素を持っている。また外面天井部には直線のヘラ記号がある。

杯身は７個体分示した。９・10は立ち上がりが内傾して低く、受部は上向きにつく。口径は非常に小さく、ともに10㎝前後であり、胎土や焼成もよく似る。子持器台の一部である可能性もある。12・13は立ち上がりが内傾し、受部は小さくやや上向き外方にのびる。ヘラケズリの範囲は外面の１／３ほどで、12は底部内外面に、13は底部内面に不整方向の指ナデを施す。14・15はやや上向きに伸びる受部と薄い器壁が特徴である。偏平な体部であると考えられ、比較的



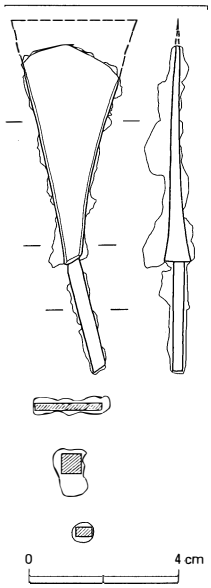
第20図　古墳に伴う土器実測図

大きな口径をなす。

瑯17は口頸部が失われ胴部のみが残る。肩部に１条の凹線をめぐらすほかには装飾はない。胴部最大径は胴部の中央より上にあり、底部は細かい不整方向のヘラケズリを施す。18は肩部から胴部にかけての破片で、やはり胴部最大径は胴部の中央より上にあり、２条の凹線をめぐらす。いずれも器壁が厚く、小型化が進んだ段階のものである。

20～22は後円部墳頂トレンチから出土した器台の破片である。20は杯部底部から脚部にかけての破片で、外面に平行タタキ・ヘラ描き凹線を施し、内面には同心円状の当て具痕を残す。21・22は脚部とおもわれるが、いずれも20とは胎土、焼成が異なる。22の外面には１ないし２条の凹線の間に雑な波状文が施される。21はカキメ調整ののち波状文を施す。残存する部分でみる限り、22に比べて波状文の施文は丁寧である。

以上のほか、短頸壺（16）やヘラで切り込みを入れただけの透孔のある短脚高杯の脚部とおもわれる破片（19）や甕などが出土しているが、個体数は少ない。時期はおおむね陶邑編年のＴＫ43型式期からＴＫ209型式期に比定されるものであろう。



第21図　鉄鏃実測図

鉄鏃（第21図）　クビレ部第１トレンチから出土した。関から直線的に大きく開いて刃部に至る形態で、先端が欠けているが、いわゆる方頭斧箭式鏃と考えられる。残存長は8.8cmで、鏃身5.8cm、茎3.0cmが残存する。刃部近くでは厚さ２mmの平造りであるが、関では６mmと厚みを増し、鏃身と茎の間には段を有する。このタイプの鉄鏃は奈良時代にも残るため時期を決めがたいが、６世紀後半以降のものは、鏃身と茎の間に段を作らず一連の面をなすものが多い。したがって、これはそれ以前の古い形態をとっており、古墳に伴うものである可能性が高い。出土位置から判断して横穴式石室に副葬されていたものと考えるのが妥当であろう。（高田）

（３）その他の遺物

長岡京期の土器（第22図-23～28・39・40）　23～26は後円部墳頂トレンチの横穴式石室検出面上層からまとまって出土した土師器である。23は墨書人面は描かれていないが、墨書人面を描くために専用に製作された土器である。口径17cm、高さ9.5cmの中型品である。内面および口縁部の内外面には丁寧にナデを行い平滑に仕上げているが、口縁部以下の外面には指頭圧痕を残すのみで、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。底部面から１cm上方には直径8.5cmほどの外型作りの圧痕も円形に残る。24は高台を持たない杯Ａである。口径18cm、高さ４cmで、ヘラ削りが外面全体におよぶｃ手法の調整を施す。口縁端部内面が強い横ナデによって浅くくぼむ。25は口径16cm、高さ2.8cmの皿Ａである。調整はｃ手法であるが、口縁端部外面に横ナデの痕跡を残している。26は復元口径13cm、高さ５cmの椀Ａである。ｃ手法による調整である。

39・40は土師器の高杯である。39は復元口径33.5cmの杯部で、直線的にのびる形態をなす。口縁端部を内側につまみ上げる。調整は内面にはナデ、外面には若干のケズリ痕を残したナデが施されその上からヘラミガキが行われる。40は脚の筒部であり、７角形に面取りされている。筒部内壁面が平滑であることから棒心作り（ｂ手法）であると判断できる。

27は底部外面に「功食（こうしょく）」の墨書がある須恵器杯Ａである。後円部墳頂トレンチ

で検出された。口径9.5㎝、高さ3.3㎝である。内外面とも丁寧なナデ調整が行われるが、底部面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。功食とは、古代に徭役労働や雇傭労働に対して与えられた食料のことである。

28は輪状高台を持つ須恵器杯Ｂである。ヘラ切りによって底部切り離しを行った後、高台を貼り付ける。高台は底部端よりやや内側をめぐる。８世紀後葉のものとおもわれる。

須恵器椀（第22図-29～31）　29は底部から体部へ内湾して立ち上がることから椀Ｂであると判断できる。削り出し高台をもつ。30・31は蛇の目高台を持つ椀Ｃである。これらは10世紀の所産であろう。

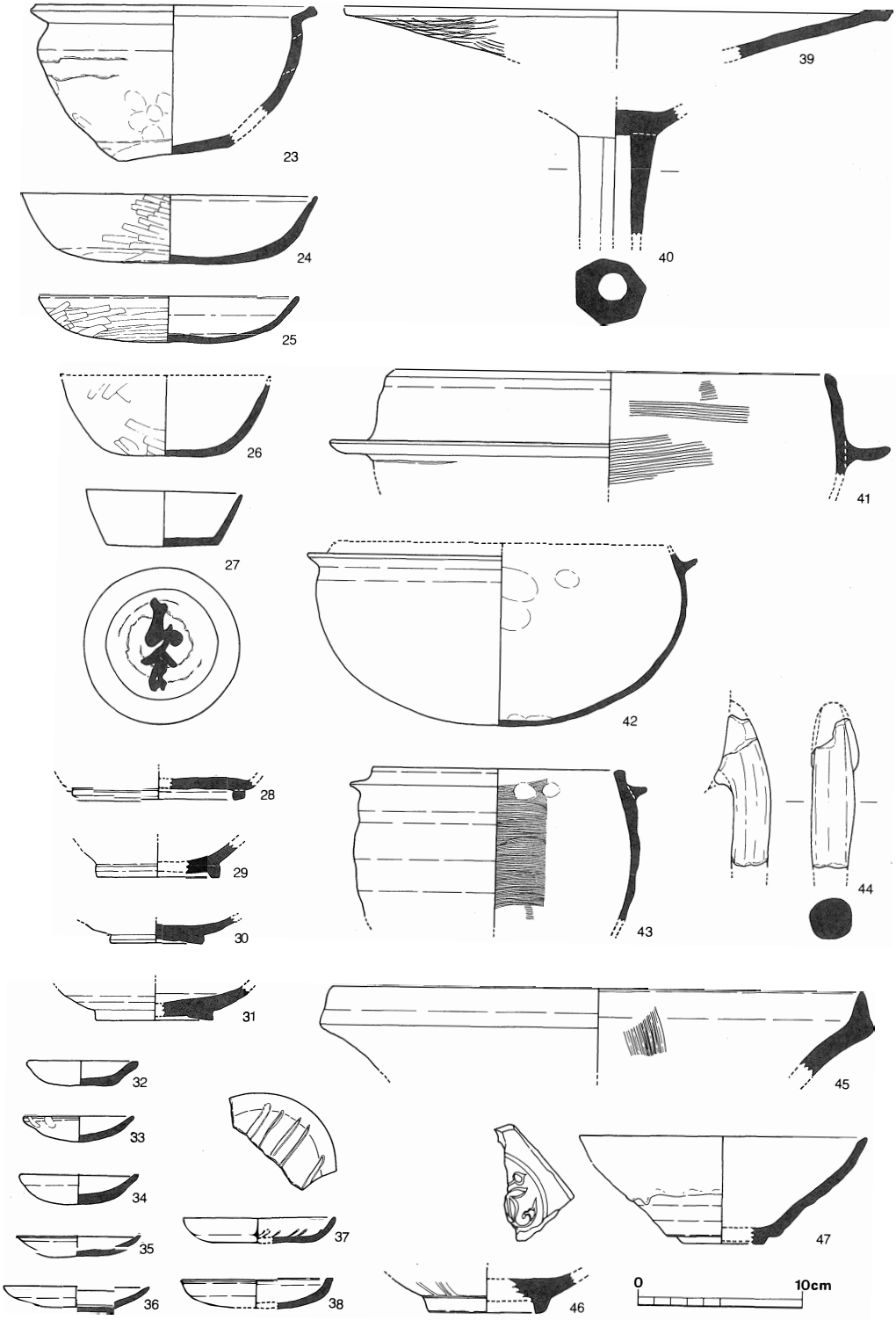
土師器皿（第22図-32～36）　32～34の口径は6.5～７㎝で共通するが、調整方法が若干異なっている。32・33は内面をナデ仕上げするが外面は指押さえのみで器面や口縁部の凹凸が激しい。色調は黄褐色である。34は口縁部内外面と内面にナデを行うが外面下半は無調整である。内面に残る痕跡から板状工具によるナデであることは明らかである。外面の口縁部やや下方に浅い凹状のくぼみがあること、底部外面が無調整であることを合わせて考えると、外型を使用し成形した可能性がある。色調は灰黄色である。35は、その色調が白色であることが特徴である。口径は7.5㎝、調整は内面と口縁部に強いナデを施し、そのため口縁端部がとがり気味に薄く仕上がる。32～34に比べ器壁が薄い。これらは室町時代の所産であろう。

36は内面の立ち上がり部に溝を作ることを特徴とする。内面と口縁部にナデを行うが、外面の下半は無調整で凹凸がみられる。口径は９㎝である。江戸時代のものであろう。

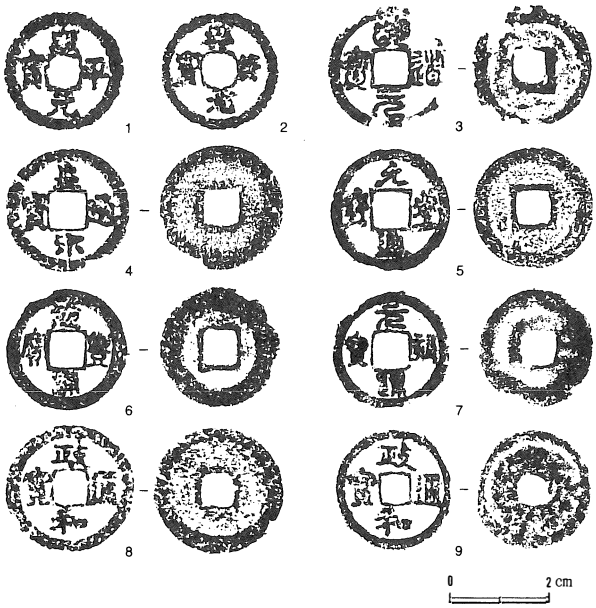
瓦器小皿（第22図-37・38）　37・38は口径９㎝の瓦器小皿である。37は内面見込みに省略された鋸歯状の暗文が施されている。内面と口縁部内外面には丁寧なナデを行う。一方、38には暗文は施されず、内面と口縁部内外面にはナデを行うが器面の凹凸が激しく、器形のゆがみが目立つ。これらは12～13世紀のものであろう。

羽釜（第22図-41～44）　41～43は羽釜の釜部である。41は復元口径26㎝、鍔の幅2.5㎝、鍔から口縁端部までは4.5㎝あり、42や43に比べて大型である。調整は外面がナデ、内面が荒いハケで、外面口縁部付近に強いナデによってできた浅いくぼみがある。鍔の下面には煤が付着している。42は上半部と下半部の破片が完全には接合しなかったが、焼成や胎土、調整の様子、器壁の厚さなどから同一個体と判断し、完形に復元した図を示した。法量は口径20㎝、高さ11㎝となり、口径は器高の２倍近い。器壁が薄く、色調は明赤褐色で、焼成が非常に良好である。煤は付着しない。43は口径が15.5㎝に復元できるやや縦長の羽釜である。内面には細かいハケを丁寧に行い、口縁部および鍔部には回転ナデを施す。外面には煤が付着している。44は三足付羽釜の脚部と考えられるが、接合する釜部は検出されなかった。これらは13世紀前後のものと判断できる。

陶磁器（第22図-45～47）　45は備前焼のすり鉢である。口径は32㎝に復元できる。口縁端部



第22図　古墳以降の土器実測図



第23図　北宋銭拓影
1.咸平元寶(998年初鋳)　2.祥符元寶(1009年)
3.明道元寶 篆書(1032年)　4.皇宋通寶 真書(1038年)
5.元豊通寶 行書(1078年)　6.元豊通寶 篆書(1078年)
7.元祐通寶 篆書(1086年)　8・9.政和通寶 分楷(1111年)

は上方に大きく立ち上がり、上端部を丸くおさめる。内外面ナデ調整で、内面のおろし目は7条の櫛目である。外面の口縁部やや下方まで釉がかかる。15世紀の所産である。47は古瀬戸の灰釉平椀である。復元口径17.5cm、高さ6.5cmである。底部から直線的に斜めにのびる体部には、外面下半を除いて内外面に黄緑色の灰釉がかけられている。15世紀のものである。46は竜泉窯系の青磁の椀である。12～13世紀のものであろう。

北宋銭（第23図）　後円部墳頂トレンチおよびクビレ部第2トレンチから出土した。第23図のうち、1は3枚、2は2枚が錆着しているため、その表面のみの拓影を示した。したがって出土総数は12枚である。各北宋銭の概要は、第23図のキャプションに示した通りである。初鋳年は998年の咸平元寶（1）が最も古く、1111年の政和通寶（8・9）が新しい。

以上みてきた稲荷塚古墳が築造されて以降の遺物には、幾つかの特色を認めることができる。

まず第1に長岡京期に位置付けることのできる遺物が多くみられることである。特に墨書人面を描くための特殊な土器が検出されたことは注目できる。後円部の横穴式石室上面の土層から他の長岡京期の土師器と一括で検出されたことも重要である。これらの点から、横穴式石室に対する攪乱行為が長岡京期に行われたことを想定できると同時に、攪乱行為に伴ってなんらかの祭祀行為が後円部墳頂上で行われたことも予想できる。第2に12～13世紀を中心とする平安時代の遺物が多いことである。瓦器小皿や青磁、羽釜、北宋銭がこの時期のものであるが、羽釜などの煮沸具が検出されたことは重要である。羽釜の外面には煤が付着しており実際に使用されたものであることも注意される。これらの遺物は、後円部、クビレ部の各トレンチから多く検出されており、後円部墳頂トレンチで確認された焼土を含む土層が形成された時期の一端を示すものとなろう。第3に15世紀を中心とする室町時代の遺物が多いことである。土師器皿や備前焼のすり鉢、古瀬戸の灰釉平椀などがこれに含まれる。さらに江戸時代の土師器皿が後円部第2トレンチで検出されていることから、稲荷塚古墳の後円部墳頂部は現代に至るまで継続して人々が活動を行った場であったことがわかる。(杉井)

5　総　　括

今回の稲荷塚古墳の調査では、これまで不明瞭であった市域北部の首長墓の実態や性格についてきわめて重要な知見を得ることができた。その全容の解明は今後の更なる調査にゆだねるが、ここでは現時点の成果を概括し、若干の問題点について指摘しておこう。

まず、稲荷塚古墳の墳丘構造については、全長46ｍ、後円部径29.5ｍ、前方部長16.5ｍ、クビレ部幅21.5ｍ、前方部前端幅29.5ｍ、現存の高さ４ｍの前方後円墳であることが確認された。また、一部のトレンチにおいては墳丘裾に浅い溝状の落ち込みが検出されたが、墳丘を全周する周溝になる可能性は少ないと考えられる。墳丘の大部分は盛土によって造られている。

今回の調査で確認された埋葬施設は、横穴式石室１、木棺直葬１の計２基である。このうち、木棺直葬からはＴＫ10型式期の副葬須恵器が検出された。横穴式石室の調査がなされていない現状では、これが古墳築造年代を示唆するもっとも有力な資料であるが、中心埋葬でないこともあり、後円部の横穴式石室構築時期はこれよりややさかのぼる可能性も残っている。また、この木棺直葬は墳丘主軸からはずれた位置にあることから、さらに何基かの埋葬施設が前方部に存在している可能性が高い。

横穴式石室はトレンチ部分で確認したため、その構造に関しては不確定要素が多いが、現時点では南側のクビレ部に開口する右片袖式の石室と判断している。玄室規模は検出面で長さ3.6ｍ以上、幅1.85ｍ、羨道の幅は1.16ｍをはかる。ただ、後円部墳丘トレンチ調査の所見によれば地山レベルは標高41.9ｍ付近にあり、石室基底部が地山面まで達していると考えるなら、石室床面は今回の検出面からさらに約２ｍの深さの位置に存在することになる。壁体の持ち送りを考慮すれば、床面における玄室規模は長さ５ｍ、幅2.5ｍ程度に達する可能性がある。

築造時期についても、ＴＫ10型式期を降らず、乙訓地方では向日市物集女車塚古墳[3]と並んで最古の横穴式石室墳となることは確実である。玄室規模も上述のように復元的に考えた場合、長さ5.07ｍ、最大幅2.80ｍをはかる同古墳に匹敵する大型石室となる。

前方後円墳において、横穴式石室と木棺直葬が墳丘に共存している事例はきわめてまれである。[4]稲荷塚古墳の周辺では、当古墳の北方30ｍに位置する長岡京市小西古墳群[5]や長法寺七ツ塚古墳群[6]などにおいても、おなじくＴＫ10型式期の須恵器を副葬する中小規模の木棺直葬墳が確認されている。このことは、こうした墓制を営んでいた乙訓西部の有力層のなかで、頂点に立つ首長の墳墓に、横穴式石室という新形式の埋葬施設がまず採用されたことを示している。横穴式石室導入のあり方がうかがえる重要な事例である。

以上の成果は当地域の首長系譜の分析に新たな問題を提起することになる。すなわち６世紀の乙訓地域においては、それまで優位に立っていた西部の長岡系譜にかわって東部の向日系譜のなかに物集女車塚古墳という傑出した前方後円墳が出現することから、盟主的首長を輩出す

る系譜が交代したととらえられてきた[7]。しかし、今回の調査によって稲荷塚古墳が物集女車塚古墳とほぼ同時期、同規模の前方後円墳であり、しかも大型の横穴式石室を有していることが判明した。現時点の情報による限りでは、埴輪、葺石、段築構造がみられる点で物集女車塚古墳が畿内の大王墓クラスの古墳と構造的共通性を多く有しているといえるが、両者の立場をいま一度比較してみる必要が生じたことは間違いない。石室構造、副葬品の特徴など今後の調査において明らかにすべき点は多い。

なお、稲荷塚古墳の墳丘上の堆積土からは古代～近世に属する数多くの土器類が出土した。これらを含む土砂が人為的に搬入されたものでないとすれば、墳丘上やその周辺が後世に何らかの人間活動の場になっていたということができるが、限られたトレンチ調査ではなぜこれらの遺物が墳丘上に存在するのか解釈しにくい。ただ、後円部石室上の攪乱坑内下層の土器出土状況は、あたかも人為的に投棄したようなありかたで興味深い。第3節において述べたようにこの攪乱坑は石室側壁のちょうど外側まで及んでいることから、副葬品目当ての盗掘坑というよりむしろ石材そのものを取り出すための掘り込みであった可能性が高い。したがって、この攪乱坑の下層で出土した完形に復元できる長岡京期の土師器、須恵器は、石材入手のため古墳を破壊したことに対する鎮魂の祭祀に用いられた可能性も考えられるのである。墨書人面土器専用タイプの壺が含まれていることもこの想定と矛盾しない。現時点では状況証拠にすぎないが、宮都造営にあたって古墳が破壊されたことは文献史料や他の発掘調査事例からもうかがえることであり、当古墳の墳頂部攪乱坑についても長岡京造営に関連した石材採取による古墳破壊の一例と推測しておきたい[8]。（福永）

注1）堤圭三郎、高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1968京都府教育委員会　1968年）pp.36－37

2）大阪大学文学部考古学研究室、長岡京市教育委員会『稲荷塚古墳発掘調査説明会資料』1993年

3）秋山浩三、山中章編『物集女車塚古墳』向日市教育委員会　1988年

4）近畿地方では類例として大阪府高石市富木車塚古墳があげられる。上田宏範ほか『富木車塚古墳』大阪市立美術館　1960年

5）『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度　長岡京市埋蔵文化財センター　1990年

6）山本輝雄『長法寺七ツ塚古墳群』長岡京市教育委員会　1988年

7）都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号　大阪大学文学部1988年

8）平城京の造営にあたって、古墳を破壊した場合に鎮魂祭祀を行うべきことを命じた勅が『続日本紀』和銅2年10月の記事に、また古墳を破壊して寺院造営用の石材を入手することを禁じた勅が宝亀11年12月の記事にみられる。清水みき氏のご教示による。

第２章　長岡京跡右京第475次（７ＡＮＫＮＴ－３地区）調査概要

――　長岡京跡右京六条二坊十一・十二町、開田遺跡　――

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1994年６月27日から1994年８月５日まで、長岡京市開田四丁目608－１・608－８において実施した長岡京跡右京六条二坊十一・十二町および開田遺跡の発掘調査に関するものである。

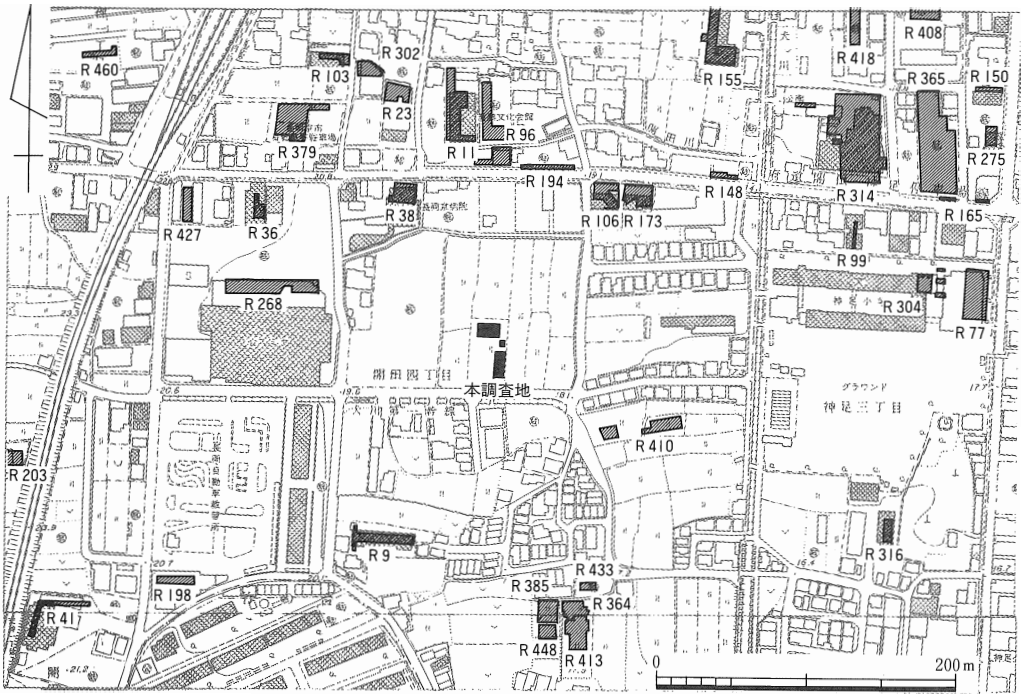
2　本調査は、六条々間南小路と本調査地の周辺に存在が推定されている長岡京の西市に関する資料を得る事を主な目的として実施したものである。

3　調査は平成６年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、同センター調査員木村泰彦が担当した。

4　調査実施にあたっては、土地所有者の樋口一雄氏、および隣接する㈱ヘルプより水道水の供給をはじめ数々のご援助をいただいた。

5　調査後の図面・遺物整理は、船戸裕子、井上礼子をはじめ多くの方々の協力を得た。

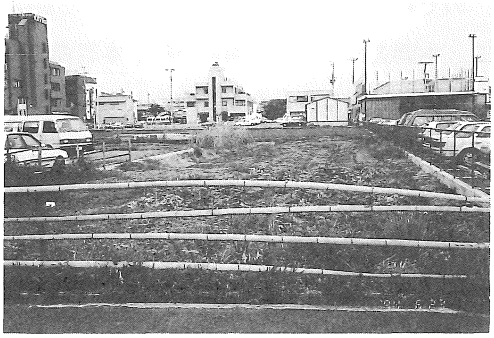
6　本報告の執筆および編集は木村が行った。



第24図　発掘調査地位置図（1／5000）

2　調　査　経　過

今回の調査地は、阪急長岡天神駅の南東約250ｍの犬川によって形成された後背湿地上に位置している。周囲は開発が進行する駅周辺地にあって、今も水田が残る一角で、調査以前は畑地としての利用がなされていた。調査地の標高は、北側で18.6ｍ、南側で18.5ｍを測る。当地周辺は以前から長岡京の西市の候補地の一つとして注目されており、長岡京市ではその解明のために国庫補助事業による調査を継続的に行っている。1992年に当調査地の南東100ｍの地点で行われた右京第410次調査では長岡京の一町の宅地を東西に二分する南北方向の溝が検出され、土器をはじめ木製品・土製品・石製品等が出土している[(1)]。特に注目されるのは「金銀帳」と書かれた題箋で、金銀に関する出納帳とみられるものである。また文書木簡・木靴・石帯の飾りなど官衙的色彩の強い遺物も出土している。このことから西市関係の施設が存在した可能性も指摘されている。

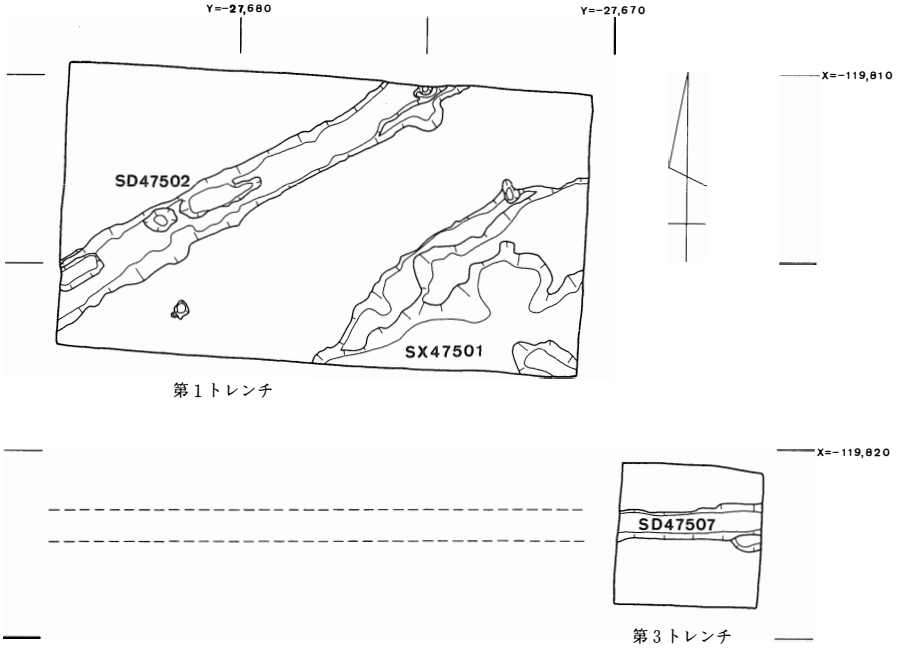


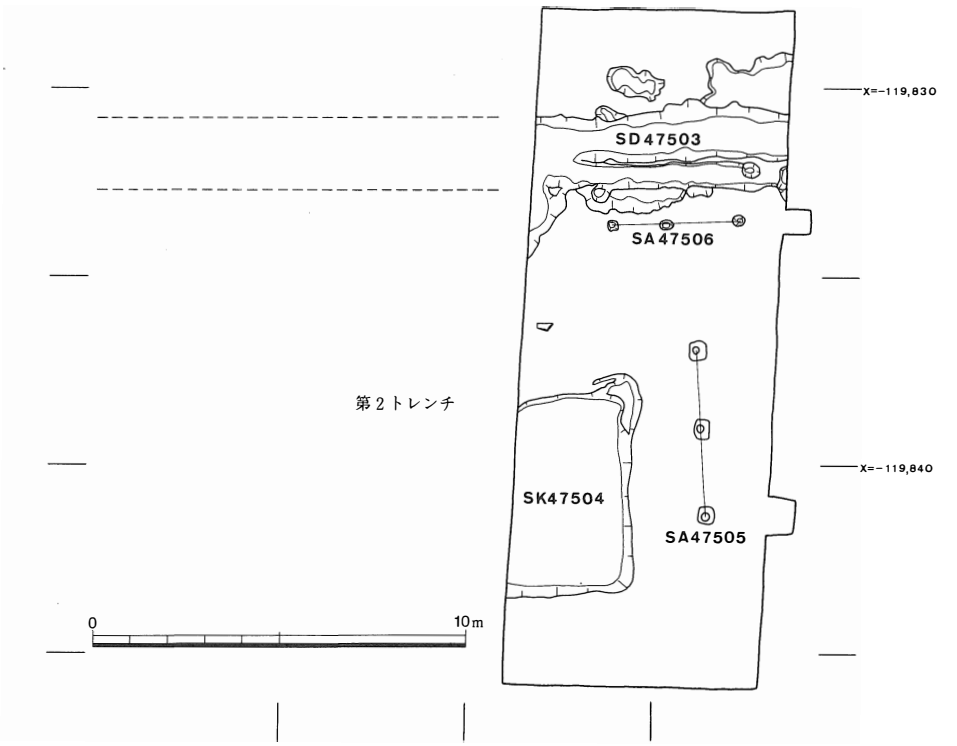
第25図　発掘調査前全景（南から）

調査地は北側の608－１番地と南側の608－８番地を合わせ逆Ｌ字型の土地で、まず北側の608－１番地に南北7.5ｍ、東西14ｍの第１トレンチを設定して南側を土置場とし、第１トレンチ調査終了後埋め戻しを行い、再度南側の608－８番地に南北18ｍ、東西７ｍの第２トレンチを設定することとなった。調査後は再び畑地として利用されるため、掘削は耕作土と床土以下を分けて重機によって行い、包含層以下を人力にて掘り下げた。調査の結果、予想どおり六条々間南小路の南側溝が検出されたため、第２トレンチ北側に新たに南北3.5ｍ、東西４ｍの第３トレンチを設定して北側溝を追求した。また第２トレンチにおいて検出された柵列追求のため部分的な拡張を行った。最終的な調査面積は第１トレンチが105㎡、第２トレンチが123㎡、第３トレンチが14㎡となり合わせて242㎡である。

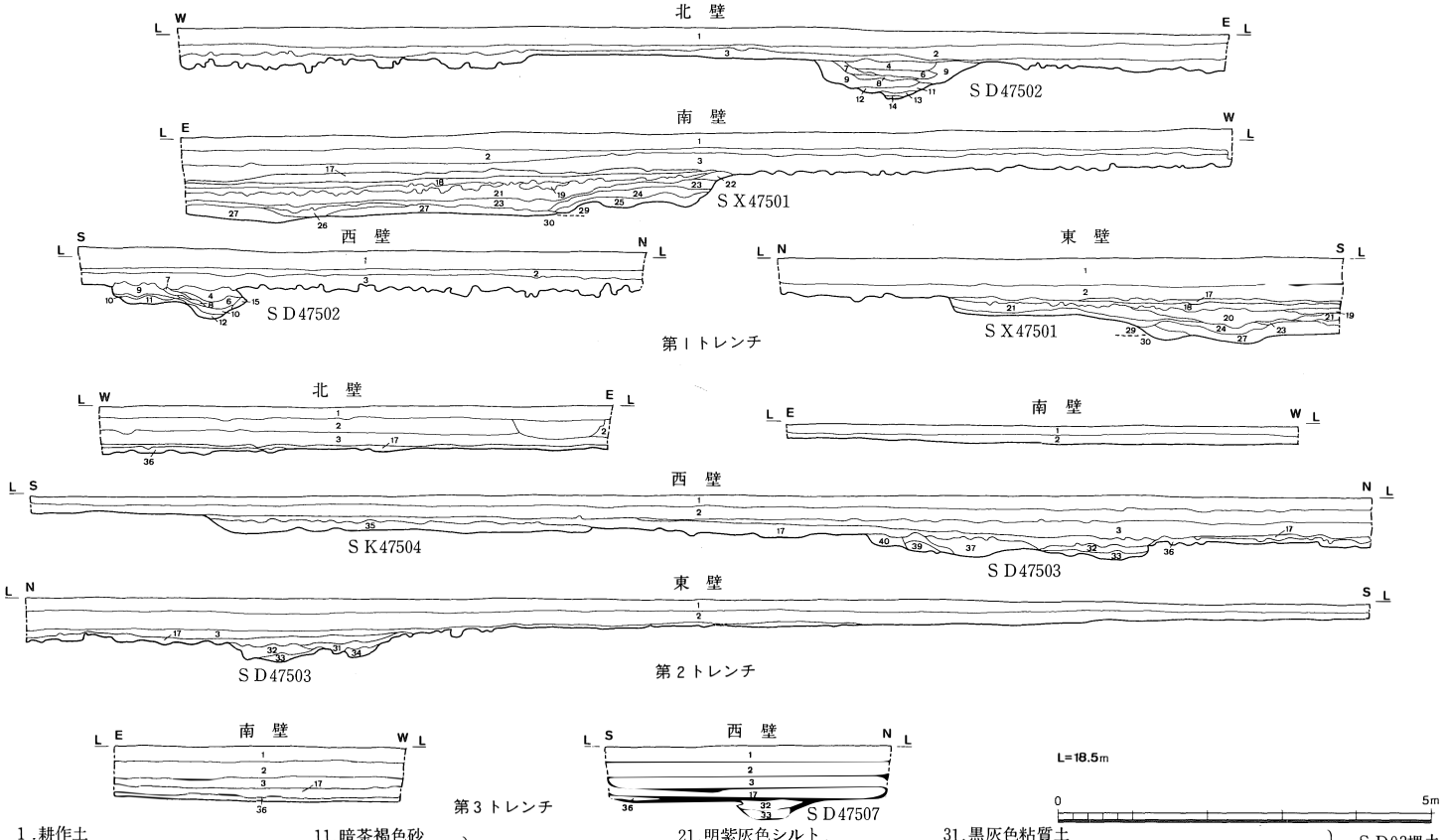
第26図　第１トレンチ調査風景（北東から）

第27図　第２・３トレンチ調査風景（北東から）





第28図　トレンチ配置図（1／200）



1.耕作土
2.床土(瓦器等含む)
3.暗灰褐色粘質土
4.暗茶灰褐色砂
5.暗茶灰色砂
6.茶褐色砂
7.灰白色粘土
8.暗黄灰色砂
9.暗灰色粘土～シルト
10.灰茶色砂
} SD02埋土

11.暗茶褐色砂
12.明茶灰色砂
13.淡灰色粘土
14.茶灰色礫
15.淡灰色粘質土
16.淡黄白色砂質土
} SD02埋土
17.黒褐色粘質土(長岡京期の遺物含む)
18.黒灰色粘土(砂を少量含む)
19.暗灰色粘土黄色マンガン混り
} SX01埋土
20.暗紫灰色シルト

21.明紫灰色シルト
22.暗灰褐色シルト
23.暗灰色粘質土
24.黄白色シルト
25.黄灰色粗砂
26.明黄灰色粗砂
27.黄灰褐色砂礫
} SX01埋土
28.暗灰色砂
29.灰白色シルト
30.明緑灰色シルト＋礫

31.黒灰色粘質土
32.暗黄灰色粗砂・暗灰色粘土をブロック状に含む
33.黄褐色粗砂礫混り
34.暗灰色砂質土
35.暗灰色粘質土
36.暗灰褐色砂質土・黒灰色粘土をブロック状に含む
37.暗紫灰色粘土砂混り
38.暗灰色シルト
39.明灰色シルト
40.黒灰色シルト

31.32 SD03埋土
33.34 SD07埋土
35.36 SK04埋土

第29図　調査トレンチ土層図（1／100）

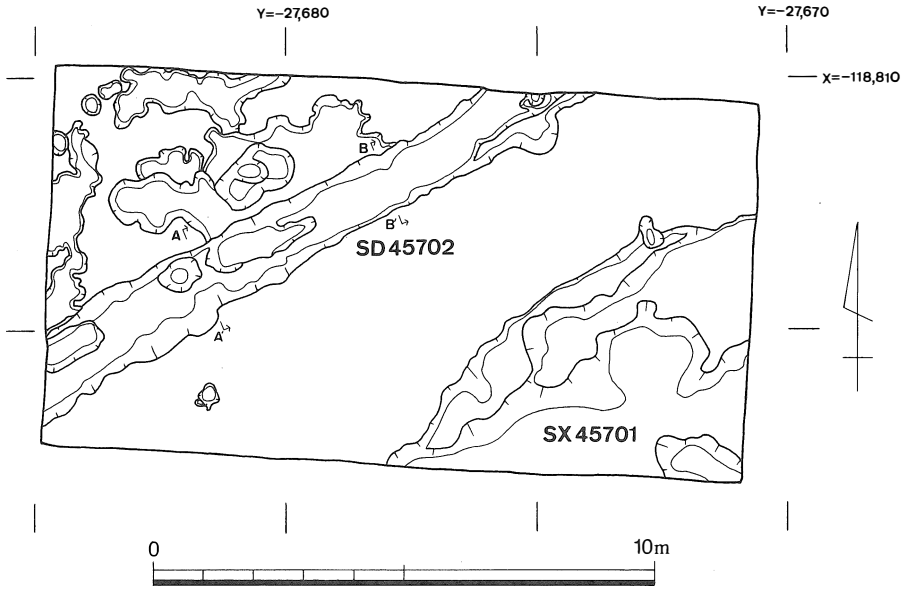
3　検　出　遺　構

調査区の基本層序は、各トレンチ共に耕作土（第１層）、床土（第２層）、暗灰褐色粘質土（第３層）、黒褐色粘質土（第17層）で遺構面にいたる。遺構面のベースは灰白色シルト（第29層）で、第２トレンチの南側では黄灰色礫混じりシルトに変化し徐々に高くなる。長岡京期の包含層である第17層は、第１トレンチでは南東隅の旧流路上面、第２トレンチでは南辺部の高い部分以外、第３トレンチでは全面に認められた（第29図）。

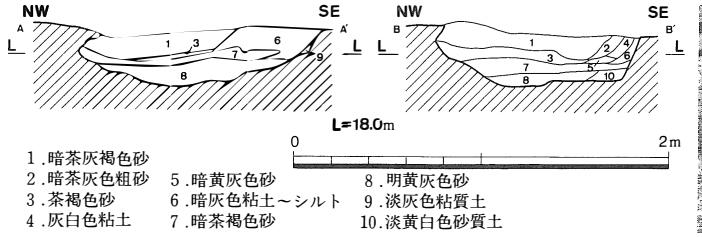
（１）第１トレンチ検出遺構

ベースとなる灰白色シルトは後背湿地の形成層で、第１トレンチでは特に軟弱である。そのため後世の水田耕作に伴う無数の足跡がほぼ全面に遺存していた。検出面はほぼフラットで、標高は18.0～18.1ｍである。

流路状遺構ＳＸ47501　トレンチ南東部で検出された流路状遺構である。北東から南西方向に蛇行しながら流れていたものとみられ、調査地の南西に隣接する㈱ヘルプ建設時の立会調査において断面で延長部分が確認されている。幅は５ｍ以上、深さは約0.7ｍで、最下層では砂礫、上層に行くに従い砂層・シルト・粘質土・粘土と変化する。このことから徐々に水流が衰え、埋没していったことが看取される。また最上層には長岡京期の包含層である第17層が堆積しているが、他の部分においては削平を受けたため遺存していない。埋土からは遺物がまったく出土していないために明確な時期は不明である。



第30図　第１トレンチ検出遺構図（1／150）



第31図　溝ＳＤ47502土層図（1／40）

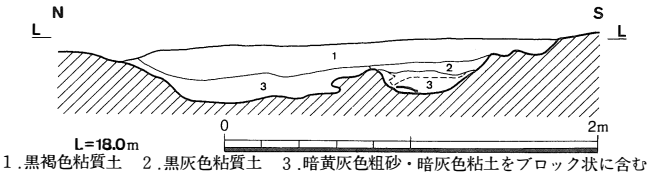
第32図　溝ＳＤ47502（南西から）

溝ＳＤ47502　北東から南西方向に流れるほぼ直線的な溝で、幅は最も広い南西部で1.5ｍ、最も狭い北東部で1.1ｍ、深さは部分的に深くなる所もあり0.3～0.5ｍを測る。埋土は砂層が何層も堆積しており、常時水流のあったことが看取される。また南東肩には部分的に粘土層が見られることから、ある程度砂層が堆積した段階で一時的に滞水状況にあり、それを削るように再度大きな流れがあったものとみられる。遺物は奈良時代～長岡京期頃の土師器の小片が数点第１層から出土しているのみで、明確な時期は決めがたいが、宅地内に当たることから少なくとも長岡京期には埋没していたものと考えられる。

（２）第２トレンチ検出遺構

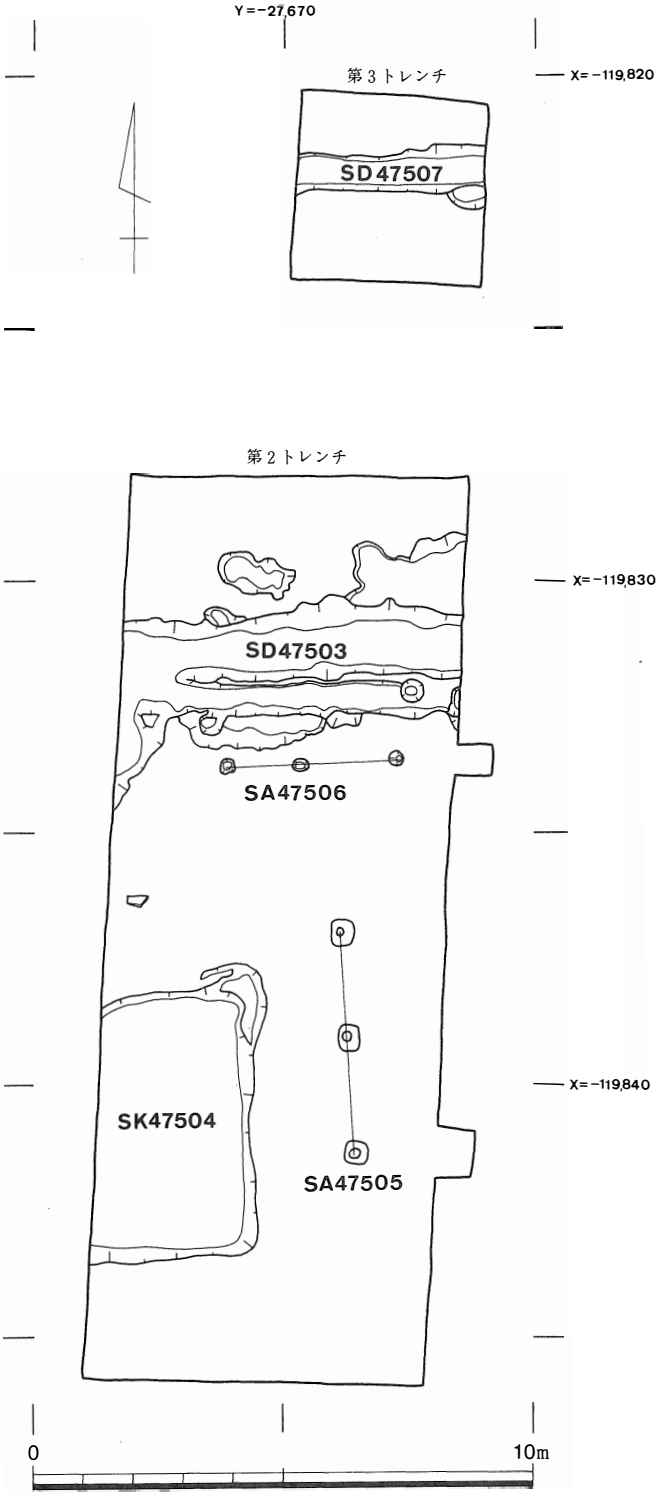
遺構面は南から北に緩やかに傾斜しており、標高は南側で18.3ｍ、北側で17.9ｍを測る。

溝ＳＤ47503　トレンチ北部で検出された東西方向の溝で、六条々間南小路の南側溝に当たるものである。肩部は部分的な崩壊がみられるが幅は最大で2.5ｍ、最小で1.9ｍあり、トレンチの西辺では南に入江状に入り込んでいる。検出面からの深さは0.3ｍ、底面の標高は東端、西端共に17.65ｍを測るが、周辺の地形から本来は西から東へ排水がなされていたと考えられる。東端における溝の中心座標は、Ｙ＝-27,666.42、Ｘ＝-119,831.32で、後述する北側溝ＳＤ47507との心々間距離は9.45ｍである。溝の埋土は基本的に４層で、上層の黒褐色粘質土とそれ以下砂質土を主体とする下層に大別される。上下層とも多くの遺物を含んでいるが、下層の遺物は非常に細片が多く接合できる物も少ない。溝内部の南側にはテラス状の段が存在するが、中央は溝状に凹んでおり、西側に深くなる。テラスの東側では円形の窪みが２か所存在しており、状況から橋状の遺構が存在した可能性も考えられるが、溝の北側に対応するものがなく、また柱痕跡も確認されないために断定は出来ない。



第33図　溝ＳＤ47503土層図（1／40）

第34図　溝ＳＤ47503（西から）

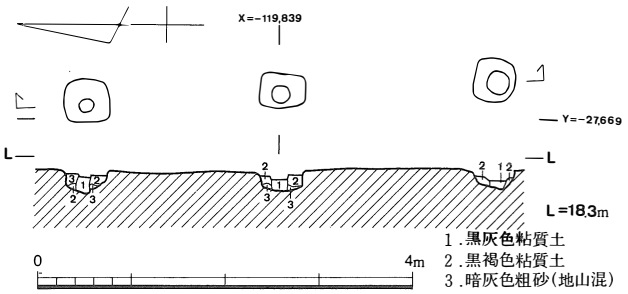


第35図　第２・３トレンチ検出遺構図（1／150）

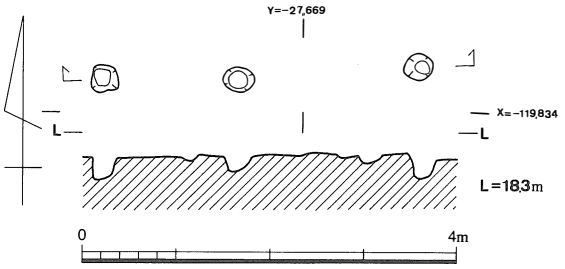
柵列ＳＡ47505　トレンチ中央部で検出された南北方向の柱列で、東西に柱跡が確認されなかったことから掘立柱建物ではなく柵列と判断したものである。方位は北で３°西に振れているが、土坑ＳＫ47504の東辺と平行していることから関連する施設と考えられ、長岡京期の遺構と推定される。柱掘形は、一辺約0.5ｍの隅円方形で、深さは0.2～0.25ｍ、柱跡は直径0.15ｍ前後で、柱間は北側で2.1ｍ、南側で2.2ｍを測る。位置的には条坊復元図によれば西二坊々間小路から約30ｍで、ほぼ一町の東西四等分にあたる。

柵列ＳＡ47506　溝ＳＤ47503の南側で検出された東西方向の柵列で２間分を確認している。位置的にみて宅地の北限と道路とを画する施設とみられるが、西側は入江状に入り込んでいる部分で途切れており、東側も拡張した範囲内では延長部は確認されていない。方位は溝ＳＤ47503の溝肩とほぼ並行しており、肩部からの距離は0.8～0.9ｍ、溝心からの距離は2.1～2.2ｍを測る。柱掘形は不整形な隅円方形ないし円形で、直径約0.3ｍ、深さは0.2ｍ、柱間は西側が1.5ｍ、東側が2.0ｍである。また東側が途切れていることと、溝ＳＤ47503で確認された橋状遺構の可能性のある円形落ち込みとは関連する可能性も考えられる。

土坑ＳＫ47504　トレンチ西辺部で一部が確認された平面隅円方形を呈する土坑である。西側は調査地外に当たるため全形は不明であるが、南北5.2ｍ、東西は3.3ｍ以上、深さは0.2ｍを測る。北東隅はやや崩れているが、東辺と南辺は直線的で南東隅はほぼ直角である。東辺は北で３°西に振れているが、出土した遺物から長岡京期と判断されるものである。埋土は２層あり、上層は黒褐色粘質土、下層は暗灰色粘質土で上層に遺物が集中している。また内部には若干の炭片が混入していたが、土坑周辺には火を受けたような痕跡は認められなかった。性格は不明

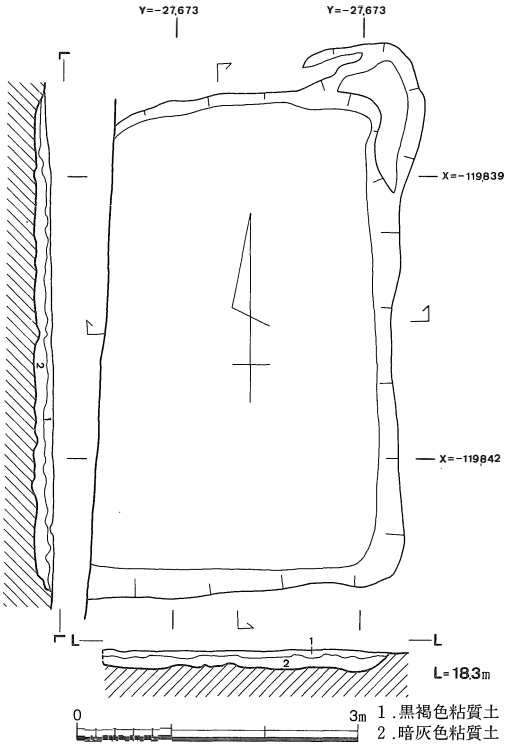


第36図　柵列ＳＡ47505実測図（1／80）

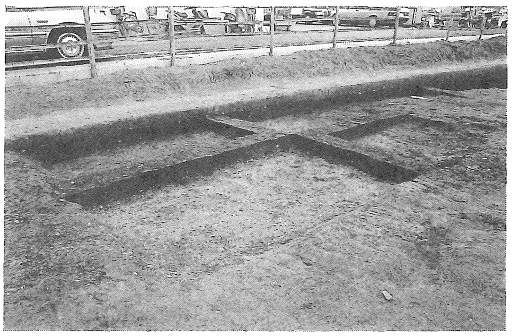


第37図　柵列ＳＡ47506実測図（1／80）

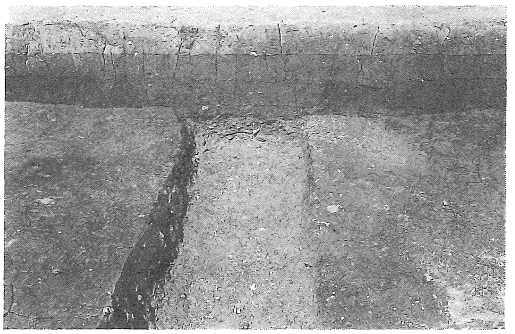
第38図　石の検出状況（北東から）



第39図　土坑ＳＫ47504実測図（1／80）



第40図　土坑ＳＫ47504（南東から）



第41図　溝ＳＤ47507（東から）

であるが、先述のごとく柵列ＳＡ47505と方位が一致することから一連の施設と考えられるものである。

これらの他に土坑ＳＫ47504の北側、溝ＳＤ47503の入江部分の南側で扁平な石が検出されている（第38図）。入江状に入り込んだ部分の周囲は西側に低くなっており、石は包含層を除去した段階で遺構面の直上で検出された。平面は不整形な台形を呈し、長さ44cm、幅20cm、厚さは４cmを測る。南側は直線的になっており、人為的な加工とみられるが表面は風化しており、加工の痕跡や砥石としての使用痕跡は認められなかった。また上部が水平であることから礎石の可能性もあるが、単独で検出されているため性格については不明である。

（３）第３トレンチ検出遺構

第２トレンチにおいて六条々間南小路の南側溝が検出されたことから、北側溝の検出を目的に急遽設定したトレンチである。検出面での標高は17.8ｍである。

溝ＳＤ47507　六条々間南小路の北側溝に当たるものである。検出部東側で肩部に崩れが認められ、幅は0.7～0.9ｍと南側溝ＳＤ47503に比べると狭くなる。検出面からの深さは0.3ｍ、底部の標高は東西端共に17.5ｍを測るが、南側溝同様西から東への水流があったものとみられる。埋土は２層で、上層は粘質土を主体とし、下層は砂礫混じりの粗い砂層で、南側溝と同様の堆積状況を示している。出土遺物は全体に少量で、上層に多く下層は特に少ない。溝心の座標は東側でＹ＝-27,665.93、Ｘ＝-119,821.87である。

4　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物の総量はコンテナにして９箱で、そのうち溝ＳＤ47503出土のものが５箱と大半を占めている、次いで土坑ＳＫ47504が１箱、溝ＳＤ47507が１箱、その他の遺構および包含層出土遺物２箱となる。紙数の制限から各遺構ごとの概略を列記する。

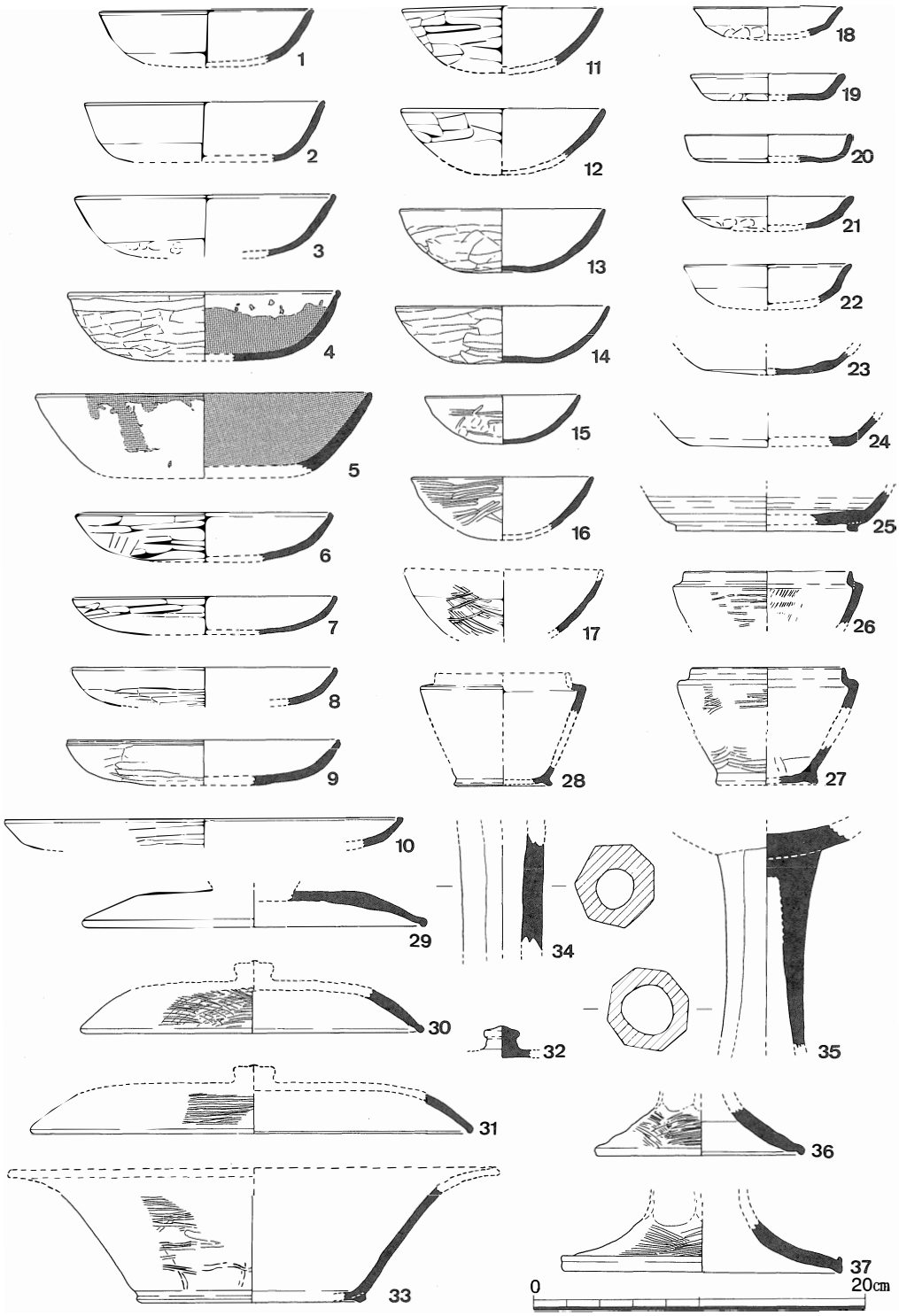
溝ＳＤ47503出土遺物　今回の調査地では最も遺物が多く出土した遺構である。土師器、須恵器、黒色土器、ロクロ土師器、赤彩土器、土馬、ミニチュアカマド、墨書人面土器、製塩土器、瓦、銅銭、木製品などの他、石鏃、サヌカイト片、古墳時代の須恵器がある。これらのうち、土器のみの破片数と比率は、土師器5152（89％）、須恵器622（10.7％）、黒色土器14（0.2％）となり、土師器が約９割と高率である点が特徴である。

土師器（第42・43図）　杯Ａ（１～５）・杯Ｂ、杯Ｂ蓋（29～32）、皿Ａ（６～９）・Ｃ（18～22）、椀Ａ（11～14）・Ｃ（16・17）、ロクロ土師器（23～25）、高坏（34～37）、盤（33）、壺Ｅ（26～28）、甕Ａ（38～46）、羽釜（47･48）がある。杯Ａの１～３は口縁部のみヨコナデし、底部は不調整である。また４・５には漆の付着がみられるが、４は生漆、５は黒漆と生漆である。18には口縁部に灯火器使用の痕跡が残るが、36の高坏脚部内面にも同様の痕跡がみられ、倒立状態で灯火器として使用されたと推定される。23～25はロクロ土師器で、回転を利用したケズリ・ナデを施す。壺Ｅのうち26は内面にハケメを有し、27は内面底部が強いナデによって凹んでいる。甕には口径13cmの小型品から口径29.6cmの大型品があり、41は外面不調整の河内産のもの、42は肩部に横方向のハケメを有する。

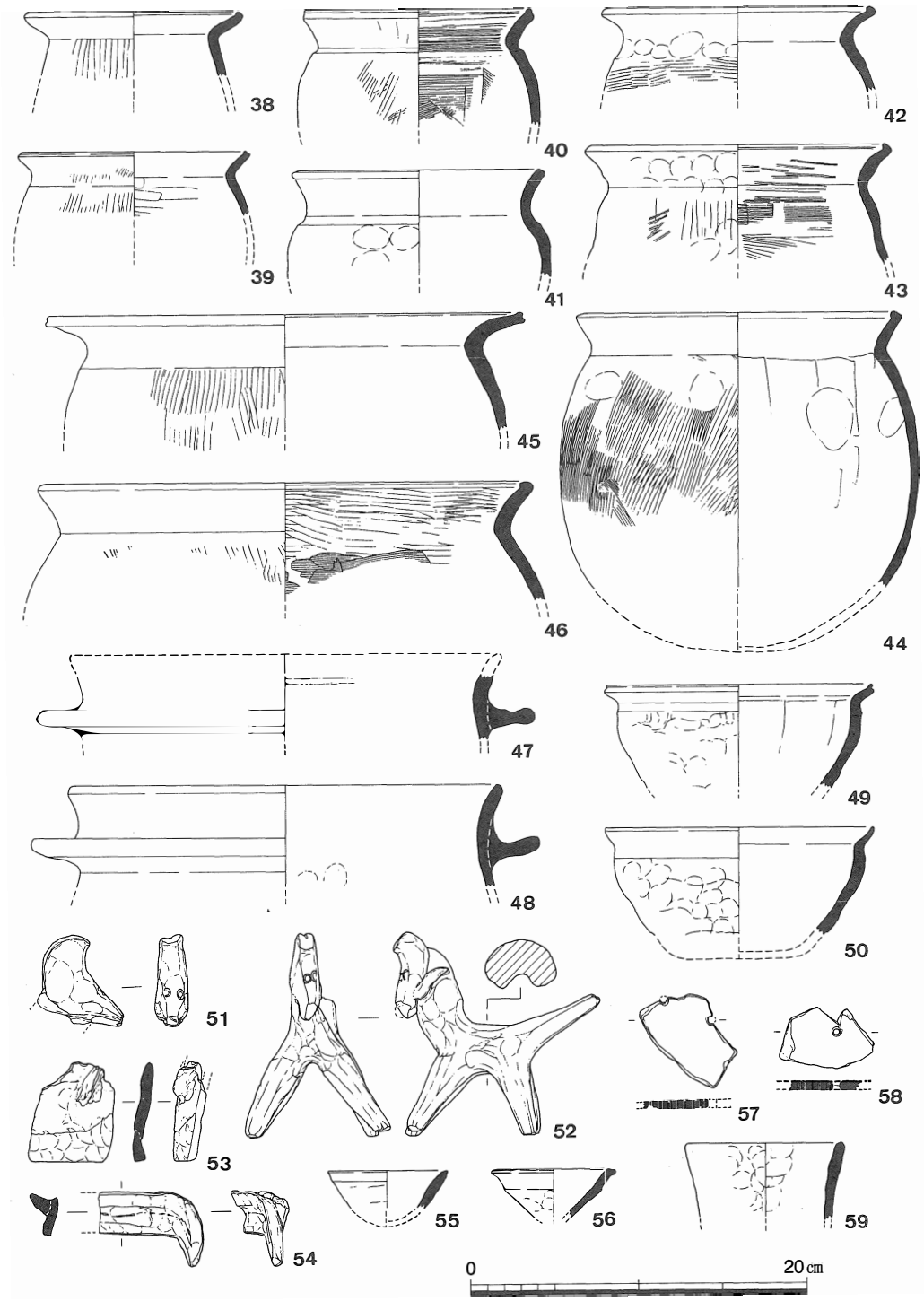
土師器の出土破片数5152のうち、杯・皿・椀類は3384（65.7％）、高坏・盤類が175（3.4％）、甕・羽釜類が1091（21.2％）、壺類29（0.6％）、その他69（1.3％）、不明404（7.8％）となり、食器類が最も多く、煮沸具がそれに次いでいる。

土製品（第43図）　壺Ｂ（49･50）、土馬（51･52）、ミニチュアカマド（53･54）・カマコ（55･56）、穿孔土器(57･58)、製塩土器(59)がある。壺Ｂは墨書人面土器タイプで、図示した107(第45図）の他、口と鼻を描いた破片が１点ある。49は肩部内面に板状工具による横方向の調整痕が残る。52の土馬は部位が揃い完形に復することが出来るもの。57・58は、土師器の杯ないし皿の底部に穿孔したものである。

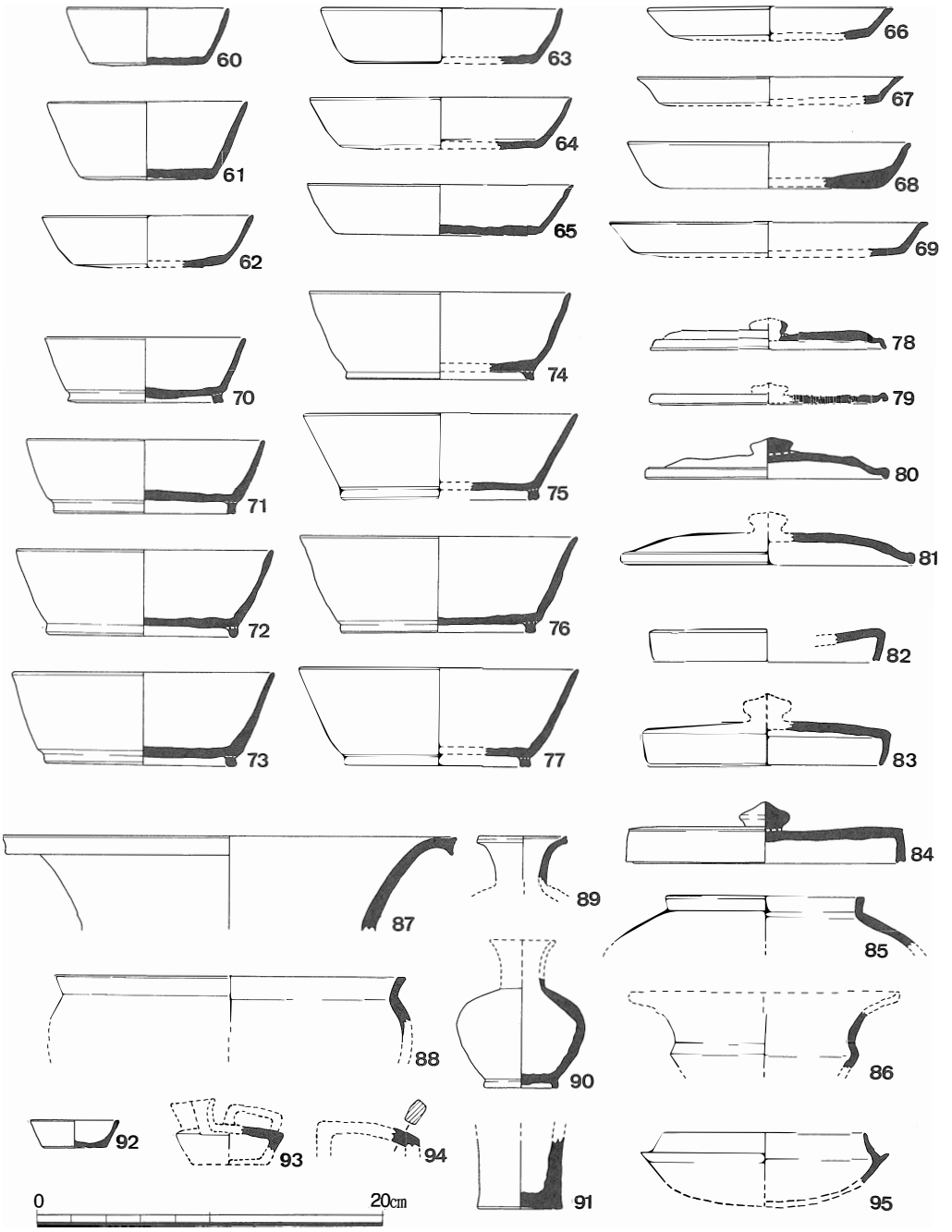
須恵器（第44図）　杯Ａ（60～65・92）・杯Ｂ（70～77）、杯Ｂ蓋（78～81）、皿Ａ（66～69）、壺Ｂ（85）、壺Ｂ蓋（82～84）、壺Ｇ（91）・Ｈ（86）・Ｌ・Ｍ（89･90）、平瓶（93･94）、鉢Ｄ（88）、甕（87）がある。杯Ａのうち61は深手のもの、92は類例の少ないミニチュアである。68の皿は底部が厚く産地の特徴を表すものとみられる。壺Ｂの蓋は端部に２形態あり、83は丸く納め、上面に自然釉がかかる猿投産のものである。ミニチュアの平瓶と小型の平瓶の把手も同じく猿投産で、他に外面に黄土をハケ塗りした甕の体部片もある。95は混入品で、Ｔ



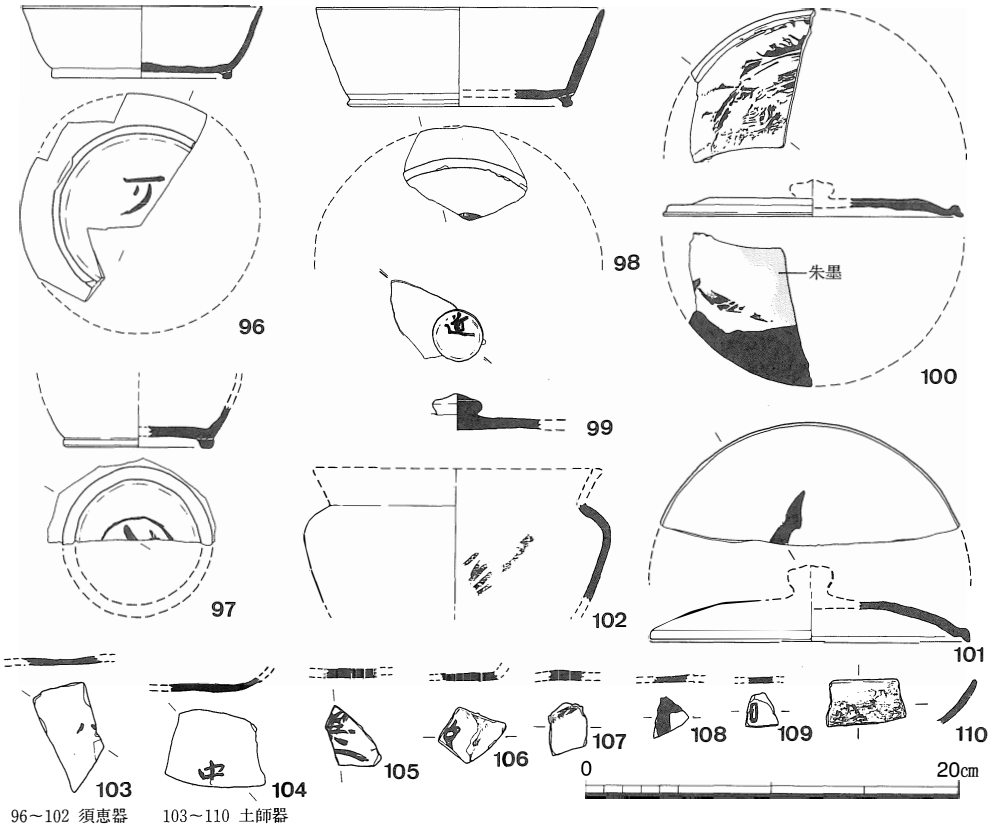
第42図　溝ＳＤ47503出土遺物実測図１（1／4）



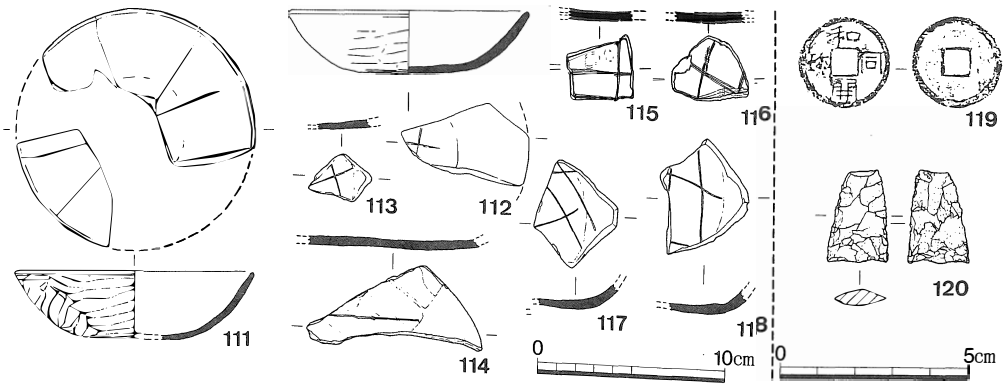
第43図　溝ＳＤ47503出土遺物実測図２（1／4）



第44図　溝ＳＤ47503出土遺物実測図３（1／4）



第45図　溝ＳＤ47503出土墨書土器実測図（1/4）



第46図　溝ＳＤ47503出土線刻土器（1/4）、銭貨・石製品（1/2）実測図

Ｋ10に比定される杯身。古墳時代の開田遺跡に伴うものとみられる。

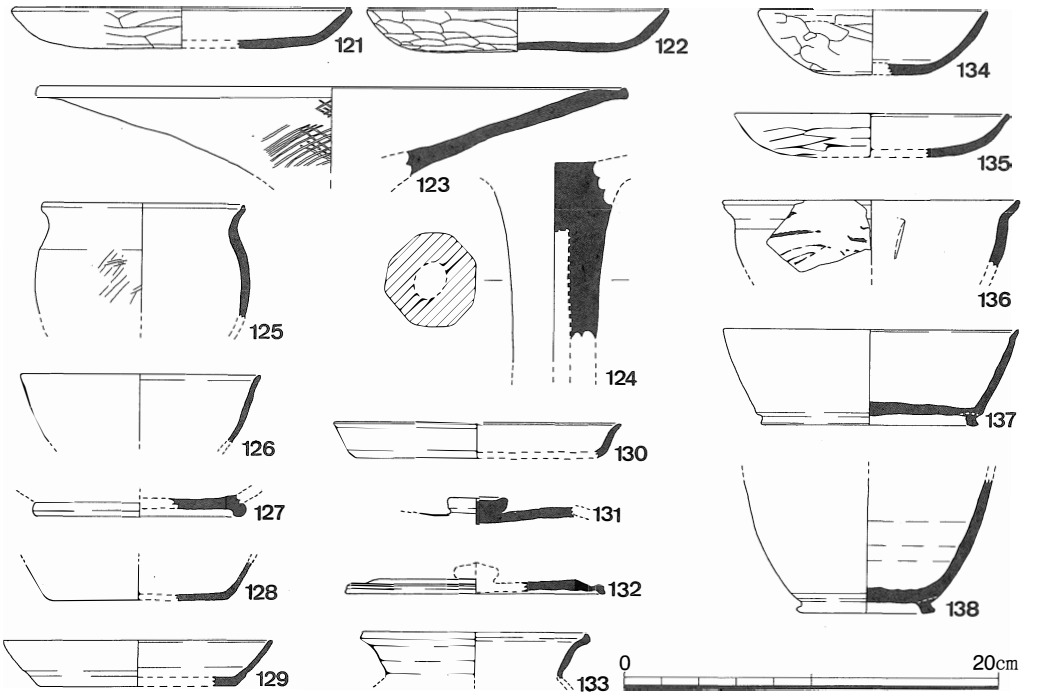
須恵器の出土破片数622のうち、杯・皿類が410（69.9％）、壺類が53（8.5％）、鉢類23（3.7％）、甕類が99（15.9％）、その他２（0.3％）、不明35（5.6％）となる。土師器と同様食器類が約７割を占め、次いで甕などの大型貯蔵具、壺、瓶類の小型貯蔵具となる。

墨書土器（第45図）　文字と記号状のものがあり、このうち文字の判読出来るものには「万」（96）、「道」（99）、「八」（103）、「中」（104）があり、他に漢字を書いたと思われるもの（105・106・109）がある。これ以外は記号あるいは不明のものであるが、102は鉢Ｄの内面に描く珍しいもの、100は内外面に墨と内面中央に朱墨が確認できる。

線刻土器（第46図）　確認できるものはすべて土師器の食器類で、器形の判明するものは椀Ａ（111・112）のみである。内面に施すもの（111・113・117・118）と外面に施すもの（112・114～116）があり、大半は「×」が多い。117は複数の平行線の組み合わせ、114は墨跡がわずかに残っており、墨書されていたと考えられるものである。

この他に和同開珎（119）、混入の二等辺三角形平基式の石鏃（120）が出土している。銅銭は和同開珎がもう１点出土している。

土坑ＳＫ47504出土遺物　土師器、須恵器、黒色土器、線刻土器、赤彩土器、漆付着土器、瓦、製塩土器、土馬、墨書人面土器などの他にサヌカイト片およびＶ期の円筒埴輪の小片が出土している。このうち土器類のみの破片数とその比率は、土師器862（90.6％）、須恵器75（8.7



第47図　土坑ＳＫ47504、溝ＳＤ47507出土遺物実測図（1/4）

%)、黒色土器6（0.7%）となり、土師器が約9割を占め、溝ＳＤ47503でみられた比率とほぼ同様となっている。

土師器には杯Ａ、皿Ａ（121・122)、椀Ａ、高坏（123・124)、盤、壺Ｅ、甕Ａ（125)、羽釜があり、須恵器では杯Ａ（128・129)・杯Ｂ（126・127)、皿Ａ（130)、杯Ｂ蓋（131・132)、壺Ｇ・Ｌ・その他（133)、甕などがある。土師器の出土破片数781のうち、杯・皿・椀類は357（45.7%)、高坏・盤類が74（9.5%)、甕・羽釜類が346（44.3%)、壺類１（0.1%)、その他３（0.4%）となり、須恵器では出土破片数のうち、杯・皿類は53（70.7%)、壺類が９（12%)、甕類が13（17.3%）となる。

溝ＳＤ47507出土遺物　六条々間南小路の北側溝で、南側溝の溝ＳＤ47503に比べると極端に遺物が少なく、図示出来るものはさらに少量であった。土師器、須恵器、黒色土器、土馬、ミニチュアカマド、墨書人面土器、製塩土器、瓦、サヌカイト片、櫛などが出土している。土器のみの破片数と比率は、土師器212（87.3%)、須恵器25（11.8%)、黒色土器２（0.9%）となり、ここでも溝ＳＤ47503とほぼ同様の比率となっている。

土師器には杯Ａ、椀Ａ（134)・Ｃ、皿Ａ（135)、高坏、壺Ｂ（136)、甕が、須恵器は杯Ａ・Ｂ（137)、杯Ｂ蓋、皿、壺Ｇ・Ｌ（138)、甕がある。土師器の出土破片数185のうち、杯・皿・椀類は141（76.2%)、高坏・盤類が３（1.6%)、甕・羽釜類が41（22.2%）となっており、須恵器は出土破片総数25のうち、杯・皿類が13（52%)、壺類が６（24%)、甕類が６（24%）となる。

５　ま　と　め

今回の調査ではいくつかの知見を得ることが出来た。長岡京期では、六条々間南小路の両側溝が検出され、また北側の右京六条二坊十一町では遺構が検出されなかったものの、南側の右京六条二坊十二町において宅地利用の様相の一部が判明した。ただ残念ながら西市の存在を直接証明するような手がかりは得られていない。

古墳時代の開田遺跡については混入した須恵器の杯が出土したのみで、遺構については確認されていない。これは当調査地が後背湿地に位置することから、この範囲まで広がらず、遺跡の中心は北側の緩扇状地上に存在するものと推定される。また円筒埴輪片の出土は、北東に存在する塚本古墳とのつながりが考えられる。

中世開田遺跡に関しても、南側において多くの遺構・遺物が確認されているにも関わらず、何も検出されていない。従ってこれも後背湿地を北限とする遺跡の範囲が推定される。これらについては今後の調査により、さらに具体像が判明するものと期待される。(木村泰彦)

注１）小田桐　淳「右京第410次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第31冊　1993年

第３章　長岡京跡右京第479次（７ＡＮＭＳＩ-14地区）調査概要

―― 長岡京跡右京七条二坊八町、開田遺跡 ――

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1994年８月22日から10月７日まで、長岡京市開田四丁目405－１において実施した長岡京跡右京七条二坊八町（六条二坊六町）・開田遺跡の発掘調査に関するものである。

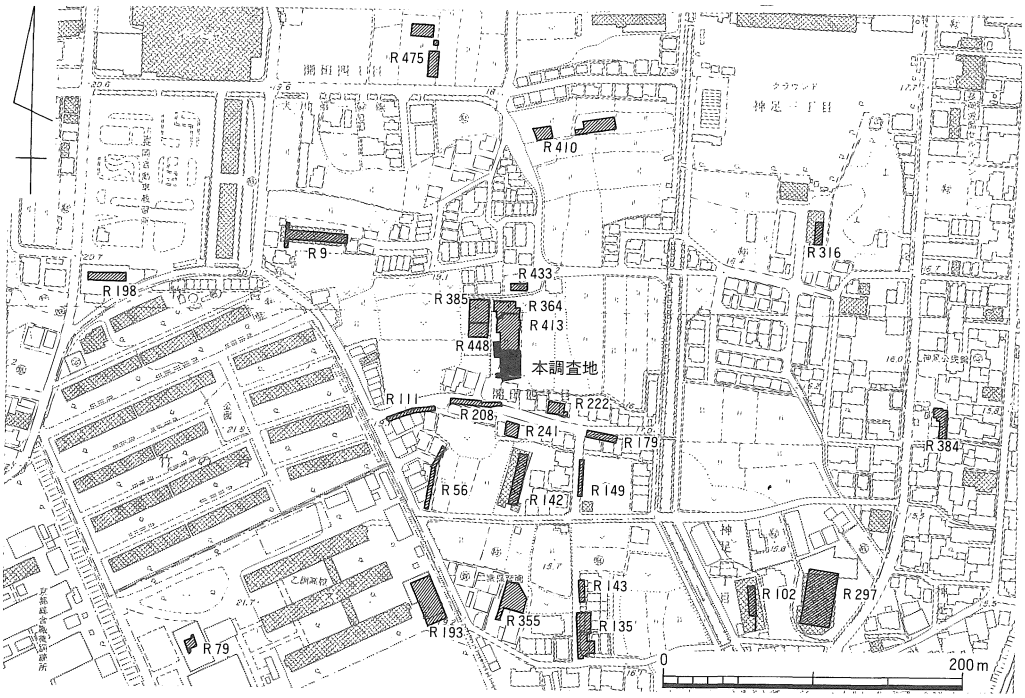
2　本調査は、長岡京跡の西市および中世の開田遺跡に関する資料を得ることを目的に実施したものである。1990年から継続した発掘調査は、今回で当初の予定地内の調査を終了した。

3　調査は、平成６年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、原秀樹が担当した。

4　調査実施にあたっては、土地所有者である藤井博一氏をはじめ、水道の借用をお願いした前川石一氏、小田佐一郎氏など周辺の土地所有者、近隣住民の方々に種々のご協力を得た。

5　調査後の図面整理は、橋田邦夫・久保直子・森昌彦をはじめ多くの方々の協力を得た。(1)

6　本報告の執筆は、４　出土遺物２－(５)を中尾秀正、５　まとめ(１)を木村泰彦、付載１を大山崎町歴史資料館学芸員福島克彦氏、付載２を奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官村上隆氏に依頼した。その他の執筆と編集は原が行った。



第48図　発掘調査地位置図（1／5000）

2　調　査　の　経　緯

（1）調査経過

本地点における長岡京跡および開田遺跡の発掘調査は、平成2年から同6年にかけて本市教育委員会の国庫補助事業として実施したものである。調査は藤井博一氏所有の畑地を各年度ごとに順次実施しており、これまでの調査地については付表3のとおりである。発掘調査にあたっては、その後も引き続き畑地として利用されるためはじめに重機で耕作土を分けて置いた後、遺構検出面まで掘り下げを行い、調査終了後は最後に耕作土を埋め戻すという手順で行った。従って、発掘調査は最終年度を除いて例年収穫後から年末までの期間に行い、年度末には報告書を刊行するという状況のなかで進められてきた。しかし、限られた期間内では遺物整理が十分に行えないこと、次年度以降の調査で関連する遺構が明らかにできる点などを考慮して初回以後は主要な遺物と検出遺構の報告に止どめざるをえなかった。本書では、今年度に実施した調査の概要と、これまで未報告であった出土遺物について報告する。先年度以前の調査地の概要については付表3の各報告書を参照されたい。また、一連の調査において遺構と遺物の報告が分散した点は、遺跡を理解するうえでさらにわかりにくくしていると思われる。このため、簡単な手引きとして各調査地全体の検出遺構図（第60図）のほか、主要な遺構について時代別の遺構変遷図（第61図）と主要な遺構一覧（付表4）を作成した。遺物についても、単独の遺構から出土した遺物以外は各調査地から出土した同時期の遺物をまとめており、これについても遺物一覧（付表8）を作成した。なお、本地点は旧大字神足小字澤井にあたることから小字名による地区標記はＭＳＩとなるが、昭和50年に新しい住居表示が実施され開田四丁目に変更されたことから遺跡名も開田遺跡と呼称している。

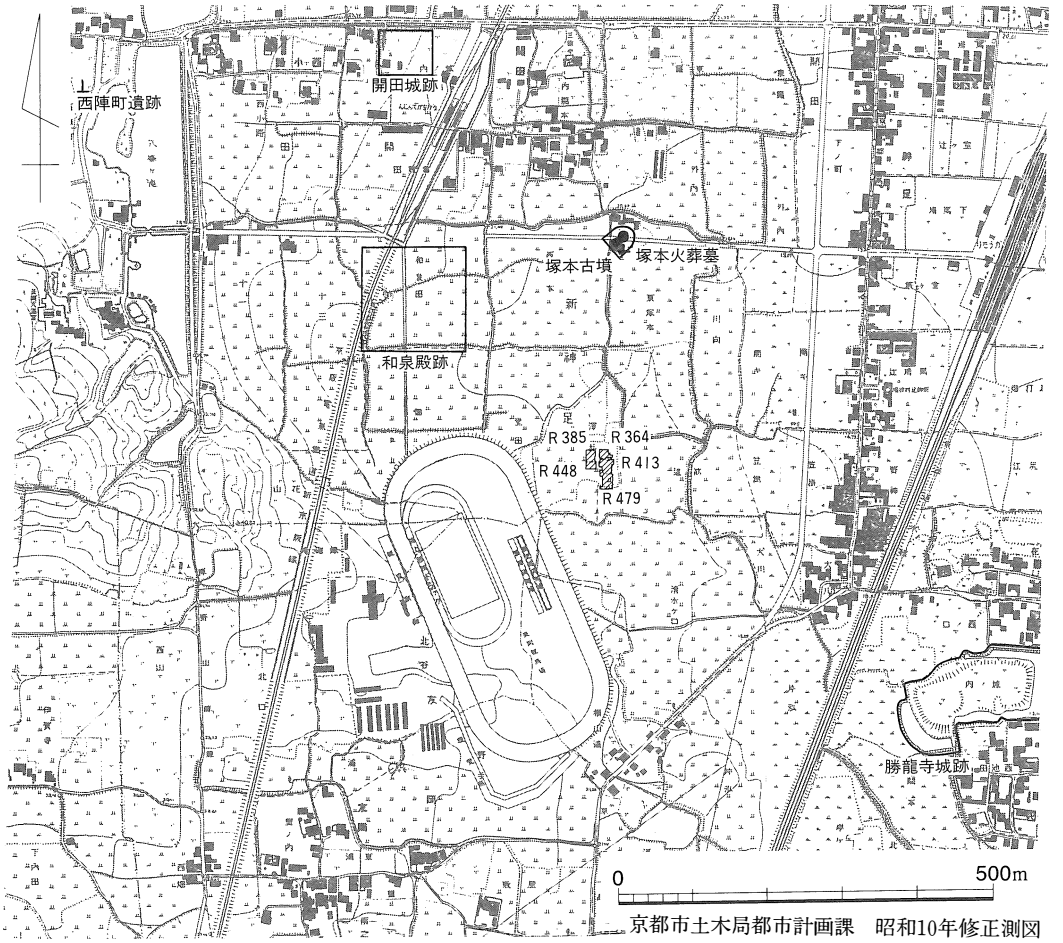
第49図　調査前の状況（北から）

（2）歴史的・地理的環境

調査地は、阪急京都線長岡天神駅とＪＲ東海道本線神足駅にほど近い市中心部の交通至便な

付表3　調査地一覧

	調査年度	調査次数	地区名	調査期間	面積	担当者	報　告　書
1	平成2(1990)年	右京第364次	7ANMSI-10	11.8～12.15	174㎡	中島	長岡京市文化財調査報告書第27冊(1991)
2	3(1991)年	第385次	11	11.14～12.19	214㎡	木村	第29冊(1992)
3	4(1992)年	第413次	12	11.17～12.28	280㎡	原	第31冊(1993)
4	5(1993)年	第448次	13	10.14～11.15	117㎡	原	第32冊(1994)
5	6(1994)年	第479次	14	8.22～10.7	297㎡	原	本　書



第50図　周辺の遺跡分布と集落（1／10000）

所に位置している。周辺では宅地造成に伴う事前の発掘調査を（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施しており、既に多くの中世遺構が検出されていた。調査地点は犬川右岸の氾濫原に立地しており[(2)]、付近の標高は18～19ｍである。旧地形は川筋に向かって緩やかに南東方向へ傾斜しており、調査地の東約60ｍは後背低地との地形変換線となっている。当地は旧小字澤井の名のとおりかつては清水がこんこんと湧き出る所として知られており、周辺で検出した井戸や池跡の大半は今なお水が枯れることがない。当地の北西約400ｍの泉殿の森は現在も付近の田畑を潤す水源地となっている。また、第50図中央の競走路は昭和４～31年まで存続した長岡地方競馬場である。

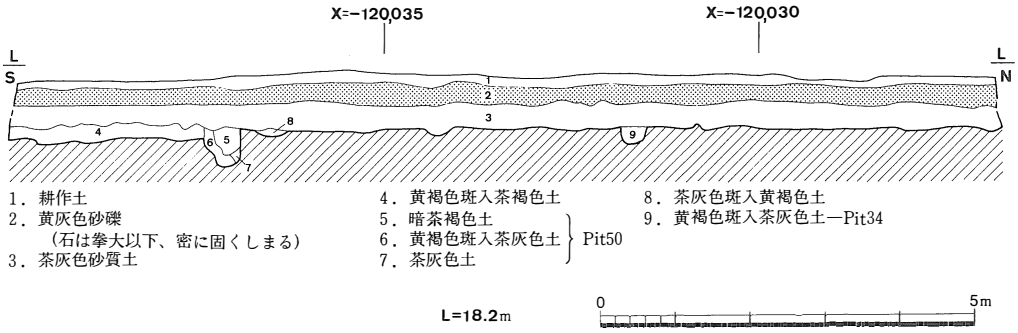
周辺の遺跡分布[(3)]は、縄文時代中期までさかのぼるがまだ明確な遺構は発見されておらず、土器片、石鏃などは二次堆積層から出土したものである。遺跡の立地は同じ犬川流域の沖積低地に位置する中期と後・晩期の土器が出土した十三遺跡の状況と類似しており、住居等の生活遺

構は周辺の扇状地や段丘部に立地するものと考えられる。弥生時代では、犬川上流の扇状地縁辺部に前期の甕棺墓１基があるほか、下流の南栗ヶ塚遺跡には中期の方形周溝墓が営まれている。本地点では中期の土器と石器のほか今回新たに前期の土器が出土した。周辺では、中期の集落は東の犬川左岸段丘部の神足遺跡が拠点的な集落として位置付けられる。長岡京期については、別項のまとめ（１）を参照されたい。一方、長岡京廃都後の開田地域では断片的ながら各所で平安時代前期の遺構と遺物が見いだされており、本地点の北西400ｍには平安時代の宮跡伝承地の泉殿跡がある。一般的に泉殿は寝殿造りの離れ屋を指しており、湧き水が豊富なことと相まって貴族の住居が造営されても不思議ではない。実際にはまだこれらを結び付ける手掛かりは乏しいが、長岡京廃都後も引き続いて土地利用が行われたことは事実である。このほか、平安時代には塚本火葬墓が犬川上流の扇状地縁辺部に営まれており、開田一帯を望む高台には西陣町遺跡の火葬塚が築かれている。このように段丘下の氾濫原に立地する本地点では、古墳時代の竪穴住居跡１軒と長岡京の道路と宅地跡を除くとほとんど生活遺構は見られない状況であるが、これが中世に入ると一転して多彩な遺物と遺構が発見される。中世の遺構は鎌倉・南北朝期と戦国期に二分されるが、(財)長岡京市埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われるまでは中世集落跡として周知される遺跡ではなかった。また、近世初頭の遺物も若干出土しており、一時期の土地利用が行われたことを物語っている。

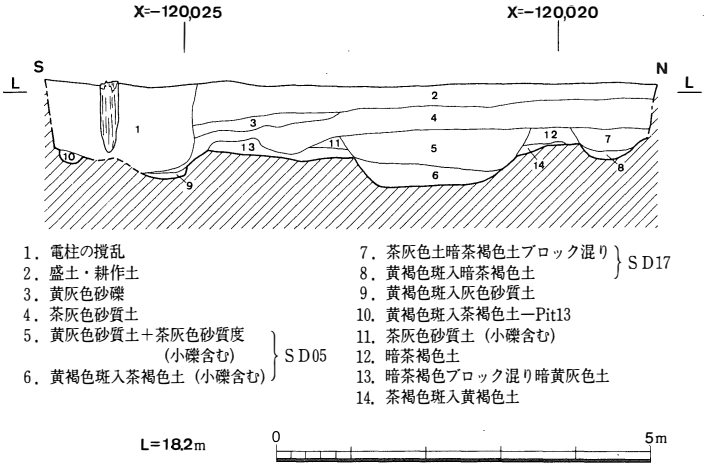
一方、当地を含む長岡京市開田・今里地区の地割については、１町の形態が坪界線のみ北で東に１°38′の振れをもつ菱形であることが指摘され[(4)]、「開田・今里地区東偏菱形条里」として提示されている。坪付に関する地名には「開田十一」、「開田十三」がある。

3　検　出　遺　構

これまでに実施した調査の概要は個別に報告済みであり、ここでは右京第479次調査を中心に述べる。遺構はこれまでと同じくすべて地山面で検出した。しかし、今回は耕作土直下に厚さ約20cmにわたってこぶし大以下の石が密に固く締まった状態で堆積しており、これがほぼ隣接する調査地の地山面と同等だったことから一時は地山と誤認する状況であった。結果的にはさ



第51図　調査地断面図（1／100）



第52図　堀ＳＤ47905西壁断面図（1／100）

らに掘り下げたところで遺構を確認したが、本地点については礫を含む盛り土で堅固に整地した状況が明らかとなった。地山は黄褐色土と堅い礫層からなる（第51図）。

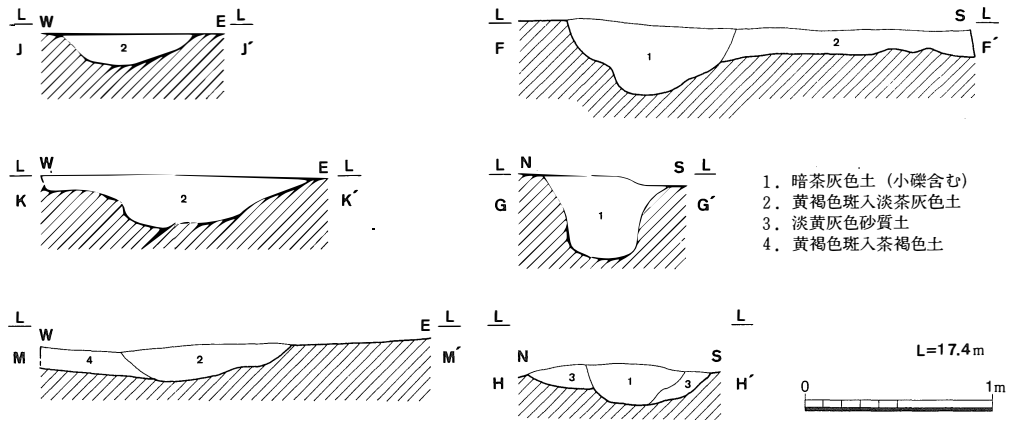
今回の調査では、長岡京期の掘立柱建物・井戸・溝、鎌倉・南北朝期の井戸・土坑・柱穴、戦国期の堀・溝・井戸・柱穴、江戸時代の溝などを検出した。また、隣接する右京第413次調査時に一部分しか検出できず全容が不明であった遺構について今回改めて見直しを行った。堀についても今回新たに西側部分を調査することから、既掘部分を再度掘り出すことにした。なお、検出遺構図には通常遺構番号の前に次数（例えば右京第479次）を付けているが、図中については煩雑になるので省略した。以下、主な遺構について述べる。

（１）近世の遺構

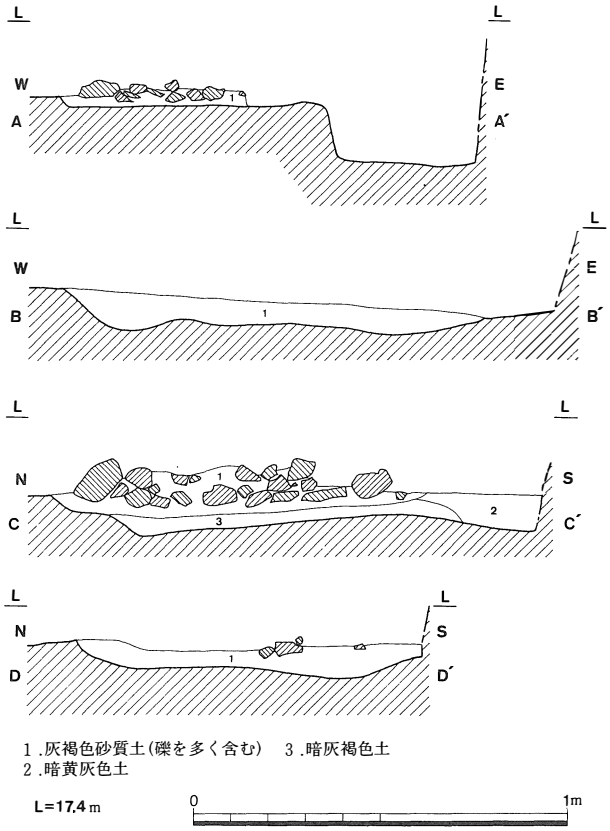
溝の他に遺構は確認できなかった。

東西溝ＳＤ47901（第53図）　幅0.6～１ｍ、深さ0.2～0.4ｍの断面Ｕ字形の溝。水が流れた痕跡はない。

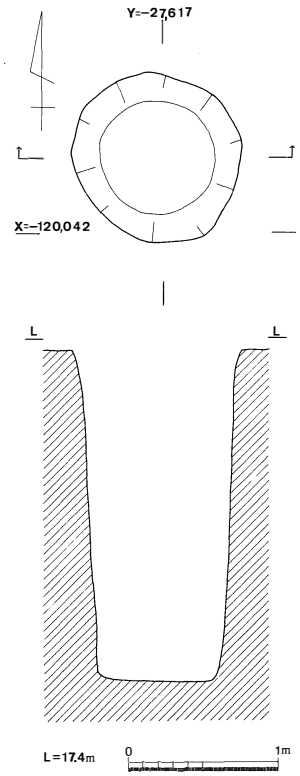
南北溝ＳＤ47904・47910　調査区西端で検出したＳＤ47904は、幅0.6～0.9ｍ、深さ0.2～0.3ｍで部分的に東側が二段に落ち込む。水が流れた痕跡はない。調査区東端のＳＤ47910は、西側のみ検出できた。同じく流水の痕跡はない。平行する両溝間の距離は内法で12ｍ余りである。



第53図　溝ＳＤ47904・01断面図（1／40）



第54図　溝ＳＤ47902断面図（1／20）



第55図　井戸ＳＥ47903実測図（1／50）

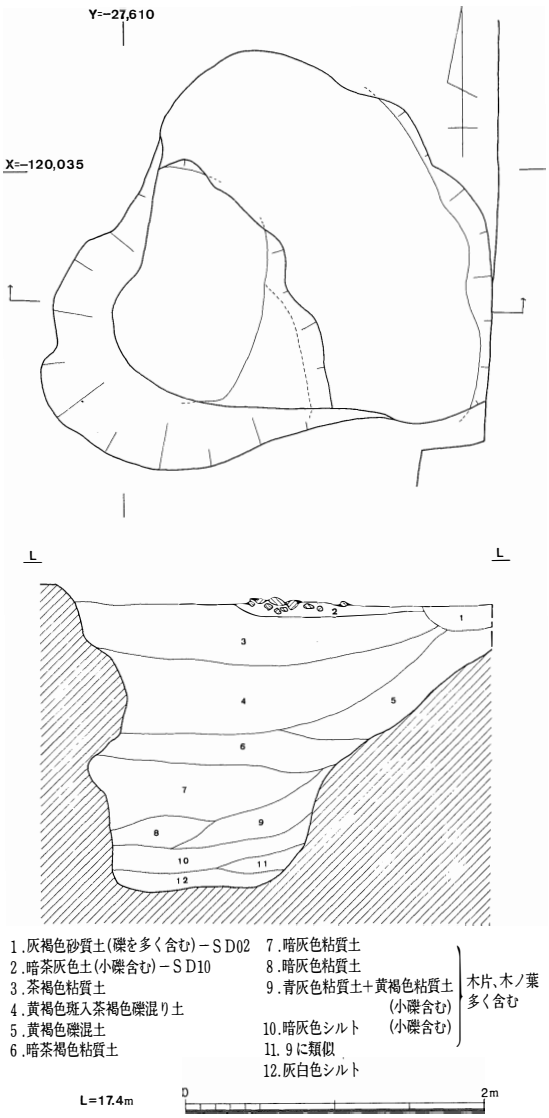
ＳＤ47904とＳＤ47901の重複関係は後者の方が新しい。また、今回の遺物整理では16世紀末から17世紀前半に位置付けられる陶磁器が少量存在することが新たに明らかになったが、まだ資料に乏しくその性格については不明である。

（２）中世の遺構

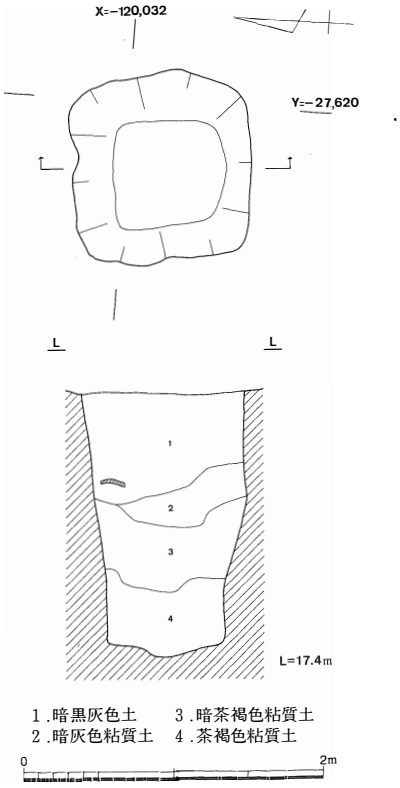
中世の遺構は、これまでと同じく鎌倉・南北朝期を中心とする中世前期（14世紀前半代）と、戦国期を中心とする中世後期（16世紀前半代）にわけられる。

堀ＳＤ47905（第52図、図版18-２）　平成４年度の調査で確認したところから西へ約４ｍ拡張した。幅は東側では３ｍあったものが西壁では2.3ｍと狭まっており、深さも前回の調査で検出した溝底の段を境に徐々に西へ浅くなっている。遺物は前回と同様に小片が多く量も少ない。空堀。中世後期。

溝ＳＤ47902（第54図、図版18-１）　調査区東端から逆Ｌ字形に折れて西へ延びる。部分的にしか確認できないことから遺構の全容は不明である。検出時は拳大の石が集まった状態で検出されたが、石を並べた形跡は認められなかった。溝の深さは0.1ｍ前後と浅く、石は途中で途切れたり、溝外にはみ出したところもみられるが、逆Ｌ字形の内側ではほぼ直線的である。遺



第56図　井戸ＳＥ47909実測図（1／50）



第57図　井戸ＳＥ47914実測図(1／50)

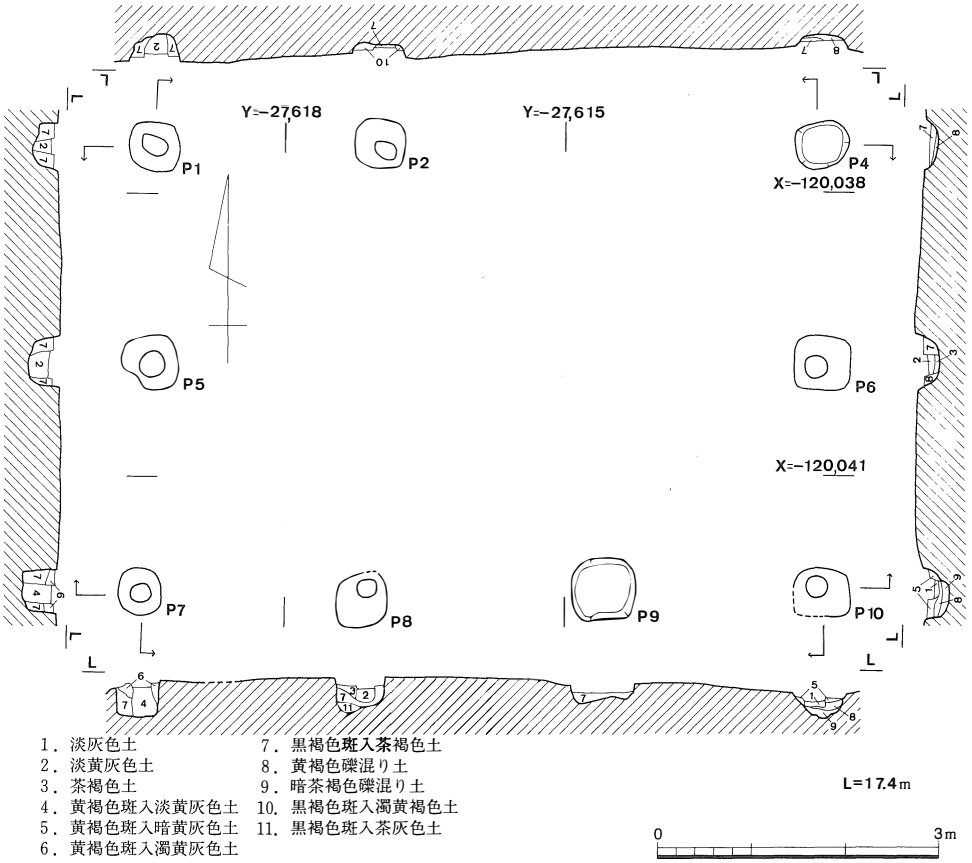
物は石に混じって土師器、陶磁器、砥石が少量出土した程度である。中世後期。

井戸ＳＥ47903（第55図）　直径約1.1ｍ、深さ2.2ｍの素掘り井戸。遺物は土師器、陶磁器の小片が出土した。中世後期。

土坑ＳＫ47919　平成４年度の調査では溝ＳＤ41316としたものである。今回の調査により溝ではなく不定形な浅い土坑と判明した。投棄された石のほかに土器、陶磁器が出土した。中世後期。

土坑ＳＫ47907・08　両者とも長辺3.8ｍ、短辺2.5ｍ前後で、溝ＳＤ47011とつながっている。ＳＫ47907は深さ0.15ｍと浅い。ＳＫ47908は深さ約0.1ｍの浅い平坦面と、底に石が集まった深さ0.8ｍの掘形からなる。水は溜まっておらず、底から根石相当の石と少量の土器、陶磁器が出土した。中世後期。

井戸ＳＥ47909（第56図、図版19-２・３）　長辺3.1ｍ、短辺2.6ｍのいびつな円形の素掘り井戸。深さ1.9ｍ。検出時の大きさに比べて井戸底は小さく、壁面もかなり凹凸がみられる。底



第58図　掘立柱建物ＳＢ47921実測図（1／80）

付近に遺物が多く、土器や陶磁器のほかに木製品が出土した。中世前期。

土坑ＳＫ47915・20　両者とも長辺約0.9m、短辺約0.6mの長方形。深さはＳＫ20が0.1m余り、ＳＫ15は0.2mである。遺物は土師器の小片が出土した。中世前期。

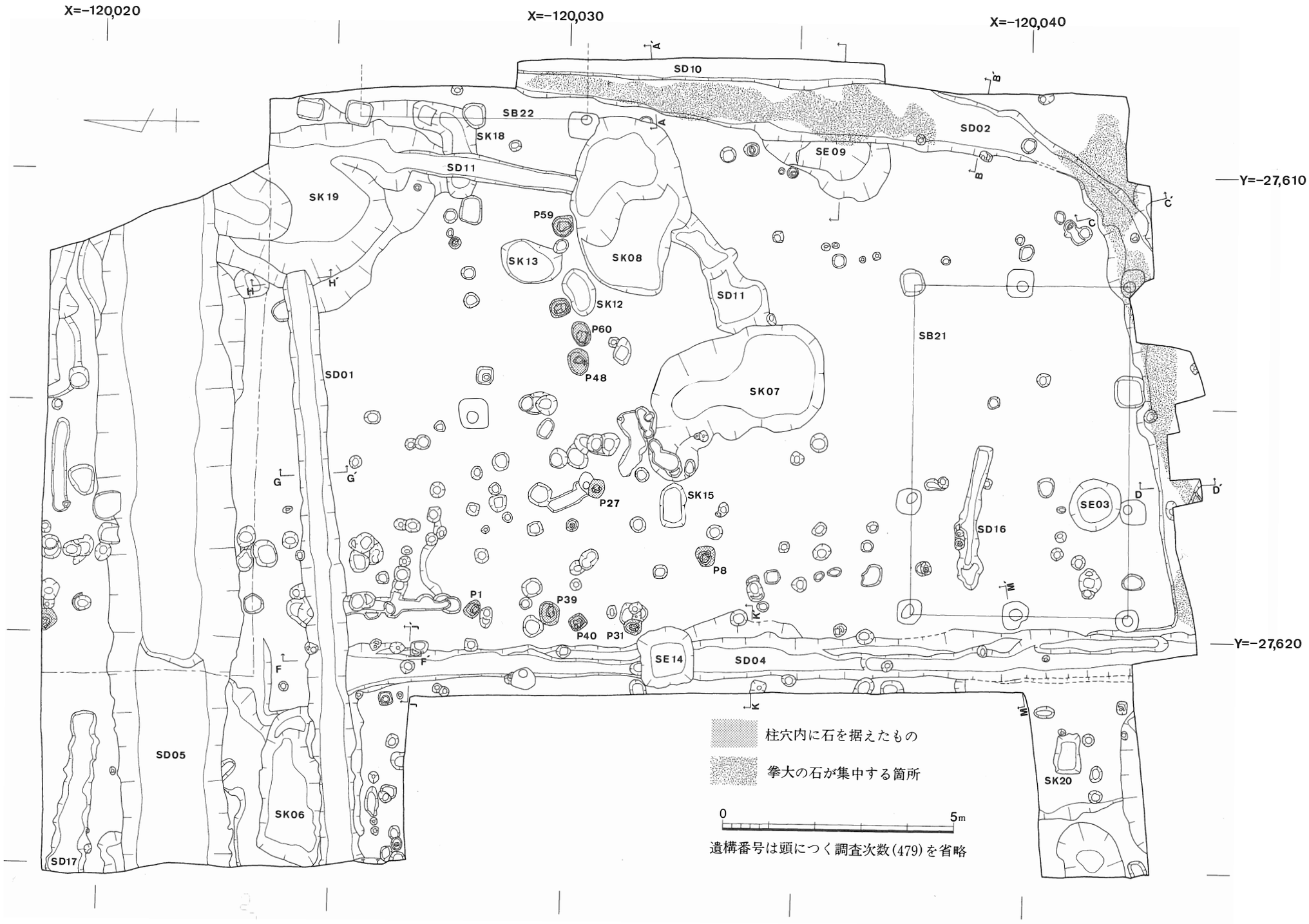
（3）長岡京期の遺構

掘立柱建物ＳＢ47921（第58図、図版19-4）　2間×3間の東西棟。北側柱列のＰ2とＰ4の間については確認できなかった。柱間寸法は梁行、桁行とも2.4mである。

掘立柱建物ＳＢ47922　南北2間分を確認した。柱間寸法は2.4mである。

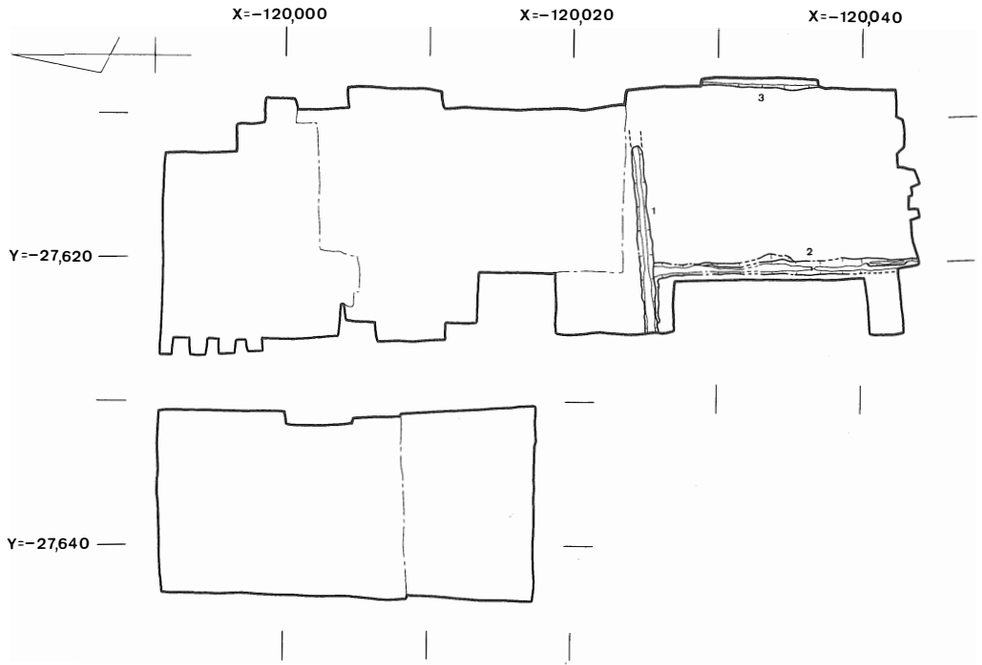
井戸ＳＥ47914（第57図）　一辺1.0～1.2mの方形掘形。深さ1.7m。井戸枠などの資材は残っていない。遺物は底から曲物の一部が出土したほかは、井戸中程から平・丸瓦と土器が出土した。土器片より瓦の方が多い。

溝ＳＤ47917　長さ3.5m分を検出した。幅0.5～0.8m。



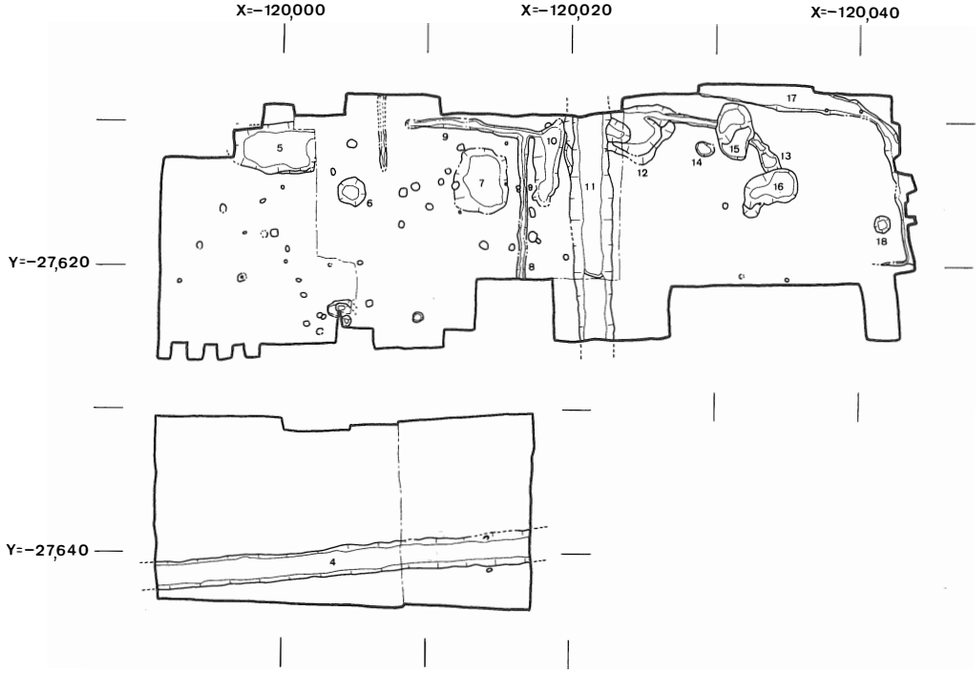
第59図　検出遺構図（1／100）

第60図　全調査地の検出遺構図（1／200）

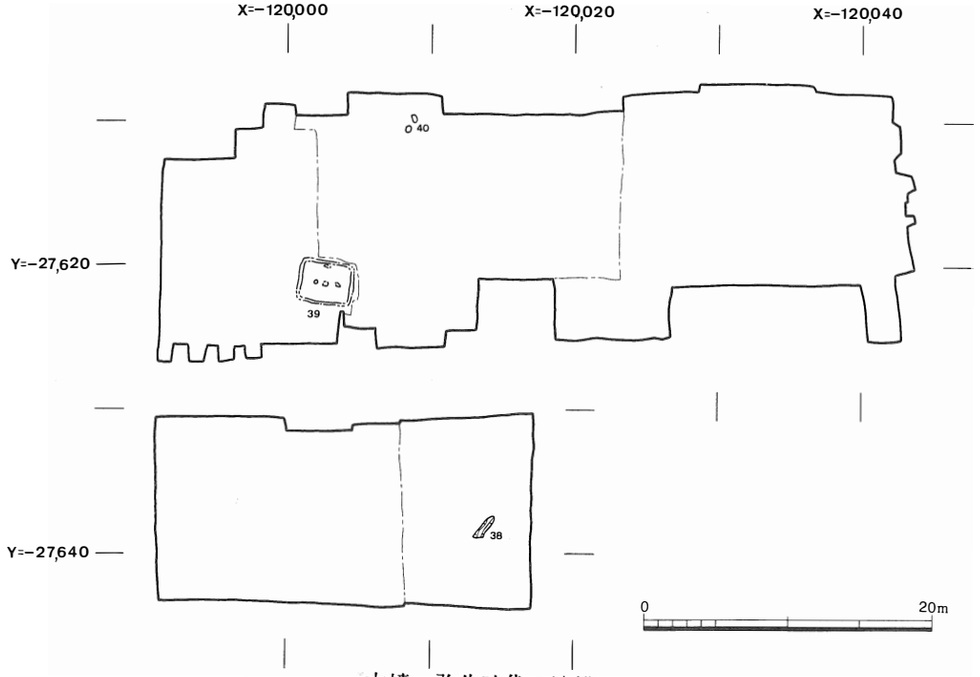


近世の遺構

中世前期の遺構



中世後期の遺構



古墳・弥生時代の遺構

第61図　時代別の遺構変遷図（1／500、番号は付表４に対応）

付表４　主な検出遺構一覧（番号は第61図と対応する）

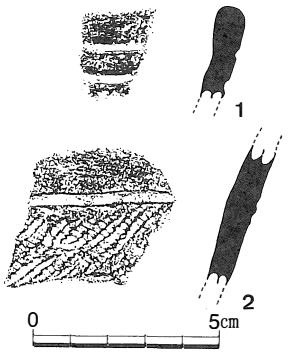
番号	遺構	次数	遺構番号	規模	遺構の特徴	報告書	挿図 図版
1	溝	R479	ＳＤ01	幅0.6～１ｍ、深さ0.2～0.4ｍ	東西溝	本　書	
2	〃	〃	ＳＤ04	幅0.6～0.9ｍ、深さ0.2～0.3ｍ	南北溝	〃	
3	〃	〃	ＳＤ10	深さ0.2ｍ	南北溝	〃	
4	〃	R385	ＳＤ01	幅２ｍ、深さ0.4～0.6ｍ	南北溝	『長岡京市報告書』第29冊1992 『長岡京市報告書』第32冊1994	第27図 第20図
5	礫敷遺構	R364	ＳＸ01	3.3ｍ×5.5ｍの方形、深さ0.25ｍ	拳大～人頭大の石が集中する	『長岡京市報告書』第27冊1991	第33図 図版25
6	井戸	R413	ＳＥ01	直径1.9ｍ、深さ2.2ｍ	円形素掘り 底から石仏が出土する	『長岡京市報告書』第31冊1993 本　書	第22・23図 第83図
7	土坑	〃	ＳＫ03	長さ4.5ｍ、幅4.0ｍ、深さ0.2ｍ	浅いすり鉢状を呈する	『長岡京市報告書』第31冊1993	
8	溝	〃	ＳＤ07 A	幅0.5～0.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍ	東西溝	〃	
9	〃	〃	ＳＤ07 B	〃　　〃	南北溝	〃	
10	土坑	〃	ＳＫ04	長さ６ｍ以上、幅２ｍ、深さ0.2ｍ	拳大以下の石が集中する	〃	第25図
11	堀	〃	ＳＤ05	幅３ｍ、深さ１ｍ	空堀。西から東に下がる	〃	第20・21図 図版11(2)
12	土坑	R479	ＳＫ19	４ｍ×５ｍのいびつな方形、深さ0.4ｍ	R413のＳＤ16と同一遺構 すり鉢状を呈する	本　書	
13	溝	〃	ＳＤ11	幅0.4～1.2ｍ、深さ0.2ｍ	土坑の間を結ぶ溝	〃	
14	土坑	〃	ＳＫ13	１ｍ×1.3ｍの長円形、深さ0.2ｍ		〃	
15	〃	〃	ＳＫ08	長さ3.8ｍ、幅2.5ｍ、深さ0.1～0.8ｍ	２段に落込む 底に石が集中する	〃	図版18(1)
16	〃	〃	ＳＫ07	長さ3.6ｍ、幅2.2ｍ、深さ0.15ｍ	すり鉢状を呈する	〃	
17	溝	〃	ＳＤ02	幅0.5～1.5ｍ、深さ0.1ｍ	拳大の石が集中する	〃	第54図 図版18(1)
18	井戸	〃	ＳＥ03	直径1.1ｍ、深さ2.2ｍ	円形素掘り	〃	第55図
19	〃	R364	ＳＥ03	直径1.2ｍ、深さ1.9ｍ	〃	『長岡京市報告書』第27冊1991	第34図 図版25(2)
20	〃	R413	ＳＥ02	1.6ｍ×1.4ｍの長円形、深さ2.9ｍ	〃	『長岡京市報告書』第31冊1993	
21	溝	〃	ＳＤ13	幅0.4ｍ、深さ0.1ｍ	東西溝	〃	
22	土坑	〃	ＳＫ06	2.5～3.5ｍ×５ｍのいびつな方形、深さ0.2ｍ		〃	図版12(1)
23	〃	〃	ＳＫ12	長さ3.2ｍ、幅1.4ｍ、深さ0.1ｍ	スサ入り粘土塊と焼土が出土	〃	第24図 図版12(1)
24	櫓状建物	〃	ＳＢ17	柱穴４か所直径0.7～1.0ｍ、深さ0.5ｍ～0.7ｍ	１間×１間の掘立柱建物 他の柱穴と比べて掘形が大きく深い	〃	第26図 図版12(1)(2)
25	溝	〃	ＳＤ11	幅0.4ｍ、深さ0.1ｍ	東西溝	〃	
26	土坑	R479	ＳＫ18	長さ２ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍ	Ｌ字形に屈曲する土坑、別個の土坑か	本　書	
27	井戸	〃	ＳＥ09	3.1ｍ×2.6ｍ、深さ1.9ｍ	いびつな円形、素掘り 曲物出土	〃	第56図 図版19(2)(3)
28	土坑	〃	ＳＫ12	長さ１ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.1ｍ	いびつな長方形、土壙墓か	〃	
29	〃	〃	ＳＫ15	長さ0.9ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.2ｍ	長方形、土壙墓か	〃	
30	〃	〃	ＳＫ20	長さ0.9ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍ	〃	〃	
31	溝	R385	ＳＤ03	幅0.6～1.3ｍ、深さ0.3ｍ	拳大～人頭大の石が集中する 遺物が最も多く出土した遺構	『長岡京市報告書』第29冊1992 『長岡京市報告書』第32冊1994	第28図 図版18(1)
32	〃	〃	ＳＤ04	幅0.5～0.6ｍ、深さ0.2ｍ前後	本表の31番の溝に切られる、真南北方向の溝	〃	
33	土坑	〃	ＳＫ09	長さ２ｍ以上、幅１ｍ前後、深さ0.3ｍ	不整な長方形を呈する	『長岡京市報告書』第29冊1992	
34	〃	〃	ＳＫ15	長さ１ｍ以上、幅１ｍ、深さ0.2ｍ	長方形掘形か	〃	
35	〃	〃	ＳＫ16	４ｍ×２ｍ以上の長方形、深さ0.3ｍ	拳大の石が集中する	『長岡京市報告書』第29冊1992 『長岡京市報告書』第32冊1994	第23図
36	〃	R448	ＳＫ10	長さ４ｍ、幅1.5ｍ以上、深さ0.1ｍ		『長岡京市報告書』第32冊1994	
37	埋納ピット	R364	Ｐ181	直径0.4ｍ、深さ0.45ｍ	円形、土師器皿12枚と瓦器椀１枚が出土した	『長岡京市報告書』第27冊1991	第35図 図版25(3)
38	溝	R448	ＳＤ11	幅0.4ｍ、深さ0.2ｍ		『長岡京市報告書』第32冊1994	
39	竪穴住居	R364	ＳＨ10	3.8ｍ×2.9ｍの隅円長方形	主柱穴２基、中央ピット１基、壁溝と土坑１基からなる	『長岡京市報告書』第27冊1991	第40図 図版27
40	ピット	R413	Ｐ99 Ｐ103	直径0.5～0.6ｍ、深さ0.4ｍ 直径0.5ｍ、深さ0.3ｍ	本表の９番に切られる、元は長円形の土坑か	『長岡京市報告書』第31冊1993	
41	埋納土坑	R385	ＳＸ07	直径0.5ｍ、深さ0.25ｍ	瓦器椀12枚、土師器小皿48枚、大皿42枚以上、土師器椀２枚が出土	『長岡京市報告書』第29冊1992	第29図 巻頭図版１

4　出　土　遺　物

各調査地から出土した遺物量は収納コンテナ（長さ54cm・幅34cm・深さ15cm）に換算すると、およそ右京第364次調査が８箱、第385次調査が11箱、第413次調査が11箱、第448次調査が４箱、第479次調査が８箱であり、合計42箱となる。その大半は中世の遺物で占められている。出土遺物については、主に未報告遺物と調査年度にその一部が報告された右京第385次調査の土坑ＳＫ38507を中心に報告する。なお、遺物は遺構ごとにまた時期別にまとめており、個々の寸法や出土遺構等のデータについては遺物一覧表（付表８）を参照されたい。

（１）縄文・弥生時代の遺物

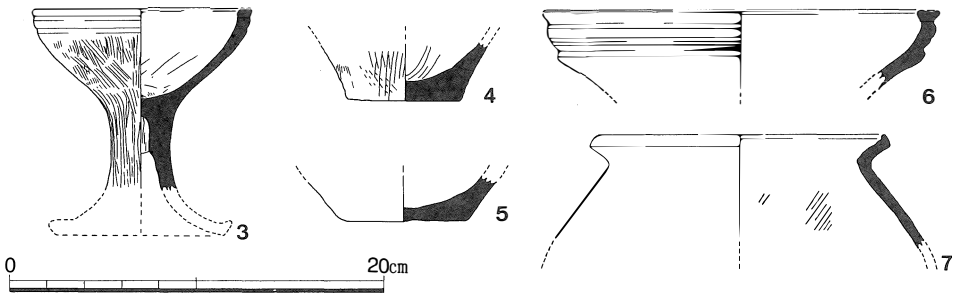
縄文時代の遺物はごく少量である。いずれも二次堆積層から出土しており、遺構については明らかでない。弥生時代の遺物は各調査地からそれぞれ数十片程度出土するほか、以前は周辺で石器が表面採集されたようである。



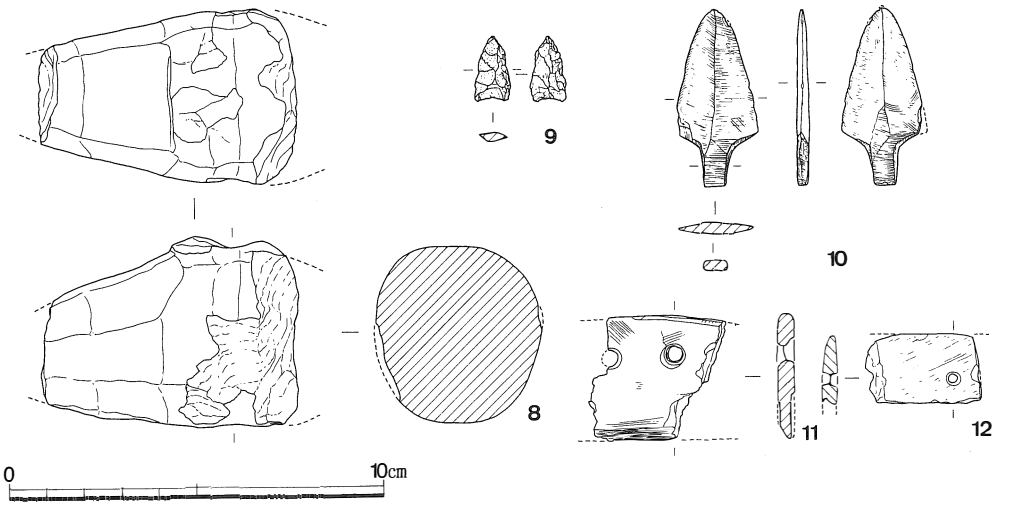
第62図　縄文土器実測図（1／2）

縄文土器（第62図・図版20-１）　１・２は後期前半の磨消縄文である。内外面とも余り磨滅していない。当地の北150ｍの右京第410次調査[5]では流路堆積層から中期と後・晩期の土器が出土しており、犬川流域の沖積低地には広く散布する状況が明らかとなってきた。

弥生土器（第63図、図版20-２・３）　高杯（３）、甕底部（４・５）、壺か器台の口縁部（６）、甕（７）のほか、高杯脚部（290）、壺口縁部（291・292）、甕口縁部（293・294）がある。３は口縁部外面に２条の凹線文が巡る。脚から杯部外面はハケメ調整。４は外面ハケメ調整。５は摩滅しており調整不明。６は口縁部外面に角度のある凹線文２条と、その間に浅い凹線文が１条巡る。７と293は「く」の字状に屈曲する短い口縁部をもつ。端部はつまみ上げる。290はヘラ描沈線文を施す。内面下方は横方向にヘラ削りする。291は口縁部端面に３条の凹線文と６条１組の縦線文を施す。口縁部内面には刺突文を巡らせる。292は短く外反する口縁部に端面をつくり出している。端面は横ナデのみで飾らない。体部外面はハ



第63図　弥生土器実測図（1／4）



第64図　石器実測図（1／2）

ケメ調整。294は頸部に３条のヘラ描沈線文と口縁端部に刻目を施す。外面には煤が付着する。これらの土器はその特徴から294が前期、290が中期前半、その他は中期後半に位置付けられる。特に前期の遺物は本遺跡では北西約300ｍの右京第38次調査地の甕棺墓が知られるだけであり、294の出土は付近に遺構が存在することを予測させる。

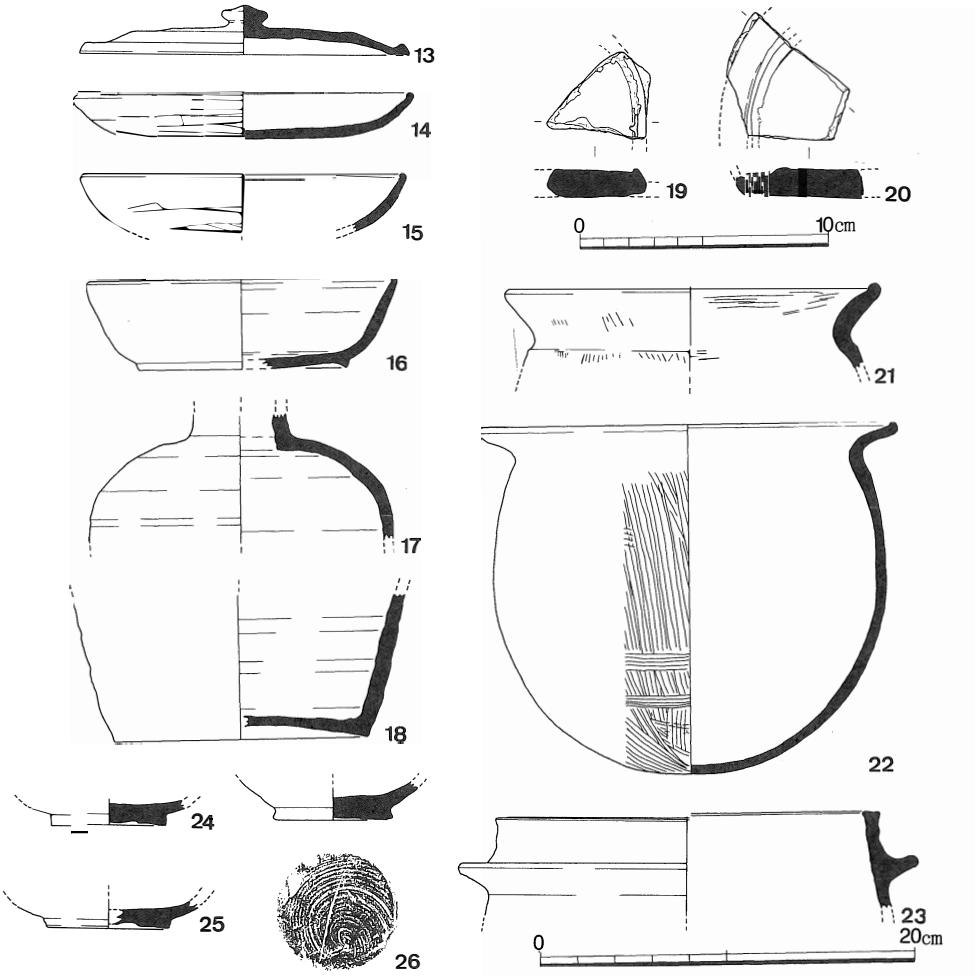
石器（第64図、図版20-４）　縄文時代の独鈷石[6]（８）、打製石鏃（９）と、弥生時代の磨製石鏃（10）、石庖丁の小片（11･12）がある。８の石材は砂岩。真ん中付近で割れており、先端部分を欠く。近畿地方では類例の少ない遺物である。後期の土器に伴う可能性が考えられる。９は凹基式。サヌカイト製。10は凸基有茎式。粘板岩製。11は刃部直線式。12は刃部に直交する研磨痕がみられる。いずれも粘板岩製。

（２）長岡京期・平安時代の遺物

少量小片のため図示できるものは限られており、西一坊々間小路西側溝ＳＤ38502とその残欠の土坑ＳＫ38506、町内溝ＳＤ47917、井戸ＳＥ47914の遺物と、中世遺構に混入したものを取り上げる（第65図・図版21・22）。なお、土坑ＳＫ38518の遺物については実測図がすでに報告されていることから写真のみを掲載した。大半は長岡京期の遺物であるが、24～26は９世紀後半に比定される。23についてはまだ資料が少ないことから明らかでない。

土師器（第65図、図版21）　皿Ａ（14）、杯Ａ（15）、杯Ｂ（16）、甕（21･22）がある。14･15は口縁部外面と内面をナデ調整。底部はヘラケズリ。口縁端部は14が内側に肥厚させ、15が小さくつまみ上げている。14は胎土に微砂粒を多く含む。16は底部に断面三角形の高台がつく。口縁部外面はヘラミガキを施しており、端部は小さくつまみあげる。21・22は「く」の字に外反する口縁部がつく。端部は内側に丸く肥厚する。この他にも土師器の高杯脚部、杯Ｂ蓋、盤Ｂなどが出土している。

須恵器（第65図、図版21）　杯Ｂ蓋（13）、壺（17･18）、陶硯（19･20）、羽釜（23）、椀（24･26）がある。13は天井部に宝珠形のつまみがつく。17は丸みのある肩部に二段構成の口頸部がつく。肩部には濃緑色の自然釉が付着する。色調は灰白色。18は底部が上げ底状になっており、底部外面は丁寧にナデ調整する。19は花弁を模した形象硯の陸部小片。20も形象硯の小片である。いずれも胎土は精良で色調は灰白色を呈する。外面には濃緑色の自然釉が付着する。これらは尾張猿投窯の製品である。当地の南東約270ｍの右京第297次調査地では脚部を残す八花硯が出土している。濃緑色の自然釉が付着するものには、肩部と体部の境に耳がつく壺（300）と、壺Ａ蓋（299）があり、硯では他に円面硯の透かし部分が出土している。23は鍔をはりつけた羽釜。焼きは硬質で暗灰色を呈する。煤の付着はみられない。右京第479次調査のピット58から同形態の羽釜が出土している。硬質で灰白色を呈する。24は高台を削り出しており中心部は



14～16、21・22 土師器　13、17～20、23・24・26 須恵器　25 緑釉陶器

第65図　長岡京期・平安時代の出土遺物実測図（13～18・21～26-1／4、19・20-1／2）

わずかにくぼむいわゆる蛇ノ目高台。内面に重ね焼きの痕跡が残るほかは、丁寧にヘラミガキ調整している。硬質。26は底部外面に糸きり痕と焼成前のヘラ記号がみられる。内面は24と同じく重ね焼きの跡が残る。

緑釉陶器（第65図、図版21）　椀底部（25）と口縁部小片（307）がある。25はいわゆる蛇ノ目高台であり、底部外面から内面に淡緑色の釉を施す。硬質。307の口縁部小片は釉が斑状に変化している。硬質。

灰釉陶器（図版21）　端反りの口縁部小片（306）がある。

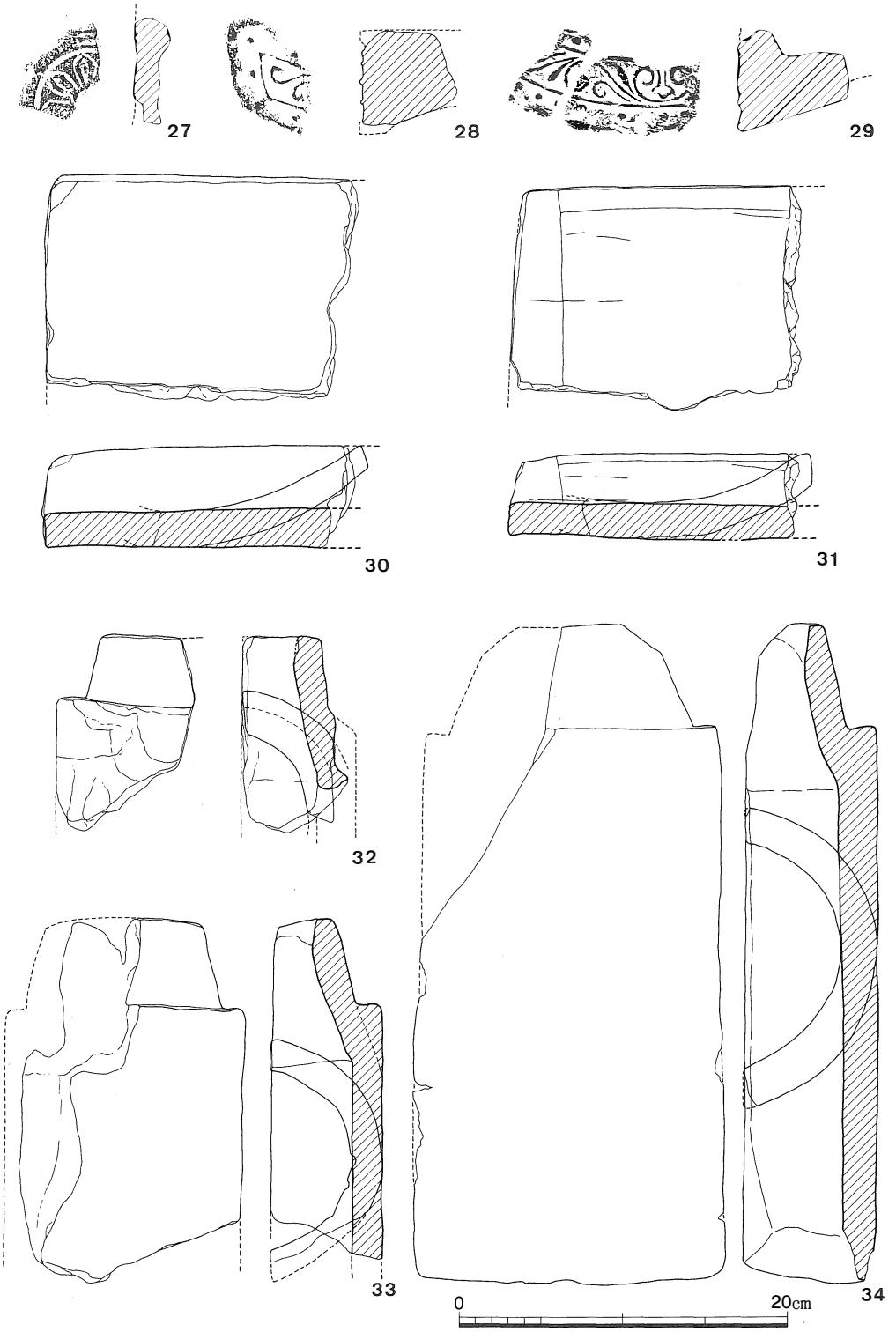
瓦（第66・67図、図版22）　当地区から出土した瓦は近世以降の瓦を除き、大半が奈良～平安時代のものである。これらの瓦は長岡京期の井戸ＳＥ47914からまとまって出土した(29～35)ほか、一部に井戸ＳＥ41301・02など中世の遺構からも出土している（27・28)。なお、当地区の東隣で駐車場建設工事に伴って実施された第93300次立会調査[8]において、長岡京期の井籠組井戸から平瓦の破片が数点出土しており、その中には「理」と印刻されたものもあった。

27は単弁蓮華文軒丸瓦。摩滅した瓦当面の一部が残る。中房面は欠損し、蓮子数は不明であるが、輪郭線がわずかに残る。蓮弁は８葉とみられ、線的に表現される短い単弁は弁端が尖り、互いに接しない。外区には内外縁を画する界線を有し、幅の狭い内縁に珠文を配する。残存する部分では珠文は蓮弁・間弁と対応して配される。外縁は欠損のため不明。精良な胎土には石英、長石、チャートの細粒を含む。焼成は軟質。色調は表面黄灰色、断面は暗灰色を呈する。型式は不明である。

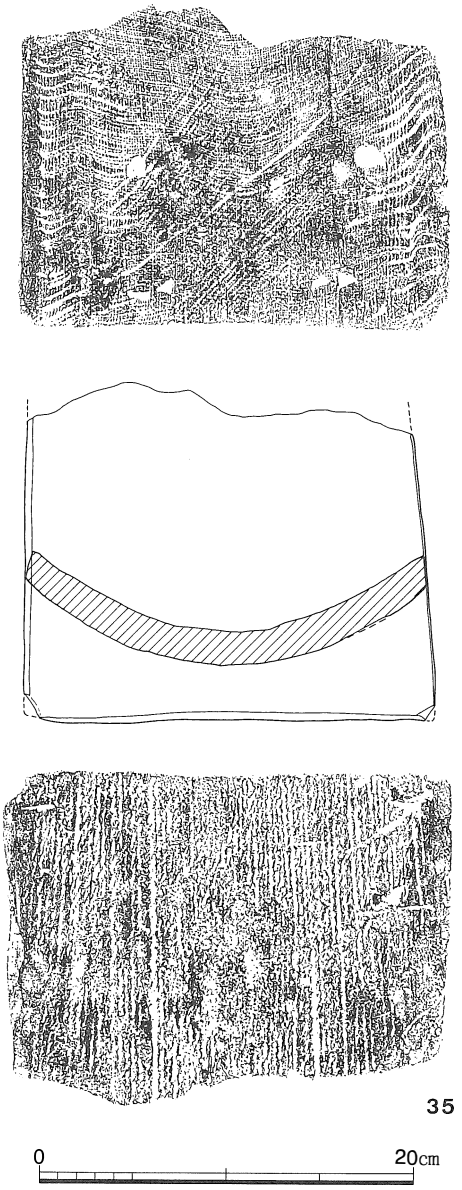
28は均整唐草文軒平瓦。長岡宮式7757Ａ型式で、端部片のため細分類し難い。この瓦は外縁の上端部が面をなしており、これまで出土した同型式のものと異なる。脇区中央の珠文の上には約１cmの范傷らしきものがある。平瓦部凹面には側面に沿って面取りがされている。曲線顎。胎土には0.1cm以下の砂粒を含む。焼成は軟質で、色調は表面黒灰色、断面は灰白色を呈する。

29は均整唐草文軒平瓦。平城宮式6664Ｈ型式である。唐草文の主葉は大きな弧を描き先端を巻き込む。段顎。良質な胎土には赤色粒と0.2cm以下の砂粒を含む。焼成は軟質で、色調は表面暗灰色、断面は淡灰褐色を呈する。同型式の瓦は長岡宮跡の第89次[9]・100次[10]・128次[11]調査などで出土している。

30・31・35はいずれも一枚作りの平瓦である。30は狭端面側の破片。凹面に７本／cmの布目痕を残し、調整を加えない。凸面には縄叩き目を施し、成形時に使用した離れ砂が付着する。側面にはヘラケズリを施す。厚さ2.2cm。緻密な胎土には黒色粒子をわずかに含む。焼成は軟質で、表面は黒灰色、断面は灰白色を呈する。31は狭端面側の破片。凹面に布目痕を残し、周縁には端面側が幅３cm、側面側が1.5cmのヘラケズリ後ナデを施す。凸面には縄叩き目を施し、成形時に使用した離れ砂が付着する。側面および端面にはヘラケズリ後ナデを施す。厚さ2.1cm。胎土には赤色粒と0.2cm以下の石英、チャート、長石を多く含む。焼成は軟質で、表面は淡黄茶



第66図　瓦実測図１（1／4）



第67図　瓦実測図２（1／4）

色を呈する。35は広端面側の破片。凹面に布目痕を残し、調整を加えない。布目は９本／cmであるが、両側面端には布の横糸が数条重なりあった痕跡が明瞭に残る。また、粘土板切断時の斜め方向の糸切り痕が残る。凸面には縄叩き目を施し、成形時に使用した離れ砂が付着する。側面および端面にはヘラケズリ後ナデを施す。厚さ２cm弱。胎土には0.3cm前後の石英、チャートなどの砂粒や黒色粒子を含む。焼成はやや硬質で、淡灰色を呈する。

32～34は丸瓦で、いずれも玉縁部を有するもので、すべて粘土板巻付け作りとみられる。32は凹面に布目痕を残し、凸面はナデを施し、成形時の痕跡を消す。玉縁部は筒部をしぼり込んで成形し、側縁は不明だが、端縁はヘラケズリをしない。凸面の玉縁との境にはわずかに段をもち、その上に粘土を貼りつけ段部を作る。玉縁の長さは４cm。胎土には赤色粒と石英、長石、チャートなどの細粒を多く含むが、中には0.3cm前後の砂粒もわずかにある。焼成は軟質で、断面・表面とも灰黄色を呈する。33は凹面に布目痕を残し、凸面にはナデを施し、成形時の痕跡を消す。玉縁部は筒部をしぼり込んで成形し、凸面の側縁と凹面の端縁を斜めにヘラケズリして調整する。凸面に粘土を貼りつけ段部を作る。玉縁の長さは５cm。緻密な胎土には赤色粒と0.05～0.5cmの石英、長石、チャートなどの細粒を含む。焼成は軟質で、表面黒灰色、断面は灰黄色を呈する。34はほぼ完形で、幅18.2cm、長さ39.8cm、厚さ2.1cmである。凹面に布目痕を残し、凸面はナデが完全ではなく、成形時の縄叩き目を一部に残す。筒部凹面は端縁をヘラケズリして調整する。玉縁部は筒部をしぼり込んで成形し、凸面の側縁と端縁、凹面の端縁を斜めにヘラケズリして調整する。凸面に粘土を貼りつけ段部を作る。玉縁は6.2cmと長い。緻密な胎土には赤色粒と石英、チャートなどの細粒を含むが、中には0.4cm前後の砂粒がわずかにある。焼成はやや軟質で、灰黄色を呈するが、表面の

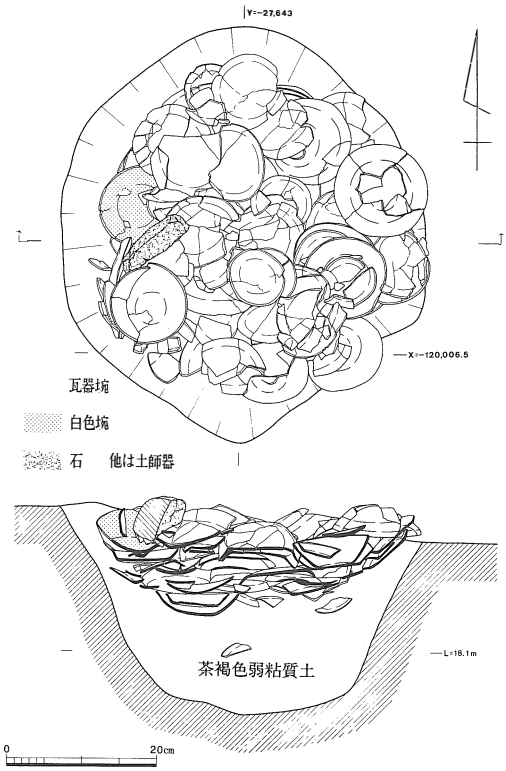
一部は黒灰色である。

このほか、図化できなかったが、井戸ＳＥ41301から均整唐草文軒平瓦の破片が出土している。右側の瓦当面が唐草２葉と上外区に珠文１つが残る。曲線顎。平瓦部凹面は布目痕を残す。凸面は縄叩き目を残し、瓦当接合部のみをナデる。緻密な胎土に赤色粒と0.3cm以下の石英、長石、チャートなどの砂粒を多く含むが、中には１cm前後の砂粒がある。焼成は軟質で、表面黒灰色、断面は灰色を呈する。型式は不明だが、唐草の先端の強い巻き込み具合や珠文の位置などから平城宮式6726Ｄに類似する。なお、平城宮式6726Ｄは長岡京跡左京第30次調査[(12)]で出土している。

（３）鎌倉・南北朝時代の遺物

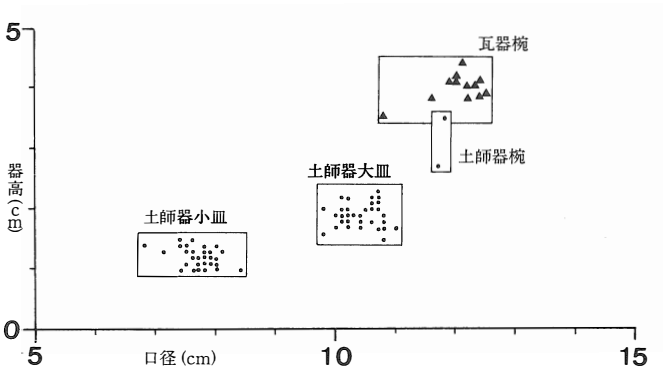
当地における一連の発掘調査では、本時期の遺物が最も多く出土しており中世開田遺跡の盛時を物語る資料として注目される。ここでは図示できた主な遺物を中心に報告する。この中で注目されるものには瓦器椀と土師器皿が隙間なく重なる状態で出土した土器埋納坑ＳＸ38507がある。既に検出状況をはじめ土器の一部は調査年度に報告されているが、ここでは再度報告書から簡単に遺構の状況を述べたのちに土器類について報告する。なお、今回の報告では遺構の性格をより明確に示す意味で遺構名を土器溜りから土器埋納坑とした。

土器埋納坑ＳＸ38507出土遺物（第69図、付表５・６、図版23～25）　土坑は「検出面で南北



第68図　土器埋納坑ＳＸ38507実測図（1／10）と検出状況（南から）

付表５　ＳＸ38507出土土器法量分布



付表６　ＳＸ38507出土土器の破片数量

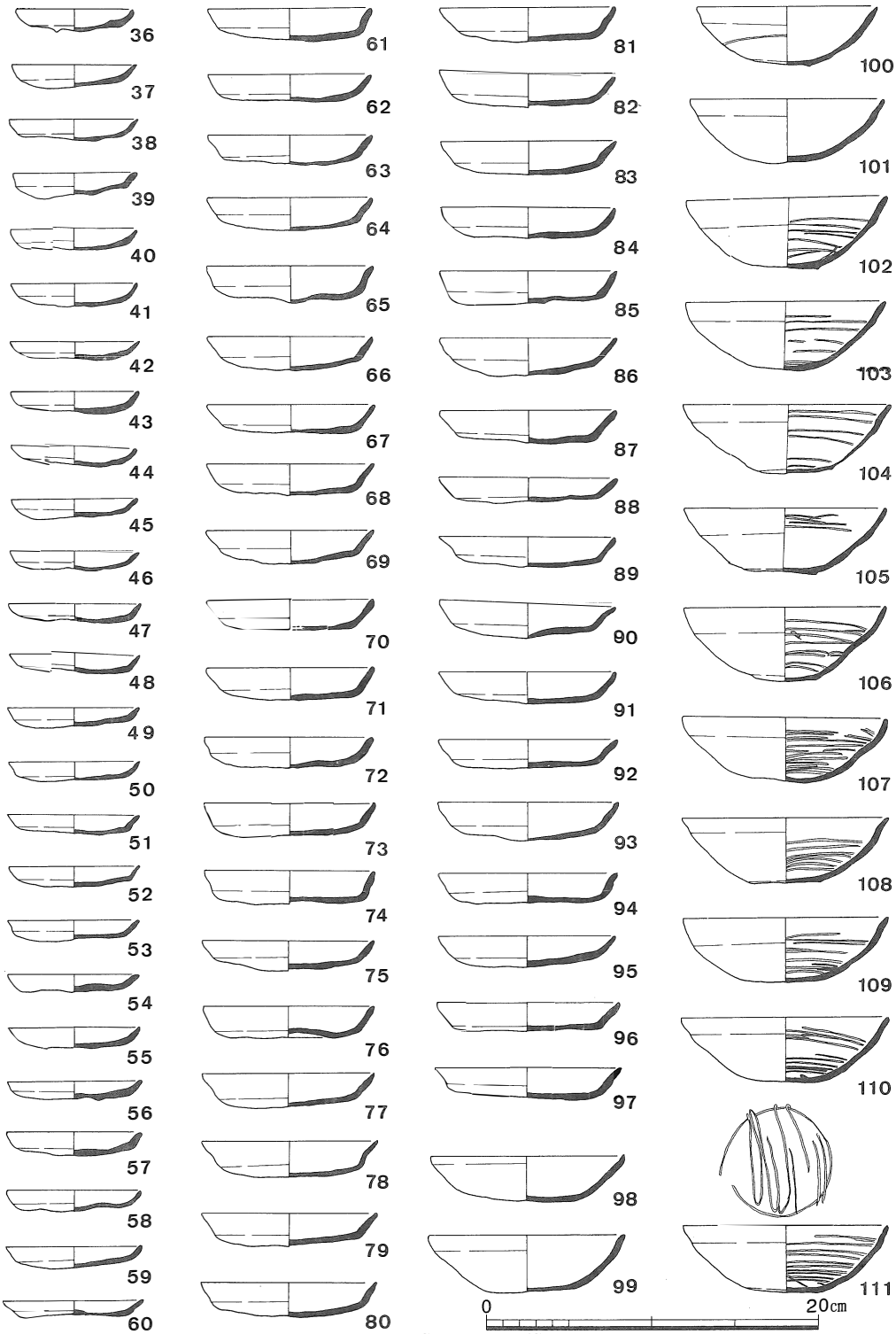
器　種	破片数	%	破片数	%
土師器小皿	380	24.4	1459	93.8
大皿	847	54.4		
椀	24	1.5		
不明	208	13.4		
瓦器　椀	97	6.2	97	6.2
合計	1556	99.9	1556	100.0

0.55ｍ、東西0.48ｍ、深さ0.25ｍの規模をもつ。埋土は淡茶褐色弱粘質土の単層であり、焼土、炭などの混入はなかった。土器は、土坑の上半に集中しており、一括廃棄されたものと考えられる。完形品が多いが接合できない破片も多く含んでいた。(中略)長さ10㎝程度の砂岩が出土したが、これは廃棄時の混入と考えられる。土器埋納坑ＳＸ38507は、土器廃棄用の土坑と考えられる」。出土状況については、調査年度の報告書から遺構図と写真を再度掲載した（第68図)。土器を埋納した事例には、本遺跡の右京第364次調査のＰ181のほかに、13世紀前半の右京第139次調査[13]土坑ＳＫ13914、16世紀前半の右京第330次調査[14]土器溜まりＳＸ33004などがある。

遺物は「口縁部が１／２以上残存するもので、瓦器椀12個体、土師器皿Ｉ（小皿）が48個体以上、皿II（大皿）が42個体以上、椀２個体を確認している」。各土器の法量分布と破片数については付表５・６のとおりである。

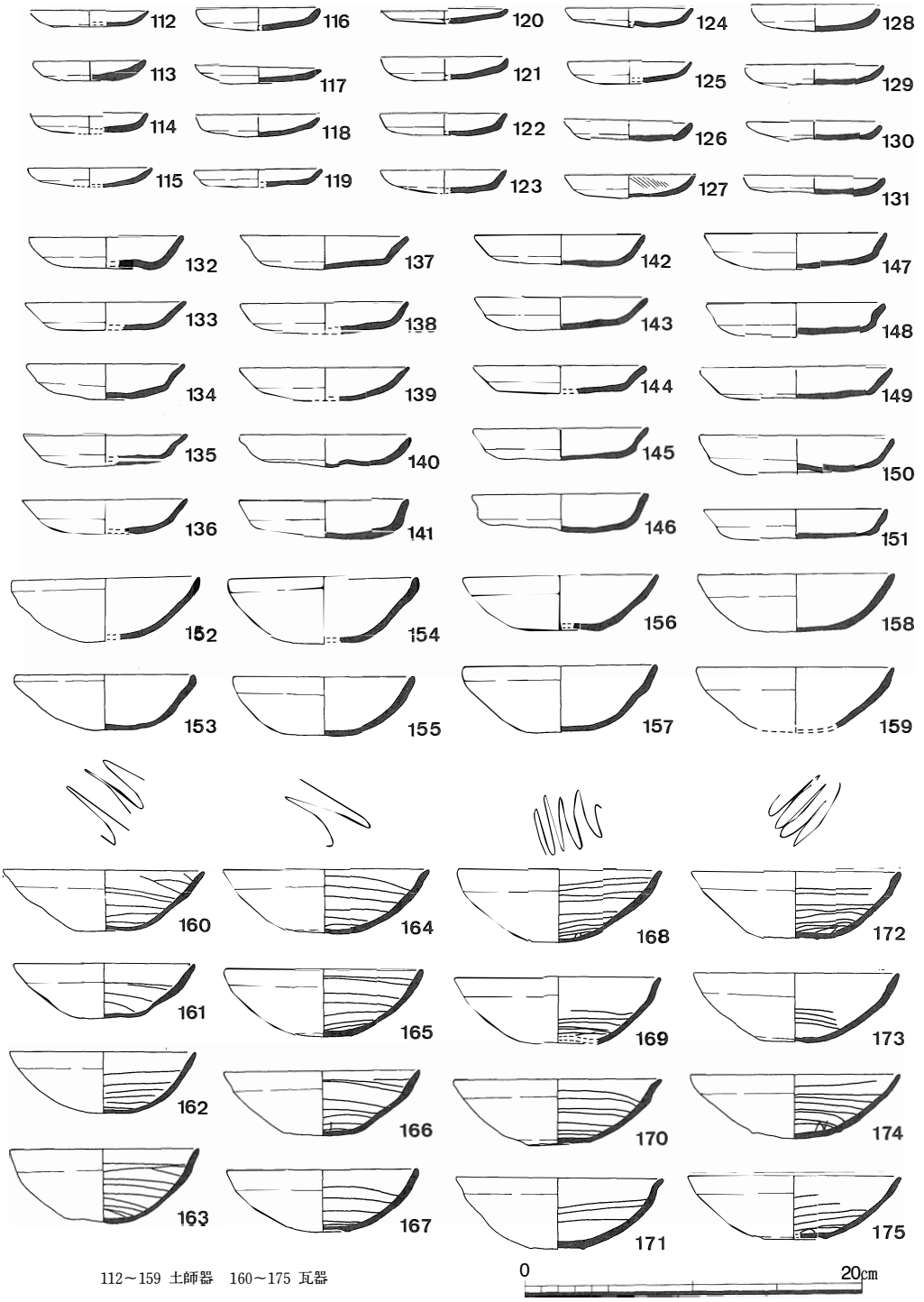
土師器では小皿（36～60）が口径6.8～8.4㎝の個体幅がある中で7.8㎝のものが最も多く、器高は1.0～1.5㎝の中で1.1㎝のものが最も多い。大皿（61～97）は、口径9.8～11.2㎝の個体幅がある中で10.1㎝が最も多く、次いで10.6～10.8㎝に集中する。器高は1.4～2.4㎝の中で1.9㎝が最も多い。大小とも平らな底部と外へひらく口縁部からなる。この中には、底部に太い筋と細い筋からなる縦縞状の圧痕がつくもの（45・52・57・58・63・65・67・88・90）や、成形時に別の粘土を継ぎ足したもの（36）がある。底部の圧痕は全体に及ぶものではなく、内面をはつるようにナデを加えたところに付いており、強いナデの場合には底部が突起したり、器壁が１㎜くらいの薄い小皿もある。縦縞状の圧痕は凸凹や太さの異なる複数の平行する筋からなっており、乾燥時の敷物が写ったものと考えられる。調整は、底部外面を指オサエ、口縁部外面と内面をナデ調整する。胎土は赤色斑粒を含む在地産で、色調は淡褐色系である。口縁部に油煙がつくものはみられない。

椀（98・99）は、口径11.4㎝と11.6㎝、器高2.9㎝と3.5㎝である。椀については本土坑のものは少ないが、他の遺構から一定量が出土している。小さい平らな底部と丸みのある体部をもち、口縁端部をわずかにつまみあげる。内面はナデ調整、外面は口縁部を横ナデするほかは指



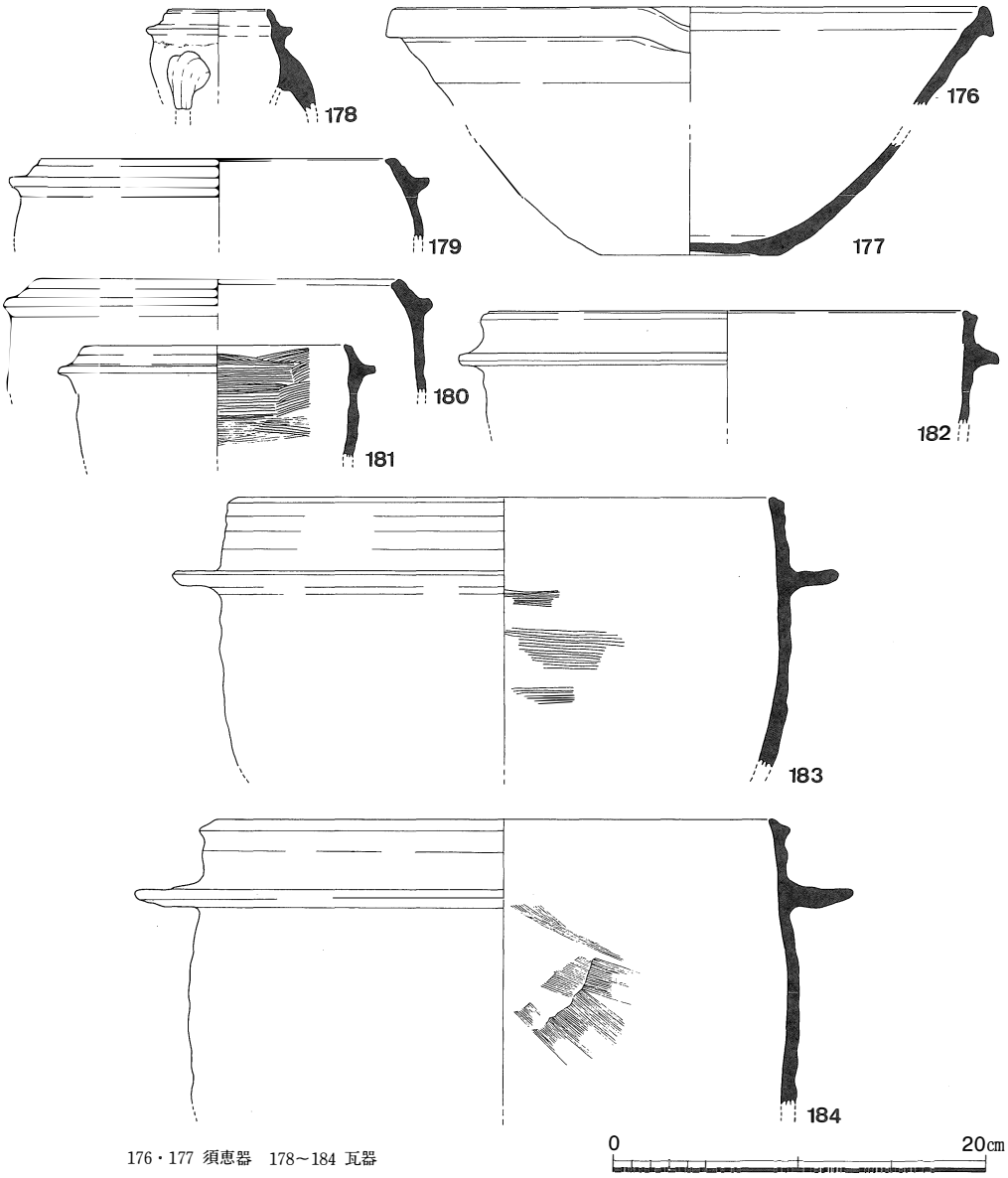
36～99 土師器　100～111 瓦器

第69図　土器埋納坑ＳＸ38507出土遺物実測図（1／4）



112～159 土師器　160～175 瓦器

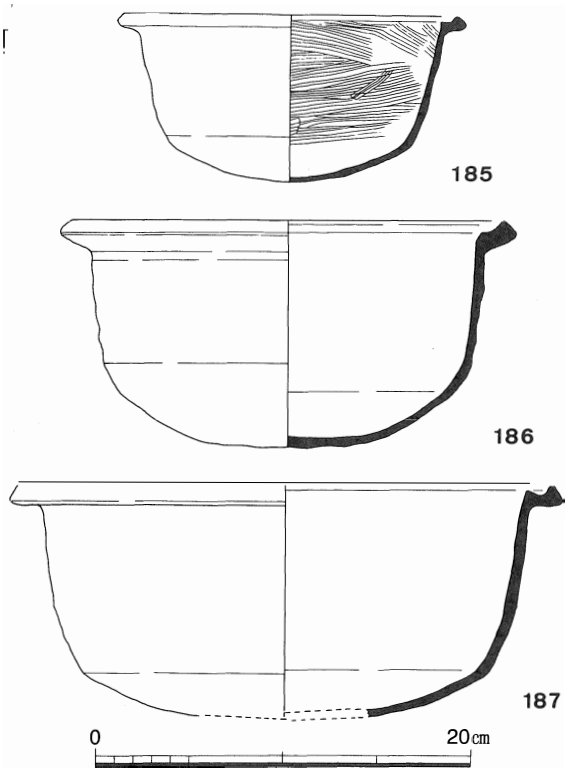
第70図　溝ＳＤ38503・44803出土遺物実測図１（1／4）



第71図　溝ＳＤ38503・44803出土遺物実測図２（1／4）

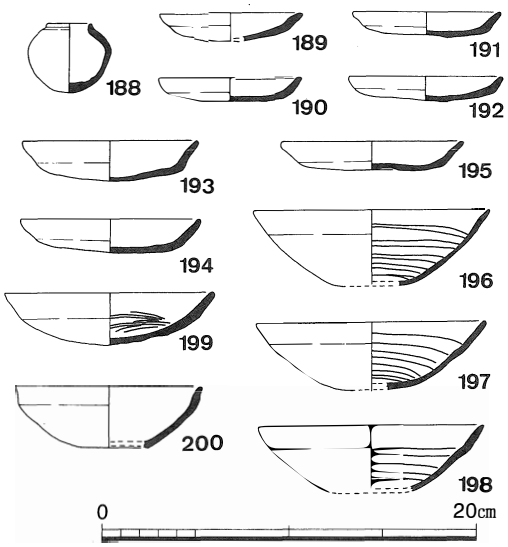
オサエする。このうち98は白色系の深椀タイプである。いわゆるヘソ皿は本土坑からは出土しておらず、全体でも両者の数は少ない。99を含めて他の遺構出土の土師器椀は皿の胎土と類似する。

瓦器椀[15]（100～111）は口径10.7cm、器高3.5cmの100と、口径11.6～12.5cm、器高2.0cmを中心とする101～111がある。小さい平らな底部と外上方へひらく体部からなり、口縁端部はわずかに外反する。全体に器壁は薄手である。高台の形状は一個体の中でも細部で異なっており、低



185～187　瓦器

第72図　溝ＳＤ38503・44803出土遺物実測図３（1／4）

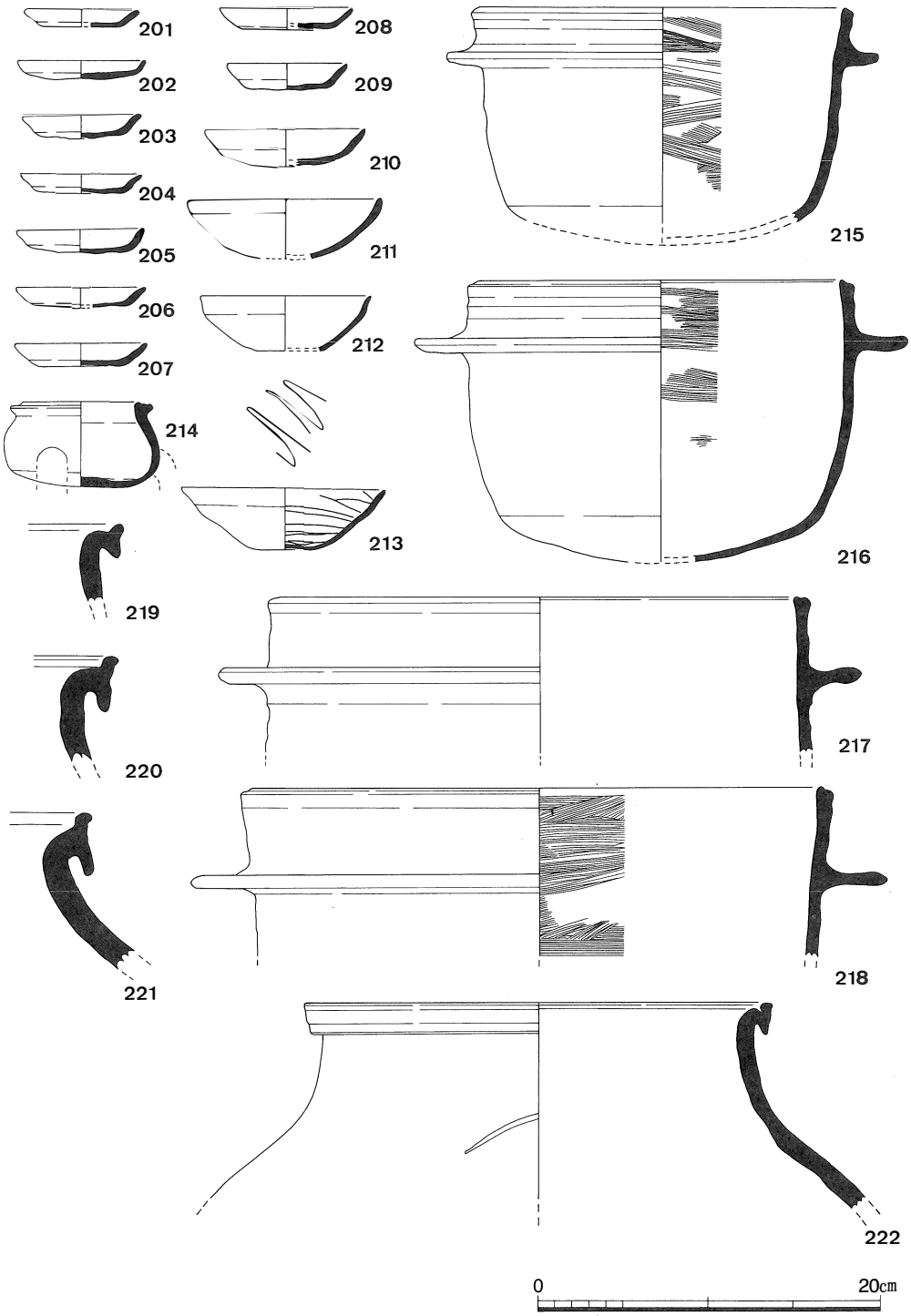


189～195 土師器　188・196～200 瓦器

第73図　井戸ＳＥ47909出土遺物実測図（1／4）

くて小さな断面三角形を呈する部分と粘土紐をこすりつけたものがあるほか、高台が剝がれたり高台が最初からないものも存在する。調整は体部外面を指オサエ、口縁部を横ナデするほか、内面には10本程度の粗いヘラミガキを施す。見込みには鋸歯状の暗文を施す。色調は黒色のもの以外に部分的に炭素が未吸着のものがある。

溝ＳＤ38503・44803出土遺物（第70～72図）　土師器皿（112～151）、椀（152～159）、須恵器鉢（176・177）、瓦器の椀（160～175）、羽釜（178～184）、鍋（185～187）がある。土師器皿と瓦器椀については基本的に土器埋納坑ＳＸ38507の土器類と形態、調整等が共通する。土師器には口縁部に油煙がつく皿（114・124）、底部に縦縞状の圧痕が付いた皿と椀（119・140・145・147・152・154・155）がある。底部の圧痕は皿・椀ともに類似するが、椀には内面をはつるようなナデはみられない。176・177は東播系の鉢。178は三足のついた小型羽釜。残存部に煤はつかない。羽釜には口縁部が内傾するもの（179・180）と、直立するもの（181・182）がある。口縁部直下には断面方形の鍔がつく。183・184は口縁部直下に水平方向へ張り出す鍔がつく大型品である。185～187は口縁部が断面三角形の受け口を呈する。羽釜と鍋は体部外面を指オサエ、内面はハケメ調整を施す。185はヘラ状の工具で外面調整する。



201～211 土師器　212～218 瓦器　219～222 常滑燃

第74図　中世前期の出土遺物実測図（201～221-1／4、222-1／6）

井戸ＳＥ47909出土遺物（第73図）　土師器皿（189～195）、瓦器の椀（196～200）、小型壺（188）がある。188は、球形の体部に短く直立する口縁部をもつ。口縁部は横ナデ、体部は内面ナデ調整、外面は指オサエを行う。内外面とも黒色を呈する。本遺跡では他に類例はない。土師器小皿は口径８㎝前後、器高1.5㎝未満。大皿は口径9.6㎝前後、器高2.0㎝未満である。この中には口縁部に油煙がつくもの（189・191）、底部に縦縞状の圧痕がつくもの（189・190）がある。197は、内外面とも炭素が未吸着で灰白色を呈する。198は外面に煤が付着する。瓦器椀には、196～198の他に法量が縮小した199と200がある。199は口径11.3㎝、器高2.8㎝。内面は粗雑な螺旋状暗文を施す。器壁はやや厚い。本遺跡では他に類例はみられない。200は口径10.0㎝、器高3.3㎝。内面は摩滅しており調整不明。低い小さな高台をつける。

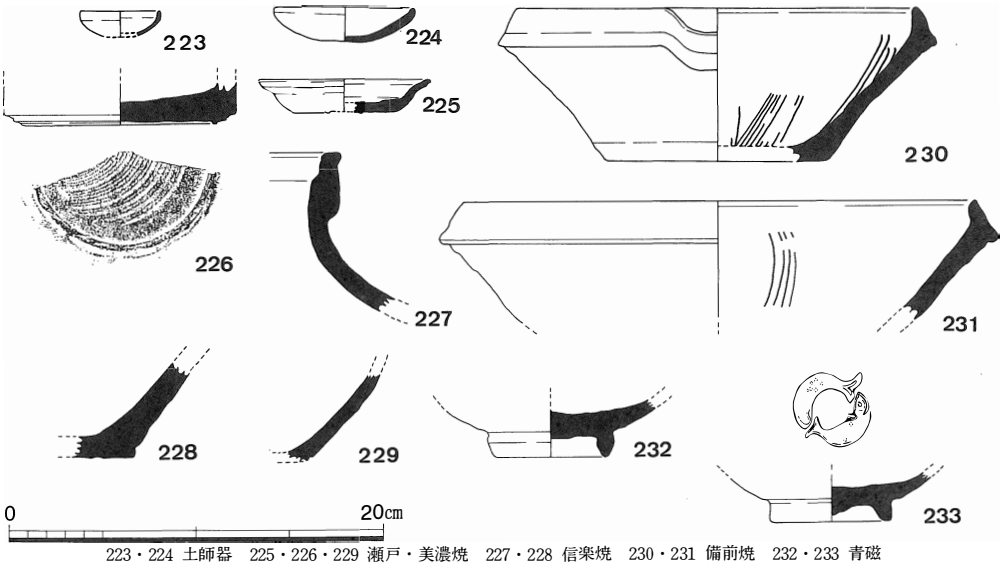
中世前期の出土遺物（第74図）　土師器皿（201～210）、椀（211）、瓦器の椀（212・213）、小型羽釜（214）、羽釜（215～218）、常滑焼甕（219～222）がある。土師器皿と瓦器椀は法量、形態・手法が埋納土坑ＳＸ38507等と共通する。203～209は大型の瓦器羽釜とともにピット108から出土した。皿は口径７㎝台、器高1.5㎝未満に集中する。羽釜は216がほぼ底部まで残る。218は体部下半が直線的に割れており、一部に丸くあけた痕跡が残る。転用した可能性が高い。常滑焼甕は外面に濃緑色の自然釉がかかるもの（219～221）と、茶褐色のもの（222）がある。口縁部の縁帯幅は２～3.5㎝である。222の胴部上半にはヘラ描きがみられる。胴部に押印する小片を１点確認した。

（４）　戦国時代の遺物

各遺構から出土した遺物は全体的に少なく、小片が多いことから図示できるものは限られている。

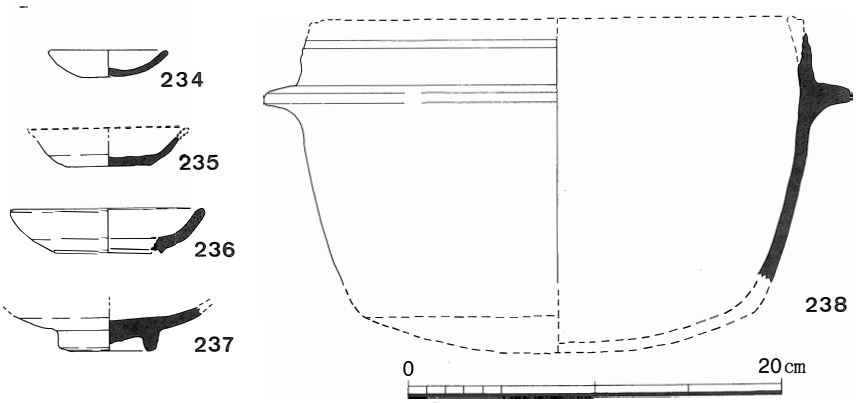
溝ＳＤ38501・44801出土遺物（第75図）　土師器小型鉢（223）、土師器皿（224）、瀬戸・美濃焼の[16]灰釉皿（225）、灰釉水差（226）、灰釉平碗（229）、信楽焼の壺（227）、擂鉢（228）、備前焼擂鉢（230・231）、青磁碗（232・233）がある。223は精良な胎土を用いている。全体に器壁が薄く約２㎜である。224は口縁部をつまみあげており、端部は断面三角形を呈する。225は底部糸切りの平底。内面と口縁部外面に施釉する。226は糸切りした底部の縁を削りだしている。筒状の体部外面には灰釉が流れて溜まる。229は底部外面を欠失する。227は口縁部の縁帯が頸部に接着しており、内面に段を有する。器表面には長石の吹き出しがみられる。230はすり目が８本。231はすり目が７本。231の外面には重ね焼きの痕跡が残る。232は高台内面が露胎する。233は内面見込みに双魚のスタンプを押す。全面に施釉しているが、高台内面と体部外面は部分的に釉切れする。

井戸ＳＥ41301出土遺物（第76図）　土師器皿（234）、瀬戸・美濃焼の灰釉皿（235・236）青磁碗（237）、瓦器羽釜（238）がある。234は長円形でゆがんでおり、底部をわずかに押し上げている。235は底部を糸切りする。内面と口縁部外面の一部を施釉する。236は小さな高台と内



223・224 土師器　225・226・229 瀬戸・美濃焼　227・228 信楽焼　230・231 備前焼　232・233 青磁

第75図　溝ＳＤ38501・44801出土遺物実測図（1／4）

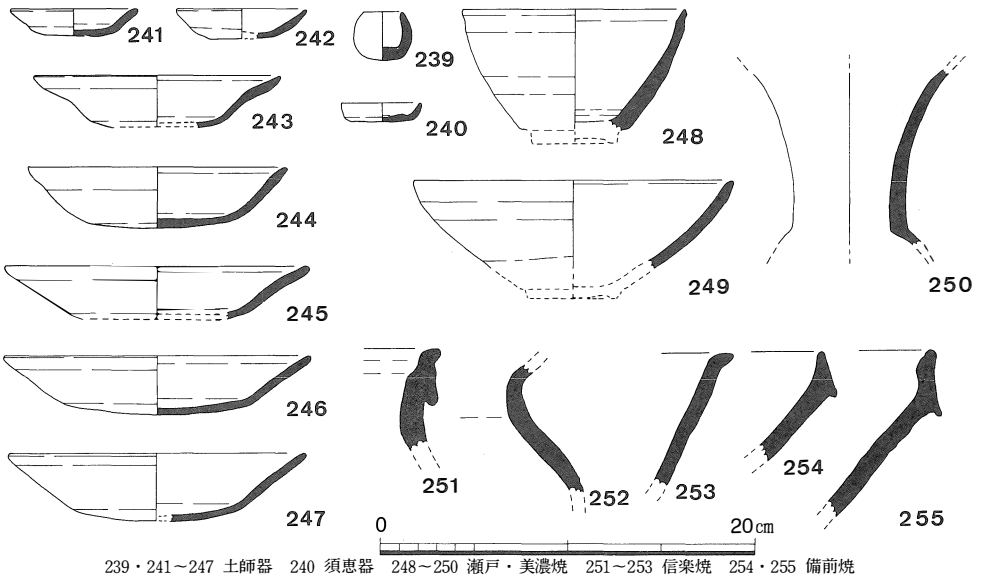


234 土師器　235・236 瀬戸・美濃焼　237 青磁　238 瓦器

第76図　井戸ＳＥ41301出土遺物実測図（1／4）

湾気味の口縁部をもつ丸皿である。全面に施釉する。237は内面見込みに花文のスタンプを押す。高台内面をのぞいて全体に施釉する。238は体部外面から鍔にかけて煤が多く付着する。口縁部には沈線が１本めぐる。

中世後期の出土遺物（第77図）　土師器小型壺（239）、須恵器小皿（240）、土師器皿（241～247）、瀬戸・美濃焼の天目茶碗（248）、灰釉平碗（249）、灰釉花瓶（250）、信楽焼の壺（251・252）、擂鉢（253）、備前焼擂鉢（254・255）がある。239はいわゆる紅壺である。手づくね成形。内容物については明らかでない。240はロクロ成形。底部をヘラ切りする。色調は内外面と



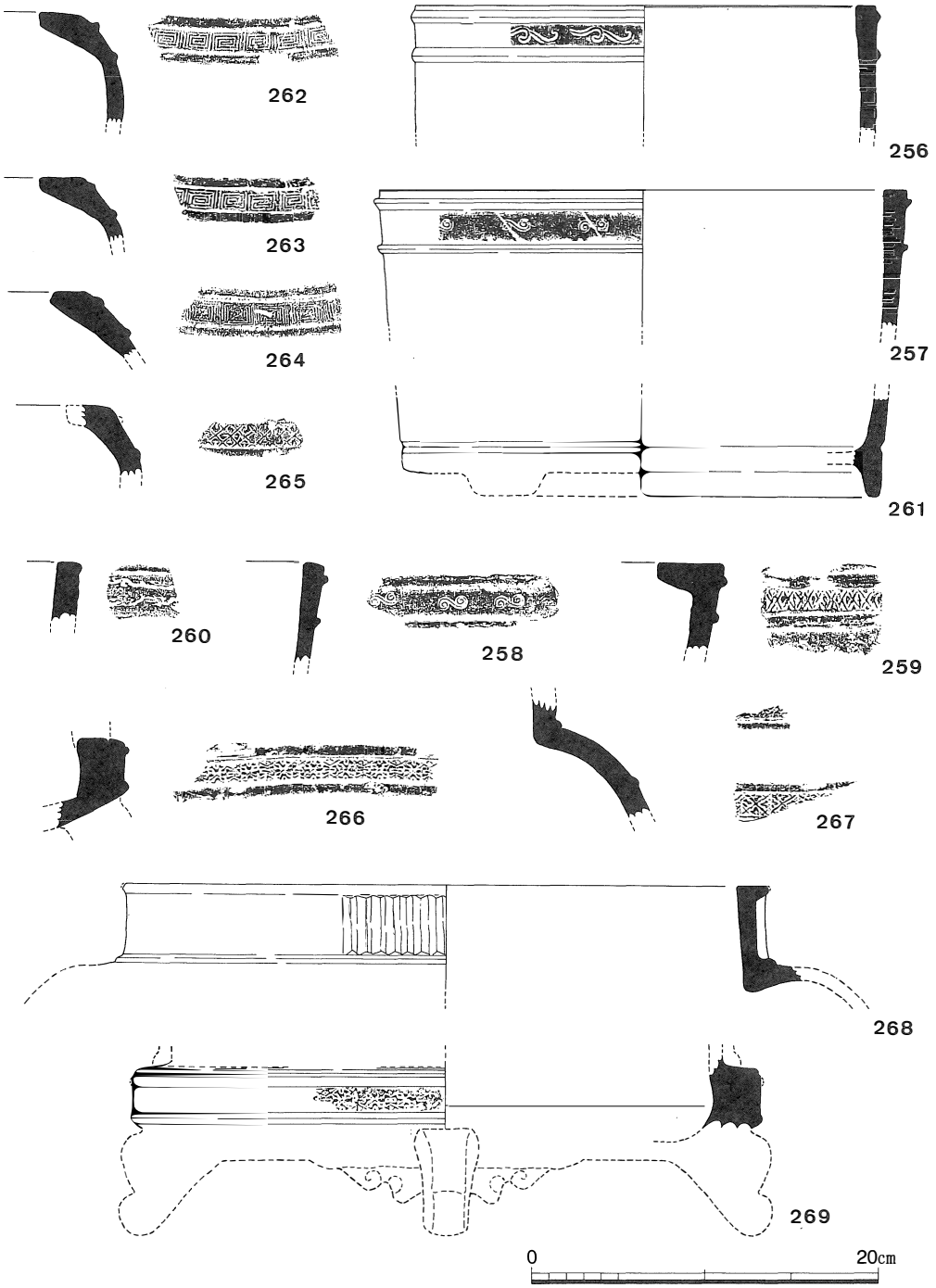
239・241～247 土師器　240 須恵器　248～250 瀬戸・美濃焼　251～253 信楽焼　254・255 備前焼

第77図　中世後期の出土遺物実測図（1／4）

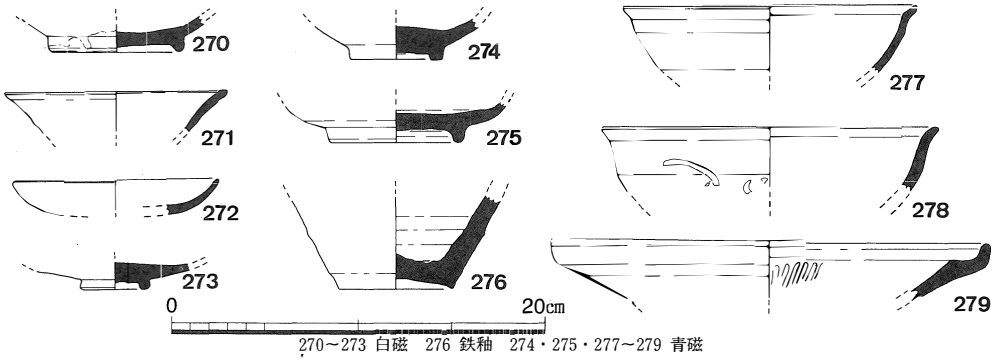
も淡灰褐色。硬質に焼成されており、胎土は灰白色を呈する。本遺跡では他に類例はない。242は内面全体にハケメがナデ消されずに残る。243～247は平らな底部と外へひらく口縁部をもつ。口縁部の屈曲度は指オサエの強弱により個体差がみられる。このタイプの皿はわずかな量しか出土していない。248は体部下方が露胎となる。ヘラ削り調整する。249は体部外面下半が露胎となる。内外面とも灰釉が剝離しており、二次的な影響と考えられる。この他に、口縁部と底部片（319～312）がある。250は頸部内面上半と外面全体に施釉する。いわゆる尊形瓶を模したものである。251は口縁部の縁帯が上下に拡張され、内面に段を有する。252は胴部上半に横方向のヘラ描き沈線を施す。桧垣文の一部であろう。253は口縁部が外反する。すり目はみられない。254はすり目が７本。255はすり目が８本。口縁部上端には沈線をめぐらせる。255と315は口縁部が直立し端部に沈線を施す。

火鉢と風炉（第78図）　暖房具の火鉢（256～261）と喫茶具の風炉（262～269）が出土している。[17] 内外面とも摩滅したものが多いが、外面はヘラミガキ調整しており器表面は平滑である。内面はナデ調整する。黒色のもの以外に二次的な影響を受けたと考えられる淡橙色系のものがわずかにある。256～258は直立する体部と断面方形の口縁部からなる。口縁部外面には２本の凸線をめぐらし、その間にスタンプを押す。256は主葉が反転したものを１単位とする唐草文。257・258は、Ｓ字状文。259は直線的な体部と内側に折り返した逆Ｌ字形の口縁部をもつ。口縁部外面には２本の凸線をめぐらせる。体部は方形で器高の低い形態であろう。縦長の菱形文を連続して押印する。260は口縁部の外面上端を肥厚させる。外面には唐草風の花文を押印する。

261は逆台形の脚部。外面に１本の沈線がめぐる。262～265は内湾する体部と上部を平らにした口縁部からなる。口縁部外面に２本の凸線をめぐらせており、その間にスタンプを連続して押



第78図　火鉢・風炉実測図（1／4）



第79図　輸入陶磁器実測図（1／4）

す。262・263は雷文、264は四つのます形を入れ子にしたものに×印を加えた文様。265は花菱文。262と264は火窓の一部が残る。266と269は体部下半に猫足がつく。猫足のみ単体で出土しているが、足の本数が明らかなものはない。２本の凸線の間には花菱文を押印する。267は直立する口縁部と丸い胴部からなる小片。それぞれ凸線の間に花菱文を押印する。268は口縁部に蓮子文をめぐらせる小片。

（５）その他の出土遺物

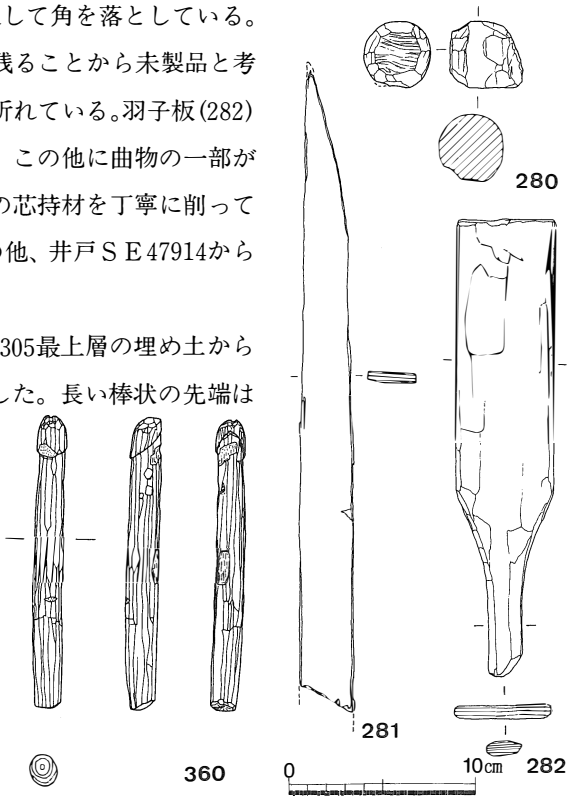
輸入磁器（第79図、図版28・29）　白磁の碗（270）、皿（271・272・273）、青磁の碗（274・277・278）、皿（275）、盤（279）、鉄釉壺（276）のほかに、白磁、青磁、染付の小片がある。270は低い高台の内面は露胎となっており、内側は斜めに外側は直立する。口縁部を玉縁にする碗と考えられる。271はいわゆる口ハゲ皿である。272は全面に施釉する。内外面に文様はみられない。273は厚みのある底部に小さな高台をつける。高台は露胎となっている。274は内面見込みに線彫りによる花文を施す蓮弁文碗。高台内面は露胎となる。中世前半の遺構に伴うものであろう。275は内面見込みに線彫りによる小さな花文を施す。高台内側の底部のみ露胎となる。276は全面に黒褐色の鉄釉を施す。底部には目痕が残る。この他に胴部の小片が出土している。277は全面に細かい貫入がはいる無文碗。278は片切彫りによる文様を施す。279は体部内面に断面Ｕ字形の菊花弁状のえぐりを施す。胎土は薄卵色を呈する陶器質である。釉調は内外面とも濁りのあるベージュ色で部分的に釉が溜まる。このほか白磁には合子の身（330）、口ハゲ皿（321）、玉縁をもつ碗（322）、高台にえぐりを入れる皿（323）などがある。青磁には、蓮弁文碗（324～331）と、いわゆる酒会壺と考えられる332がある。端反りの碗（333～335）と底部（336）のうち、333・334・336は釉層が薄く器表面は斑状を呈する。336は高台内面の露胎部分が焼成時に酸化して赤褐色を呈する碗である。337は口縁部を折り返して平縁とする盤か。花弁形の口縁部と、型抜き成形による多角形の体部からなる。338は、花瓶の口縁部。339は染付[18]。高台をもつ端反りの皿である。口縁部外面に唐草と花文が描かれる。小野正敏氏の分類[19]による

と、皿Ｂ群に該当すると考えられる。このうち白磁については320・322が平安時代末期、321は本遺跡の中世前半期に相当し、その他は中世後半期に伴うものである。

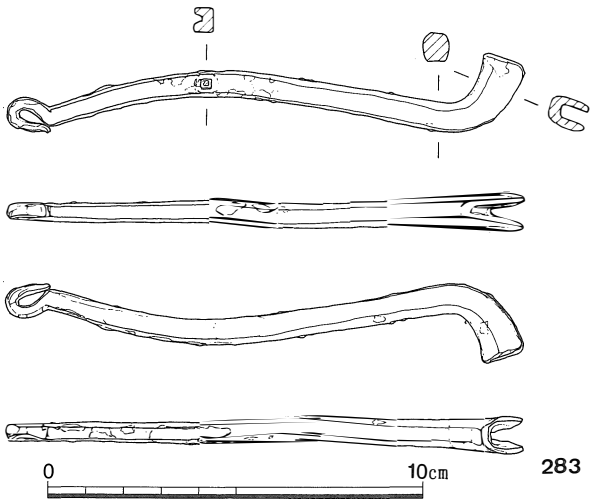
肥前系陶磁器（図版29）　唐津焼（350～352）、伊万里焼の染付（340～347）、肥前産京焼風陶器[20]（351）がある。340は高台と体部に圏線文を施す碗。341は初期伊万里の筒形碗。線描きしたあとに染付した唐草文を描く。342は唐草と花文を描いた丸碗。見込みに二重圏線と花文を配する。343は高台部分が釉切れした碗。344は高台と体部下端に圏線文を描く。340・342～344の高台畳付は打ち欠いた割れ方をしている。345は内面蛇の目釉剝ぎした皿。高台は露胎する。高台内のヘラケズリは深く高台は三日月状を呈する。346は全体に細かな貫入がはいった碗。347は内面蛇の目釉剝ぎした皿。内面はコンニャク印判の五弁花と花唐草を描く。348は全面に明るい灰黄色の釉を施釉した唐津系の碗。349は全面に白濁色の釉を施した唐津系の碗。350は唐津刷毛目碗。351は京焼風陶器碗。精製された胎土にくすんだ黄色い釉を施す。高台は無釉で高台内面中央に円刻を施している。見込みに山水文を描く。大半の遺物は盛り土や耕作土から出土したものである。このうち、340～344は初期伊万里を含む17世紀前半代、その他は17世紀後半から18世紀代と考えられる。

木製品（第80図・図版30）　井戸ＳＥ47909の底付近から出土したものである。打毬の木球（280）は長さ3.9㎝の円筒形の両端を細かく面取して角を落としている。片側には粗い面取と斜めに切断した痕が残ることから未製品と考えられる。刀形（282）は切っ先から途中で折れている。羽子板（282）は長方形の平らな板にＹ字形の柄がつく。この他に曲物の一部が出土している。陽物（360）は長さ15.5㎝の芯持材を丁寧に削っており、亀頭部は写実的な作りである。この他、井戸ＳＥ47914から曲物底板と側板が出土している。

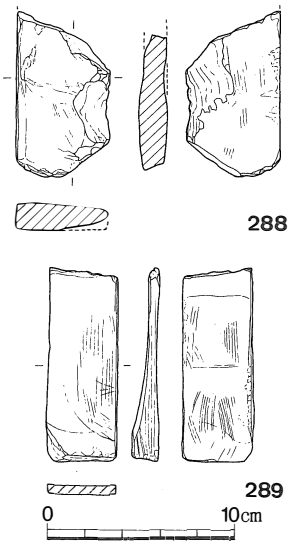
金属製品（第81図・図版14）　堀ＳＤ41305最上層の埋め土から火縄銃の火縄をはさむ火挟（283）が出土した。長い棒状の先端は断面Ｕ字形、末端は曲げて輪となっており、中心よりやや後ろには装着する側を凹ませただけの支点がある。棒状の本体は末端から先端まで上面の背が平らになっており、断面形は支点までが方形、支点から先は両側が膨れた形となる。なお、火挟みの形状が支点から真ん中にかけてわずかに屈曲する点は銃本体に装着するために加工・調整されたものであろう。



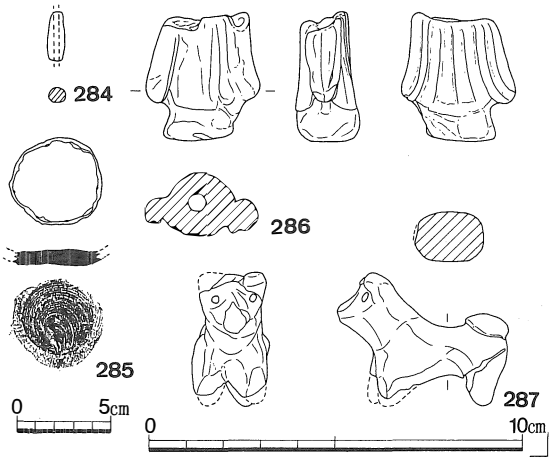
第80図　木製品実測図（1／4）



第81図　火挟実測図（1／2）



第83図　砥石実測図（1／4）



第82図　土製品実測図（286・287-1／2、284・285-1／4）

第84図　石仏出土状況

開田遺跡では他に鉄砲関連の遺物は出土していない。

土製品（第82図・図版30）　土錘（284）、加工円盤（285）、人形（286）、犬形（287）、泥面子（359）がある。285は瀬戸・美濃焼の灰釉皿の底部。周囲を丸く打ち欠いている。286は芯棒に粘土を巻き付けた手づくね製品。

石製品（第83・84図、図版30）　砥石[21]（288・289・352～355）、石仏（356）がある。354は大きな石から打ち割った破片を砥石に使用している。石材はホルンフェルス。355は花崗岩質アプライト。288・289・352・353は珪質頁岩・粘板岩製。356は花崗岩製。井戸底から石仏の他に赤

褐色を呈するレッドチャート片が出土した。

付表７　主要遺構の遺物破片数量

（中世前期）

ＳＥ47909

器種		器形	破片数	%
土師器		椀	1	0.4
		皿	103	36.1
		不明	18	6.3
瓦器		椀・皿	158	55.4
中国陶磁	青磁	碗	5	1.8
合計			285	100.0

ＳＥ41302

器種		器形	破片数	%
土師器		皿	58	32.8
		不明	28	15.8
瓦器		椀・皿	33	18.6
		鍋・釜	16	9.0
		不明	32	18.1
須恵器		鉢	5	2.8
国産陶器	常滑	甕・壺	2	1.1
中国陶磁	青磁	碗	1	0.6
	白磁	皿	1	0.6
	鉄釉	壺	1	0.6
合計			177	100.0

ＳＤ38503
ＳＤ44803

器種		器形	破片数	%
土師器		椀	110	3.7
		皿	1239	41.7
		不明	34	1.1
瓦器		椀・皿	1061	35.7
		鍋・釜	257	8.7
		不明	240	8.1
須恵器		鉢	11	0.4
国産陶器	常滑	甕・壺	18	0.6
合計			2970	100.0

（中世後期）

ＳＥ41301

器種			器形	破片数	%
土師器			皿	9	12.7
			不明	2	2.8
瓦器			火鉢・風炉	6	8.5
国産陶器	瀬戸美濃	灰釉	碗	6	8.5
			皿	2	2.8
		天目	碗	1	1.4
	信楽		甕・壺	19	26.8
			すり鉢	7	9.9
	備前		甕・壺	4	5.6
			すり鉢	14	19.7
中国陶磁	青磁		碗	1	1.4
合計				71	100.0

ＳＤ47902

器種			器形	破片数	%
土師器			皿	3	3.4
			紅壺	1	1.1
瓦器			羽釜	34	38.6
国産陶器	瀬戸美濃	灰釉	壺	5	5.7
			不明	1	1.1
		天目	碗	5	5.7
	信楽		甕・壺	18	20.5
			すり鉢	2	2.3
	備前		すり鉢	8	9.1
	不明		甕・壺	9	10.2
中国陶磁	青磁		碗	1	1.1
	白磁		皿	1	1.1
合計				88	100.0

ＳＥ47903

器種			器形	破片数	%
土師器			皿	32	28.1
			不明	44	38.6
瓦器			羽釜	24	21.1
国産陶器	瀬戸美濃	灰釉	碗	14	12.3
合計				114	100.0

ＳＤ41305
ＳＤ47905

器種			器形	破片数	%
土師器			皿	21	14.2
			不明	40	27.0
瓦器			火鉢・風炉	6	4.1
羽釜				45	30.4
国産陶器	瀬戸美濃	灰釉	碗	5	3.4
			皿	1	0.7
	信楽		甕・壺	14	9.5
			すり鉢	1	0.7
	備前		すり鉢	8	5.4
中国陶磁	青磁		碗	5	3.4
			皿	1	0.7
	白磁		皿	1	0.7
合計				148	100.0

ＳＤ38501
ＳＤ44801

器種			器形	破片数	%
土師器			皿	73	16.7
			不明	211	48.3
瓦器			火鉢・風炉	25	5.7
国産陶器	瀬戸美濃	灰釉	碗	3	0.7
			皿	1	0.2
			水さし	1	0.2
		天目	碗	1	0.2
	信楽		甕・壺	83	19.0
			すり鉢	7	1.6
	備前		甕・壺	3	0.7
			すり鉢	18	4.1
			不明	1	0.2
中国陶磁	青磁		碗	10	2.3
合計				437	100.0

5　ま　と　め

（1）長岡京期の遺構について

これまでの一連の調査では長岡京期の遺構・遺物も少なからず発見されており、特に以前から当調査地周辺に存在が推定されている長岡京の西市との関連が注目される。そこで当地における一連の調査と周辺の調査を合わせ概観しておきたい。

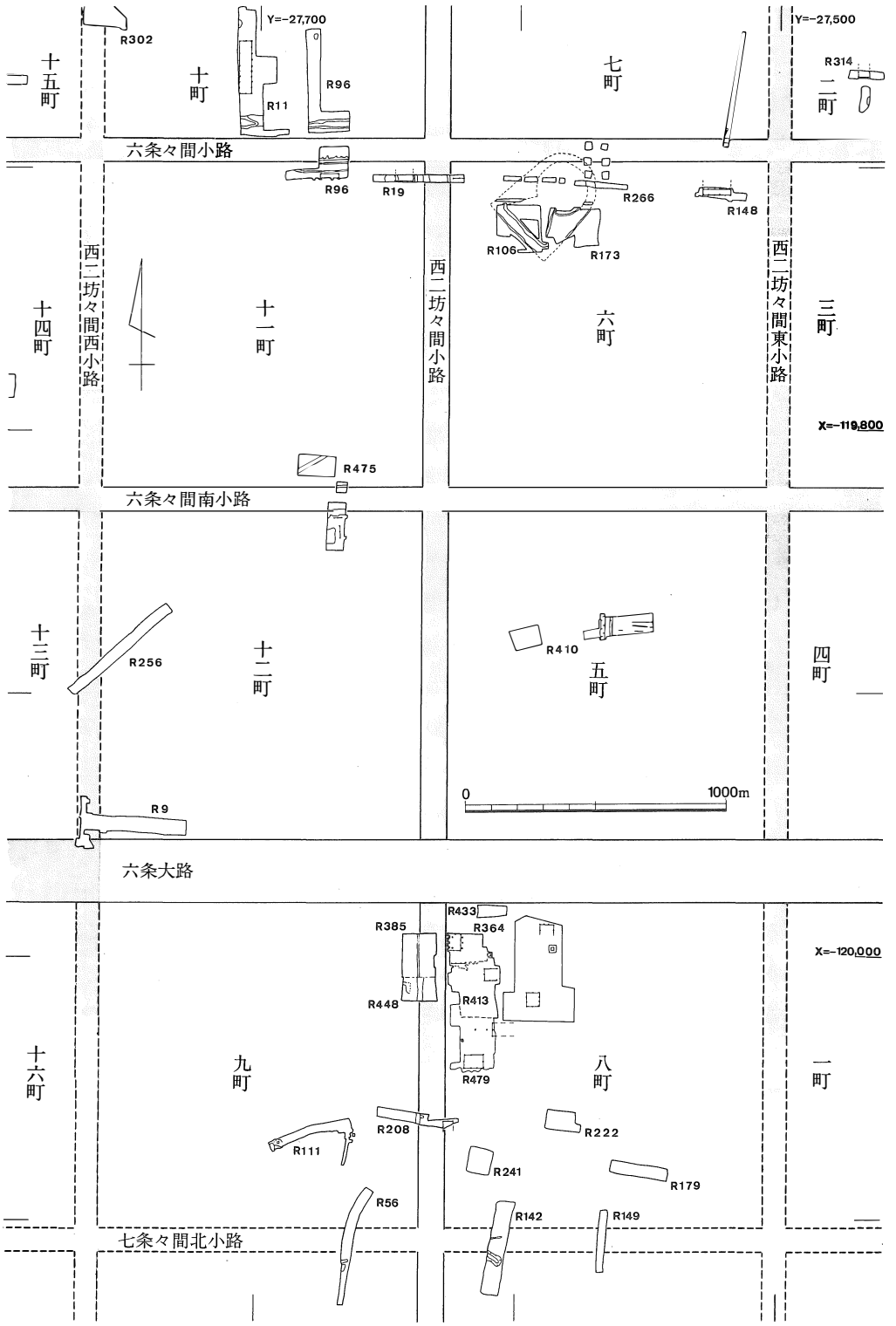
長岡京の市の場所に関して最初に述べたのは中山修一氏である。中山は長岡京市神足付近に残る「棚次」「典薬」「橋本」などの地名をもとに左京五条二坊と三坊にまたがる四町域を東市の候補地としてあげ、西市も右京の対称位置に推定された[22]。ただし、この推定では市の中心を東西の二坊大路が貫くことになり、平城京・平安京のあり方からみれば若干の課題を残すものであった。その後数回にわたって左右京で市の推定地にあたる部分の調査が行われたが、関連する資料は得られなかった。ところが、1982年に当調査地の南東約250ｍ付近で行われた右京第102次調査において「自司進」「三年十二」と書かれた木簡が出土し、にわかに注目を集めることとなった[23]。木簡に書かれた「司」は出土地点から考えれば「市司」の可能性が高く、さらに同時に出土した土器のなかに「西」と書かれた墨書土器が存在し、西市の候補地として有力となってきた。さらに1992年に当調査地の北約100ｍで行われた右京第410次調査において「金銀帳」と書かれた題箋が出土し[24]、金銀の出納に関わる施設の存在が推定され、市との関連が指摘されることとなった。また、近年長岡京の新しい条坊復元案が出されるに伴い[25]、市の推定地は右京で七条二坊付近に推定されることとなった。

当調査地のこれまでの長岡京期の遺構は、西二坊々間小路西側溝と掘立柱建物・柵・井戸などが検出されており、七条二坊八町の状況がある程度推定される。それによれば、掘立柱建物はいずれも小規模なものが多く、宅地内での配置も比較的疎らである。検出された柵列は一町を32分割するラインにのらないため、１／２あるいは一町域の宅地利用も考えられるが、現状では断定するには至らない。出土遺物では第93300次立会調査において比較的まとまった資料が出土しているが全体的には量が少なく、宅地の性格を推定するものはなかった。また、包含層からではあるが、長岡京では類例の少ない猿投産の八花硯が出土しているものの、これもただちに西市に結び付くような資料とはいえない。

以上のように、当地の調査では残念ながら西市の存在を積極的に証明する資料は検出されなかった。しかし、当地が西市の有力な候補地であることには変わりがなく、今後周辺地での調査が進展することにより、木簡や墨書土器等の新たな発見が期待される。

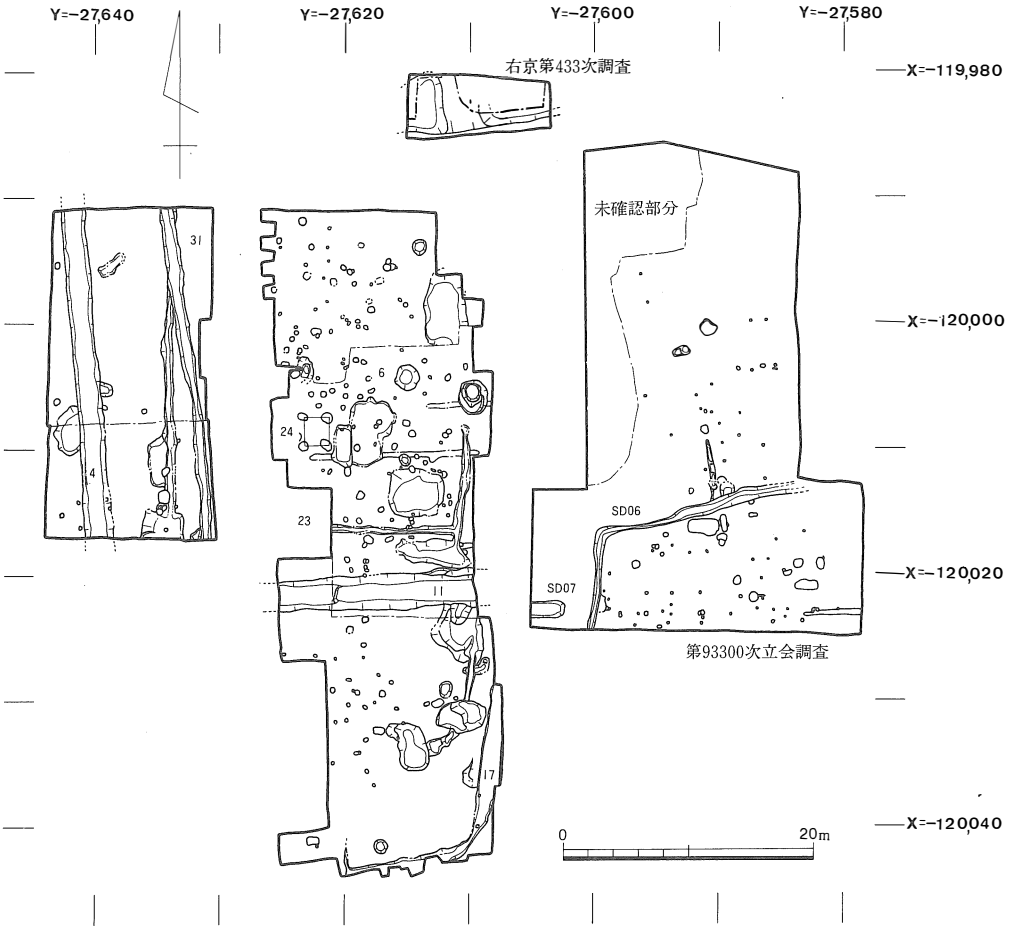
（2）中世の開田遺跡について

中世の開田遺跡における各時期の遺構を概観したあと、出土した火挟の年代について整理しておきたい。なお、中世遺構の評価について既報告と異なる点は本書に従うものとする。



第85図　調査地周辺条坊図（1／2500）

14世紀前半の瓦器椀と土師器皿を中心とする中世前期は、開田遺跡の調査の中でも最も遺物量が多い時期である。大半は溝ＳＤ38503･44803（31）と土器埋納坑ＳＸ38507（41）から出土したものであり、他の井戸や土坑などと比べて量的に圧倒的な差が認められる（付表６・７）。このような遺物量の差は遺構の在り方とも関連しており、柱穴や溝、井戸、土坑などの主たる生活の場に少なく、遺構の希薄な領域に大量の土器が投棄または埋納された状況が見て取れる。一方、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが南側で実施した調査では中世井戸７基のほか池状の落ち込みを検出し、旧小字澤井の名のとおり水に関する遺構が集中する。本地点は広範囲に及ぶ開田遺跡の中でも遺構内容と遺物量が周辺地に比べて卓絶しており、当地が集落の中心部に近いことを物語るものであろう。集落は地形条件からみてさらに北西方向に展開する可能性が高い。また、東側の第93300次立会調査では土壙墓を検出している。これより東は川筋へ下る後背低地となる点も加味すると当地が墓域であった可能性が考えられよう。建物柱穴は中世前・後期を通じて、右京第385・413次調査地から集中して検出したが、建物を復元するには決め手



第86図　主な中世遺構の検出状況（1／600）

を欠く。このうち、掘形が他の柱穴より大きく深いＳＢ41317 (24) は物見櫓ではないかと考えている。また、高い火熱を受けた土器片の他にスサを含む焼けた土の塊が土坑ＳＫ41312 (23) から出土しており、金属関係の生産が行われていたことが推測できる。

16世紀前半を中心とする中世後期では、南を堀ＳＤ41305に西を溝ＳＤ38501・44801で区画した状況が認められ、建物柱穴や井戸などもこの内側に集中する。北については、右京第433次調査で東西方向の池状遺構を検出しており、この間の南北幅は約35ｍとなる。西では、区画する明瞭な遺構は未確認であるが、川筋へ下ることから遺構の密度は低いと考えられる。また、井戸や溝、土坑の中には拳大程度の石が集中するものがある。中でも底から石仏が出土した井戸ＳＥ41301 (6) の中間層には隙間なく石が詰まっており、意図的に埋めた状況がわかる。これらの石は打ち割られた形跡をもつものが多い。堀ＳＤ41305(11)については、西で溝ＳＤ38501・44801 (4) に接続すると考えられる。東側は立会調査で堀の延長部分の溝ＳＤ07を検出したが、途中で途切れることが判明した。両地点の溝底には約0.7ｍの比高がある。立会調査の溝ＳＤ06も同時期の溝ＳＤ47902 (17) につながるものと考えられる。北側の右京第433次調査では池状の落ち込みから彩色独楽が出土している。中世後期の遺物は16世紀前半代を主体とするが、中には236・239・255・272・339など16世紀中葉～後半のものが少数含まれている。これらの遺物は包含層や前代の溝、井戸等から出土しており、量的に少なく単発的な出方をしている。同時期の遺構については明らかでないが、その後の土地利用を物語る資料である。この他、注目されるものとして埋没した堀ＳＤ47905 (11) の最上層から出土した鉄砲の火挟がある。史料では鉄砲は天文12 (1543) 年にポルトガル人が種子島にもたらしたとされるが、伝世する鉄砲は初期のものほど少なく、大半は江戸時代中・後期のものである。鉄砲伝来から間もない時期、主として16世紀後半代の遺跡から出土した火挟は知り得た限りでは４点ある。このうち福井県一乗谷朝倉氏遺跡[26]から２点、青森県浪岡城[27]から２点出土している。一乗谷朝倉氏遺跡は戦国大名朝倉氏の本拠地であり、天正２ (1574) 年に織田信長との戦いに敗れて城下町は灰燼に帰した。鉄砲関連の遺物は、火挟の他に弾き金、鉄砲玉、鉛延べ板、鉄砲玉を入れたルツボなどが出土している。一方、青森県浪岡城は北畠氏によって築かれた戦国時代の城館である。落城したのは天正６ (1578) 年とされる。火挟の他、鉄砲玉が出土している。これらの火挟を比べた場合、本例のものは支点の穴が装着する片側にしか空いていない点が他と大きく異なるほかは、基本的な形態や寸法は似通っている。中でも各寸法は一乗谷朝倉氏遺跡の２例に近似しており、このうちの１点は末端が輪になるところも同じである。開田遺跡の火挟が出土した堀最上層からは時期の決め手となる共伴遺物は不十分なものしか出土しておらず、概ね近世初頭までの時期幅を考えなければならない。しかし、下限年代の一端が明らかな上記２遺跡出土の火挟との類似性や、本書付論２で明らかにされたとおり材質が銅－銀合金である等の特徴からみて本例は鉄砲生産が開始された初期の製品であることは間違いない。付近には、北に開田城、犬川を隔

てた東に桂川以西の西岡地域を支配した細川藤孝の勝龍寺城があり、天正10（1582）年には羽柴秀吉と明智光秀による山崎合戦が繰り広げられた。本遺跡の火挟もこれらの戦国動乱の中で埋もれたものかもしれない。今後、各地の初期鉄砲部品との比較検討が待たれる。

なお、末筆ではありますが、火挟の資料について種々のご教示をたまわった福井県立朝倉氏遺跡資料館岩田隆氏、浪岡町史編纂室工藤清泰氏、滋賀県立安土城考古博物館稲垣正宏氏、堺鉄砲研究会澤田平氏の各氏に感謝申し上げます。

注１）付表作成と破片数の計算には、尾崎みづ樹・安尾美穂・早川いずみの協力を得た。

２）日下雅義・植村善博「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一 1991年

３）各時代に様相については『長岡京市史』資料編一　1991年を参照されたい。

４）百瀬ちどり「付載－２　乙訓郡条里についての一考察　－乙訓郡西部の条里をめぐって－」『長岡京市文化財調査報告書』第12冊　1984年

５）小田桐　淳「右京第410次調査」『長岡京市文化財調査報告書』第31冊　1993年

６）奈良大学助教授泉拓良氏のご教示を得た。

７）小田桐　淳「右京第297次調査」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度　1989年

８）花村　潔「第93300次立会調査」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成５年度　1995年

９）山中　章・石尾政信・丸嘉樹「長岡宮跡第89次調査」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第９集　1983年

10）山中　章「長岡宮跡第100次調査」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第９集　1983年

11）山中　章「長岡宮跡第128次調査」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集　1984年

12）山中　章・石尾政信「左京第30次調査」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集　1985年

13）木村泰彦「右京第139次調査」『長岡京市埋蔵文化財センター報告書』第２集　1985年

14）原　秀樹「右京第330次調査」『長岡京市文化財調査報告書』第24冊　1990年

15）橋本久和『中世土器研究序論』真陽社　1992年

16）藤沢良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986年

17）菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　1989年

18）(財)大阪市文化財協会松尾信裕氏、森　毅、積山洋氏にご教示を得た。

19）小野正敏「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№.２　1982年

20）大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニューサイエンス社　平成３年

21）石材については、山城郷土資料館橋本清一氏のご教示を得た。

22）中山修一「最近新たに知られたこと」『乙訓文化』第34号　乙訓文化遺産を守る会　1977年

23）岩崎　誠「右京第102次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財センター報告書』第１冊　1984年

24）注５に同じ

25）山中　章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻　第４号　1992年

26）『一乗谷朝倉氏遺跡』Ⅶ　昭和50年度発掘調査整備事業概報　福井県教育委員会　昭和51年

27）『浪岡城跡』Ⅴ　昭和56年度浪岡城跡発掘調査報告書　浪岡町教育委員会　昭和58年

付論１

乙訓の中世城館研究に関する覚書

福島克彦（大山崎町歴史資料館）

１　はじめに

近年、乙訓における中世城館の研究は、網羅的な調査に加え、個別の考察も成果を上げつつある。筆者は、この地域の現地踏査を行っていないため、これらについて批判する力量がない。本稿では不充分ながら、研究史を確認した上で、問題点を整理し、責を塞ぎたい。なお、今回は旧乙訓郡だけでなく、歴史的にも深い関係にあった桂川西岸の葛野郡も検討の範囲に加える。

京都近郊の城館については、すでに元禄期、黒川道祐『雍州府志』に城跡が記されている。このうち、乙訓および桂川西岸地域の城郭跡は香西城（嵐山城）、上野城、勝龍寺城、天皇山城（天王山城）の四つを記すに過ぎない。地誌の示す城郭遺構の数はかなり少ない。

こうした状況下、木下良氏は防御集落の観点から、歴史地理学の個別成果を吸収しつつ、文献・地名で確認できるものを摘出し乙訓の城館と環濠集落を総合的にまとめている。ここで木下氏は有名な「野田泰忠軍忠状案」（以下「泰忠軍忠状」と省略）の「城」と「館」の使い分けから、その規模の差異の可能性を指摘し、勝龍寺城・鶏冠井城・上野城が乙訓地方で別格的存在を推定している[(1)]。今谷明氏は文献による京都市近郊の城館調査を進める中で、乙訓の城館についても触れ、京都近郊の城郭は国人のものが少なく、守護代や郡代の城郭が目立つことを指摘した。この視角は守護所研究へつながり、嵐山・峰ヶ堂・勝龍寺・淀・槙島・吉祥院・西十條を山城国の守護所、郡代役所として捉えている[(2)]。山下正男氏は大原野まで調査範囲を広げ、現地調査を徹底することで、遺構の有無を確認し、本来の意味での分布調査を展開した[(3)]。

中井均氏は近年の乙訓における発掘事例（久世城之内遺跡・今里遺跡・勝龍寺城など）も加え、方法の範囲を広げた。また、南山城や近江との比較検討から、①乙訓地域の山城は臨時的なもので、領主が保持した詰城はみられないこと、②居館が濃密に分布し、その背景に惣国体制があったと推定できること、③以上の２点を支える基本姿勢として15世紀は平地居館が一般的で、山城は16世紀に入って全国的に展開する構想があること、を指摘した[(4)]。これらの検討によって、乙訓の城館研究は他地域との城館分布や構造の比較への段階に達したといえる。

簡潔ながら、年代順に各氏の成果をまとめた。逐次検討材料が増え、方法論も多様化しており、着実に研究が進展している様子が窺い知れよう。ただ、同時に視角が次第に狭まってきたことも事実である。嚆矢となった木下氏は城・居館・環濠集落と対象を幅広くされていたが、今谷氏は領主の居館の考察については控えている。さらに山下、中井氏は環濠集落への視角については対象外とした。研究の進展で、個別専門化することは常であるし、それにも増して環濠集落の検討は、構築時期や復元方法も含めて難しく、禁欲的にならざるを得ないのが実情で

あろう。ただ、乙訓の城館は、むしろ村落の中での位置づけと遺構の残存状況に大きな意味があるように思われる。すなわち、城館の維持主体（在地土豪）の存在形態の変化や村落側による規制や開発で、城館や城館跡自体が大きな改変を迫られ、村落内部に埋没する可能性があった点である。例えば、遺構や伝承が残らなかったにもかかわらず、城跡の存在を推定させる地名が集落内部や周辺に残っていることは、こうした点を傍証している。また、乙訓に領主に詰城と想定される山城が皆無にというのも、城館と環濠集落の関係で捉えていくべき課題であろう。むしろ平地における居館・環濠集落のあり方を追求することで、乙訓の山城遺構も特質もより明確になるのではないだろうか。本稿は、具体的な検討はできないが、こうした問題意識から、外部勢力の城郭・在地土豪の城館・環濠集落の３つに分けて、考察したい。

2　外部勢力の城郭

外部勢力の城郭という表現は曖昧だが、ここでは便宜上、守護代などの非在地勢力によって取り立てられ、郡規模の広域地域の支配拠点を指向した城郭を指すこととしたい。近年在地土豪の城館など、村落との密着度の高い城を「小規模城館」という概念が使われているが、これらと基本的に対峙する存在として扱う。もちろん後述するように、在地の居館を外部勢力が使用する場合もあり、両者を明確に区別することはできない。ただ、少なくとも在地勢力が、中心的な維持主体とならなかったことが確実な城郭を取り上げたい。ここでは嵐山城・峰ケ堂城、勝龍寺城・山崎城の４か所をあげる。

嵐山城はすでに南北朝の動乱期に戦闘に使用され、文和４年(1355)、仁木左京大夫頼章が丹後･丹波の軍、三千余騎を従えて「嵐山ニ取り上ガ」っている（『太平記』)。また戦国期は、山城国守護代として半済米を課したことで有名な香西元長の永正２～４（1505～1507）年の段階の居城になっている。このことから今谷氏は史料上登場する「嵐山城」と「嵯峨城」の両方は同一と考えられることを確認した上で、嵐山城を守護所として把握されている。ただし、きわめて軍事性の強い側面もあり、南北朝期と同じく戦国期も隣接する丹波との軍勢移動が多く、半済米の徴発を含め、地域に対して威嚇的な性格も多分にあるようである。

城郭遺構については『雍州府志』『山城名跡志』などの地誌がすでに取り上げているが、現地遺構の残存度については、近年上山春平氏により紹介された[(5)]。西岡の北へ延びる丘陵の先端の嵐山山頂に位置する。比高は335ｍで、嵯峨側にあたる北斜面は急峻である。

峰ヶ堂城は桂の西の丘陵上にある。この城の確認は今谷氏が天文３（1534）年の茨木長隆の奉書（『東寺百合文書』ひ）を取り上げて、存在が知られた。この史料から西岡から徴収された米済米を当時の守護代木沢長政が「峯城之米」として収蔵していた様子がわかり、下五郡の守護所か、郡代役所と推定されている。遺構の確認は近年、山下氏がなされ、法華山寺の故地が推定されている。この地は山陰道を見下ろす丘陵上で、比高130ｍの地である。また稜線上の唐

櫃越のルート上でもあり、交通の要地であったことは間違いない。

勝龍寺跡は戦国期全体を通じて、乙訓の中心的な城郭である。すでに多くの研究があり、詳細は譲りたいが、ここで注目されるのは、百瀬ちどり氏の「小塩荘下向引付」に関する検討である。百瀬氏は、永正２（1505）年、小塩荘の直務支配のため入城しようとした九条政基を、香西元能(元長の弟)が城の木戸を閉めて妨害した記事を取り上げ、この城郭を勝龍寺城とした。[(6)] また政所給田が勝竜寺周辺にあることから、政所屋敷も近辺にあった。このことから、勝龍寺城は乙訓に散在する小塩荘の拠点的存在だったことが知れる。また、香西元能が入っていることは、同時期の元長の嵐山居城と関連して重要である。以後、戦国期の各権力の抗争の中で、勝龍寺城が争奪の対象になったことはいうまでもない。

山崎城は戦国期、やはり軍事的緊張下において外部勢力がたびたび使用した。これは南北朝にすでにみられ、林真弘軍忠状には「八王寺山馳参、鳥取尾城、自五月廿九日、迄六月廿三日夜、致用害警固候」(『前田家所蔵文書』)とある。八王寺山は酒解神社の前身、天神八王子社から由来することが考えられるから、やはり天王山と考えられる。鳥取尾城も天王山周辺にあったものと思われる。また文明元（1471）年には応仁の乱の戦闘で西軍が「天王山」に山城を拵えている。「泰忠軍忠状」にも鳥取尾山城に陣取られた様子が記されている。これらのことから、山崎に外部勢力が築いた城は基本的に天王山周辺にあったものと思われる。

さて天文７（1537）年９月、山崎の「城料」として、山城下五郡から段銭が徴収されている（『大徳寺文書』)。この「城料」という表現については、検討が必要だが、同年３月細川晴元が山崎に城を構えるとの風聞があること（『親元日記』）から、城郭構築に関係するものと考えられる。山城下五郡への段銭賦課が行われていることは、京都及び山城国の防衛の一環として当城郭を重要視していることがわかる（比高240ｍ)。

以上、４つの外部勢力の城郭についてまとめてきたが、これらのうち、勝龍寺城以外はすべて、山城あるいは丘陵上の城郭である。それぞれ比高にばらつきがあるが、少なくとも、集落から離れたところに立地している。前述したように、乙訓地域の特質として、集落から距離を隔てて、維持されていた在地土豪の詰城（山城）は皆無に等しい。このことから勘案すると、乙訓において外部勢力の構築した山城は、立地的にもより特異な存在だったと考えられる。

３　在地土豪の城館

戦国期乙訓地域には、物集女氏・鶏冠井氏・竹田氏・神足氏などの在地土豪がいた。彼らを中核として乙訓惣国一揆が形成されていたことは有名である。明応７（1498）年、細川政元から守護代香西元長を通して、山城国の５郡に五分一済と人夫役が課せられた際、彼らは談合を繰り返し、乙訓郡を国持ちにするように交渉している。郡内において「国之寄合」を行い、合議する体制があったようである。一方で彼らは西岡被官人として室町幕府の重要な軍事力の一

翼を担っていた[7]。そのため、その本貫地にも何らかの城館が維持管理されていたと考えられる。

応仁の乱期乙訓地域の城館がまとまって登場する「泰忠軍忠状」によれば、乙訓の城館は「城」と表現されているものが、鶏冠井城・鳥取尾山城、「館」が秋田館・井内館・寒川新左衛門尉館、「陣」が山崎、上野、谷之堂、嵯峨、寺戸山などが確認できる。勝龍寺は「勝龍寺搦手北の口」と表現されていることから、城館として機能していたことは確実である。また「陣」は一過性が想定されるが、何らかのタイプの城館か、環壕集落の既存の防御施設を利用した可能性もある。このように応仁の乱時、乙訓地域でかなりの軍事的緊張があり、城館をめぐる戦闘があった。ほかに、文明２年山名是豊、丹波勢に攻められた「開田城」が登場している（『大乗院寺社雑事記』）。なお、鶏冠井城は細川氏の抗争（高国と晴元）さなかの大永７（1527）年にも現われ、『実隆公記』同年10月24日条に「鶏冠木井未退散云々」、翌25日条に「西岡城未退」とある。『二水記』にも「鶏冠井城未落居」とあり、西岡衆の拠点で籠城戦があったことを窺わせる。また、この前哨戦で高国と対立した柳本賢治は丹波から西岡に出て、「西岡野田城」を落とし、一帯の「十所計」焼き払っている（『言継卿記』）。

もうひとつ、寒川新左衛門尉館（寒川光康館）は東寺領土久世荘の公文寒川氏の本拠と推定される。この寒川氏の館は長享２（1488）年に「城」として現れる。公文寒川家光は盗難事件で逐電した久世の地下人富林弥九郎が「私之城」に夜陰にまぎれて忍び込んだため、これを殺害したことを東寺側へ報告している（『東寺百合文書』を）。時期がずれるが、「私之城」は個人名で登場していた「寒川新左衛門尉館」の流れを組むものと考えていいだろう。

永正元（1504）年、細川氏の当主として澄元の擁立をねらった薬師寺元一は、西岡衆の協力を得て、管領細川政元に反旗をひるがえした。『後法興院日記』には、このとき戦闘の舞台となった場所として「西岡神谷城」と「淀藤岡城」をあげている。この「西岡神谷城」が神足城と推定されている。

さて、戦国後期（16世紀中葉以降）になると、こうした乙訓地域の城館名は勝龍寺城以外、文献から姿を見せなくなる。勝龍寺城の乙訓における歴史的位置が高まったため、この地域をめぐる抗争が、この城の争奪戦にのみ集中し、史料上現れにくくなったものと思われる。

取り上げた城館の現地比定や構造の推定については、すでに前章であげた各研究者によってなされている。本稿では、これらを逐一検討する準備をもてなかったので、細かい考察は今後の課題とせざるを得ない。ただ、問題点としては、史料上現れにくくなった乙訓の城館を土豪層の消長とも含めて検討する必要があることであろう。これは現在でも、乙訓の城館遺構が村落のなかに包摂されて、明確な範囲が画定できないこと、あるいは、江戸期の地誌類にも城主や伝承が明確に残っていないこととも関連するように思われる。その意味で、集落の検討、すなわち環濠集落（防御集落）の考察は、乙訓の城館を検討する不可欠の視点となる。

4　環濠集落

よく取り上げられるように『洛外図屏風』には、乙訓各集落の周囲に竹やぶや垣根に相当する施設が描かれており、周囲を堀などで遮断する集落形態が指摘されていた。また集落には「北の口」などの方角の入口を示した地名があり、決まった箇所で村人の出入りがあったことを想起させる。こうした、出入口は村の防御上重要な意味をもったものと思われ、環濠集落の存在を窺わせる。

最近小島道裕氏が環濠集落に関する貴重な史料を紹介している[8]。それは永禄５（1562）年大藪蔵介らが植松荘代官へ提出した請文（『田中穣氏旧蔵典籍古文書』）で、内容は恒常的な放火や「懸銭」に困惑した大藪氏が、年寄層とも「談合」し、堀を構え、出入口を一か所することで、世間の物騒に対処しようとしたものである。この史料では地名の特定はできないが、小島氏の指摘のように大藪氏の姓から久世郡の大藪村か、あるいは植松荘のある上桂あたりと想定される。いずれにせよ、乙訓と隣接する地域である。

この史料で重要な点は、第一に堀を構え、出入口を１か所に集約して村の防御しようとしていること、第二に大藪氏が村落の年寄層も交え、対外的な防御意識から、環濠化を進めていること、第三に堀構築分の年貢が減ることも含め、荘園領主側へ環濠化の同意を確認していることである。年寄層の同意を得ていることは、環濠化の際、下からの意見が反映する可能性がある。また荘園領主へ確認は、彼らによる規制も存在したことを物語っている。荘園領主側は耕地の減少による年貢の減少という点に神経を払ったらしく、応仁の乱時、西軍の最勝光院の周囲の堀構築で、その分の年貢の減り方を東寺が調査した事例がある（『東寺百合文書』え）[9]。したがって、戦国期においても荘園領主の権力が強かった京都近郊では、在地側による防御施設構築に大きな規制力となったことが想定される。すでに山下氏が簡単にふれておられるが、土豪の城郭分布にムラがあり、特に神社の社領域は皆無に等しいことを報告されている。城館遺構や環濠集落の分布状況にも多少なりとも影響を及ぼしたのではないだろうか。

さて、集落の出入口が集約され、防御上の重要地点になったことについては、大山崎などでも推定できる。天王山（山崎城）の麓、大山崎は応仁の乱時、「侍衆」として幕府の軍事力の一翼を担った。史料価値は落ちるが、『応仁別記』によれば、文明２（1467）年天王山の城を任された東軍の浦上美作守は畠山義就の夜討ちのため、いったん「五位川口」へ退いている。その後、大山崎の井上治郎、井尻左衛門太郎が天王山の城への間道を教えたため、美作守は城を奪回した。この「五位川口」は大山崎の北と東面を流れる五位川と西国街道が交わった地点と想定され、かつて大山崎惣中の境界の黒門があったところである。やはり史料価値は低いが『大閤記』にも、山崎合戦の際、秀吉軍が「東惣搆」から出撃したとある。現在も残る黒門跡の屈曲は『洛外図屏風』によって、少なくとも承応３年～万治２年（1654～59）に存在したことは

確実だが、これが戦国期のいつ頃まで溯り得るのか、問題となろう。美作守が城を追われて、いったん「五位川口」へ退いていることは、単に境界を示すだけにとどまらず、防御的な意味もあったものと思われる。すでに大山崎は文明2年、東軍の山名是豊から「特就堀構已下粉骨之由」を称賛されている（『離宮八幡宮文書』）。「堀構」は天王山の城の普請手伝いだったと想定されるが、こうした軍事施設の構築に大山崎の住民が参加していた様子が窺われる。

5　おわりに

以上、研究史を寄木した粗雑な文になってしまったが、城館遺構の各視角を簡単にまとめてみた。今回、三つの視角に分類したが、言うまでもなく筆者は各遺構を分類して固定化を提唱しているのではなく、それぞれの要素の強弱や重複が今後の問題となるということを確認しておきたい。

近年の「村の城」論のように、村落住民が避難する山城（「山小屋」）の存在が叫ばれて久しいが、これに対して集落の環濠化は生活・生産の場と一体的に防御しようとする点に特色をもつ。したがって、在地勢力の山城分布の希薄性と環濠集落のあり方は密接に関連するものと思われる。こうした分布論を展開するためにも、遺構を残り方自体も史料化する必要が迫られている。すでに戦国期の後半や近世段階で淘汰、消滅が推定される城館・集落も存在する。本稿では充分な検討が出来なかったが、地下遺構や生活の消長など幅広く検討できる考古学は、今後乙訓地域の中世城館を遺構評価する意味で、より重要な存在となるであろう。[10]

注1）木下良「西岡地方における城館と防御集落」『京都社会史研究』1971年

2）今谷明『言継卿記』そしえて　1980年、『守護領国支配機構の研究』法政大学出版局　1986年

3）山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭」『京都大学人文科学研究所調査報告』35　1986年

4）中井均「地域における中世城館の構成」『長岡京古文化論叢』2　1992年

5）上山春平『城と国家』小学館　1982年

6）百瀬ちどり「九条政基の『小塩荘下向引付』を読む」『長岡京古文化論叢』2、1992年

7）上島有『京郊庄園村落の研究』塙書房　1970年

玉城玲子「15世紀後半における乙訓の惣国について」『長岡京古文化論叢』1　1986年

乙訓の政治史については、森田恭二『戦国期歴代細川氏の研究』和泉書院　1994年を参照。

8）小島道裕「平地城館跡と村落」『シンポジウム小規模城館』1992年

9）京都府立総合資料館編『応仁の乱』第六回東寺百合文書展展示図録　1989年

10）乙訓の中近世の土地利用を考古学から網羅的に集約したものとして、山中章「長岡廃都後以後の土地活用（上・下）」『研究紀要』2・3　向日市文化資料館　1987・88年がある。

付論２

長岡京市開田遺跡出土火挟（鉄砲金具）の材質について

村上　隆　（奈良国立文化財研究所）

１　はじめに

ポルトガル人によって種子島に鉄砲が伝来したのは、1543（天文12）年のことといわれる。鉄砲伝来が当時の社会に与えた影響は大変大きかったが、同時にわが国の技術史を考える上でも重要なできごとであった。伝来後直ちに鉄砲鍛冶が生まれ、急激な需要の拡大に対して、完全な国産化と大量生産化が急務であったことは想像に難くない。その過程で鉄砲製作にどのような材料が用いられたのか興味あるところである。開田遺跡から出土した火挟はかなり初期の鉄砲の部品と考えられ、鉄砲製作技術の変遷を考える上で貴重な資料と考えられる。

２　分析方法

分析は主に非破壊的手法によるマクロ分析用蛍光Ｘ線分析法を用いた。使用した装置は、㈱リガク製文化財用非破壊蛍光Ｘ線分析装置Ｃ3371（波長分散型）である。管球のターゲットはクロム（Ｃｒ）、分析条件は、電圧50kV、電流は50mA、今回の資料には、主に10mm φ の照射面積調整用マスクを使用した。この装置は、表面を研磨調整した青銅製標準試料に対するＦＰ法による分析値の再現性が20mm φ マスク使用時に99％以上になるように調整してある。また、資料細部の材質確認のため、㈱テクノス製ミクロ分析用蛍光Ｘ線分析ＴＸ650（エネルギー分散型）を用いた。この装置は、Ｘ線の照射面積を100μ m φ まで絞ることができるので、資料の微細部の分析に適している。

なお、非破壊的手法では、資料の表面状態や形状を一定に調整しＸ線の照射条件を規格化することは不可能である。従って、分析結果は、資料の構成元素に関する大まかな情報を与えてくれるが、資料の正確な組成を示すものではない。蛍光Ｘ線分析のデータを扱う時にはこの点に十分注意する必要がある。

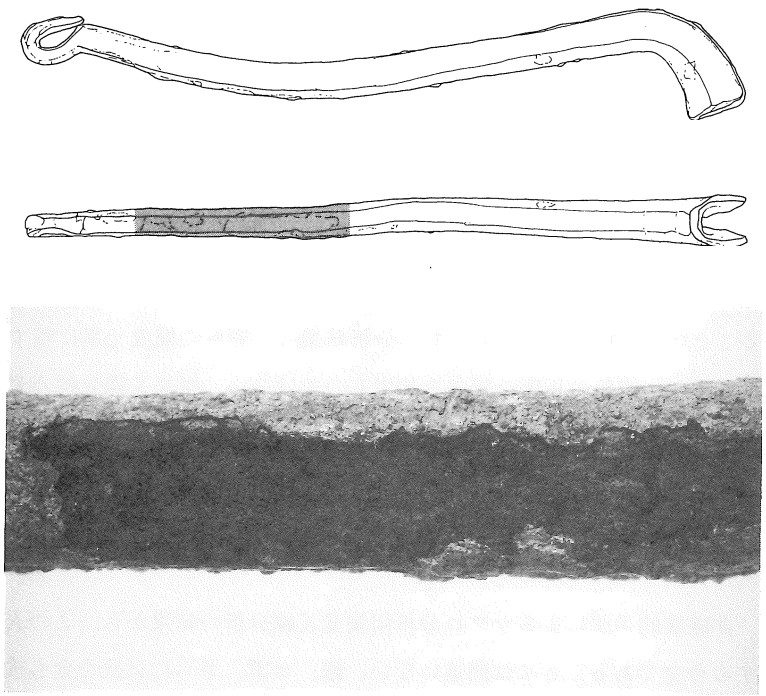
３　結果及び考察

非破壊的手法によるマクロ分析用蛍光Ｘ線分析の結果から、この火挟は基本的に銅を主体にする合金であることには間違いない。銀、ヒ素、さらには鉄や金も検出され、銅系合金としてはいくつかの可能性が考えられる。第一に、銅－銀合金で、これにヒ素が加わった合金が想定される。ただし、ヒ素の量が高めなのが気にかかる。第二に、銅－ヒ素系合金の表面を銀でコ

ーティングしたものとも考えられる。資料表面全体は、錆と絡んだ土で覆われ灰褐色を呈しているが、所々表層部が剝げ落ち少々黒く地金部分が顔を覗かせている(第87図)。この部分でミクロ蛍光X線分析を行い、マクロ分析の結果と比較してみた。鉄は表層部だけに見られることから、土中埋蔵時の土成分の吸着と見られる。銀とヒ素が、表層部よりむしろ地金部の方がやや高めであることから、上で述べた第一の仮定、すなわちヒ素を含む銅－銀合金とする方が自然である、と考えられる。正確には、資料内部からサンプリングし、再チェックする必要がある。今後の課題としたい。

4　まとめ

長岡京市開田遺跡から出土した火挟の非破壊分析の結果、ヒ素などを含む銅－銀合金でできている可能性が高いことがわかった。今後、さらに材質について精査すると共に、この合金が火挟の材質として適当であったのか、また当時の火挟の材料として定着したものなのか、などの材料科学的な検討を、他の出土事例を調査する中で探ってゆく必要があるだろう。それによって、鉄砲という外来の武器がわが国において短期間で定着していく過程を追えるのではないか、と期待するものである。



第87図　火挟細部

付表８　遺物一覧表

（縄文・弥生土器）

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm)（ ）内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径〔底径〕	器高				
1	縄文	鉢か	R413	SX05・2区	・・・	(2.4)	小片	62	20	
2	〃	〃	〃	精査	・・・	(3.8)	〃	〃	〃	
3	弥生	高杯	R448	SD02・2区1層	11.8	(9.6)	杯部1／3	63	〃	
4	〃	甕	R413	南拡張区耕作土	〔6.1〕	(3.1)	底部	〃		
5	〃	壺	R448	SD04	〔6.4〕	(2.4)	〃	〃		
6	〃	器台	〃	SD02・1区2層	21.3	(4.2)	1／8	〃	20	
7	〃	甕	R479	SD16・2区	16.0	(5.6)	1／8	〃		

（石　器）

遺物番号	形態	出土地点		寸法(cm)			挿図番号	図版番号	備考
		次数	遺構・層位	長さ	幅	厚さ			
8	独鈷石	R385	SD01・1区	(6.9)	(5.1)	(4.7)	64	20	砂岩
9	石鏃	R479	SD05・1区	1.8	0.95	0.2	〃	〃	サヌカイト
10	〃	R413	茶灰色土	4.7	2.15	0.3	〃	〃	〃
11	石庖丁	R448	精査	(3.3)	3.7	0.45	〃	〃	粘板岩
12	〃	R413	耕作土	(3.05)	(1.85)	0.45	〃	〃	〃

（土師器・須恵器・施釉陶器）

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm)（ ）内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径〔底径〕	器高				
13	須恵器	杯B蓋	R479	SE14上層	17.6	2.6	1／8	65		
14	土師器	皿A	R448	SD04・4区	18.2	2.4	1／4	〃		
15	〃	杯A	R479	SE14下層	17.4	(3.1)	1／5	〃		
16	〃	杯B	R448	SD04・1区	16.6	4.8	底部1／3、口縁部小片	〃		
17	須恵器	壺	〃	SD04・4区	・・・	(6.8)	底部1／8	〃		
18	〃	〃	〃	茶灰色土	〔13.6〕	(7.6)	底部1／3	〃		
19	〃	硯	〃	精査	長さ(3.5)	幅(4.2)	厚さ(1.1)	〃	21	猿投産
20	〃	〃	R385	SD01・1区	長さ(5.1)	幅(5)	厚さ(1.2)	〃	〃	〃
21	土師器	甕	R479	SE14	20.2	(4.6)	1／5	〃		
22	〃	〃	〃	SD17	22.3	18.8	1／3	〃	21	
23	須恵器	羽釜	R385	SD01・3区	17.9	(5.3)	小片	〃		
24	〃	椀	R448	SD01・2区2層	〔6.2〕	(1.4)	底部	〃		
25	緑釉	椀	〃	SD02・1区1層	〔6.6〕	(1.5)	底部1／2	〃	21	
26	須恵器	皿	R479	SE09・2区2層	〔6.4〕	(2.1)	底部	〃		

（瓦）

遺物番号	形態	出土地点		寸法(cm)			挿図番号	図版番号	備考
		次数	遺構・層位	長さ	幅	厚さ			
27	軒丸瓦	R413	SE01・3層	・・・	・・・	・・・	66	22	
28	軒平瓦	R448	茶灰色土	・・・	・・・	・・・	〃		長岡宮式7757A型式
29	〃	R479	SE14	・・・	・・・	・・・	〃	22	平城宮式6664A型式
30	平瓦	〃	〃	・・・	・・・	2.2	〃		
31	〃	〃	〃	・・・	・・・	2.1	〃		
32	丸瓦	〃	〃	・・・	・・・	・・・	〃		
33	〃	〃	〃	・・・	・・・	・・・	〃		
34	〃	〃	〃	39.8	18.2	2.1	〃	22	ほぼ完形
35	平瓦	〃	〃	・・・	・・・	2.0	67		

（土器・陶磁器）

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm)（ ）内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径〔底径〕	器高				
36	土師器	皿	R385	SX07	7.1	1.3	完形	69	23	粘土を継ぎ足す
37	〃	〃	〃	〃	7.4	1.4	〃	〃	〃	
38	〃	〃	〃	〃	7.7	1.2	〃	〃	〃	
39	〃	〃	〃	〃	7.4	1.5	〃	〃	〃	
40	〃	〃	〃	〃	7.6	1.3	〃	〃	〃	

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm)（　）内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径〔底径〕	器高				
41	土師器	皿	R385	SX07	7.5	1.4	完形	69	23	
42	〃	〃	〃	〃	7.7	1.0	〃	〃	〃	
43	〃	〃	〃	〃	7.6	1.5	〃	〃	〃	
44	〃	〃	〃	〃	7.5	1.3	〃	〃	〃	
45	〃	〃	〃	〃	7.5	1.1	〃	〃	〃	底部に圧痕
46	〃	〃	〃	〃	7.7	1.1	〃	〃	〃	
47	〃	〃	〃	〃	8.0	1.2	〃	〃	〃	
48	〃	〃	〃	〃	7.8	1.3	〃	〃	〃	
49	〃	〃	〃	〃	7.9	1.3	〃	〃	〃	
50	〃	〃	〃	〃	7.8	1.0	〃	〃	〃	
51	〃	〃	〃	〃	7.8	1.3	〃	〃	〃	
52	〃	〃	〃	〃	7.9	1.2	〃	〃	〃	底部に圧痕
53	〃	〃	〃	〃	7.8	1.4	〃	〃	〃	
54	〃	〃	〃	〃	7.9	1.1	〃	〃	〃	
55	〃	〃	〃	〃	7.8	1.4	〃	〃	〃	
56	〃	〃	〃	〃	8.0	1.2	〃	〃	〃	
57	〃	〃	〃	〃	8.0	1.4	〃	〃	〃	底部に圧痕
58	〃	〃	〃	〃	8.1	1.3	〃	〃	〃	〃
59	〃	〃	〃	〃	8.1	1.3	〃	〃	〃	
60	〃	〃	〃	〃	8.4	1.0	1／2	〃	〃	
61	〃	〃	〃	〃	9.8	2.0	完形	〃	24	
62	〃	〃	〃	〃	9.8	1.6	〃	〃	〃	
63	〃	〃	〃	〃	10.0	1.7	〃	〃	〃	底部に圧痕
64	〃	〃	〃	〃	10.0	1.9	〃	〃	〃	
65	〃	〃	〃	〃	10.1	2.2	〃	〃	〃	底部に圧痕
66	〃	〃	〃	〃	10.1	2.0	〃	〃	〃	
67	〃	〃	〃	〃	10.1	1.8	〃	〃	〃	底部に圧痕
68	〃	〃	〃	〃	10.1	1.9	〃	〃	〃	
69	〃	〃	〃	〃	10.2	2.0	2／3	〃	〃	
70	〃	〃	〃	〃	10.2	1.8	完形	〃	〃	
71	〃	〃	〃	〃	10.2	1.9	〃	〃	〃	
72	〃	〃	〃	〃	10.2	1.9	〃	〃	〃	
73	〃	〃	〃	〃	10.4	1.9	〃	〃	〃	
74	〃	〃	〃	〃	10.2	2.0	〃	〃	〃	
75	〃	〃	〃	〃	10.4	1.8	〃	〃	〃	
76	〃	〃	〃	〃	10.3	1.9	〃	〃	〃	
77	〃	〃	〃	〃	10.5	2.0	〃	〃	〃	
78	〃	〃	〃	〃	10.6	2.2	〃	〃	〃	
79	〃	〃	〃	〃	10.5	2.0	〃	〃	〃	
80	〃	〃	〃	〃	10.6	2.1	〃	〃	〃	
81	〃	〃	〃	〃	10.6	2.1	〃	〃	〃	
82	〃	〃	〃	〃	10.7	2.0	〃	〃	〃	
83	〃	〃	〃	〃	10.6	2.0	1／2	〃	〃	
84	〃	〃	〃	〃	10.6	1.8	〃	〃	〃	
85	〃	〃	〃	〃	10.7	2.0	完形	〃	〃	
86	〃	〃	〃	〃	10.2	1.7	〃	〃	〃	
87	〃	〃	〃	〃	10.7	2.0	〃	〃	〃	
88	〃	〃	〃	〃	10.8	1.5	〃	〃	〃	底部に圧痕
89	〃	〃	〃	〃	10.8	1.8	〃	〃	〃	
90	〃	〃	〃	〃	10.7	2.2	〃	〃	〃	底部に圧痕
91	〃	〃	〃	〃	10.8	1.9	〃	〃	〃	
92	〃	〃	〃	〃	10.8	1.7	〃	〃	〃	
93	〃	〃	〃	〃	10.7	2.3	〃	〃	〃	
94	〃	〃	〃	〃	10.8	1.8	〃	〃	〃	
95	〃	〃	〃	〃	10.8	1.9	〃	〃	〃	
96	〃	〃	〃	〃	11.0	1.7	〃	〃	〃	
97	〃	〃	〃	〃	10.7	2.1	2／3	〃	〃	
98	土師器	椀	〃	〃	11.7	2.7	完形	〃	25	白色系
99	〃	〃	〃	〃	11.8	3.5	〃	〃	〃	
100	瓦器	椀	〃	〃	10.8	3.5	〃	〃	〃	
101	〃	〃	〃	〃	11.6	3.8	〃	〃	〃	
102	〃	〃	〃	〃	11.9	4.1	〃	〃	〃	
103	〃	〃	〃	〃	12.0	4.2	〃	〃	〃	
104	〃	〃	〃	〃	12.4	4.1	〃	〃	〃	
105	〃	〃	〃	〃	12.2	4.0	〃	〃	〃	

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm)（ ）内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径(底径)	器高				
106	瓦器	椀	R385	SX07	12.1	4.4	完形	69	25	
107	〃	〃	〃	〃	12.2	3.8	〃	〃	〃	
108	〃	〃	〃	〃	12.4	3.9	〃	〃	〃	
109	〃	〃	〃	〃	12.4	3.9	〃	〃	〃	
110	〃	〃	〃	〃	12.5	3.9	〃	〃	〃	
111	〃	〃	〃	〃	12.3	4.0	〃	〃	〃	
112	土師器	皿	R448	SD02・1区1層	7.0	1.0	1/2	70		
113	〃	〃	〃	SD02・1区1層	6.8	1.2	1/3	〃		
114	〃	〃	R385	SD03	7.0	1.2	1/3	〃		
115	〃	〃	R448	SD02・1区2層	7.5	1.2	完形	〃		
116	〃	〃	〃	SD02・1区1層	7.4	1.3	1/4	〃		
117	〃	〃	R385	SD03・3区北	7.4	1.0	完形	〃		灯明皿
118	〃	〃	〃	SD03・3区中央	7.4	1.2	1/2	〃		
119	〃	〃	〃	SD03	7.6	1.0	1/2	〃		底部に圧痕
120	〃	〃	〃	〃	7.7	0.9	2/3	〃		
121	〃	〃	〃	〃	7.7	1.3	3/4	〃		
122	〃	〃	R448	SD02・3区1層	7.6	1.3	1/2	〃		
123	〃	〃	〃	SD02・1区2層	7.5	1.4	完形	〃		
124	〃	〃	〃	SD02・1区1層	7.7	1.1	3/4	〃		
125	〃	〃	〃	SD02・1区2層	7.4	1.3	完形	〃		
126	〃	〃	R385	SD03	7.5	1.1	〃	〃		
127	〃	〃	〃	〃	7.6	1.4	〃	〃		
128	〃	〃	〃	SD03・3区南	7.5	1.5	〃	〃		
129	〃	〃	R448	SD02・1区2層	8.2	1.3	1/2	〃		
130	〃	〃	R385	SD03	7.8	1.1	完形	〃		
131	〃	〃	〃	〃	8.3	1.1	〃	〃		
132	〃	〃	〃	SD03南拡張区	9.2	1.8	〃	〃		
133	〃	〃	R448	SD02・1区2層	9.6	1.7	1/2	〃		
134	〃	〃	〃	〃	9.5	2.1	完形	〃		
135	〃	〃	〃	〃	9.8	1.8	3/4	〃		
136	〃	〃	〃	〃	9.8	2.1	1	〃		
137	〃	〃	〃	〃	10.0	2.0	完形	〃		
138	〃	〃	〃	〃	10.0	1.8	1/2	〃		
139	〃	〃	〃	〃	10.2	2.0	1/3	〃		
140	〃	〃	R385	SD03・3区	10.2	1.7	完形	〃		底部に圧痕
141	〃	〃	〃	〃	10.2	2.2	〃	〃		
142	〃	〃	〃	SD03	10.2	1.8	〃	〃		
143	〃	〃	〃	〃	10.3	1.9	3/4	〃		
144	〃	〃	〃	〃	10.3	1.6	1/2	〃		
145	〃	〃	〃	〃	10.4	1.9	〃	〃		底部に圧痕
146	〃	〃	〃	SD03・3区	10.6	2.1	完形	〃		
147	〃	〃	〃	SD03	10.9	2.1	〃	〃		底部に圧痕
148	〃	〃	〃	〃	10.7	2.0	〃	〃		
149	〃	〃	R448	SD02・1区2層	11.4	1.9	1/3	〃		
150	〃	〃	R385	SD03・3区	11.6	2.1	3/4	〃		
151	〃	〃	〃	SD03	10.4	1.8	2/3	〃		
152	〃	椀	〃	SD03	11.2	3.7	完形	〃		底部に圧痕
153	〃	〃	〃	SD03・3区南	10.8	3.3	〃	〃		
154	〃	〃	〃	SD03	11.3	3.8	〃	〃		底部に圧痕
155	〃	〃	〃	SD03・3区南	10.9	3.4	〃	〃		〃
156	〃	〃	R448	SD02・1区2層	11.6	3.3	3/4	〃		
157	〃	〃	R385	SD03	11.5	3.9	完形	〃		
158	〃	〃	〃	SD03・3区南	11.6	3.4	1/2	〃		
159	〃	〃	R448	SD02・1区	11.7	(3.7)	1/2	〃		
160	瓦器	〃	R385	SD03南拡張区上面	12.0	3.6	完形	〃		
161	〃	〃	〃	SD03・2区	10.9	3.2	〃	〃		
162	〃	〃	R448	SD02・1区2層	11.1	3.6	〃	〃		
163	〃	〃	R385	SD03	11.2	4.2	〃	〃		
164	〃	〃	〃	SD03・3区	12.2	3.7	〃	〃		
165	〃	〃	〃	〃	11.8	4.0	〃	〃		
166	〃	〃	〃	〃	11.7	3.8	〃	〃		
167	〃	〃	〃	SD03	11.5	3.6	〃	〃		
168	〃	〃	〃	〃	12.1	4.3	〃	〃		
169	〃	〃	R448	SD02・1区1層	12.3	3.9	1/2	〃		
170	〃	〃	〃	〃	12.4	3.9	完形	〃		

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm) ( )内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径〔底径〕	器高				
171	瓦器	椀	R385	SD03	12.2	4.1	完形	70		
172	〃	〃	R448	SD02・1区2層	12.4	4.0	〃	〃		
173	〃	〃	R385	SD03	12.1	4.1	〃	〃		
174	〃	〃	R448	SD02・1区1層	12.5	3.8	2/3	〃		
175	〃	〃	〃	SD02・1区2層	12.7	3.7	1/3	〃		
176	須恵器	鉢	R385	SD03・3区上面	32.6	(8.7)	口縁部小片	71		東播系
177	〃	〃	〃	〃	〔9.5〕	(6.0)	底部	〃		〃
178	瓦器	小型羽釜	〃	SD03南拡張区	7.9	(5.2)	1/4	〃		脚部1本
179	〃	鍋	〃	SD03南拡張区	22.6	(4.3)	1/7	〃		
180	〃	〃	〃	SD03・3区上面	23.1	(6.0)	1/6	〃		
181	〃	〃	〃	〃	17.0	(6.0)	1/5	〃		
182	〃	羽釜	〃	SD03上面	29.0	(6.0)	〃	〃		
183	〃	〃	〃	SD03	35.9	(14.3)	1/6	〃		
184	〃	〃	〃	SD03南拡張区	38.6	(15.1)	1/3	〃		
185	〃	鍋	〃	SD03・3区上面	18.8	(9.0)	1/4	72		
186	〃	〃	〃	SD03・3区	29.4	12.0	1/3	〃		
187	〃	〃	R448	SD02・1区2層	29.4	(12.3)	1/6	〃		
188	〃	小型壺	R479	SE09・2区2層	2.5	3.7	完形	73	26	
189	土師器	皿	〃	〃	7.6	1.5	〃	〃		底部に圧痕、灯明皿
190	〃	〃	〃	〃	7.6	1.3	〃	〃		〃
191	〃	〃	〃	〃	7.9	1.2	〃	〃		灯明皿
192	〃	〃	〃	SE09・7層	8.2	1.3	完形	73		
193	〃	〃	〃	SE09・2層	9.5	2.2	〃	〃		
194	〃	〃	〃	SE09・2区2層	9.7	1.8	〃	〃		
195	〃	〃	〃	〃	9.7	1.5	〃	〃		
196	瓦器	椀	〃	SE09・2区2層	12.6	4.1	1/3	〃		
197	〃	〃	〃	〃	12.3	3.7	〃	〃		
198	〃	〃	〃	〃	12.1	3.6	1/4	〃		
199	〃	〃	〃	SE09・2区1層	11.3	2.8	2/3	〃	26	
200	〃	〃	〃	〃	10.0	3.3	2/3	〃		
201	土師器	皿	R413	P27	6.7	1.1	1/4	74		
202	〃	〃	R448	SK07	7.5	1.1	1/3	〃		
203	〃	〃	R413	P108	7.0	1.4	2/3	〃		
204	〃	〃	〃	〃	7.1	1.1	1/2	〃		
205	〃	〃	〃	〃	7.5	1.4	完形	〃		
206	〃	〃	〃	〃	7.6	1.2	1/3	〃		
207	〃	〃	〃	〃	7.8	1.4	1/4	〃		ゆがんだ小片
208	〃	〃	〃	〃	7.8	1.3	1/5	〃		〃
209	〃	〃	〃	〃	7.1	1.6	1/4	〃		〃
210	〃	〃	R448	SD01・3区2層	9.5	1.3	1/2	〃		底部に圧痕
211	〃	椀	〃	茶灰色土	11.5	(3.5)	1/5	〃		
212	瓦器	〃	R479	SD17	10.1	(3.2)	2/3	〃		
213	〃	〃	R385	SD03上面	12.0	3.6	完形	〃		
214	〃	小型羽釜	R413	SK06	8.3	(5.0)	2/3	〃		脚部欠失
215	〃	羽釜	R385	SK19	22.3	(12.3)	2/3	〃		
216	〃	〃	R448	SD01・3区2層	22.6	16.4	2/3	〃	26	
217	〃	〃	R385	SK19	31.8	(9.0)	1/5	〃		
218	〃	〃	〃	SD03	34.6	(9.7)	1/4	〃		
219	陶器	甕	R413	SE01・3層	・・・	(4.5)	口縁部小片	〃	27	常滑焼
220	〃	〃	R385	SD01・3区	・・・	(7.0)	〃	〃		〃
221	〃	〃	R448	暗茶褐色土	・・・	(9.0)	〃	〃		〃
222	〃	〃	R413	SE01・3層	41.5	(17.8)	〃	〃	27	〃
223	土師器	皿	R448	SD01・3区2層	4.4	1.2	1/4	75		
224	〃	〃	R385	SD01・1区	7.6	1.8	2/3	〃		
225	陶器	〃	R448	SD01・4区2層	9.2	1.8	1/2	〃	26	瀬戸・美濃焼
226	〃	壺	〃	SD01・2区2層	〔12.4〕	(2.2)	底部1/3	〃	〃	〃
227	〃	甕	〃	SD01・4区1層	・・・	(8.5)	口縁部小片	〃	27	信楽焼
228	〃	鉢	〃	SD01・2区2層	・・・	(5.0)	底部小片	〃	〃	〃
229	〃	平碗	〃	SD01・1区1層	・・・	(4.4)	〃	〃	26	瀬戸・美濃焼
230	〃	すり鉢	R385	SD01・3区	23.5	8.1	1/5	〃		備前焼
231	〃	〃	〃	〃	30	(6.4)	口縁部小片	〃		〃
232	青磁	碗	〃	〃	〔6.8〕	(3.0)	底部2/3	〃	28	
233	〃	〃	〃	〃	〔6.5〕	(2.5)	底部1/2	〃	〃	双魚文
234	土師器	皿	R413	SE01・5層	6.4	1.4	2/3	76	26	
235	陶器	〃	〃	SE01・3層	〔4.5〕	(1.5)	底部2/3	〃	〃	瀬戸・美濃焼

遺物番号	種別	器形	出土地点		寸法(cm)（ ）内は現存値		残存度	挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	口径〔底径〕	器高				
236	陶器	皿	R413	SE01	10.4	2.4	1／4	〃	26	〃
237	青磁	碗	〃	SE01・3層	〔5.4〕	(2.3)	底部	〃		
238	瓦器	羽釜	〃	SE01・4層	31.5	(13.2)	1／2	〃		
239	土師器	小型壺	R479	SX02精査	2.0	2.6	完形	77	26	
240	須恵器	小型皿	R448	SK07	4.3	1.0	〃	〃	〃	
241	土師器	皿	R413	SK04	6.9	1.5	〃	〃		
242	〃	〃	〃	耕作土	7.0	1.6	〃	〃		内面全体にハケメが残る
243	〃	〃	〃	東拡張区精査	13.2	(2.8)	1／7	〃	26	
244	〃	〃	R479	SE09・2区1層	13.6	3.2	2／3	〃	〃	
245	〃	〃	〃	SE03下層	16.2	(2.8)	1／5	〃		
246	〃	〃	R413	P74	16.3	3.3	1／2	〃	26	
247	〃	〃	〃	暗灰色土	16.0	3.6	1／5	〃		
248	陶器	碗	R413	SK04	11.9	(6.5)	1／4	77		瀬戸・美濃焼
249	〃	平碗	R479	SE03上層	17.0	(4.6)	1／6	〃	26	〃
250	〃	壺	〃	SX02・20区	・・・	(9.4)	頸部2／3	〃	〃	〃
251	〃	甕	R413	精査	・・・	(5.4)	口縁部小片	〃	27	信楽焼
252	〃	壺	〃	SX05・3区	・・・	(6.8)	胴部小片	〃	〃	〃　沈線1条
253	〃	すり鉢	〃	SK06	・・・	(7.0)	口縁部小片	〃	〃	〃
254	〃	〃	R448	SD01・1区2層	・・・	(5.7)	〃	〃	〃	備前焼
255	〃	〃	〃	SD01・2区2層	・・・	(8.8)	〃	〃	〃	〃
256	瓦器	火鉢	R385	SD01・1区	26.6	(7.2)	口線1／10	78		
257	〃	〃	〃	SD01・2区	30.4	(7.7)	口線1／8	〃		
258	〃	〃	R413	SE01第4層	・・・	(5.9)	口縁部小片	〃		
259	〃	〃	R479	SX02・8区	・・・	(4.9)	〃	〃		方形か
260	〃	〃	R385	SD01・精査	・・・	(3.4)	〃	〃		
261	〃	〃	〃	SD01・1区	27.2	(5.7)	〃	〃		口径にあわせて復元
262	〃	風炉	R413	SE01・3層	・・・	(6.2)	〃	〃		火窓が一部残る
263	〃	〃	R479	SK07・1区	・・・	(3.6)	〃	〃		〃
264	〃	〃	R448	SD01・1層	・・・	(4.9)	〃	〃		
265	〃	〃	R413	SX05・3区	・・・	(3.9)	〃	〃		
266	〃	〃	〃	SE01第4層	・・・	(5.2)	〃	〃		
267	〃	〃	R479	SK08・1区	・・・	(7.1)	〃	〃		
268	〃	〃	R385	SD01・2区	37.5	(6.0)	〃	〃		
269	〃	〃	〃	〃	・・・	(4.4)	小片	〃		
270	白磁	碗	R385	SD03・1区	〔7.3〕	(1.9)	底部	79		
271	〃	皿	R448	暗茶褐色土	11.8	(2.2)	1／5	〃		
272	〃	〃	R413	SX05・3区	11.0	(1.9)	1／4	〃	28	
273	〃	〃	R413	SE01・3層	〔3.7〕	(1.5)	底部	〃	〃	
274	青磁	碗	R448	SD01・3区1層	〔4.9〕	2.2	〃	〃	〃	
275	〃	皿	R413	SD07・4区	〔7.3〕	2.1	底部1／2	〃	〃	
276	鉄釉	壺	R413	SE02	〔6.1〕	5.0	底部1／2	79	29	
277	青磁	碗	R448	SD02・1区1層	15.7	(3.6)	1／7	〃	28	
278	〃	〃	〃	暗茶褐色土	18.0	(3.4)	1／8	〃	〃	
279	〃	盤	R413	SD05・3区 SD07・4区	23.2	(3.2)	1／8	〃	〃	

（木・金属・土・石製品）

遺物番号	種別	形態	出土地点		寸法(cm)			挿図番号	図版番号	備考
			次数	遺構・層位	長さ	幅	厚さ			
280	木製品	木球	R479	SE09	3.9	3.5	・・・	80	30	
281	〃	羽子板	〃	〃	24.1	5.1	0.7	〃	〃	
282	〃	刃形	〃	〃	34.3	2.9	0.5	〃	〃	
283	金属製品	火挟	R413	SX05	13.9	1.0	・・・	81	〃	
284	土製品	土錘	R448	茶灰色土	2.6	0.9	・・・	82	〃	
285	〃	加工円盤	〃	SD01・2区2層	4.9	4.5	0.9	〃		
286	〃	人形	R413	茶灰色土	3.4	3.1	1.7	〃	30	頭部欠損
287	〃	犬形	R479	茶灰色砂質土	4.6	2.1	・・・	〃	〃	
288	石製品	砥石	R479	SX02・20区	8.8	5.0	1.5	83	〃	
289	〃	〃	R364	P85	10.2	3.8	1.5	〃	〃	
360	木製品	陽物	R479	SE09	15.5	1.6	・・・	80	〃	

（図版の遺物）

遺物番号	種別	形態器形	出土地点 次数	出土地点 遺構・層位	図版番号	備考
290	弥生	高杯	R448	P7	20	
291	〃	壺	R364	SE02・1層	〃	
292	〃	〃	R413	精査	〃	
293	〃	甕	〃	SK06	〃	
294	〃	〃	〃	P91	〃	
295	石器	剝片	R479	SD05・1区	〃	
296	〃	〃	〃	耕作土	〃	
297	〃	〃	〃	SD04・8区	〃	
298	〃	〃	〃	茶灰色砂質土	〃	
299	須恵器	壺A蓋	〃	SD04・12区	21	
300	陶器	壺	R413	SD05・3区	〃	
301	土師器	椀	R385	SK18・北拡張区	〃	実測図 長岡京市文化財調査報告書　第29冊
302	〃	〃	〃	SK18	〃	
303	〃	杯	〃	SK18・北拡張区	〃	
304	須恵器	〃	〃	SK06・北拡張区上面	〃	
305	土師器	甕	〃	SK18	〃	
306	陶器	椀	〃	SD01・3区	〃	灰釉陶器
307	〃	皿？	〃	SD01・1区	〃	緑釉陶器
308	土師器	皿	R413	SE03・2区	26	
309	陶器	碗	〃	SE01・1区3層	〃	瀬戸・美濃焼
310	〃	〃	〃	SK06	〃	〃
311	〃	平碗	〃	耕作土	〃	〃
312	〃	甕	R385	南拡張区	27	常滑焼
313	〃	〃	R364	SK01	〃	〃
314	〃	すり鉢	R413	SE01・4層	〃	備前焼
315	〃	〃	〃	SE01・3層	〃	〃
316	〃	甕	R479	SK19・1区	〃	信楽焼
317	〃	〃	〃	SX02・11区	〃	〃
318	陶器	甕	R479	SX02・20区	27	信楽焼
319	〃	鉢	R413	SE01・第3層	〃	〃
320	白磁	合子蓋	R448	SD02・2層・1層	28	
321	〃	皿	R479	SX08・精査	〃	
322	〃	碗	R385	SK19	〃	
323	〃	皿	R479	耕作土	〃	
324	青磁	碗	R479	SE09・2区2層	〃	
325	〃	〃	〃	SE09・1区1層	〃	
326	〃	〃	〃	SE09・2区2層	〃	
327	〃	〃	R364	SK128	〃	
328	〃	〃	R479	SK08・1区	〃	
329	〃	〃	〃	SK18・1区	〃	
330	〃	〃	R479	SE09包含層	〃	
331	〃	〃	R413	SE01・1区3層	〃	
332	〃	壺	R479	SE09	〃	
333	〃	碗	R413	精査	〃	
334	〃	〃	〃	〃	〃	
335	〃	〃	R479	SD11・3区	〃	
336	〃	皿	〃	SX02・6区	〃	
337	〃	盤？	〃	不明	〃	
338	〃	花瓶	R364	SK20	〃	
339	染付	皿	R479	耕作土	29	景徳鎮
340	〃	碗	R413	耕作土	〃	初期伊万里焼
341	〃	〃	R413	耕作土	〃	〃
342	〃	〃	R385	SD01・3区	〃	〃
343	〃	〃	R479	耕作土	〃	肥前系磁器
344	〃	〃	R479	〃	〃	〃
345	〃	皿	R413	〃	〃	〃
346	〃	碗	R413	精査	29	〃
347	〃	皿	R364	トレンチ北断ち割り耕作土	〃	〃
348	〃	碗	R479	SD04・11区	〃	肥前系陶器
349	〃	〃	R448	暗褐色土	〃	〃
350	〃	〃	R479	耕作土	〃	〃
351	〃	〃	R385	南拡張区	〃	肥前産京焼風陶器
352	石製品	砥石	R479	精査	30	
353	〃	〃	〃	SK08	〃	
354	〃	〃	R413	SK12・2区	〃	
355	〃	〃	R479	SK13	〃	
356	〃	石仏	R413	SE01	〃	第83図に出土状況
357	〃	碁石	R479	SD17	〃	
358	〃	〃	〃	不明	〃	
359	土製品	泥面子	R364	SK20	〃	

付表11　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうきほうこくしょ　だい33さつ
書名	長岡京市文化財調査報告書　第33冊
副書名	
巻次	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第33冊
編著者名	中尾秀正・福永伸哉・杉井　健・木村泰彦・原　秀樹　他
編集機関	長岡京市教育委員会
所在地	〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号　TEL075-951-2121
発行年月日	西暦1995年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
井ノ内稲荷塚古墳(第2次調査) 長岡京跡 (右京第478次調査)	長岡京市井ノ内小西40	26209	10 107	34度 56分 17秒	135度 41分 16秒	19940720 ～ 19940811	40m²	古墳の範囲および主体部の残存状況の確認
長岡京跡 (右京第475次調査) 開田遺跡	長岡京市開田四丁目608－1他	26209	107 80	34度 55分 10秒	135度 41分 50秒	19940627 ～ 19940805	242m²	遺跡確認
長岡京跡 (右京第479次調査) 開田遺跡	長岡京市開田四丁目405－1	26209	107 80	34度 55分 3秒	135度 41分 53秒	19940822 ～ 19941007	297m²	遺跡確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井ノ内稲荷塚古墳(第2次調査) 長岡京跡 (右京第478次調査)	古墳 都城跡	古墳時代後期 平安時代前期 (長岡京期)	墳丘面・周溝 横穴式石室 (後円部) 木棺直葬 (前方部)	須恵器、墨書土器、土師器、陶磁器、鉄鏃、北宋銭	後円部・前方部とも良好に主体部が残存
長岡京跡 (右京第475次調査) 開田遺跡	都城跡 集落跡	平安時代前期 (長岡京期)	溝、柵列、土坑	土師器、須恵器、黒色土器、ロクロ土師器、赤彩土器、土馬、ミニチュアカマド、墨書人面土器、製塩土器、瓦、銅銭、木製品、石鏃、埴輪	六条々間南小路両側溝
長岡京跡 (右京第479次調査) 開田遺跡	都城跡 集落跡	平安時代前期 (長岡京期) 鎌倉末～南北朝 室町時代末期	掘立柱建物、井戸 井戸、溝、建物 井戸、堀、土坑	土師器、須恵器、瓦、土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、輸入磁器	

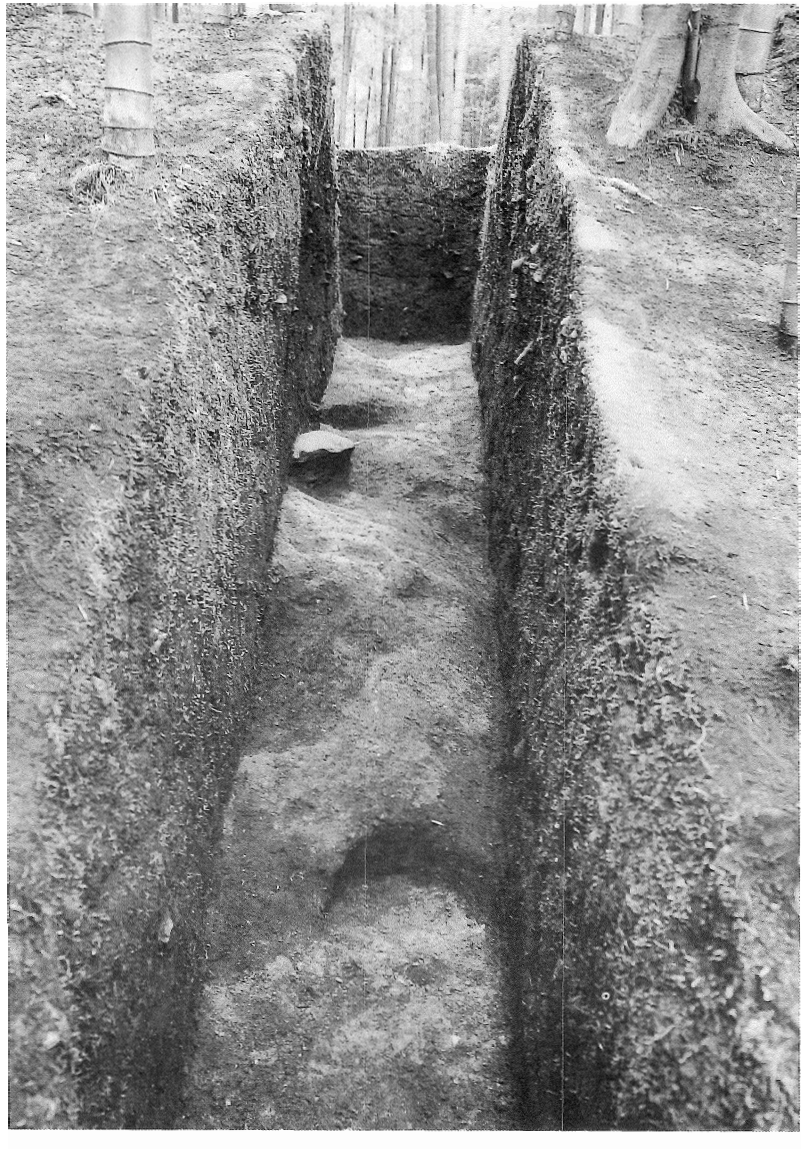
図　版

1　墳丘の現状(後円部から前方部を望む)

2　前方部墳項トレンチ(前方部から後円部を望む)

1　前方部第1トレンチ全景(南から)

2　前方部第2トレンチ全景(東から)



1　クビレ部第1トレンチ全景(西から)

2　クビレ部第2トレンチ全景(東から)

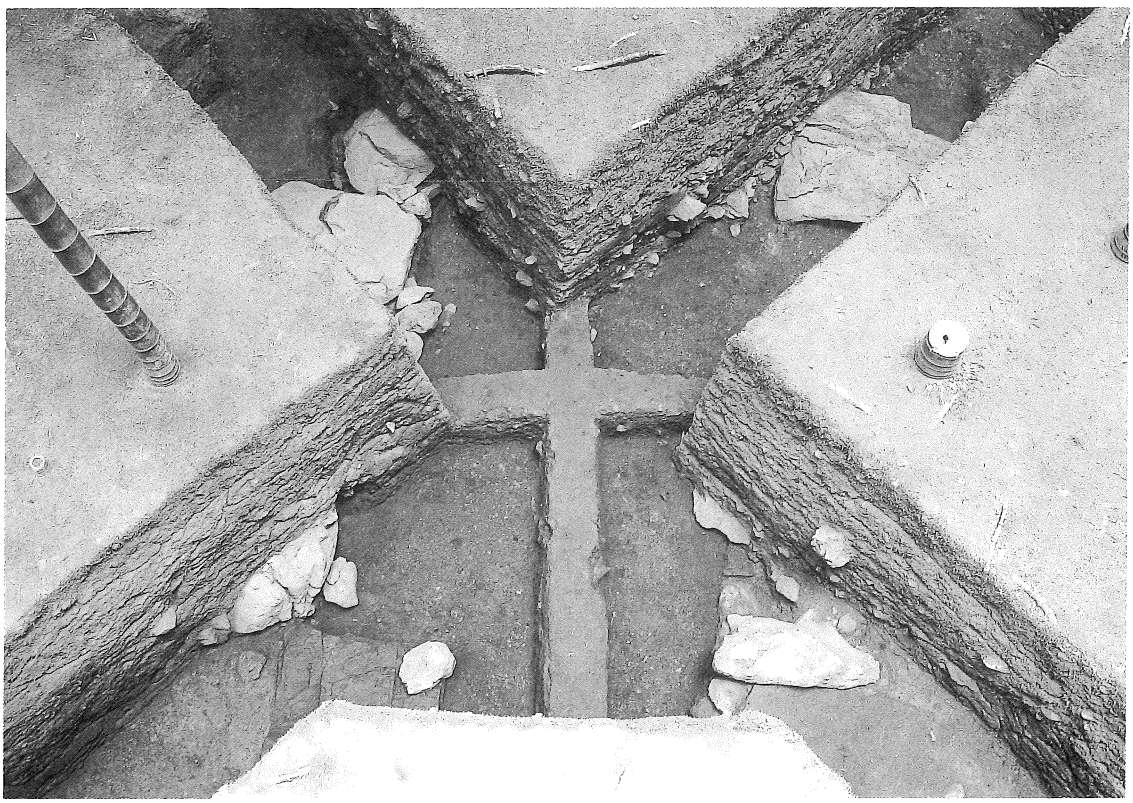
1　後円部第1トレンチ全景(北西から)

2　後円部第2トレンチ全景(北から)

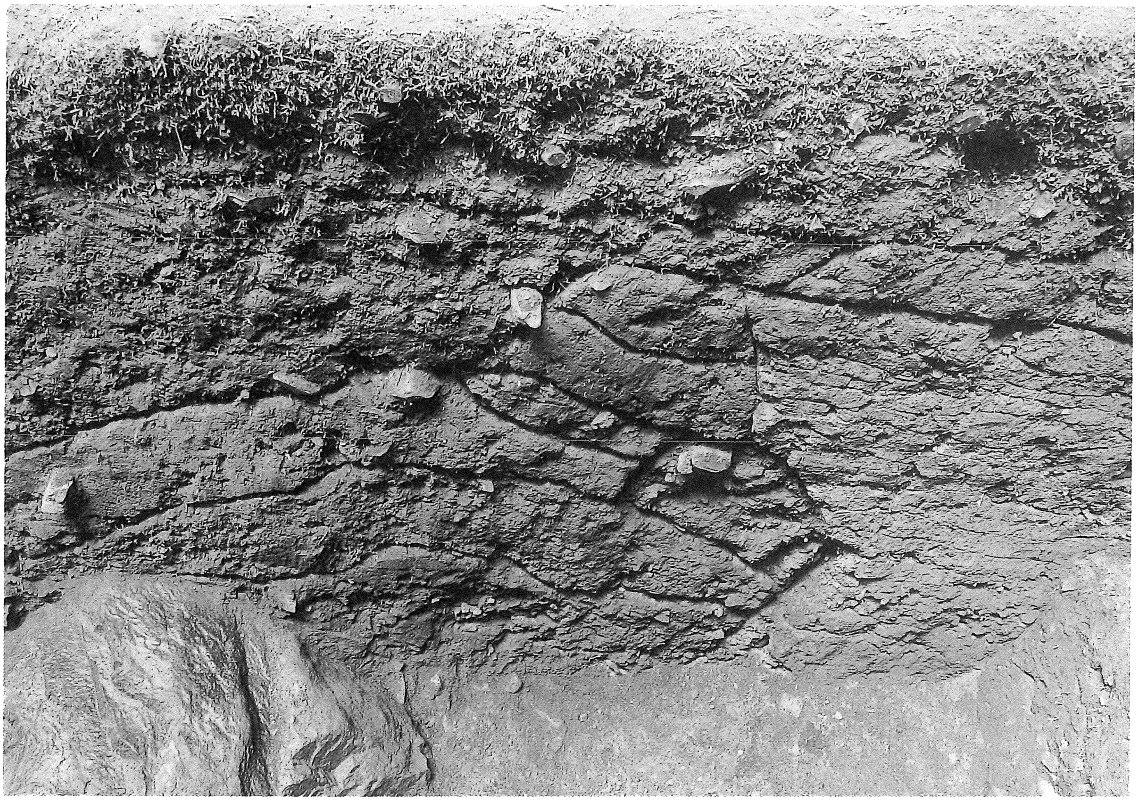
1　墳丘裾の浅い溝
（後円部第２トレンチ
北半部）

2　後円部第１トレンチ上部の
盛土状況（東小口壁）

1　後円部墳頂トレンチ全景(南から)

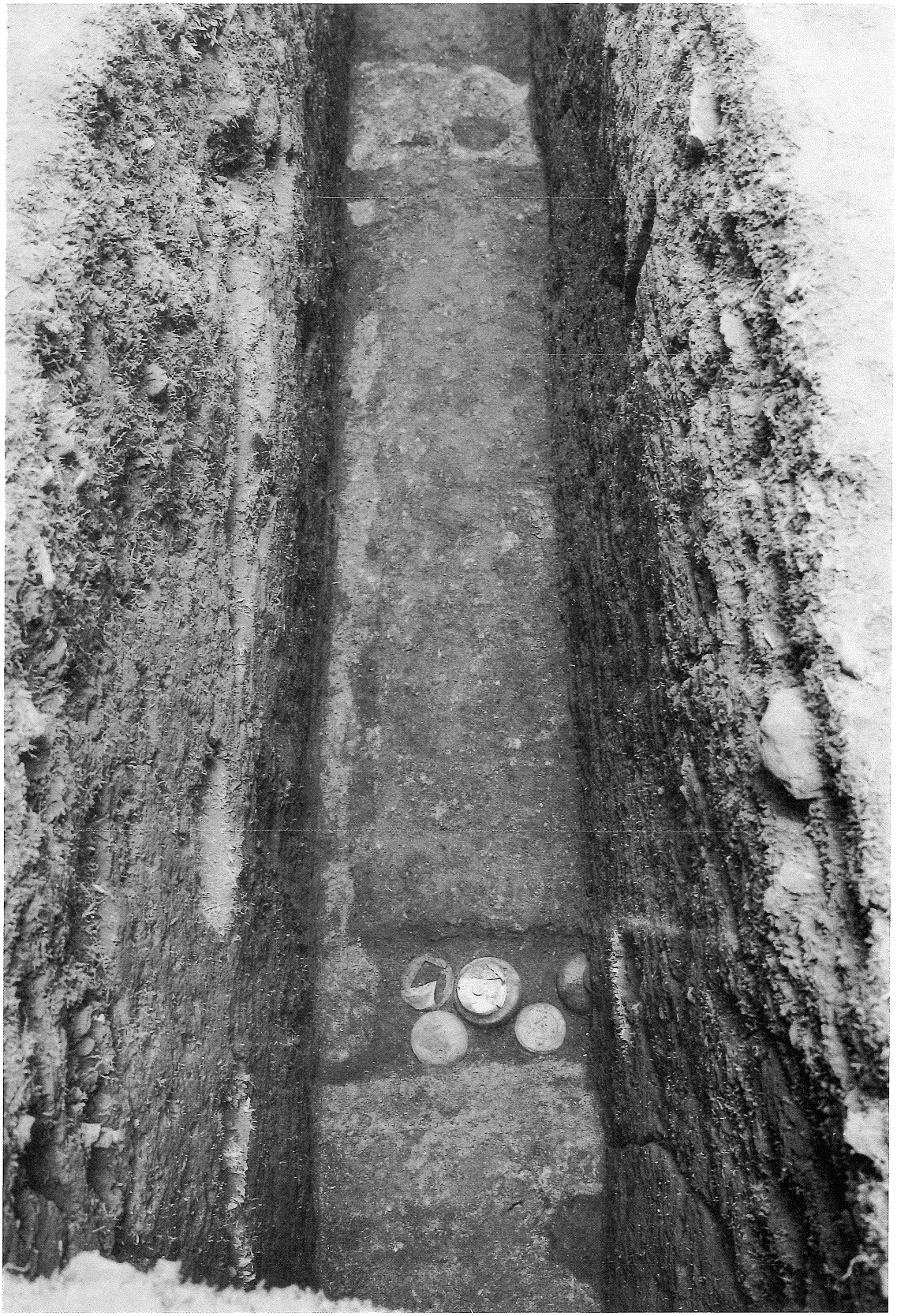


2　後円部横穴式石室(羨道側から)



1　後円部墳頂トレンチ東区北壁土層断面(攪乱の切り込みライン)

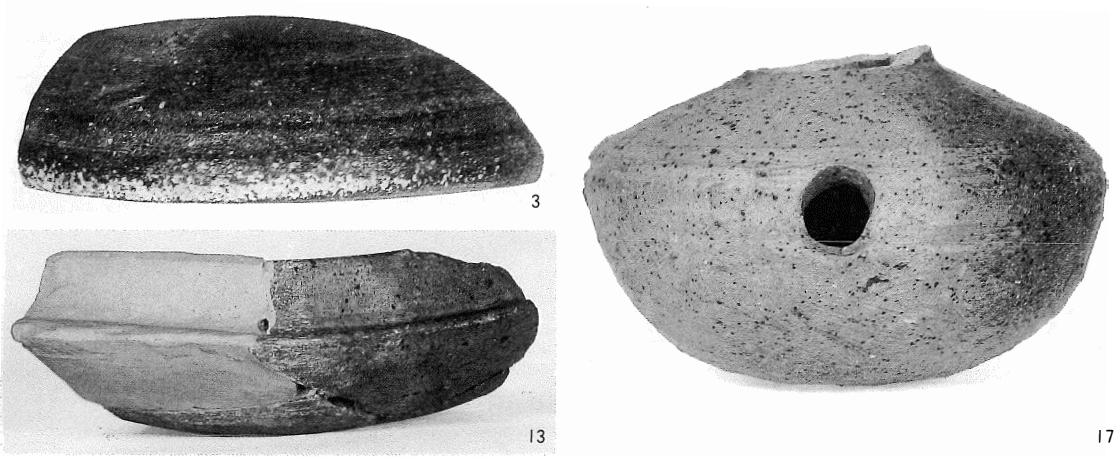
2　後円部墳頂トレンチ西区北壁土層断面(攪乱の切り込みライン)

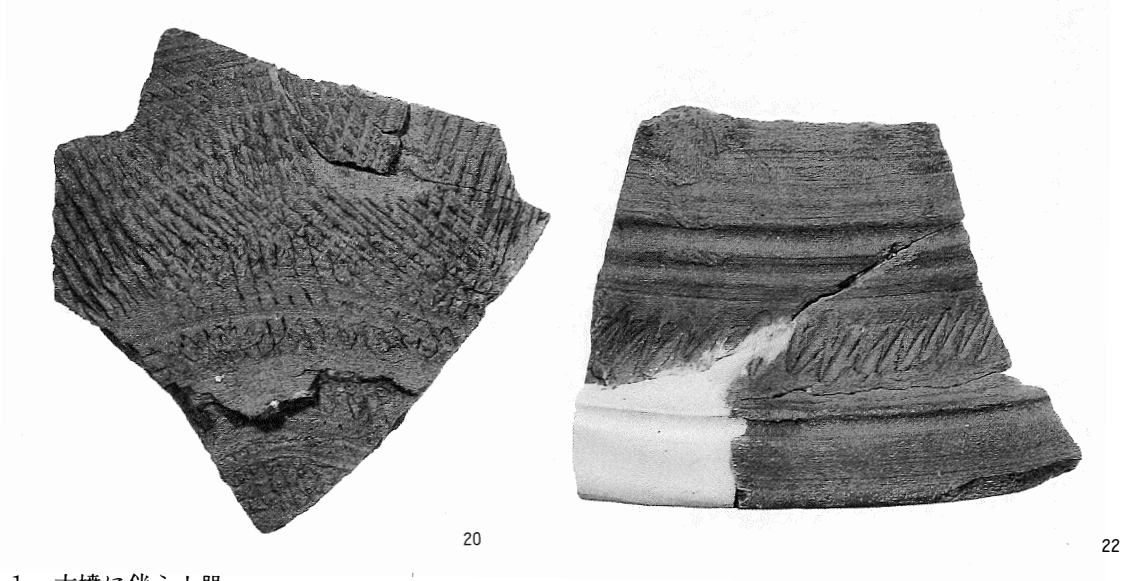


前方部木棺直葬

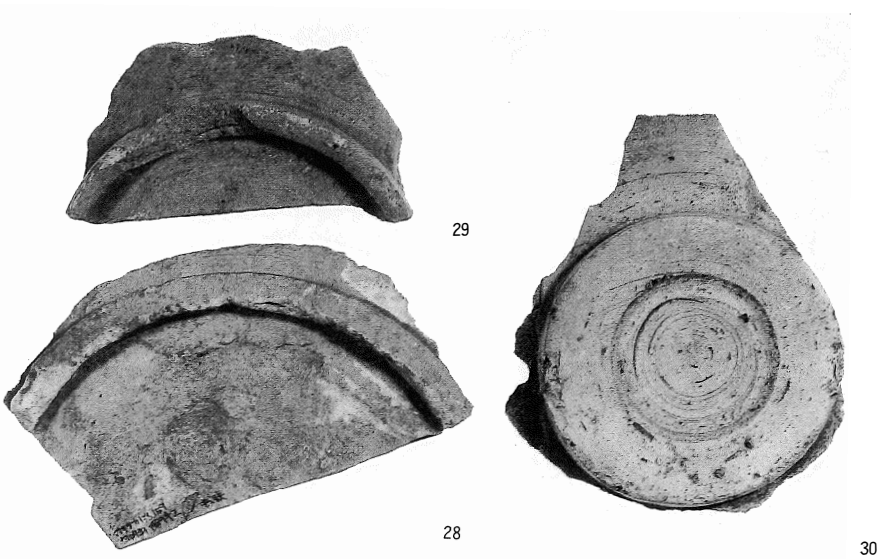
1　前方部墳頂トレンチ東区北壁土層断面

2　木棺に副葬された須恵器

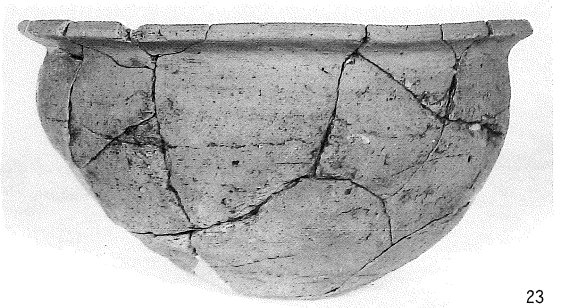


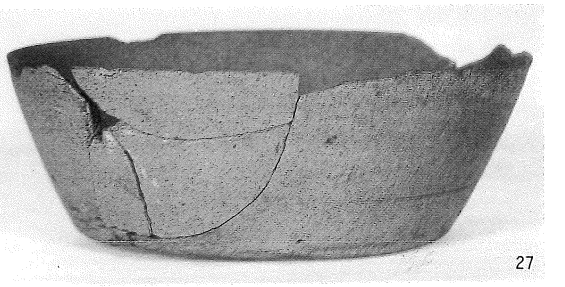


1　古墳に伴う土器



2　鉄鏃　　3　古墳以降の土器１


23


27

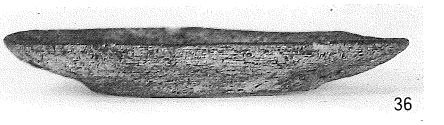
25

39

27

32

33


36

37

45

46

43

44

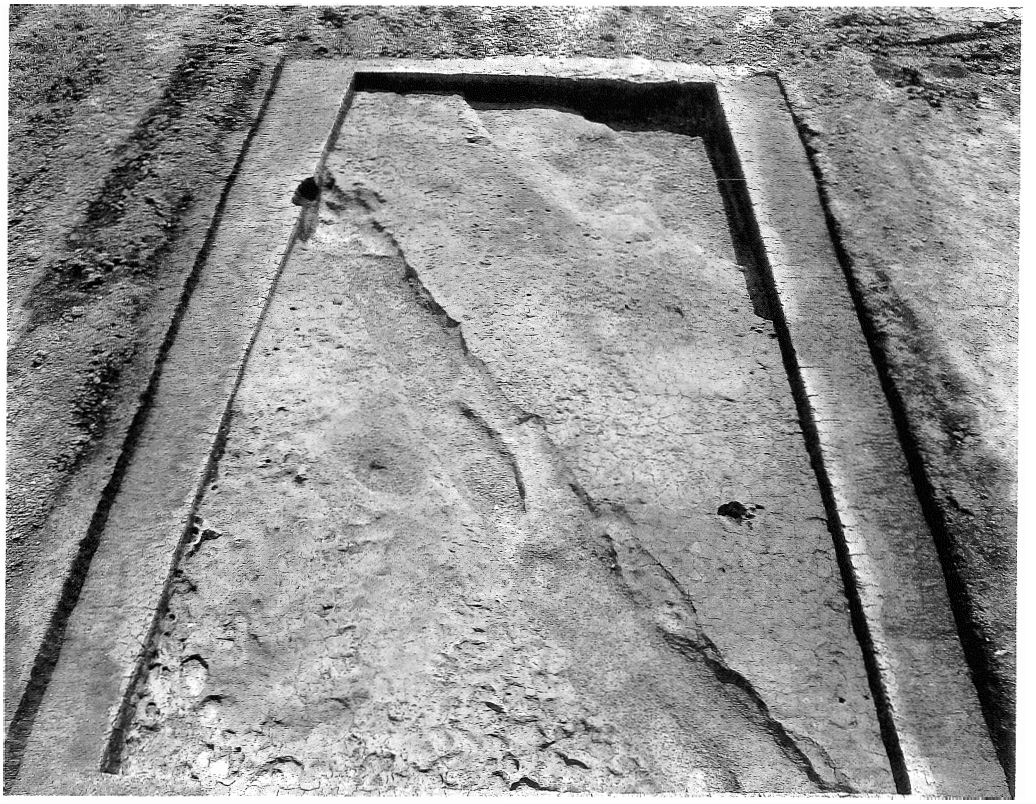
47

古墳以降の土器２

1　発掘調査地全景(南から)

2　六条々間南小路全景(西から)

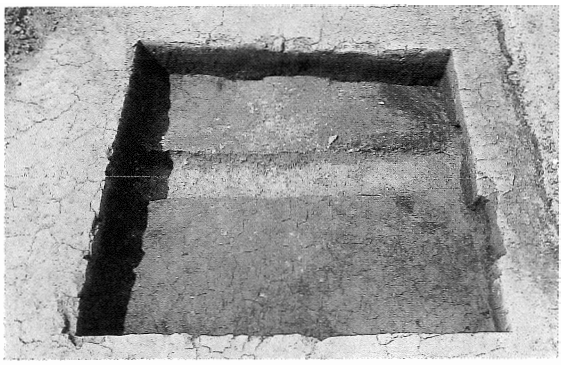
1　第１トレンチ遺構検出状況(南から)



2　第１トレンチ全景(西から)

1　第２トレンチ遺構検出状況(西から)

2　第２トレンチ全景(北から)

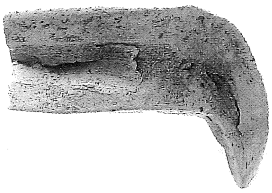


3　第３トレンチ全景(南から)

4　ＳＸ47501全景(北西から)

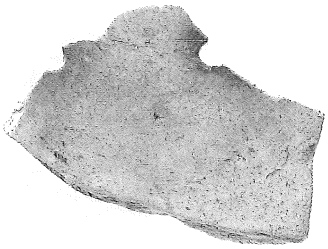
60

53

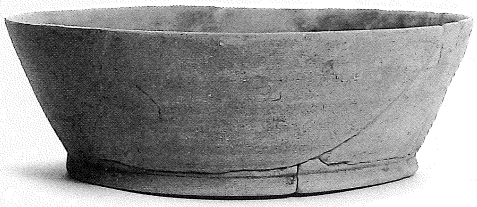


54

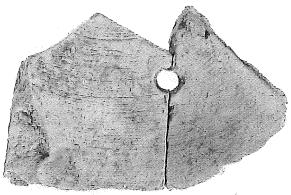
64



57

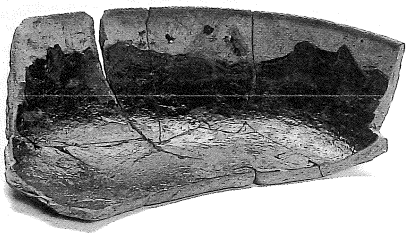


72

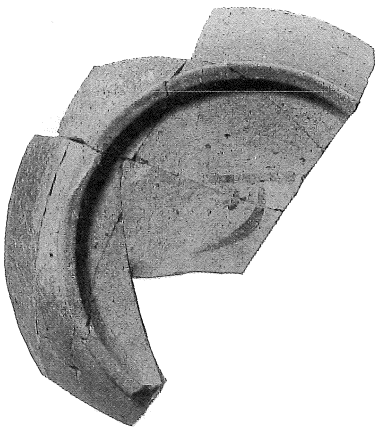


58

80



4



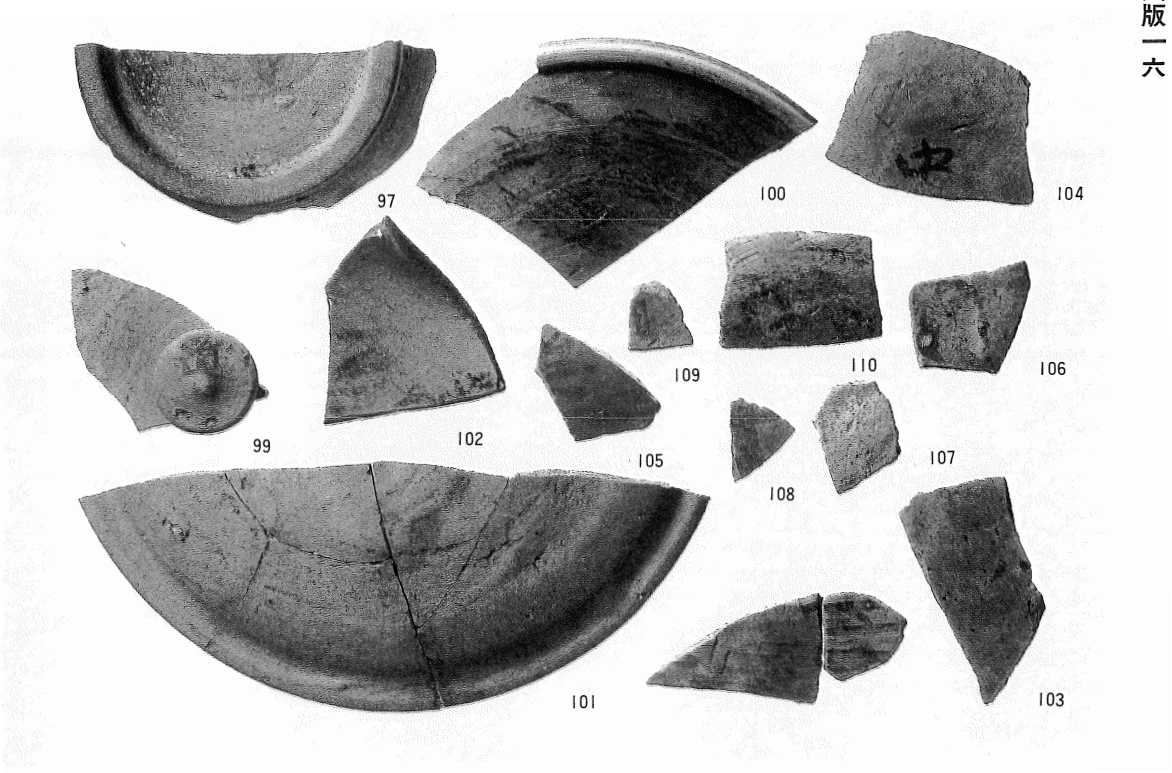
96

52

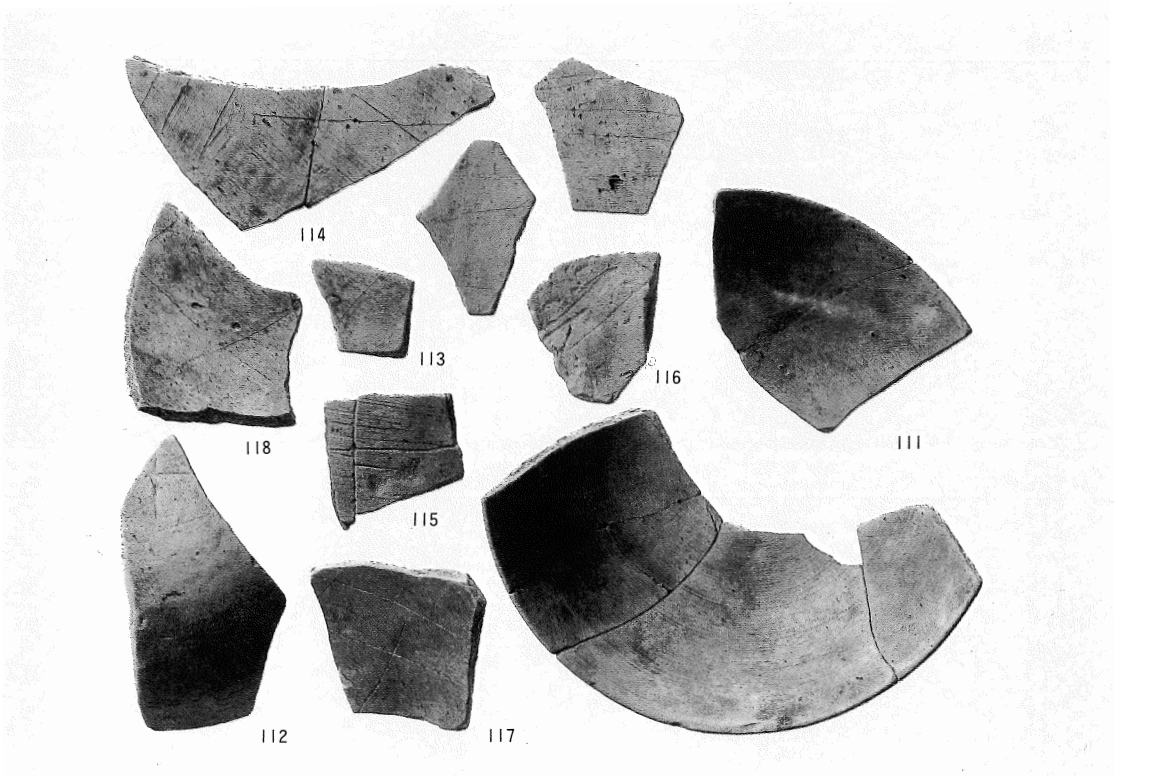
119

120

溝ＳＤ47503出土遺物



1　溝ＳＤ47503出土墨書土器

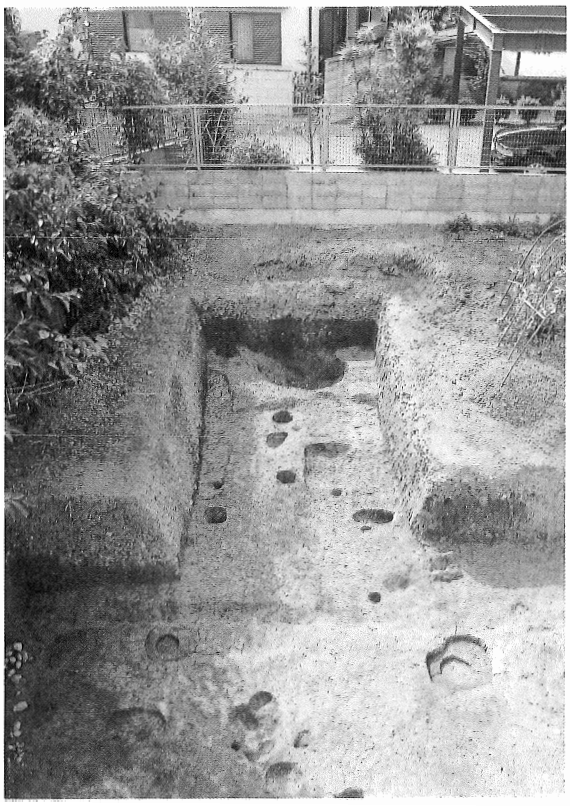


2　溝ＳＤ47503出土線刻土器

発掘調査地全景(北から)

1　溝ＳＤ47902検出状況（北から）

2　堀ＳＤ47905西壁（東から）

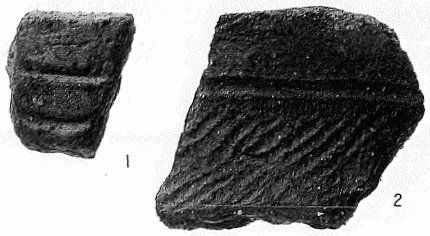


1　拡張区全景(東から)

2　井戸ＳＥ47909(東から)

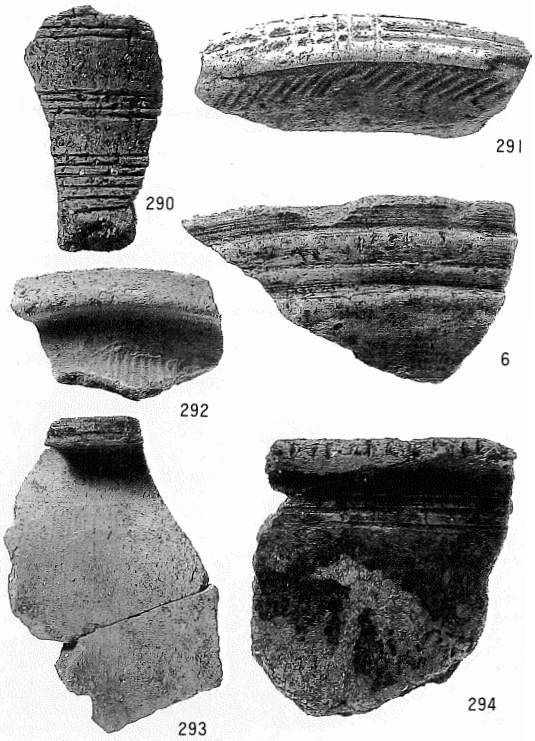
3　井戸ＳＥ47909出土の曲物(東から)

4　掘立柱建物ＳＢ47921(北から)

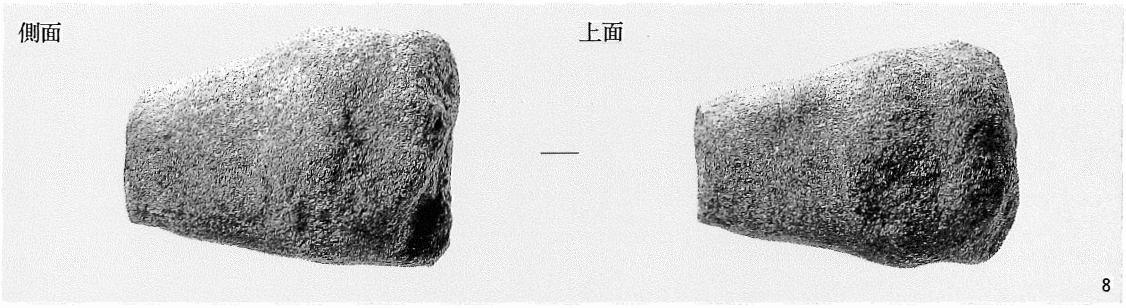


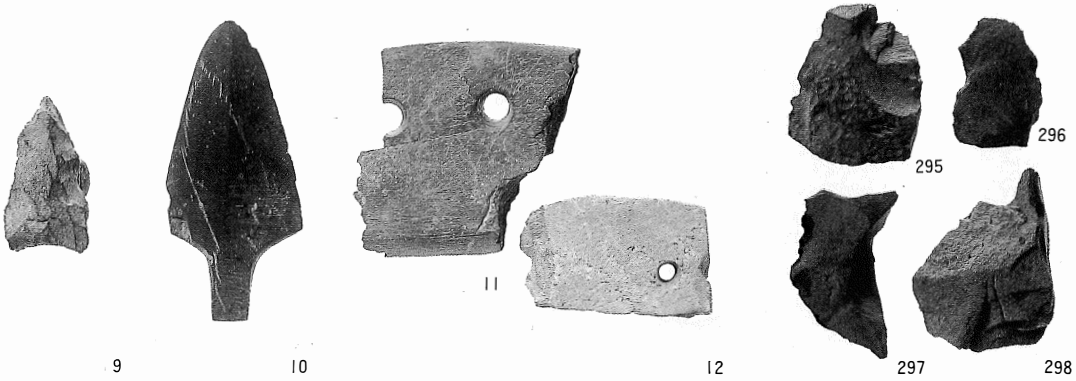
1　縄文土器

2　弥生土器 1

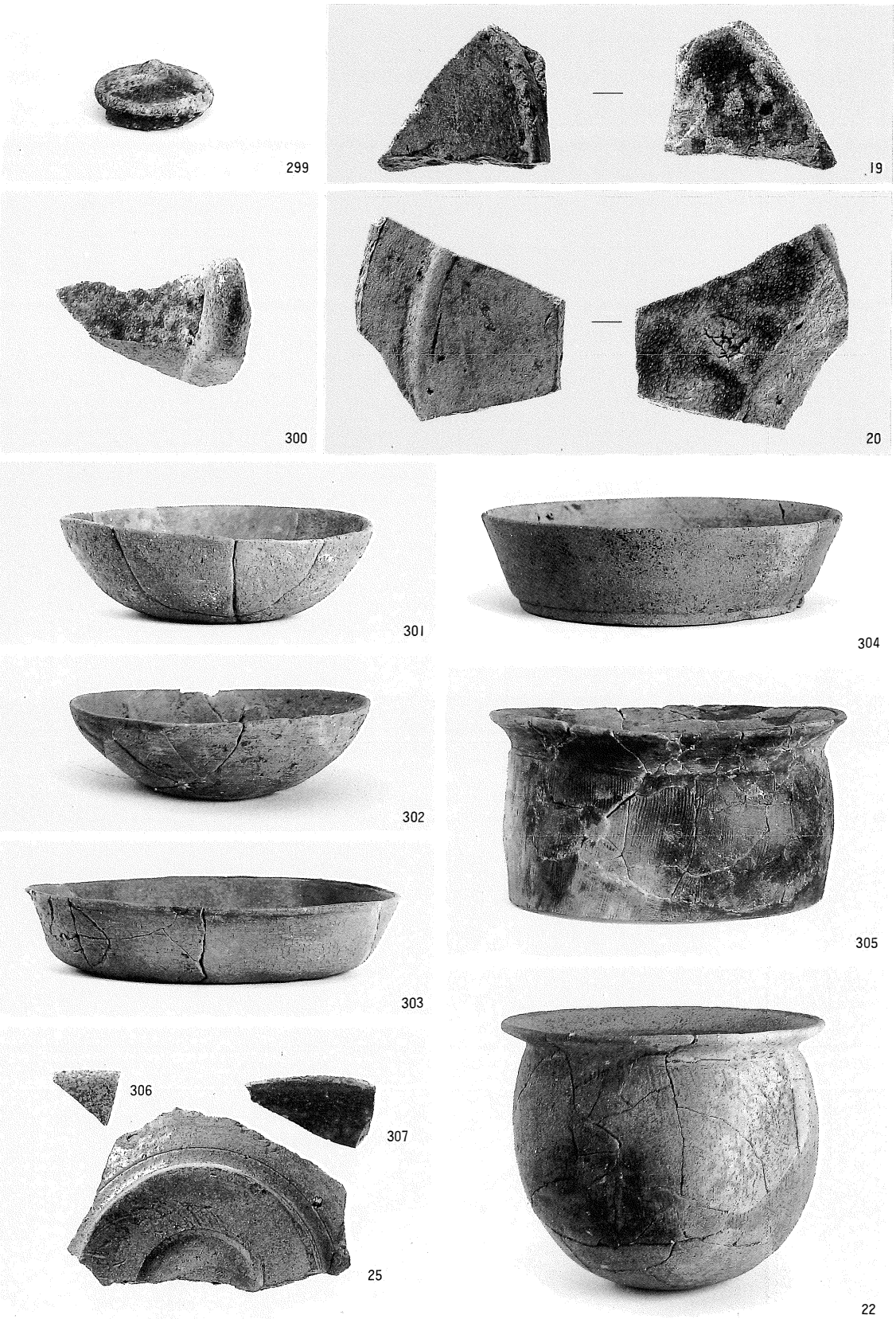


3　弥生土器 2

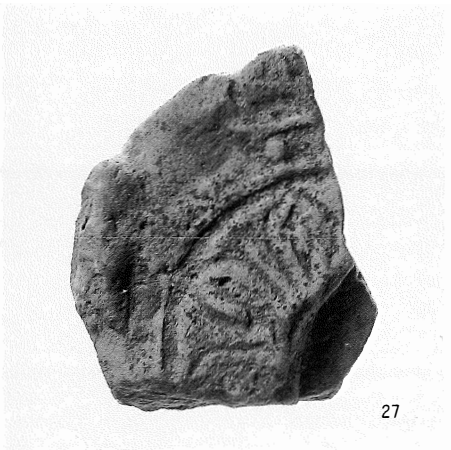




4　石器



長岡京期・平安時代の土器・陶器



27

29

34

瓦

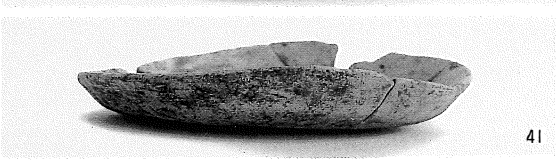
36

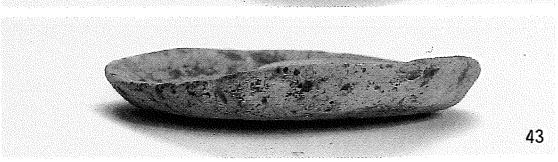
37

38

39

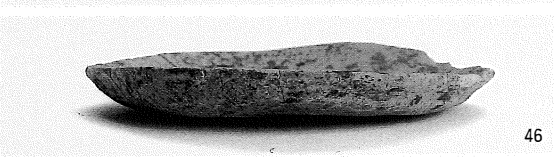
40


41


43

44

45


46

47

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

土器埋納坑ＳＸ38507出土遺物１

61

62

65

67

68

70

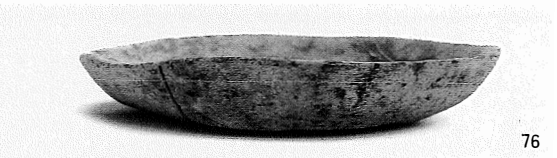
71

72

73

74

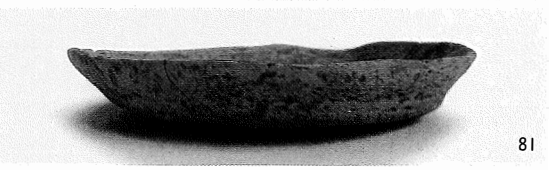
75


76

78

79

80


81

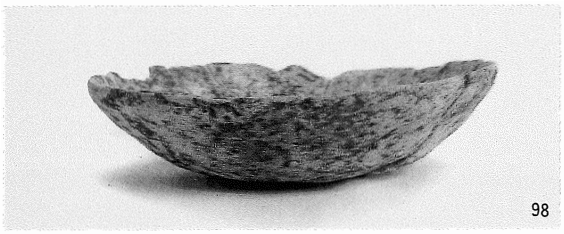
88

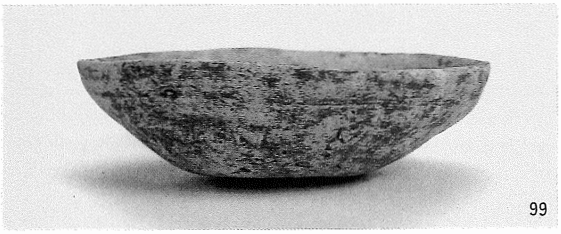
91

93

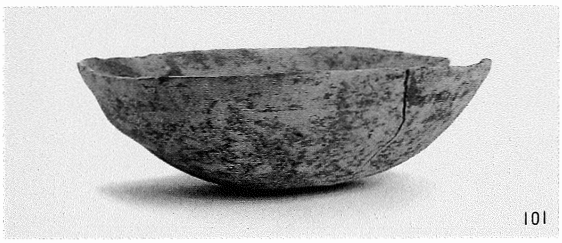
95

土器埋納坑ＳＸ38507出土遺物２


98


99

100


101

102

103

104

105

106

107

108

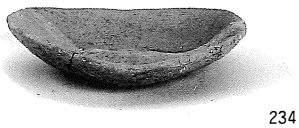
109

110

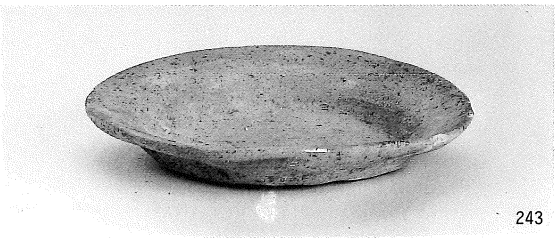
111

土器埋納坑ＳＸ38507出土遺物３

240

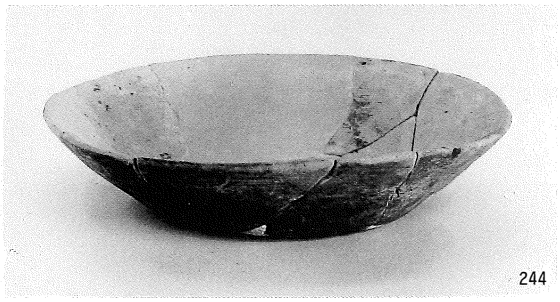

234

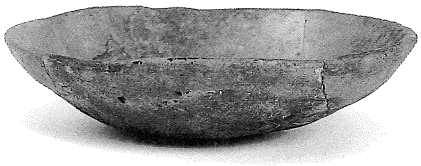
308


243

239

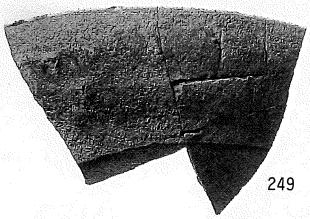
188

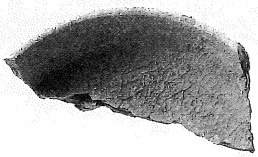

244

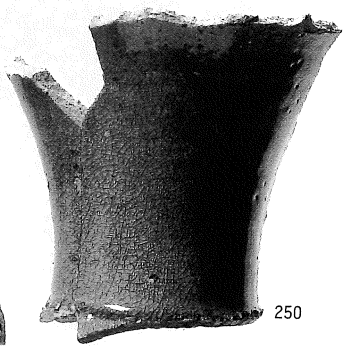

199

246

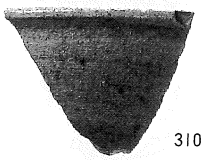
216


249

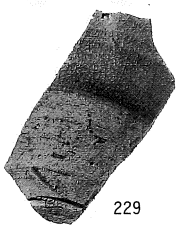

236

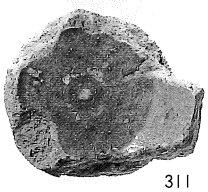

250

309


310

225

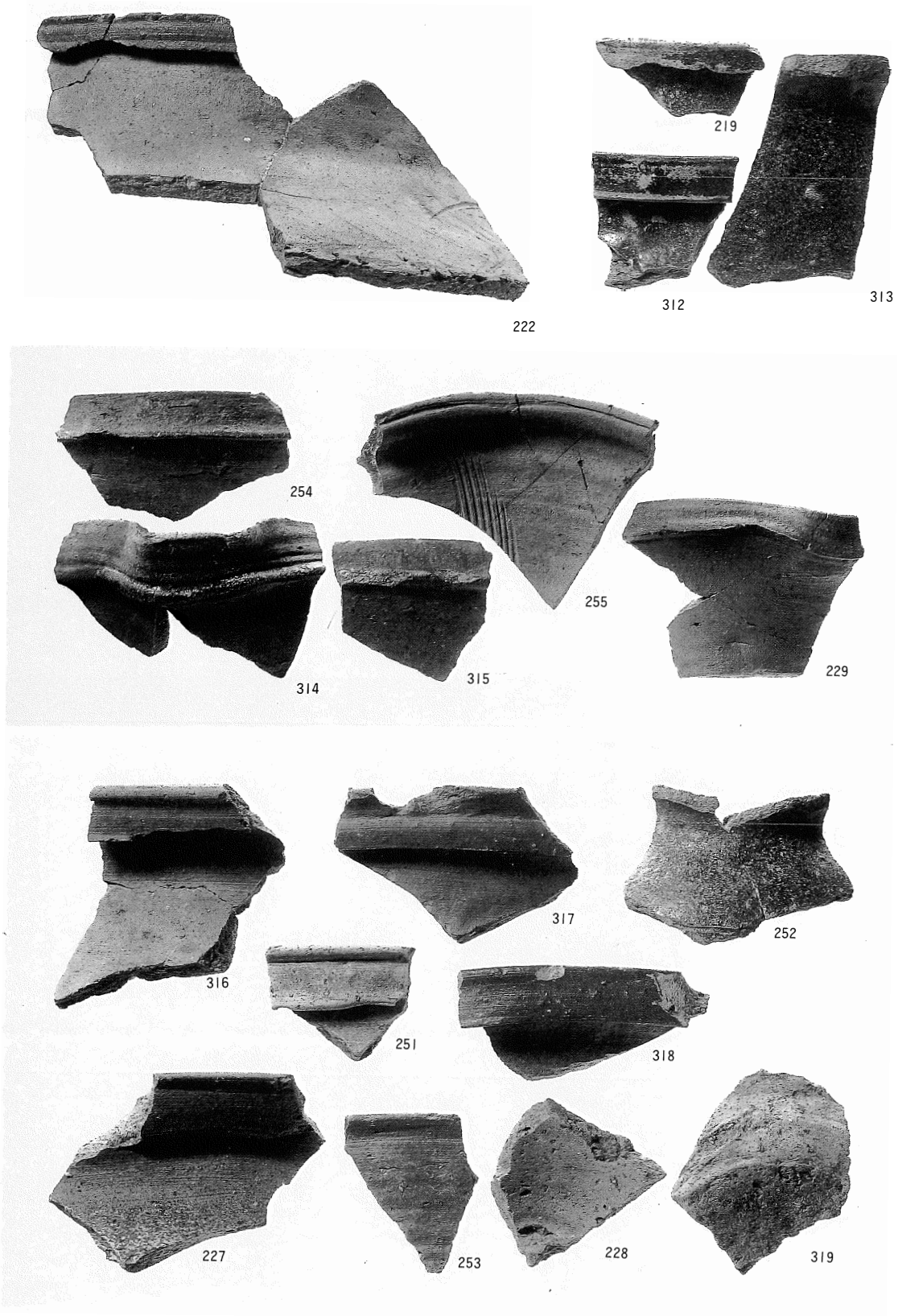

229


311

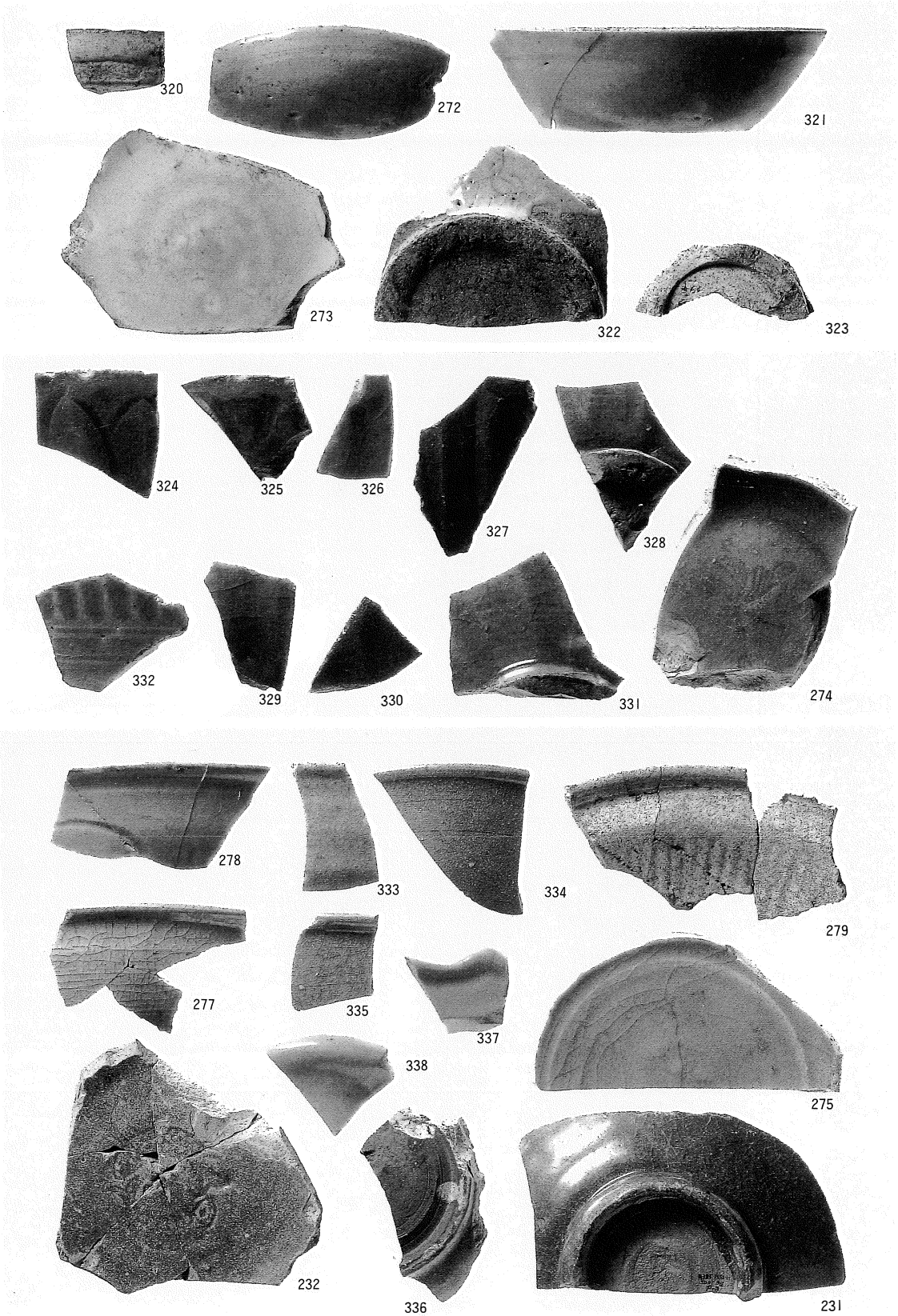
235

226

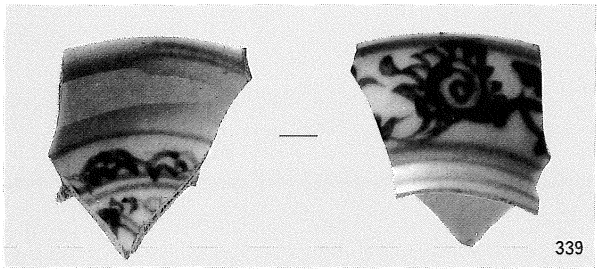
土師器・瓦器・施釉陶器

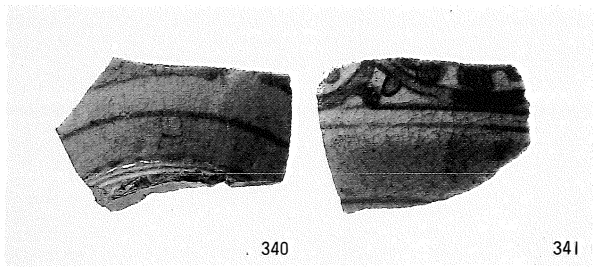


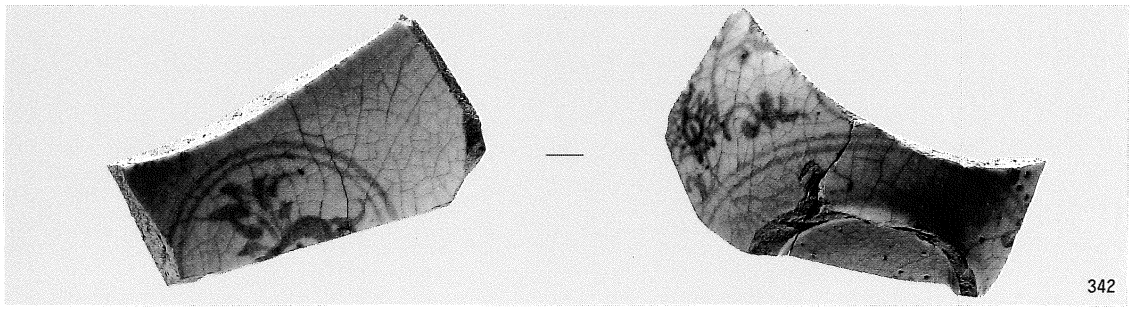
国産陶器(上段：常滑焼、中段：備前焼、下段：信楽焼)



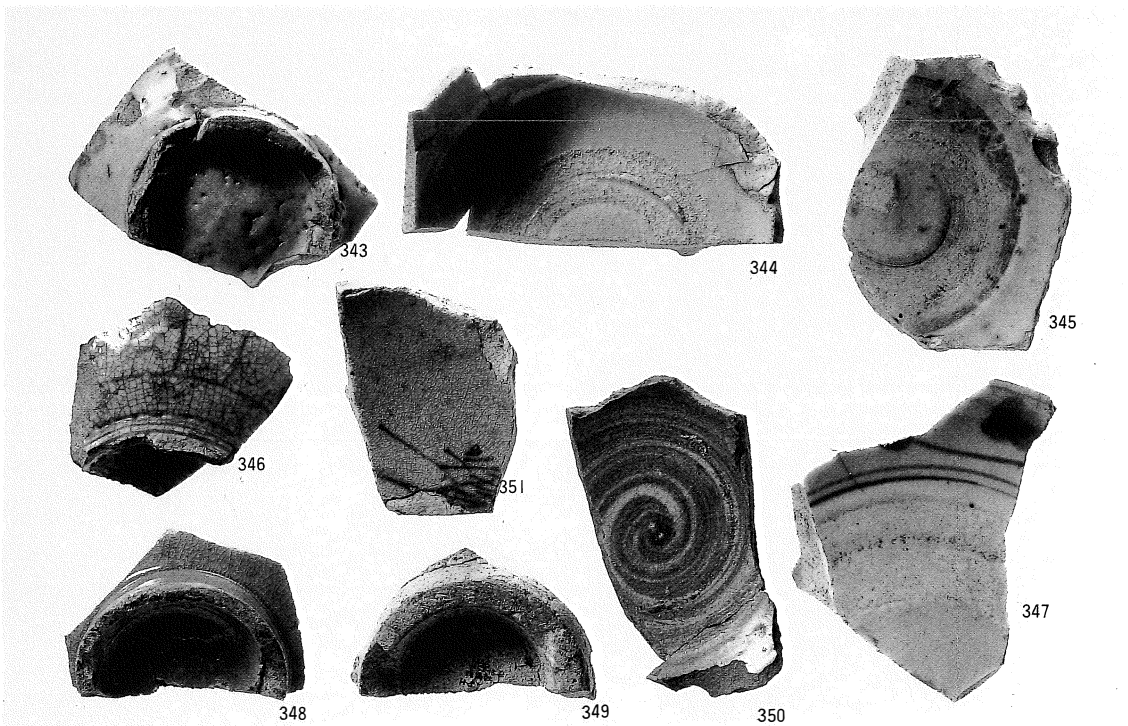
輸入磁器(上段：白磁、中・下段：青磁)



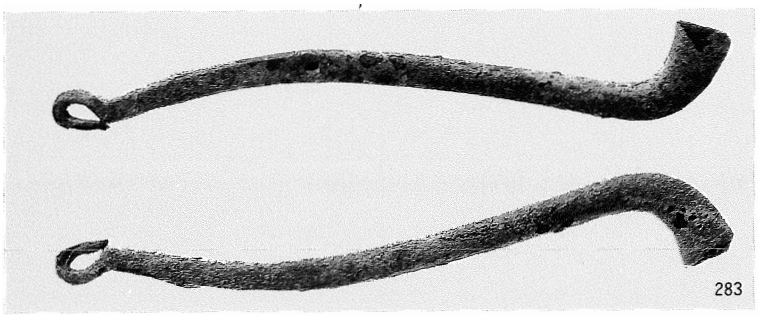


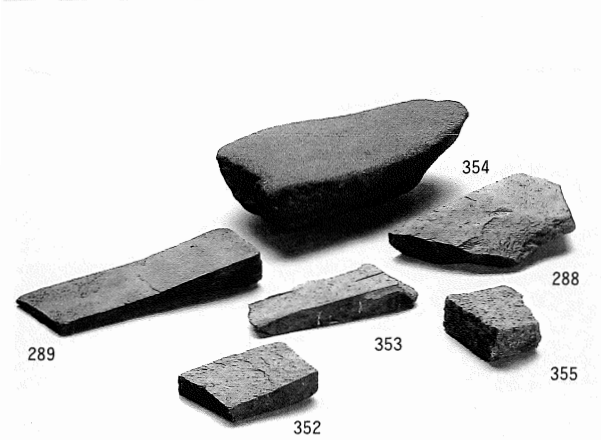


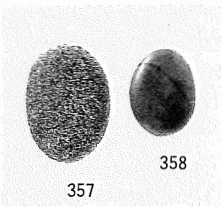
1　輸入磁器と伊万里焼

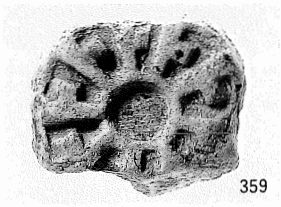


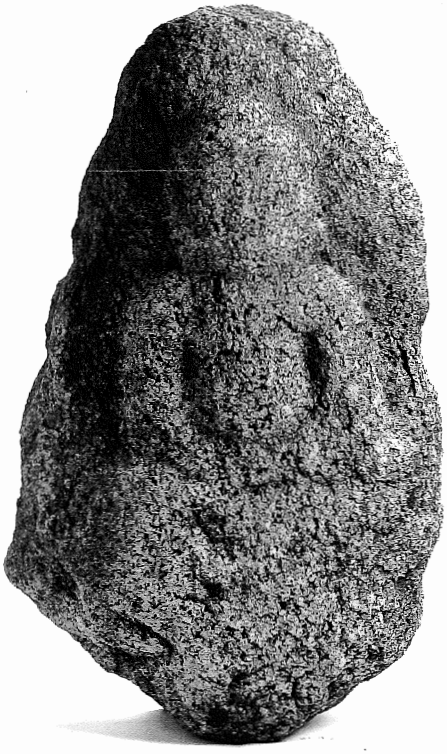
2　肥前系陶磁器

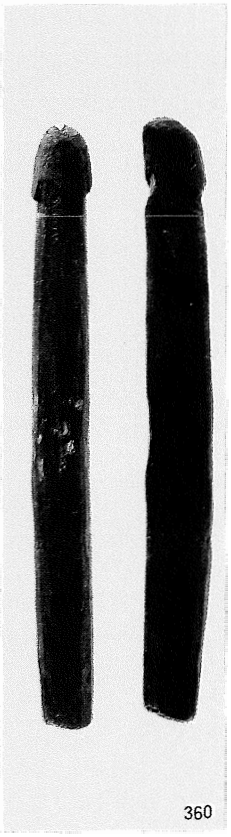












木製品・金属製品・土製品・石製品

長岡京市文化財調査報告書　第33冊

発　行　日　　平成７年３月３１日
編集・発行　　長岡京市教育委員会
〒617　京都府長岡京市開田一丁目１番１号
電話　075-951-2121
印　　刷　　株式会社図書印刷同朋舎
〒600　京都市下京区中堂寺鍵田町２項
電話　075-361-9121～４（代）